

奇譚クラブ

1957年 2月号

映画シナリオ「私は街の道化者」
或る手記「白衣の傍観者」

丘与志夫
菅野ふみ子



2
月号

昭和三十三年二月一日印刷（第十一巻第二号）
昭和三十三年二月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年二月号

2

奇譚クラブ

昭和三十三年二月一日印刷（第十一巻第二号）
昭和三十三年二月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

（送料八円）

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805



奇譚クラブ 復刊第十二号 目次

新着フォト紹介 (3) (アメリカ篇)

洋画スチール名場面集 (4) (四場面)

北原純子・画 (捕われの令嬢 責任画集)

猿轡を嚙まされた女優たち (映画の場面)

巻頭 〆私は誰でしょう

〆何という映画の場面でしょう

欧米式新スタイル (6)

我が異常性の記

オート・スタイルの女腹切

お隣の研究

創作赤い廃墟

ある夢想家の手帖から

花と朔風 (二)

マゾヒズム・見たたり聞いたりためしたり

科学は裁く

映画シナリオ

『私は街の道化者』

サジスチンの半生記 (三)

南時夫 18

藤山秀緒 24

須藤律夫 26

柳沢吉保 28

青葉楓一 30

沼正三 38

本田由郎 41

北原純子 44

春木俊野 52

丘与志夫 56

鷹野めぐみ 66

秀緒の告白

未来幻想マゾ小説

家畜人ヤプー (第三回)

サディズムの芽

女教員の責め折檻

異人屋敷の裸女

さものシリーズ最終篇

お妾アパルト

現代マゾヒズム芸術時評

話の肩籠

フエチに関する切抜きから (2)

人糞尿と下肥

フアンレター

或る手記 白衣の傍観者

手帖雑報欄

読者提供のアイデア

「ズロース・クラブ会則」

私の「縛り美五原則」に就て

流腸とおむつ 其の一

私のふんどし (3)

玉稿落穂集

早く眠狂四郎に腹を切らせろ	157
地で行く「処刑の部屋」	158
女装の好きな男	159
「雪夫と母」	160
読者通信	162
編集後記	176
山口幸一	157
松島三千代	145
編集部	149
月岡映子	144
流腸とおむつ	141
私のふんどし	137
玉稿落穂集	136
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	135
地で行く「処刑の部屋」	134
女装の好きな男	133
「雪夫と母」	132
読者通信	131
編集後記	130
山口幸一	129
松島三千代	128
編集部	127
月岡映子	126
流腸とおむつ	125
私のふんどし	124
玉稿落穂集	123
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	122
地で行く「処刑の部屋」	121
女装の好きな男	120
「雪夫と母」	119
読者通信	118
編集後記	117
山口幸一	116
松島三千代	115
編集部	114
月岡映子	113
流腸とおむつ	112
私のふんどし	111
玉稿落穂集	110
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	109
地で行く「処刑の部屋」	108
女装の好きな男	107
「雪夫と母」	106
読者通信	105
編集後記	104
山口幸一	103
松島三千代	102
編集部	101
月岡映子	100
流腸とおむつ	99
私のふんどし	98
玉稿落穂集	97
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	96
地で行く「処刑の部屋」	95
女装の好きな男	94
「雪夫と母」	93
読者通信	92
編集後記	91
山口幸一	90
松島三千代	89
編集部	88
月岡映子	87
流腸とおむつ	86
私のふんどし	85
玉稿落穂集	84
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	83
地で行く「処刑の部屋」	82
女装の好きな男	81
「雪夫と母」	80
読者通信	79
編集後記	78
山口幸一	77
松島三千代	76
編集部	75
月岡映子	74
流腸とおむつ	73
私のふんどし	72
玉稿落穂集	71
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	70
地で行く「処刑の部屋」	69
女装の好きな男	68
「雪夫と母」	67
読者通信	66
編集後記	65
山口幸一	64
松島三千代	63
編集部	62
月岡映子	61
流腸とおむつ	60
私のふんどし	59
玉稿落穂集	58
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	57
地で行く「処刑の部屋」	56
女装の好きな男	55
「雪夫と母」	54
読者通信	53
編集後記	52
山口幸一	51
松島三千代	50
編集部	49
月岡映子	48
流腸とおむつ	47
私のふんどし	46
玉稿落穂集	45
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	44
地で行く「処刑の部屋」	43
女装の好きな男	42
「雪夫と母」	41
読者通信	40
編集後記	39
山口幸一	38
松島三千代	37
編集部	36
月岡映子	35
流腸とおむつ	34
私のふんどし	33
玉稿落穂集	32
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	31
地で行く「処刑の部屋」	30
女装の好きな男	29
「雪夫と母」	28
読者通信	27
編集後記	26
山口幸一	25
松島三千代	24
編集部	23
月岡映子	22
流腸とおむつ	21
私のふんどし	20
玉稿落穂集	19
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	18
地で行く「処刑の部屋」	17
女装の好きな男	16
「雪夫と母」	15
読者通信	14
編集後記	13
山口幸一	12
松島三千代	11
編集部	10
月岡映子	9
流腸とおむつ	8
私のふんどし	7
玉稿落穂集	6
早く眠狂四郎に腹を切らせろ	5
地で行く「処刑の部屋」	4
女装の好きな男	3
「雪夫と母」	2
読者通信	1
編集後記	0

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

ナイフ投げの的……………BIZARRより
女子学生……………北原純子・画
欧米式新スタイル二態……………(2)
寄生虫……………壬生すみ子
流暢とおむつ……………月岡映子
恋の脱殻……………松井蘭子
へんしゅう余滴……………本誌記者
飯場往來なぐりこみ……………沼田良雄
家畜化小説の登場を喜ぶ……………沼田三枝
はつかねすみ……………沼田三枝
紅蓮(ぐれん)……………青葉規矩
光りある中を……………近東規矩
文学に現れた同性愛……………藤見集
懸賞応募作品短評……………松原三千代
私の「ふんどし」……………島直樹
「被虐哀歌」……………真金十郎
「被虐哀歌」……………其の後
澤マニアの女生徒の手記……………池田ふみ子
奈子の恋愛について……………門田奈子
沼正三の手帖……………沼田正三
お灸を据える女性雑誌……………松原正三
映画に現れた拷問場面……………左巻忠策
現代マゾヒスム芸術時評……………東原一郎
探偵小説新考……………白田由郎
芝居の責め、紅皿欠皿……………本田一穂
最近の映画から……………悦庵の歴史的考察……………松原春夫
私一切腹の歴史……………角間荘吉
私のコレクシヨンより……………大谷念子
なめくじ……………編集子
玉稿落穂集……………嵯峨美也子
最近の縛り映画から……………(復刊第九号)
〇十月号(復刊第九号)……………定価二百円(千8円)
北原純子十月集、壊れ易き獲物……………刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎……………現代マゾヒスム芸術時評参考資料……………引廻し……………春日ルミ嬢、伊吹真佐子嬢……………米誌に見た緊縛写真欧米式新スタイル……………

サディズム・シオン詳察……………藤木仙治
お灸の女王コンクール……………岩瀬三夫
天は知つてゐる……………近東規矩
光りある中を……………青葉三枝
大衆雑誌と責め……………青葉三枝
捨犬……………ラファマン
私の流暢ブレイ……………福村忠治
受刑生活の思い出……………原光治
現代マゾヒスム芸術時評……………沼田三枝
寄生虫……………壬生すみ子
俺は知らない……………本田由郎
「家畜化小説を喜ぶ」……………其の二……………本田由郎
「まさけお派山夫」……………其の三……………本田由郎
「新聞・雑誌」……………通信……………本田由郎
泥棒に縛られた話二件……………池田三枝
エスキモー娘の切腹……………本間正一
ある夢家の手帖から……………沼田正三
「流暢」……………沼田正三
締めつけられた女優達……………古留完三
泥棒に入られた南田洋子……………古留完三
責め絵の今昔……………伊藤信司
レポート……………伊藤信司
「一男色者の手記」……………大矢桐
なめくじ……………大矢桐
私のアイデア「晒し台」……………大矢桐
ローカル・レポート……………柳沢村
緊縛映画速報欄……………千葉栄
探偵小説新考……………東原一郎
サジスチンの半生記……………鷹野めくみ
「同好和服マニア会」……………逸名・居士
黒女量……………沼田三枝
読・乗馬スポンの女腹切……………藤山三秀
最近の映画から……………白石稔
〇十二月号(復刊第十号)……………定価二百円(千8円)
新着フォト紹介(一)……………北原純子・画
「いであゆ」……………北原純子・画
拘束服とマスク、欧米式新スタイル……………成るボーズ……………(雲井久子)
現代マゾヒスム芸術時評……………(雲井久子)

滝れい子素描集……………滝れい子・画
文学に現れた責めの描写……………滝れい子・画
新橋で米兵同性心中……………矢桐重八
私のふんどし(二)……………松原三枝
異性より同性に興味……………山崎三枝
沈黙の館……………山崎三枝
コルセット・マンボ……………小林一平
スカーレットへの魅力……………東山幸一
「少年期(母と子の手紙)」……………山口幸一
牢獄の花嫁……………山口幸一
黄色オラミ誕生……………真木通夫
「無医村の診療班」……………岸本柳
和装女の縛り責め展覧会……………小西規二
美女決闘場のアイディア……………近東規矩
光りある中を(完結篇)……………沼田三枝
腋毛礼賛……………沼田三枝
女武者自刃……………沼田三枝
黒女皇……………沼田三枝
ある夢家の手帖から……………沼田三枝
醜態への幻想……………沼田三枝
玉稿落穂集……………沼田三枝
魂を病む人……………沼田三枝
「F4」……………沼田三枝
私の告白二題……………沼田三枝
家畜化願望と女性ホルモン……………沼田三枝
女性化願望と女性ホルモン……………沼田三枝
系日誌……………沼田三枝
最近の映画から……………沼田三枝
美とワイセツの境界……………沼田三枝
緊縛映画速報欄……………沼田三枝
防具使用による窒息死……………沼田三枝
マゾ・クラブの結成を望む……………沼田三枝
バスガールに硫酸……………沼田三枝
めした手拭七百本……………沼田三枝
告白責めとフェチの自画像……………沼田三枝
現代マゾヒスム芸術時評……………沼田三枝
昭和三十三年……………沼田三枝
〇一月号(復刊第十一号)……………定価二百円(千8円)
緊縛映画と雑誌の挿絵……………千葉真一

新着フォト紹介(アメリカ)……………(2)
花嫁受難二題……………北原純子・画
「ボウニー分岐点」……………一場面……………北原純子・画
鳴門の怪鬼(水戸黄門漫遊記第十話)……………須川金子嬢
ADESUGATA……………北原純子・画
お灸せめ……………北原純子・画
欧米式新スタイル(5)……………北原純子・画
文学に現れた責めの描写……………北原純子・画
花と羽風……………北原純子・画
フエチに関する切抜きから……………北原純子・画
天は知つてゐる……………北原純子・画
黄色オラミ誕生(第二部)……………北原純子・画
大奥女決闘……………北原純子・画
電気責め……………北原純子・画
ある夢家の手帖から……………北原純子・画
女性切腹例抄記(上)……………北原純子・画
ある女給の体験……………北原純子・画
東京切腹……………北原純子・画
遊女八重路の責め……………北原純子・画
女性角度的に……………北原純子・画
特異な角度から……………北原純子・画
続々・乗馬スポンの女腹切……………北原純子・画
女性素足礼賛……………北原純子・画
家畜化願望(第二回)……………北原純子・画
舞踊家ヤブの責め……………北原純子・画
最近の映画から……………北原純子・画
少年期(母と子の手紙)……………北原純子・画
戦地での同性愛……………北原純子・画
赤いネオンのアイディア……………北原純子・画
読者提供のアイディア……………北原純子・画
「魔海の炎」……………北原純子・画
「魔海の炎」……………北原純子・画
玉稿落穂集……………北原純子・画
映画速報欄……………北原純子・画
ヴェールを脱いだ肢体美……………北原純子・画
また国電でモモ切り……………北原純子・画
ムチ打ち……………北原純子・画
緊縛映画と雑誌の挿絵……………千葉真一

新着フオト紹介
(アメリカ)



ル 名 場 面 集



米 20TH.FOX映画 『女海賊アン』中央デブラ・パジェット
その左 ジーン・ピーターズ☆右後方で奴隷売買が行われている。



米 RKO映画 『紳士はブルネット娘と結婚する』中央左ジューン・ラッセル
右」ジーン・クレイン ☆美しい脚に接吻する典型的なフェチリスト



佛映画『ボルジュア家の毒薬』より、左ペドロ・アルメンダリス



米 MGM映画『暴力教室』☆問題となったシーンである。女教師を暴行しようとする高校生の顔、そして手の猿ぐつわが印象的。

捕われの令嬢

北原純子・画



庭先でのお仕置



北原純子・画

れた女優たち [何という映画の場面でしょう]



1. 女優名 () 映画の題名 ()



2. 女優名 () 映画の題名 ()

|||||||〔私は誰でしょう〕|||||||猿轡を噛まさ



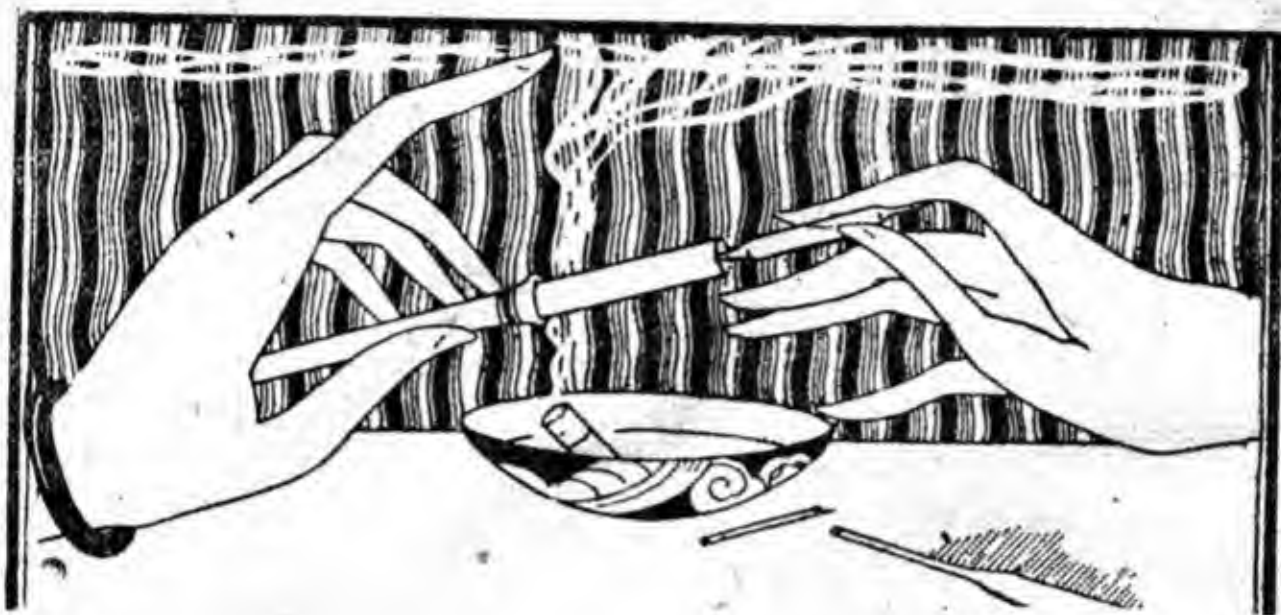
3. 女優名 () 映画の題名 ()



4. 女優名 () 映画の題名 ()

欧米式新スタイル [6]





新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1957年 2月号

(第十一卷 第二号 通刊第九十二号)



「体験告白手記」

我が異常性の記

南 時 夫

序

私は奇クの長年の愛読者の一人ですが、今日まで「読者通信」には二、三回投稿致したことがある外は、自分のこれまでの体験、告白は何一つ書きませんでした。それを今しみじみと考え、悩む様になりました。何故であるか私にも不可解な心理です。多分、それは自分というものの異常さを同好の方々に打明けてみたいと思う気持ちもさることながら、自分のこの異常な心理状態を赤裸々な文章として自分のこの眼で読みたい、自分を離れて、第三者として自分の異常性をのぞいてみたいということが大部分をしめている様な気がするのです。

文才があり文壇に発表する機会でも恵まれているのなら私は何等悩みますまい。文字に書いて発表しなくても自分のこの告白を口に出して話すことの出来る相手があれば私も慰められましょう。私はこの様な経験がある。私はこんな趣味をもっている。と話すことが出来さえすれば、そしてそれを快く(?)聞いて呉れる人さえ居れば、この様にして無理に自分の拙文を読者の方に披露する必要もないのです。告白の内容の異常であることの悲しさ!そして又、なまじっか学問をし、理性の不必要な強さに禍され私には語るべき相手もおりません。この上は如何に幼稚な文章でも奇クの数頁を拝借して発表させて頂く他に途の

ないことが判ったのです。とは申せ奇クの他の御投稿に比して私のこの告白は拙文の上に内容自体も読者にとっては何等物珍しいものでないが故に、この記事も載せて頂けないかも知れません。でも私は編集部の方々並に読者の皆様に申上げたいのです。それは創作ならいざ知らず、真の経験というものは、そんなにバラエティに富んでいないものではないということを。

こう書いてもこれまでの全ての告白記事を決して批判して言っているものではありません。私を取巻く世界は全てノーマルである。それだけにこの私の異常性は私の心に重くのしかかってくるのです。たとえそれが奇クの読者の方にとっては、告白なん

てきよう／＼しい」とお考えになられるものであっても、私にとつては今日まで誰一人にも話すことが出来ず、悶々としてきた告白であるのです。もし最初の告白文が幸いにも誌上に載せて頂ければ、二回三回に互って書き加えてゆきたいと思っております。

次に私の履歴と、そのアブノーマルな性格を簡単に紹介させて頂きたいと思ひます。私は現在大学生です。とは云つても現在の大学生としては多少年齢が多いのです。私は旧制の官立専門学校を卒業してから、直ぐ中学校の教師となり、その勤務が二年間。その後又學問をやり直し、現在某大学の法学部四年在学中、来春は社会に再出発する身です。大学名をはっきり記すことはお許し下さい。ただ旧制帝大の一つであることを書きますれば全国の大学の中、七つに範囲が狭まった訳ですが、それ以上聞かないで下さい。私を取巻く友人達は皆優秀な才能をもつ前途洋々たる若者ばかりです。その中で一人私だけ……この様な異常な……もう愚痴はやめましょう。私としても英語、ドイツ語を読み法律書を読んで過して来たこれまでの生活には決して悔を残しているわけがなく、特に異常性格を胸に秘めながら良くここまで皆と肩を並べて

きたものと自分を愛う氣持なのです。

私の異常性格の第一は奇クでも最も典型的なものの一つに入る女性緊縛のサディズムであり、第二は女装愛好、第三に下着愛好のフェチズムです。具体的内容はそれぞれの稿に書く積りですが、唯一つ申述しておきたいことは、私もこれまで文学を読み詩を書いて、文才は無いままに創作意欲は多分にあるのですが、これから書いてみたい告白には一切真に体験し、真に自分がその意欲しているもののみを書いてゆく積りです。それが奇ク誌上に載るには余りに平凡であるというのでしたら私は無理に誇張して書くことはせず、いさぎよくあきらめる所存です。女性緊縛の一事を取上げてみても、この世の中に実際に女性を縛った経験のある人は数える程しかいません。成程空想的サディストは男性の中には可成りあるかも知れません。しかし、それが現実化し真に一人の女を縛り上げ猿轡をはめたという経験をもち人は極めて少ないと思います。

私は法律学徒として、法律の面からも厭がる相手を無理に縛ったりすれば刑法二二〇条の逮捕罪の規定により三月以上五年以下の懲役になることを知っています。勿論

被害者の承諾があれば違法性が阻却され犯罪とならない場合がありますが、そう簡単に同意する女の人もざらにはありません。そうであれば、その描写に何等の美辞麗句が伴わずともただ、私がある女の人を縛ったことがある、と書いただけで極めて重大な告白となるのではないのでしょうか。

いささか自己弁護になりました。ただ告白と創作はあくまで別であるということ。私は自分にいい聞かせてこれからの文章をつづけてゆく積りです。私の異常性格の最たるものは女性緊縛ですけれど、これを最初に発表するとサディズムの文章に慣れている諸君の方々には余り魅力がないかも知れませんので最初に女装の体験を書くことにしました。

一、女装マニア

奇クにも女装マニアの方が可成り見られます。女装を好む、この心理はどう説明すべきなのか、これに関する専門書を読んだことのない私には不明です。ただ一人の女装マニアとして私はこう考える。男が女の衣類を身に着けて化粧する、そして自分が女になったと錯覚する。他の人から女としてみられたい——この心理はその人が決し

て男であることを嫌うからではないのです。自分が男であるという事実はあくまでも是認し、その対象としての女性を求め、それが人一倍強いのです。その強さが嵩じてくると最も身近な(?)自分を女に仕立ててそれを同体の自分が愛する——自己愛の一種ともいえましよう。一つの身体の中に男女両性が共棲する。この倒錯こそ女装マニアの姿だと思ふのです。

女になった自分はいくまで女の世界の間でありたいと思う。選りに選って女臭い所に行つて見たい。デパートに入つても婦人下着や化粧品売場にただずむ心理。女性のための世界をのぞきみたい。トイレに入るにしても男子としては絶対に入れない婦人用トイレに憧れる様になるのです。女装といつても女になつた自分が極めて強力になつて本来の男性たる自分を見失つてしまつた時にはもう女装マニアとは云えないでしょう。例えば女装して男を求める男娼にはそう云うことが言えるのではないでしょう。女装マニアは決して自分の対象として男を求めるものではなく、あくまで女を求めているのです。女装した自分を自分で縛っている人も決してその人がマゾヒストであるからではありません。緊縛する対象が得られないが故に自分を女にして今一人の

自分に縛られているのです。立派な女性緊縛のサディストと言えましよう。所謂男性マゾとはその本質を異にする点なのです。

つまらない事を書きました。女装マニアの方の中でも深夜秘かに女装してみる位でそのまま戸外へ出るという様なことを経験された方は数少いでしょう。私はその数少いと思われることを経験してみたのです。その時の様子をなるべく詳しくありのままに書いてゆきたいと思ひます。

私が何才の時だったか忘れしました。十九才か二十才の頃だったと思ひます。それまで私も秘かに自分の部屋で深夜家人が寝入つてしまつた頃、顔にお白粉をぬつて鏡に写しあかず眺めていました。でもそれも次第に強くなる欲求の前には不満足になつてしまつたのです。私は女装して町へ出てみることを決心しました。今考えて随分と大それた決心をしたものです。

冬でした。夏は薄着であるし、女の人は殆んど腕を露ヌグにしていますので女装外出は不可能でした。春秋も、これといった女の衣類を持合せていない私には、これも出来ない相談でした。私には姉が一人おります。でも姉の衣類を持出すことは殆んど不可能でしたので最大限ごまかせる冬を選んだのです。私はその前日、奥にしまつてあ

る姉の行李からスカートと靴下それにネツカチーフの派手なのを選んで用意しておきました。私の部屋は玄関のすぐ前であつてその隣がトイレになっています。

私はまずはいっていたズボンその他をぬぎ捨て、姉が今では殆んど着ていない真赤なスカートをはきました。そしてこれも姉のストッキングを着けたのです。ストッキングもナイロンの様な薄いものでは毛深い私の足には困るので多少地の厚いものを選んでおいたのです。上衣は何もありません。仕方がないので、まず胸の周りをヘコ帯でぐるぐる巻きにしてから女性の乳房にあたる所に手ぬぐいで塊を二つ作りそれを差込み、その上から自分の白のトックリのセーターを着ました。そこまでやってから又どてらを着て鏡と化粧道具(と云つてもお白粉と口紅、頬紅だけです)を持ってトイレに入つたのです。

トイレの中で妖しげな女の顔を仕上げました。濃目にお白粉をぬり、あくどくルーシユを画きました。私の眉毛は濃い方なので多少余計にその部分に粉をたたきつけ、まぶたと頬に薄く紅をぬつて出来上ります。今考えてあれでよく他人の眼をごまかせたと不思議になりますが、その時分は今の様にひげも濃くなく顔も幾分白かつたの

でこれだけでもどうにか仕上ったのだと思います。顔が出来ると私は派手なネッカチーフで頭を包みました。ネッカチーフはあごの下で結ぶので男性特有のノドボトケを隠すのに好都合でした。自分の髪毛に混ぜて女の抜毛をそのネッカチーフに差込んで終りました。女の抜毛は鏡台から少し取っておいたものでした。何しろこの様な時は極度に興奮していますので、じっくり自分の顔を見直す余裕ありません。家人に見つかったらどうしよう。早く外へ出たい。そればかりが脳裡を離れません。

ネッカチーフをかぶりどてらを着た異様な恰好でトイレを出た私はどてらをぬぐと玄関わきに掛けていた姉のスプリングコートを着ました。冬でオーバーは姉が自分の部屋に持って行ってしまっているのです。スプリングしかなかったのです。それを着てグリーン絹のマフラーで、どてらを隠し私は下駄をはいて外へ出ました。門を出てから横の暗がり風呂敷に入れて来た姉のハイヒールをはき下駄を垣根にかくしました。姉の靴は男の私には矢張り小さく、それにハイヒールというものは先端に力がかかるので、その痛いことは非常なものでしたが私は我慢して歩きました。これも姉が以前に使っていたハンドバックを手にして歩き出

したのですが、何分始めてのことで顔は上げられず、家出娘のその様にうつむいて歩くのが勢一ぱいでした。まして明るい街になど出る勇氣ありません。

暗い路ばかりをとぼ／＼と歩いてから少し気も落着いたので勇を奮って街中へ通ずる電車通りに出ました。もっとも、明るい所へ出る前に私は白いガーゼのマスクをはめたのですが。夜の七時半頃だったでしうか。まだ可成り人通りがありました。はたして、人の往来する明るい街を女装して歩くことは自分の想像していた何倍もの刺激であり、興奮でした。マスクをした為自分の顔にぬったお白粉の香にむせり、しめつけた胸、始めてはいて歩いたハイヒール、そしてストッキングの感触、私の全身は妖しげな快感で波打ちました。

でも私は不安でした。歩き方も、つめて女らしく小股に歩き、シヨウウィンドや建物のガラスに写る自分の姿を横目で見ながらどこかに「男らしさ」が残っていないものかと。私をあくまで女と思ったのか、それとも私なんか眼中に入らなかったのか、道行く人々は私をじろじろ見ることもなく、注意することなく行き過ぎてゆきました。私は安心すると共に次第に大胆になつてネッカチーフにマスクの顔を上げて

歩いていました。私の眼は鋭い方でその点随分気を使い眼を細めて歩いていたのも時々たま大きく見開いて歩ける様になりました。

駅もすぐそこだという時です。(申遅れましたが私の家は東京の渋谷区ですので駅は渋谷駅です)。私の後から一台のジープがやって来て私の横に止ったのです。私はドキッとしました。すると「ヘイ……」というアメリカ兵の声がしたのでした。私をパンパン嬢と間違えたのだと思います。私は不安になつて急ぎ逃げました。ジープがそのまま行ってしまふのを見て私には変な自信が湧いて来ました。アメリカ兵に呼びとめられる位だ、という女装に対する自信。その自信を背負って私は渋谷駅のあの明るい構内を堂々(?)と通り抜け街中へ出たのです。

パンパンと間違えられた原因は思い当ることもあるのです。今から七、八年前のことなのでまだ随分街にパンパンが居たことと、私のはいていたスカートの真紅な上にバンドをしていなかった為に段々下へ落ちてコートの下からのぞいていたこと、それにネッカチーフがよくパンパン嬢のする様に派手なものであったこと等でしよう。正面は兎角、私の後姿はアメリカ兵の眼には

完全な女として映じたのです。

家から駅までの経過はもっとより大きな刺激を求めさせる様にと、私は映画館に入ることにしました。映画館は暗いし、それにじっと座っていても人からそうじろじろ見られることもないだろう。それにもまして私は慣れないハイヒールに足を可成り痛めていましたので早く何処かに座りたかったのも本音でした。入った映画館は渋谷松竹だったと記憶していますが現在のキヤピタルだったかも知れません。黙ってお金を出して切符を買った私は次に思い掛けないシヨックを受けました。それは切符を切る受付嬢の所へ行ったとき私の顔を見てその女の人が妙な顔をしたのです。誰が入ろうと構わないのは当然で勿論切符を切り、半券を渡して呉れましたが、私の後ろの方で二、三人で何か話している様子、私はどきまぎしてあわてて暗い座席に飛び込みました。家を出てから初めて明るい処でしかも直ぐ前から顔を見られたことが私の不安を生んだのかも知れません。

私は女の観客の隣に座をしめました。自分が女であると思ひ女として見られたい。私は隣の女の人を時々盗見しました。男の私を同性だと思つて何の気にもとめていない。そう思つただけで私の興奮は

極度に高まりました。上映されている映画自体のことはもうどうでもよかったのです。

休憩時間少し前に私はトイレに行きました。勿論婦人用です。トイレには誰も居ませんでした。私は婦人用トイレの中で用をたしました。しかし夜の映画館の殺風景なトイレは私の期待に反して大した刺激でもありませんでした。女客でも沢山居てがやがややっている時ならばいざ知らず一人居ないトイレは男子の方と大差ありません。私が鏡に向つて変る処はないかと顔を直している時一人の女の人が入つて来ましたが私は直ぐ其処を出しました。私の経験によれば婦人用トイレの中よりも座席に女観客に互して座つていた時の方がより大きな興奮だったことを述べておきます。

映画館を出てからは婦人服の店に入ったり、アクセサリーのウィンドウをのぞいたりしてから又歩いて帰りましたが、別にお話する程のことではありません。ただ女性の下着類を店員の眼の遠い処でさも選んでいる風に触つてみた時は女装の有難味を知つたと云えましょう。家の近くでマスクをはずし少し煙草を吸つたところ何処かに隠れていたのか与太者風の男が「おい姐さん」と呼び掛けて来たのには驚きましたが、それ以上に恐しくなつて早々に帰つたのが最後の出来事でした。

私の女装外出の最初の体験談は以上の如くです。この体験は異常な興奮に終始しましたが女だけの世界をのぞいてみたいと云う私の願望は実現しませんでした。女だけの世界というものは余りあるものではなく私の要求の無理なことを知りました。私はその後二回程つづけて女装で外出しましたがその模様は省きます。

一回はおの婦人専用電車に乗つてみたくて渋谷から東京まで電車に乗りそれから中央線で新宿に出る積りでしたが、婦人専用車というのがとうとう見付からず帰つて来ました。この時は電車に乗ることに随分勇気を要しました。何しろ車内は明るく、じつと動かずに居なくてはならず、その上極めて近くに人が居りますので神経の疲れること一通りではありません。見破られ何か言われても逃げ出すことも出来ない。私は座つて下を向き持つて来た洋服の本をさも読んでいるかの様な風をしていたのですが駅と駅との間が長く感ぜられそれが又異様な興奮を呼んで自分の異常性をまざまざと示した次第です。三回目には女装のまま夜の道を随分と歩き廻つただけでこれと云つた事件もありませんでした。

私の体験は以上三回で終止符を打ちました。現在でも女装して外を歩いてみたい気がたまらなく強いのですが、でも今はあの

当時と違って自分の「男らしさ」を隠すためには余程の洗練さを要するし、その機会もありません。女の人の服装がすっかりして来て私の体験した当時とは違い簡単にこまかせないことも私のこの欲望をあきらめさせる一原因でもあります。

それ故、今では欲求のはけ口を、もっぱら深夜自分の部屋だけで女装をし、自分で自分の手足を緊縛し、猿ぐつわをはめることだけで満足せねばならなくなりました。

出来ればブラジャーからパンティ、ジュミーズ、ブラウス、スカートのストッキングハイヒールと自分用のものを揃えて女装して戸外を歩き、完全な女になって縛られてみたいと思います。しかし私の資力、そして分別はその実現の不可能を認めざるを得ないのです。女装して縛られ、猿ぐつわをはめられることが快感を呼ぶのは自分がマゾなのではないかと一時は疑ったこともありました。でも私は男性マゾでは決してなく、その様な写真には何等興味の無いところから矢張りサディストなのでしょう。

女装して縛られている自分はいくまで女として縛られているのであって男としての自分が縛られているのではないのに気がつききました。私は男の人を縛ったり責めたりするのは興味が無いのです。でもその男の人が完全な女装をして手を後ろに組んで

下されば私は異常な興奮と共にその人を縛って上げるでしょう。

私は他の男の人が女装している姿を見るのも好きです。上野に散在する男娼の姿を見ても刺戟があります。でも女装はあくまで「女らしく」あるべきだと思っています。私は和装より洋装を好みます。和装は確かに盛装すれば完全な女形になりました。う。それに年令も相当の巾がもてる利点があります。でも洋服に比べて和服は男物も女物も形の上からは大差ありません。ワンピース、スカート、ストッキング、ハイヒールという様なものは女性の身を包む衣類の中で女しか着ることのないものです。それ故に洋装はそれを完全に自分のものにした時、一番「女らしさ」の表明になるものです。

しかし洋装はむづかしい。年令にも制限がありその上身体つき如何が主要なハアクターになるのです。私は二十七になってこの欲求を断念したのも以上の理由によるのです。しかし女性の下着から凡ての衣類及びアクセサリーがありさえすればまだ完全な「女」になってみせるというはかない自負は持っています。

私の拙い女装の告白とその感想を記しました。これが私の第一回の告白文です。私のこの女装外出体験の副産物として私に新

らたな今一つの奇妙な異常性を生んだことを最後に書き添えておきたいと思っています。それはネッカチーフとマスクです。私はネッカチーフにマスクをはめて外出しました。それから街行く女の人の中でネッカチーフをしている人（近頃は可成り多いのですが）を見るととても嬉しくなるのです。これも一種のフェチズムでしょうか。そしてそれよりもネッカチーフとマスクを併用している女の人を見ると、たまらない快感を覚える様になりました。

マスクについては古川裕子様その他の方々の文もありました様にそれが猿ぐつわを連想させサディズムの面からも貴重なものです。白いマスクで鼻口を覆っている女の人の顔程美しく思えるものはありません。それにもましてネッカチーフで顔を包み鼻口を白いマスクで覆っている女の人を見ると——この併用は案外数少いだけに——私は自分の体験もありますので非常に喜びが湧くのです。とは云ってもネッカチーフにマスクをしている女の人の全てが無条件に興奮を生むというのでは勿論ありません。眼だけを出している顔であっても私には魅力のある女かそうでないかが判るのです。これは自分ながら変った趣味だと思っています。

オート・スタイルの女腹切

藤山秀緒

第一話 血みどろの臓腑

一、疾走

美枝は、スチユワーデスを思わせる濃紺のスーツに、グレイの乗馬ズボンを着き、編上げの長靴をはき、ギヤバジンのレインコートのベルトもきりゝとしめ、フードをかぶってオートバイにまたがります。

降りしきる雨の中を、美枝はどこへ行くの
でしょう。

そうです。美枝は死にゝ行くのです。オートシヨウの縄張り争いから、隣の町のシヨウ団は、卑怯にも美枝を待伏せし、凌辱したのです。美枝は、よろ／＼とよろめくようにして自分の小屋へ戻りました。相手は名にし負う酒井オートシヨウです。美枝に熱い息を吐いた男の一人々々の顔がうかんで来ます。美

枝は一晩考えあかしました、そして。

いま美枝は雨の中をオートバイを飛ばして隣町の酒井オートショウの小屋へ急ぎます。
レインコートは雨水のためにずぶぬれになり、フードをつたう水は滝のようです。

勝気な美枝は、紺のスーツの下に、曲乗りの時に用いる派手なシヤツブラウスを着て、最後の時にぬぎすてる死衣裳まで、すっかりきめているのです。

ダダ……ツ

オートバイは雨を~~ついて~~走ります。

きりゝとした手首の尾錠。前のめりの騎乗位。すべては、なやましいレインコート・フードのMスタイルに心憎いばかりの美しさ。

三、散華

「ウウツ！」

かくし持った美枝の短刀が一閃、ボタンを

外す間もどかしく、スーツをぬぎすて、シヤップラウスの前をひらいて美枝は腹へ突立てたのです。オートシヨウがはねて、深夜の場内。酒井オートシヨウの連中が取巻いていきます。みんなアツと云ったきり気をのまれてたゞ呆然と見守るばかりです。

「アア、女乍らも、こ、この通り、は、はらを切つて、シ、死んでみせる！よく、よく見ておいでッ」

「ウ、ツ——う、う、う、うっうっうっ！」

うゝむツ」

ググッ！と一気に腹をかき切り、腰を浮かせて短刀を引き抜きます。

氣丈な美枝は、乗馬ズボンの膝頭を揉み合
わせながら、顔をゆがめ、上体をのめらせ、
右手を腹腔へ差入れます。

「あッムッーッ、うッ、うムッ……ッム

「うふふ、うふつ——ウーッ！」

こらえかねたように烈しく呻いて、ずるずると腸を引きずり出した美枝。

ワナワナふるえる手に再び短刀をさぐり取った彼女は、流れ出る腸管へ刃をあて、

「アアッ！ク、ク、……ッ、うっ……」

がばと俯伏せになりながら、腸をかき切り左手にしかとつかんで、脂汗にまみれた美貌を引きつけて苦しみます。

彼女は血みどろの臓腑をつかんで、きつと



顔をあげます。蒼白な顔、血走った両眼。

「ウ、ウウ……ッ、く……ム……ッ……」

物云いたげですが舌がこわばったのか、呻きに消されてきくとれません。やがて、大きく眼を見ひらき、たった一言

「お……の……れッ！」

酒井団長めがけて、ダツと臓腑を投げつけると、力つきてバツタリ倒れてしまいます。う……う……と彼女は歯をくいしばりながら、

断末魔の苦しみにとうち廻ります。腸管を断ち切つて、なんてたまりましよう。Mスタイルに身を固めた美枝は全身を煙れんさせ虚空をつかんで悲壮な最期をとげるのです。

投げつけられた臓腑は、血汐にまみれて、生きもののようにぬめぬめと床を這い、彼女は、いつまでもくく眼を見ひらいていました。

第二話

血染めのオートバイ

朝まだきの大矢サーカスは時ならぬ自殺者のために上を下への大騒ぎになりました。

自殺したのは、一座の花形でオートバイ曲乗りの花子という女性でした。

それも、オートバイにまたがり、両足をベルトでペダルにたく結びつけ、腹を切つて、ハンドルにのしかかるといふ死んでいくのです。

乗馬服、乗馬ズボンに、長靴を穿き、ヘルメットまでかぶつて、曲乗りの時と寸分違わぬ完全武装のスタイルで、前をくつろげ、十文字に切った腹から、流れ落ちた血汐が、オートバイを朱に染めて、最期の苦痛を憶え憶えた彼女の自決シーンは、騎乗の女武者のそれにも似て悲壮美の極致を見せて居ます。

なぜ彼女は死んだか？　なぜ女だてらに腹を切つたりしたのか？

彼女は腹にやどったいのちを、思いのかぎり切り裂いて死にたかったのです。東京にのこして来た彼女の夫は病気で死した。彼女は夫のために、毎日三回づつオートバイにまたがって、男のようなズボン姿で曲乗りをつづけなければなりません。両足をしめつけ手ばなしで宙返りもします。二台のオートバイが、せまい鉄球の中で追いつ追われつする曲乗りにも出ました。女は彼女ひとりでしたから、疲れていても休むことは許されません。彼女は、はげしい目まいを憶えながら、オートバイからおりと、あゝ今度も無事であったかと、固く凝った乳房を抑えて、明日の運命を思うのでした。彼女も、もう廿六、はげしい緊張のために、次第に衰えて行く容貌をみるにつけ、はやくこんな危険な仕事から手をひきたい、それだけが彼女の希いでした。

しかし、花子にとって、彼女の夫の急死は生きるのぞみを失わせました。しかも、団長大矢は、それをよい事にして彼女に云い寄り遂に手ごめ同様の暴行を彼女に加えたのです。いまは是まで。彼女は汚らわしい自らの腹を、心のま……にかき切つて死のうと決心しました。

彼女は、短刀を用意し、機会を待っています。

した。幸にこの町の興行は大入りで、団員たちは、うかれていましたから、彼女は、油断を見て、衣裳を持ち出し、暗い場内の片隅で着かえ、苦楽とともにした彼女のオートバイにまたがって死んだのでした。

彼女は、スラックスから乗馬ズボンに穿きかえ、乗馬靴、乗馬服に身を固め、ヘルメットをかぶってアゴの処を尾錠でとめ、乗馬服の胸のポケットには亡き夫の写真を入れて、最新の身仕度をととのえ、忍び足でオートバイに近附きます、流腸をして腸内をととのえ、絶食していた彼女は、こゝで、此世の名残りにミルクを飲み、切腹のための英気を養います、このミルクが、腸へおける前に、死なねばなりません。死を直前にして花子ははげしい興奮に身を悶えるのでした。

彼女は、乗馬ズボンの裾を蹴って、オートバイに腰をおろすと、短い革紐で、乗馬靴を穿いた両足を、オートバイにかたくゆわえつけてます。苦悶のためにオートバイからずり落

ちるのを防ぐためでありましょう。乗馬服のボタンをはずし、シヤツブラウスの前をひらいて、乳房をあらわし、今度は乗馬ズボンのバンドをゆるめて下腹をのぞかせ、更に、男物のズボンのために、前部のボタンを二三ツはずして、思い切って下部までもかき切れるように用意をととのえます。

これでよし、とうなづいた彼女は、懐剣を抜いて白布を巻き、ジツと、ふくよかな胸、腹のくびれと、白刃を見くらべます。あゝさぞ苦しかりう。いゝえ、いまの曲乗りをつげながら、衰えて行くことを思えば、若く美しい今こそ死ぬべき時なのだ。——花子はひとりさびしく微笑んで、刃を腹にあてがいます。

「ウウッ……」

前のめりに立上った彼女は、両足をいましめられた姿で、膝頭をしめつけながら、キリキリと懐剣を引廻します。ヘルメットのきわから脂汗が流れ、ウームと呻くたびに傷口か

私は二三見聞した事があるが、へそ酒とは余り聞いた事がない人が多いかも知れない今は既に故人となったが松岡某氏は、その満鉄総裁時代このへそ酒が好物だったそうで特に酒席に侍る若い妓を捕えては、その拒む

一 お臍による回春法

のを強引に隣室に運び、へそ酒を楽しんでいたそうである。又朝鮮総督時代のT大将も若い妓生を捕えてはこのへそ酒をたしなんでいたと云う話がある。伝え聞くところによるとこのへそ酒こそ、延命長寿の回春法としては朝鮮人參を遙かに凌ぐとか、従って斯道の粋人間では非常に珍重されているそうである。

らがばがばと血汐が湧き出るのです。はげしい息遣い。充分右へ引廻しておいてぐつと刃を抜き、今度は乗馬ズボンの前ボタンを外した臍下一寸五分ばかりの処へ刃を上むきにしてぐざとばかりに突立てます。

「むう……ッ！う……ッ、ツム……うムム……ッ……ッ……うムッ……うむ……」

しづかに切り上げる白刃。腰を浮かせ必死に怯える女ざかりの肉体。意志といひてちの血みどろの闘い。乗馬靴をふみしめ、オートバイにしっかりと跨りながら彼女の両手は懐剣をにぎりしめ、両眼を屹と見開いて最後の苦しみに鯉のように喘ぎつづけます、女乍らも男装に身を固めて作法通り十文字にかき切る白い腹。やがて腹部大動脈に切り込んだ彼女は

「ウーッ！ううムッ」

と烈しく呻き、駆けつけた団員達の見守るうちに取乱す様子もなく両肢をふんばり、体を硬直させながら散って行くのでした(完)

先ずその方法であるが、何と云っても女性若い方が良くお酒は日本酒の特級酒が宜しいそこで女体腹部の湖お臍の穴に徳利のお酒を注ぐ——するとなみ／＼と溢酒は………を散歩したものが粹人はそれを嗜むと云う訳である。之は体温と同程度にお爛のついた酒の中に、若い女性ホ

ルモンが混合して化学作用を起し、回春の妙薬となるのかも知れない。

お 臍 の 研 究

二 臍による性別

占い

— 追 補 抄 —

これは今では一種の流行とも云う可きものになって仕舞ったが、

須 藤 律 夫

もと／＼はイギリスに

於けるれっきとした珍習に発するものなのである。女が妊娠すると生れて来る子が男の子か女の子かを知りたがるのは、敢えて当時者の夫婦のみならず、親類、縁者一同の共通した気持であろう。だが現代の医学では胎児の性別を事前に予知する事が出来ない。そこで何処でもやるように占いじみた事が行われる訳だが、イギリスでは大真面目に、次の様な性別予知法が行われるのである。と云うのは先づふくらんだ母親のお腹に縫針を突き刺すのである。そしてその針には一メートル位の糸がついている。この糸の端を夫が持つてそっと引張る。と、ピンを張った糸の先の針の頭がピリ／＼と動く。斯くて針の頭が孤を描いて円く動いたら、生れて来る子は男の子、上下に動いたら女の子と判別する訳である。一寸他愛もない方法のようにも思われるが、

然し彼のハリウッド随一の美人スター、エリザベス・テイラー嬢が祖国イギリスの風習に従ってこれを行って以来、アメリカ中の妊婦が真似をし、それが蔓延して、今では世界の風習になりつつある。(以上珍習、奇習イギリス版より)

筆者註、(我が国では妊娠十ヶ月に到るも尚臍窩の存在する時は男子、臍窩が既に消失し、却って臍が突出する時は女子と相せられているが、之は初産婦の場合、又経産婦の場合等、多少の相違を免れない。)

三 造 臍 手 術 の 話

お臍が二つあったら化けものであるが、お腹の真中を示すこのボタンは無くても又困りものである。次は人工的にお臍を造り上げたと言う山本医学博士の話である。

— 産婦人科では妊娠した子宮の大きさを臍を中心にして計算する。例えば妊娠五ヶ月は恥骨結合と臍の中程の大きさと、妊娠六ヶ月は臍の高き迄とか云うように、臍に手を当て、撫でる丈で便利に妊娠月を計算する事が出来る。けれど臍は誰でも同じ腹位にある訳ではなく、個人によっては随分異なる場合がある。局所の位置が違うように異なるのであるから妊娠子宮の大きさを計るのに、子宮底の高さを臍を基準にせず、恥骨結合からの長さを計って妊娠月を割出す方法もある。

婦人科の開腹手術は子宮を目標にする為め大抵の場合先ず臍と恥骨を結ぶ線をザックリと切開する場合が多い。なくもがなの臍なのだが、これは或る女の子で強度のヘルニヤ(腸が臍の窩から突出する俗に云う出臍)で困った親が治療を頼みに来た。そこで手術をして腸をつめてヘルニヤを治したのであるが、上手く行って手術の傷跡も、すっかり癒える。と、その両親はあわてゝ仕舞った。娘のお臍もなくなっていたからである。『嫁に行つて臍がないとなつては困る』と両親に泣かれて実に綺麗に治つてのっぺりした娘のお腹に再びメスを当て、お臍を造り上げた事があつた——と。

(未完)

【レポート】雑誌通信

む だ 毛

／＼文芸春秋「オール読物」十二月号

柳 沢 吉 保

又々、「わき毛」のことで恐れいますが「オール読物」十二月号「御存じですか」という面白い記事に、左のような文がありましたから御知らせいたします。

む だ 毛

ワキ毛の魅力というのが最近話題になっている。脱毛されない自然のままのワキ毛が野性的な魅力があるというので、新しい女性の武器として流行しそうな気配があるからだ。いま売出しの肉体女優、マリナ・グラディが「悪者は地獄へ行け」でみせた、金髪のロングヘアに片腕をのせ、ワキ毛を押し気なくさらけ出した水着姿のシーン。まつたくものすごいセックス・アツピール。ソフィア・ローレン、シルバーナ・マンガローも「河の女」や「苦い米」でワキ毛の魅力を、いかに発揮している。

日本でも旦那ローラン・ルサツフルを伴い風の如く現われ、話題をまいた谷洋子や、ピンボウ・ディナウと夫婦とも稼ぎの淡路恵子が、ワキ毛露出性的魅力型。

いままでムダ毛とされ、そりおとしていたワキ毛も、このところ女性にとっては美的価値ばかりではなく立派な商品。昨年大流行をみたヘア・パーン・スタイルがすたれ、ロング・ヘア時代に移りつゝあるというから、来年の夏ごろにはワキ毛をそらないグラディ・スタイルが、世の男性を悩ますことになりそう。

「むだ毛」とはそもそも美容的用語で、美的にみて必要でない毛のこと。マユ毛の太りすぎるのも、オデコの狭すぎるのも、むだ毛が多いから。もつとも人類学的にみればムダ毛というのは一本もない。人間創造の神が造られたものに一つとして無駄はないから

だ。ものの本によると頭髪は人間の最も大切な頭脳を守るため、ワキ毛は腕と体部のマサツを防ぐため、ウブ毛は皮膚の表面積を広め体温の調節をはかるため、とそれぞれ存在意義をもつ。

陰毛のことはのつていないが、このデンでいくと下の方も時々マサツがあるから、それなりの存在意義はあるわけだ。もつともなかには無い方がかえつてよいというものもあるから、これらの効用も実際にはそれほどないらしい。人類の進化につれ、やがて毛は一本も無くなるかも知れない。

人間の毛は、硬毛と軟毛の二種類ある。硬毛はさらに長毛と短毛に分かれ、頭髪は長毛ワキ毛、胸毛などは短毛。

うぶ毛は軟毛に属する。毛は発生学上からいえば、最初全身にあつたものだが、その後だんだん退化して、今ではクチビル、タナゴコロ、乳頭、踵、龜頭などには生えない。医学的にいえばホルモンの関係で体の位置によつて局部的に密生している。

毛の太さは頭髪などの長毛で〇・〇五—〇・〇二ミリ、ワキ毛、陰毛などの短毛は〇・〇五ミリ、毛の数は頭髪は十二万本、ワキ毛三百—七百万本、陰毛は案外多く千—千五百本というのが標準。

色は金、明褐、暗褐、黒、赭の五種、人種別によつて異なるが、なかにも同じ人種でも毛

皮内のメラニン色素の出来具合で異なるものもある。白毛はこの色素がなくなつた場合に起る現象。人種別や毛の種類を問わず白くなる形は断面が円形、三角形、ソラ豆形などがあり、円形以外の不整形は毛にネジレが出る頭かは円形、ワキ毛や陰毛は三角形のものが多し。

毛の寿命はマツ毛や生え際の毛で百―二百日、頭髪や陰毛は二年前後、頭毛は普通一日六十本程度抜ける。

秋は抜毛が多いというが、これは夏間の熱や栄養の関係で弱くなつてゐるためだ。高熱の病氣にかゝれば毛の抜けることが多い。陰毛に抜毛の多いのもこのためだ。

毛は女性にとつて大切な美の要素となつてゐる。「あるべきところに無い」とか、「普通より薄い」とかいふ／＼男女性とも苦勞するところ。薄毛、更年期に入つた人たちの悩みのタネは先天的なものと、後天的なものがある。

先天的なものは遺伝、後天的なものはホルモンの不足による場合が多い。後天的なものは、毛は「薬」などでホルモンの補給や、毛根に感光色素を与えれば二番毛も望みないわけではない。先天的なものは絶望である。だが、植毛という手も最近の医学では進んでゐる。植毛は他人の毛では駄目。陰部の植毛も最近の医学では進んでゐる。自分の頭髪を用

いればよい。おしやれには生やす苦勞ばかりでなく、ワザワザはえてゐるのを抜く場合もある。ワキ毛をソる風習は上半身を露出するような服装になつてからのこと。

日本では洋装が普及した大正の末ごろが始まり。いまでは都会に住む女性ならたいていはソつてゐる。もつとも外人は金髪で細く大して目立たないから商売人以外はほとんどソらない。日本人は黒く太く存在が目立つのでそうもいかず、SKDの踊り子などは脱毛が舞台に上る一つの規則にさへなつてゐる。脱毛の方法は最初ソるか抜いたものだが、のちには硫化バリウム質のエバクリムなど薬品でとがした。戦後は美容整形が発達、永久脱毛といつて、毛穴に電気針をつつ込み、毛の組織を分解したり凝固させる方法がとられてゐる。

脱毛はワキの下だけでなく陰部もやる。いまはどうか知らないが、昔は色街などで陰毛の無い女性が珍重され、遊女は線香で根本から焼き切つたそう。いまでもワキガのある場合は脱毛してゐる。

ワキガはワキの下や乳頭の付近、陰部に出る。動物にあるアポクリン線という体臭が人間の毛穴に残つていて、これが分解すると悪臭を放つ。ワキガを消すには永久脱毛と同じ方法で、アポクリン腺を凝固させればよいワキ毛をそらない流行にでもなれば、よほど

手入れがよくないとせつかくの美人も台なしになる。

ところで毛深の人は助平だといわれているが、まんだら医学的根拠のないことではない。毛とホルモンの関係は、頭髪の真中の部分が女性ホルモン、胸毛、陰毛などは男性ホルモンによつて発育が促進される。したがつてハゲや胸毛の多い人は男性ホルモンの過剰ということになり、精力も絶倫だというわけ。人種別では南方系、アイヌ系、アングロサクソン系などが毛深く、モンゴロル系は毛が薄い南方、アイヌ系の多い日本人はさしずめ助平の部類に属する。

来年の夏頃は、もつとヴラディ・スタイルが世の男性を悩ますことになりそうだが、これは男性側の大いに歓迎するところだろう。しかし、貧弱な肢体の持主や不潔なのは困りものだ。本誌のモデルの方々、特に私の大好きな中富綾子さんのヴラディ・スタイルを御本人には無理でも、是非拝見したいものだ。本誌十二月号の南俊夫氏の『腋毛礼讃』を読み、早速、ストリップ劇場へ初見参に及んだが、目当の踊り子がおらずガッカリさせられた。舐めたように美麗なのは私には、かえつて不気味に思えた。

(創作)

赤い廃墟

青葉楨一

六尺禪

秋山巡査は、背を丸くして、出来るだけ早くベタルを踏んだ。事件発生で帰宅が遅れ、もう夜中の一時をまわっている筈である。

彼は、夜目にも黒々と校舎を横たえている私立の、星辰高校の方へハンドルをきると、いつものように、(近道だからな……)と、心に呟いた。自分へのいいわけであった。

星辰高校と隣合うようにして、終戦前までは、風変りな、煉瓦建の洋館が建っていた。それはまるで、明治時代の建物かと思われたが、本当は、そう古いものではなく、奇を好む当主が、わざわざ、煉瓦造りにさせたものだと言われていた。いつからか、付近の人々は、この家のことを、「煉瓦屋敷」とか「赤屋敷」とか呼ぶようになった。この辺り一帯は、数回の空襲にも、その難を、まぬがれたが、最後の艦砲射撃で被害をうけ、その時、赤屋敷も全壊した。

そのあとは、未だに手が入らず、幹を裂かれたり、折られたりして、畸型のようになった樹木に囲まれて、赤煉瓦の残骸が、不気味に静まったまま、荒廢するに任せてある。

秋山巡査は、赤屋敷の跡まで来ると自転車を止めた。彼は、氣持を鎮めるために、二、三度深い深呼吸をしてから、ひとりでに忍びあしになって、片方だけ残っている門柱のと

ころまで進んだ。

と、全く突然、「ケケ、、、、、」と云うかん高い笑聲が起り、そして直ぐに止んだ。

時が時だけに、秋山はギクリとして一瞬棒立ちになったが、忽ち職業意識が働き出し、息を殺して、前方の闇に神経を集中した。

すると今度は、「カチカチ」と云う、微かな、硝子の触れあうような音がした。

(ヒロポン！)

咄嗟に彼の脳には、その薬の名がピンと来た。そして、崩れた煉瓦の壁の角が、屏風のようになった蔭に人の氣配を感じると、コクツと固い唾をのみこんだ。

狙いをつけて、パツと懐中電燈を照すと、ジャンパーを着た二人の若い男が、余りの驚きに、うずくまったまま、口もきけない様子で、秋山巡査を見上げた。

「オイ、何をしていた？」

と秋山が云った途端、足もとの瓦礫が、ガラツと崩れ、不覚にも彼は、もんどりうって転倒し、どこを打ったのか、それきり動けなくなってしまった。

二人の男は、立上ると顔を見合せた。

やがて背の高いほうが、投出された懐中電燈を拾うと、秋山巡査に近寄った。

「オイ、大丈夫か——？」

もう一人も、こわごわ側へいく。

「大丈夫だ。のびちまってやがる——オヤ？」

「オイ、お前、此奴に見覚えはないか——？」

「ウン——そう云えば……」

「そうだ！ 確かにそうだ。畜生——此の前はひでえ目に合わせやがって……。よし、いいことがある。お前、足のほうを持ちナ」

「どうすんだヨ——？」

「いいから、サ、早くしろ」

二人は、気絶している秋山の身体を、少し離れた樹の下まで運んだ。

「オイ、早いとこ、此奴を裸にするんだ」

「裸に？ いいのかい、そんなことして——」

「ツベコベ云わずに、俺の云う通りすりやいいんだ。上衣から、ソラ——」

云われた男は、まだ不安そうに、秋山巡査の制服を脱がせにかりながら、

「本当に、一体、どうすんだ——？」

「うん。此奴をナ、真ッ裸にして、この樹に繋いどくんだ。明日の朝、誰かに発見されて大恥をかくって寸法ヨ。何しろオマワリだからな。フフフ……」

「ああ、そいつは面白えや。フフ、ケケケケ——」

「静かにしろ。お前の笑声は気色が悪くっていけねえヨ」

秋山巡査の上半身が裸にされ、筋肉質の締った肩や胸があらわれた。

「そうだ。何か縄みたいなもの——」

背の高い男は、懷中電燈をあっちこっちへ

向けると、道路に置いてある自転車を見つけ、

「ああ、あの自転車に何かついてるだろう。みて来い」

駈けていった男は、じきに細い麻のロープを持って戻って来た。

「よし、後手に縛って、そのはしを樹に繋ぐんだ」

風が出て来ていたし、三月とはいっても夜気は冷く、裸の肌は、見ているほうで寒いくらいだ。

「縛ったら、今度下のほうだ。待て、その前に、帽子をかぶせてやれ」

「帽子を——？」

「仮にも警察官殿だ。そのくらいの敬意は、はらわなくちやナ」

「なるほどネ。ケケ——」

「うん。それでよし——サア、靴だ——靴下も——お次はズボンだ——」

急きたてられながら、ベルトのバックルをはずしていた男は、不意に「あっ」と云って跳びのいた。

「ナ、何でえ？」

「キ、気がつきやアがった——！」

「チエツ、慌てるなイ」

秋山巡査は、（寒い！）と感じ、ブルツと身体を顫わせた。と同時に、その場の事態と自分の立場を覚ると、カッとなり、

「おい、俺を何うする気だ？ 貴様等、警察官を愚弄するのか！……」

と叫んだ途端、制しきれぬ速さで起って来る自分の身体の変化に狼狽した。

「オイ、構わねえ。相手は自由が利かねえんだ。早いとこやっちまえ。二人がかりなら、わけはねえ」

二人は、両方からズボンの裾口を掴んで、力まかせに引張る。

「オイ、よせ。よさんか。コラ。——」

秋山は、足をバタバタやって抵抗したが、ズボンはズルズルと抜けて、忽ち脱がされてしまった。

背の高いほうの男が、

「——あとは俺がやる。お前は、制服や警棒や、みんな一まとめにして持っている。いいか」

と仲間に指図して、藻掻く秋山の下半身から、ひっぺがすように、ズボン下を剥ぎとると、その下には、真ッ白な六尺褌が締められていた。それを見た男は、一寸驚いたふうに、「へエ、褌か。変ってやがる……」と呟くと前屈みになり、秋山巡査の顔を覗込んで、

「モシ、お巡りさん。褌だけは勘弁してやりてエが、そうもいかねえ。お気の毒だが明日の朝迄、真ッ裸でいて戴きやしよう。へへ、こないだお世話になった、ほんのお礼心でさア。ヘッヘ——」

(しまった! やつぱり——)

秋山は、募って来る興奮の中で、意志の力の及ばぬ、不随意筋を恨んだ。

しかし、今となつては、絶対絶命である。抵抗の無駄なことは、わかっているのだ。

男の手が、禪の結び目にかかった。

「マ、まて。まて。まて。くれ。それだけは、禪だけは、勘弁してくれ……!」

秋山は、警察官の誇も忘れて、泣くように哀願した。しかし、その言葉は、ただ彼自身の感情へ、拍車をかけることだけにしか、役立たなかった。

彼の五官には、もう、被虐の毒が、麻薬のように廻り始めていたのである。

浣腸

三村逸夫は、フツと眼を醒ました。枕許の時計を見ると、午前三時である。

彼は、あくびをしながら起上ると、便所へたつついたに、一巡りして来ようと思ひ、懐中電燈をとって、宿直室を出た。

逸夫の祖父にあたる人が、この星辰高校の前身である、星辰商業学校を創立し、現在は父が、理事長と校長を兼務している。

(オヤ?……)

と思ひ、逸夫は眼を凝らした。

一寸離れているので、ハッキリとは判らないが、自転車らしいものが、道の真中に置いてあるのだ。

であるのだ。

(誰だろう? 今時分——)

逸夫は、好奇心にかられて、道路へ出ていった。

近寄ってみると、やはり自転車であった。しかし、それだけではない。その辺の路上には、白のメリヤスや黒っぽい衣類が、散乱しているのだ。上衣とおぼしいのを手にとってみると、警官の制服であった。驚いて次々と調べていくと、警棒があり、ズボンも靴もある。そして、細長い白いものが、六尺禪だと判ると、逸夫の動悸は急に高くなった。

(何かあったのだ——!)

一人の警官が糸縷わぬ全裸になった(いや、おそらくは、された)ことが、彼の脳を一杯にした。

逸夫はひどく興奮している自分を感じた。

職員室には、空時間の教師達が、数人残っているきりであった。逸夫は、思ひだしたように、手帳の間から一枚の名刺をとった。

『秋山亮太郎』

そう刷られた五文字の名前を讀んでいるとあの夜の光景が、マザマザと甦って来る。

やがて、思ひきつたように椅子を立った逸夫は、電話室の扉を開けた。

しかし、受話器から秋山巡査の声を聞くことは、出来なかった。彼は、病氣欠勤だと云うのである。

学校が退けるのを待って、逸夫は、秋山巡査の下宿を訪ねていった。

逸夫を見る、秋山は、驚きの中にも懐しうに、白い歯をみせて、

「せんだっては色々とお世話になって……。」

あらためてお礼にと思ひながら、寝ついてしまったんで、つい——」

と云う口許に、薄く伸びている不精髯や、少しボサボサしている髪の毛が、妙に男臭い感じであった。

逸夫は、柱に掛けてある制服へチラとやった視線を、ふたたび秋山の顔へ移して、

「急にお逢いたくなって、警察へ電話したんです。そうしたら、御病氣だと云うんでしよう。驚いて来てみたんです。感冒でもひいたんですか? あのとき——」

「イヤ、足を腫らしましてね。もともと、原因は、やはりあのことなんです。抵抗したときに、右の足首を、石か何かで打ったらしいんです。大したことはないと思つて、風呂へはいったのが悪かったのか、急に腫れて来て、とうとう歩けない程になつてしまひましてねえ——」

「それは、大変でしたねエ……。で、手術でも——?」

「イヤ、医者は、ベニシリンでも射っておけばいいだろうって云うんで、ズツと注射でや

「つてるンですよ」

「痛むんですか？」

「痛みのほうは大分いいんですがね、何しろ絶対安静でしょう。それが苦痛ですよ——」

逸夫の、やや神経質そうな眉や、いかにも教師らしい、冷い眼を見ている中に、秋山巡査は、一種のせつなさに襲われて来た。それは、たとえば、全裸となつて、この青年の足下に身を投出したような、気持であつた。

彼は、一寸口ごもつてから、何うように逸夫を見上げて、

「——尾籠な話ですが、ね、便所へいけないのは往生しますよ。仕方がないから便器でとるんですが、小便はまあいいとして、困るのは大便なんですヨ。初めてやるンで、馴れないせいか、便意はあるのに、いくらいきンでも出てくれないんですからねエ——。浣腸がいいだろうと思つて、医者云つたら、下剤をくれました。面倒なンですね。——イチジク浣腸なら、自分でもやれそうだから、階下の奥さんに頼んで、買って来てもらおうとも思つてみたんですが、やっぱり、女の人には云い難くつてねエ——。ハハハ、今度はまったくコリましたよ」

秋山は、内心は、逸夫の手で浣腸されることを、望んでいるのであつた。しかし、まさか、そんなことは口に出せず、彼の前で浣腸の話をして、わずかに心を慰めた。

「浣腸」と聞いたときから、逸夫の胸はワクワクして、

「僕でよかつたら、やってあげましょう」

と云つた声も、息がはずんでいた。そして

秋山巡査が何か云うのもかまわずに、

「——とにかく、浣腸器や何か、いるものを買って来ますから……」

と云いすて、階段を駆け下りた。

表通りへ出ると薬局はすぐに見付かつた。

「アノ、浣腸器、ありますネ？」

若い店員の顔を見ないようにして、逸夫は訊いた。そんな筈のないことは分つてゐるのに、店員の笑顔が、此方の心をみすかしているようで、面映ひなのだ。

「これで如何でしょう——？」

と出されたのを、逸夫はロクに見もしないで、ポケットの紙幣をさぐつた。

「グリセリンも差上げますか？」

「ソウソウ——ああ、それから、脱脂綿も——」

逸夫は、そそくさと店を出た。

子供のよう待ちかねていた秋山巡査は、逸夫の戻つて来た足音を聞くと、枕から頭をもたげた。

逸夫は、買って来た物を一度そこへ置くと階下へいってコップを借りて来た。

「——グリセリンは、薄めるんですか？」

グリセリンを瓶からコップに移しながら、

逸夫が訊く。しかし、秋山も初めての経験でよく判らなかつた。

「じやア、そのまま、やってみましょう——」

逸夫が吸上げる浣腸器が、コップの縁にあつて、カチカチと鳴つた。

「どんな姿勢をしたらいいかな……？」

秋山は、襦をはずした、手深い股や脚を、開いてみたり屈けてみたりした。

「さあ——仰向けで、両足を上げて——恰度赤ン坊がオシメをするときみたいにしたら、どうでしょうね……」

逸夫が云うと、秋山は云われた通りに足を上げ、両手を膝の下に入れて支えた。

一寸触れただけで、キュツと絞れる、強靱な括約筋へ、力を加えつつ嘴管を挿入していくと、快い抵抗が、逸夫の指先から、痺れるように這いあがつて来る。

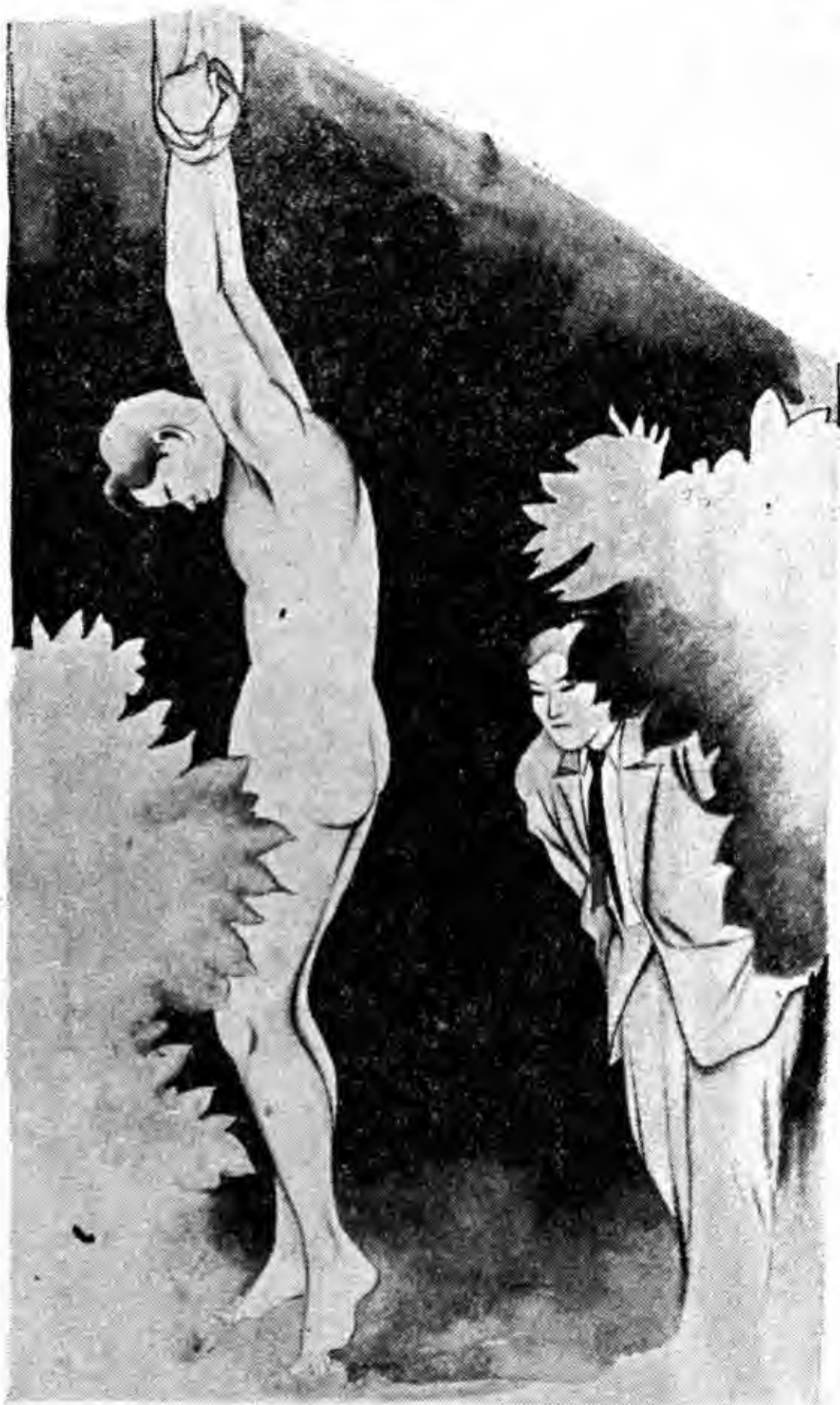
秋山巡査は、焼火箸を突込まれるような被虐感に、我にもなく、「ア、ア、アアアアア……」と、啜泣くような声を上げると、全神経を凝らして、腸内の変化を待った。

浣腸器を抜取ると、逸夫は、そのあとを脱脂綿で押さえた。

腹痛をとまなつて、腸もろともに押出そうとするような、凄じい便意に、秋山は思わず

「便器々々！」と小声で叫んだ。

「まだ、まだ。暫く我慢しなけりや効果はあ



りませんよ」
逸夫は冷ややかに云って、脱脂綿を押さえる指をゆるめようとはしない。
うなずきつつも秋山は、額に油汗を滲ませ眼には涙さえ泛べて、呻いた。
やがて、頃合をみて逸夫がやっと便器をあててやると、秋山巡査は激しく身顫いして、

勢よく多量の糞便を排泄した。
翌日——。
秋山巡査が待っていると、逸夫が風呂敷包を抱えてやって来た。
浣腸の器具は置いていったのだし、何だろうと思って見ていると、
「今日はいいいものを持って来たんですよ。何

てゆっくりやるといいですよ」
「それア、ありがたいナ……。しかし、三十過ぎて、オシメをするようになるうとはネ。ハハハハ……」
秋山巡査はテレかくしに笑ったが、早くオシメを試みたくて、ウズウズしているのであった。

だか判りますか——？」
と云って、逸夫は悪戯っぽく笑った。

「サア……？」

秋山には見当もつかない。
黙って逸夫が開く包から出てきたのは、男物の古い寝巻で作った、五、六枚のオシメである。

「……！」

秋山は眼を瞠った。

「——ホラ、これが、おむつカバー。子供のときのゴムの両合羽で作ったんです。余りうまくは出来ませんでしたかね……」

逸夫は、手製の大きなおむつカバーを、両手でひろげて見せた。

「どうです、いい思いつきでしょう？ 今日これを当て

毛むくじやらの、大きな赤ン坊は、大人しく浣腸をおわると、オシメを当てて貰った。

おむつカバーに押さえられた、布地の柔かな圧迫が、一種の緊縛感となって、オシメの与える屈辱を、いやがうえにも甘美にする。

秋山は、身を揺する陶醉に、熱い息を吐きながら、思いきり脱糞し放尿した。じかに皮膚へ触れる糞尿の生ぬるい感触が、オシメの中でジクジクと拡がっていくのが、何とも云えない。秋山巡査は、眼を閉じてゆっくりとそれを味い悦しむのであった。

秘 密

秋山巡査は、一週間ぶりで、「赤屋敷」の前に自転車止めた。

空には、まだ昼間の青い色が残っているが赤屋敷の跡は、煉瓦の赤もくろずみ、樹立の間には、早くも夕闇が濃み始めている。

秋山は、辺りに人気の無いのを見定めてから、足早に自転車をひいて、門を這入っていた。

そこは、彼の秘密の場所である。

しかし、今日の彼は、何時ものようにすぐ服を脱ごうとはせず、一本の古い樟の幹にもたれて、暫く物思いに時を過していた。

偶々おこった奇禍から、警察官としての辱しめを受けた夜の記憶が、身体中を駆回るようであった。もうあんな目には、二度と遭う

ことはないのだと思うと、よけい身内が熱くなる。

それにしても、あの、三村逸夫と云う青年教師は、何ういう男なのであろう。口は笑っても眼だけは笑わないような、彼の冷い視線が、今では秋山の心を離れなくなっている。

秋山は、逸夫に、肉体のあらゆる部分を知られたことで、不思議な親しさ、恰度、女が身体をゆるしてしまった男に感ずるような気持ちを、抱いていた。そして、彼に浣腸されたいと願ったように、彼の手でさまざまな責苦を与えられたいと、念じているのである。

しかし、浣腸とは違い、容易にはきりだせなかった。亦、警察官の良心が、それをさせなかった。秋山巡査は、模範的な警察官として誰からも認められていた。それだけに尚、彼の苦悩は大きいのだ。彼がもし他の職業に就いていたら、それほど煩悶しないで済んだかも知れない。秋山は、厳しい制服姿の自分を、フト鏡の中に見たりしたとき、その心の奥に潜むアブノーマルな性向を思っ、ゾッとすることがあった。彼には、対象を外に求めるなど、思いもよらなかった。しぜん彼のマゾヒズムは、自虐のかたちをとって、発散されていたのである。

秋山は、ツと幹を離れると、それから物に憑かれたようになって、着ているものを脱捨て、六尺禪一本になると、土の上に身を投出

し、芋虫のようにゴロゴロと転った。少しゆるめてあった禪が、いつかズリ下って、太股にからみつく。ハッと喘ぎながら、樹に縋って起上り、よろめいては又倒れる。禪はもうぬけ落ちて、真っ裸であった。咽喉は焼けるように渴いているし、頭の中がドッドツと鳴っていた。

彼は、五、六米先に落ちている禪を拾いにいって、その一端に小さな輪を作ると、もう一方の端を恰度投縄のように通して抜き、高さを加減して、しっかりと樹に括りつけた。そうして今度は、手拭を両手の通るくらいの輪にすると、それへ先ず左手を通し、次に禪の輪を通してから、右手を入れて、身体を倒した。それによって禪の輪が締ると、手首が緊縛されたようになり、身体の重みで手拭が食込んだ。

逸夫に責められているという想定が、昂奮を一層駆立てた。

(……!)

快い虚脱に、秋山巡査はウットリと身を任せていた。昂奮の残渣が、五官からまだすっかり抜けきっていない。左手は、禪の縄に繋がれたままである。

突然、何かフワリとした白いものが落ちて来た。秋山は、反射的に身体を硬くした。

三村逸夫は、そんな秋山を好もしそうに、

しかし、どこか残忍な眼付で眺めていた。
「三村さん——君は、見ていたんですか？」

——ヒドイ人だ……！」

秋山は、仕方なく、まのわるそうに笑ったが、心中の狼狽は隠しきれなかった。今の今迄サディストとして想いえがいていた逸夫であつても、現実にかえれば、全く違った存在になるのだ。秘密を知られたのは、何としても取返しのつかぬことであつた。

襷を締める彼の手は、ワナワナと顫えた。制服を着けると、尚のこと、逸夫の前で顔の上げられぬ恥かしさであつた。その場から、すぐにも逃出したい気持なのに、足は釘付けになつたように動かない。

何か弁解しなければ、と焦る一方では、既に見られてしまつた以上、どんな弁解も役にはたたない、と絶望的になつた。

落着こうと思ひ、秋山巡査は煙草を取出したが、箱は空になつていた。

逸夫がポケットから自分のを出した。

一本貰うと、秋山は貪るように吸つた。しかし、軽いめまいがするだけであつた。

「大丈夫ですよ、秋山さん。他の人に見られたわけじゃアなし——僕を信用すればいいんです。心配することはありません」

と云うと、逸夫は、一寸口をつけただけの吸差をポイと捨て、靴で踏みつけた。

「——しかし、もし世間へ知れたら、僕は破

滅だ！ おしまいですよ……！」

秋山は、額を手で押えた。

「だから——僕さえ黙っていたら、世間へ知れる気遣は無いわけでしょう。秘密を知っているのは、貴方と僕だけですからネ」

「ええ……、それは……」

「——今夜のことさえ無かつたら、僕にも知られずにすんだと思つてゐるでしょうが、実を云うと、僕には前から判つていたんですよ。正確に云えば、推測してゐたんです」

「……？」

「別に不思議じゃアありません——あの事件の夜。それから、何回かの浣腸のとき。——それが何を物語つていたかは、貴方自身承知の筈じゃアないですか。——もっとも、もし僕がノーマルな人間だったら、おそらくは見逃してゐたでしょうね……。もうお判りでしょう。僕も貴方と同様、アブノーマルな傾向を持った男です。同性を対象とした、サディスト。それが僕の正体です」

「君はまさか、僕をからかつてるンじゃないでしょうね——？」

秋山は、意外というより、何か欺されてゐるような気持であつた。

「とんでもない！ 浣腸から、オシメの世話まで、單なる親切や、おせっかいで、出来ることじゃアありませんよ。夜、貴方を助けたときだって、僕の気持は、貴方と全く同じだ

つたんです——」

そう云われれば、秋山巡査にも思当るフシがあつた。それに、夕暗の中で光つてゐる逸夫の眼は、恐ろしい程真剣である。

「秋山さん。僕はネ。何うしてだか、子供の頃から、巡査が好きで好きでならなかつた。道でいきあつても、ドキドキするくらい。子供の僕には、お巡りさん、が此の世で一番偉い人だつたんです……。ねえ、解りますか。僕には貴方が必要なんだ！ 貴方だつて、そうでしょう——」

逸夫の声は、刃物のように秋山の胸を抉つた。秋山は、崩れそうになる心を必死にふみこたえて、警棒を固く握り締めていた。

「——秋山さん。貴方はやはり、警察官であることに拘つてゐるんですね。警察官にあるまじき行為だと、恥じてゐるんでしょう。その気持は、解らないじゃアありません。僕だって、教師ですものね。貴方のように考えることだってあります。しかし——」

「三村さん。僕は何うして巡査になる前に、君に邂逅つてゐなかつたんだろう！ 数年間というものの、官服を着通して来た俺は、何という破廉恥漢だ……！」

僕の制服は、当然、剥がるべきです。僕のような、警察官に値しない人間のむくいですからね。——僕を、かたくなだと恨まないで下さい。卑法だと嘲わな

いで下さい。僕は脳が混乱してゐるんです。

時間が欲しいんだ——返事は必ずします。しかし、今度僕が君の前に現われるとしたら、その時は既に、警察官では無くなっているでしょう。そうしたら君はもう、僕には用が無いのかも知れませんか。ハハハハ……」

(レポート)

「切腹心中」を実演の写真

週刊誌に『眠狂四郎』を書いて今や爆発的？ 人気を得ている柴田錬三郎氏のところについて先日住所の書いてない封書が来た。例によって『原稿送ったから読んでくれ』か『お前は流行作家だから金を貸せ』といった類だろうぐらいに思っただけで開封してオドロいた。

写真同封で、『早く眠狂四郎に腹を切らせろ』と書いてあるばかりでなく『切腹心中』の場面をそっくり真似して姉の長じゆばんを着腹にさらしを巻いて短刀で腹を切ったところの写真を送って寄越したのだ。柴田氏の推理では、左から右に短刀をひいたところでシヤッターが切れるようにしたいという。

切腹実験ぶりを作者にみせようとしたのだろが、しかもなおって癒着したのをもう一度切ったんだから、まったく大変な切腹マニヤだ。さらに柴田氏を悩ましたのは、その青

秋山巡査は、泣くように頬を歪めると、淋しげに笑った。そうして自転車に寄ると、暮れきった道を下町の方へ走りさった。

三村逸夫は、後を追わなかった。彼を支えているものは、微かな期待である。何時迄も

年のお母さんから電話があつて『切腹の場面なんか書かないで下さい』という訴えに、自分で悪いわけでもないのに『すみません』とあやまった。こんなことで現在もとも多忙な彼も、思い出すたびにペンがしぶりノイロ—セ気味だそうだ。

(十一月十三日付内外タイムス)



女性専門に70件

——総武線荒しの変態スリ——

総武線で女学生や通勤女性からスリを仿いでいた男が九日警視庁捜査三課に捕まった。

千葉県印旛郡四街道、無職河野基良(二六)

で、同日朝九時ごろ同線浅草橋—秋葉原駅間で板橋区板橋一会社事務員山口弘子さん(二〇)のハンドバッグから財布をすりとうと

したところを同課吉川刑事に逮捕された。持っていた手提カバンに婦人用財布六十個、定期券五十七枚、貯金通帳四通、他人の名刺百

立ちつくしている彼の眼は、フト暗い路上に灰白くうねっている六尺禪の幻を見たと思つた——。

(完)

二十枚を、内ポケットには女学生の写真九十枚を入れていた。

河野は去る三月ごろから総武線の車内で朝夕のラッシュニアワーを利用し、婦人の背後にびったりとくっつきスリとっていたもので、七十件の犯行を自供している。また被害品のなかに入っていた女学生の写真を内ポケットに入れ、いつもはだから離さないという変質者だった。

同人は昨年三月に同様犯行で同課に捕まり執行猶予中だった。

(十一月九日付、毎日新聞夕刊)

前者は誠に熱心きわまりない切腹マニアの執心に驚きます。この人はきつと行動派なのでしよう。後者は、明らかに婦人の持物に対する強度のフェチシストでしよう。然し、このように盗みを働くようでは困りものです。何か犯罪にならない方法で昇華されなかったものかと悔まれます。

(東一郎記)

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第四百 白人女性と有色人男性

前項末尾で私は女性として、或は女性に代って、Mによって白人男性に仕えたいのだと書いたが、それは私というものの一部分であって、残り大部分の私はやはり白人女性に惹きつけられる。

米軍の中には女の兵隊——むしろ女将校、女下士官らしいが——も随分いる。前項迄との関係上、白人女性への手掛りを先ずここに求めよう。男に飢えた彼女等が密かに日本男性によってその欲望を満すということは、巷間屢々伝えられることであって、否定すべきものでない。然し彼女等がその男をどんな風に扱い、どんな心理で接しているかについては、無責任な新聞雑誌記事以外に資料の拠るべきものがない。前項迄の資料はすべて洋娼の悲惨な姿に対するヒューマニズムから集められたものであるが、女将校の相手をしたとて男には悲劇は来ない。実際は「生きた性具」視されていて、白人崇拜的感覚から、金髪美女の相手をしたことを、むしろ果報のように考える面さえ強い。従ってこれについては洋娼の場合のような文献らしい文献はない。そこで推測によるしかない。

推測の方向は二つある。白人男性の日本女性に対する態度から逆

に推測するのが一つ、白人女性の黒人その他有色人男性に対する態度から直接に類比するのが一つ。

無責任な噂話が多いにせよ、彼女等に接した日本男性はいずれも彼女等の旺盛な性慾に悲鳴をあげたらしい。前項の論法からすれば彼女等のVと日本男性のPとが等置されたことになるだろうか？即ち両者は人格として対等視されているのだろうか？

そうではない。差別観の下ではPとVとの結合が対等を意味せず男が女を「黄色い便器」扱いすることができた（前々項）ことを思い出そう。女の方から男を便器扱いするのはおかしいというのなら洋妾をもつことを「黄色い猿を檻に飼っている」という表現（神崎清氏による）を借りて来よう。これなら女から男へも通用するだろう。つまり畜生扱いと云うことだ。

畜生などと書くと、私好み勝手に畜生妄想をはねまわらせているように思われるかも知れぬから、典拠をあげよう。黒人については、白人女性が黒人男性に関係して性欲を発散する事例は欧州では少くない。これは何故か？婦人解放運動研究家エベルハルトは、大著「婦人解放とその性的基礎」（その第二部第四章）において、この種の事例を沢山あげているが、一方植民地在住の白人女性の

「黒人女性を妾達と法律上同様にしようとする試みほど妾達に対する侮辱はありません。妾達はそれを聞いて顔をなぐられたような気がしました。人三獣七のゴリラ女達——当地の黒人女性の大部分はこんな程度の者です——に法律上の権利や教会の祝福を与えなつて白人男性の伴侶にすることはできません。」という痛烈な文章を引用し、劣等種属に野蛮な獣性の存することを肯定した上、白人女性が黒人男性を求めるのは、結局ゴリラ男の獣性に欲情を刺戟されるからであるとし、「頽廢した欧州女性のかかる獣的性愛衝動には、疑いもなく獸姦的色彩が見られる、この墮落は大いに非難攻撃せねばならぬ。」と云っている。黒人を相手にする白人女性に獸姦の意識を見ているのだ。そして——後段のC技巧要求の説明にもなるわけだが——この場合白人女性側が積極的になり無遠慮になる理由を、次のように考察している。曰く、「婦人達は黒人相手に性欲を発散させるに当っては甚だしく慎しさを欠くのが常であるが、これは、彼女等が、心の底では自分の欲情の対象物を非常に低く評価していることを示すものである。けだし、ひとは自分の尊敬する者の前においてのみ羞恥を感じるのであるから。人間が畜生は対しては何の羞恥心も起さず、その面前で平気で弱点を露呈するように、婦人達は黒人相手には——黒人の持つ獣性だけしか眼中にないの——羞恥感情を示さない。彼女等にとって黒人とは欲情の対象物たる畜生に過ぎない、生まの肉欲の刺戟を満足させるための蔑しむべき道具に過ぎない。」と。(羞恥心については第七十八項も参照)

右は黒人についてのことだ。然し、白人女性の有色人に対する優越意識は、黒人に対する日本人に対すると異なるわけでない。エペルハルトは、欧州女性について述べた後、米国において黒人に対する蔑視の最も甚だしいことを述べ、黒人男性は白人女性を犯そうとした嫌疑だけで処刑せられる位、両者の接触に対する社会的禁圧のきびしいことを指摘し、米国女性も欧州女性という姉妹同様、有色

人と緊密な交わりをしようとの不潔な欲望に陥ること稀でないが、「米国では黒色は余りにも禁圧が甚だしいので、先の黒人男性の地位はそっくり日本人、支那人によって取って代わられている。」と断じている。この米国女性が日本男性に対する時「黄色い猿」を相手にする獸姦的意識をもつとしても何の不思議もない。いや意識的にはそうではないかも知れぬが、少くとも無意識的にそういう非対等感をもち、従って羞恥心を失うこと、これだけはエペルハルトの権威にかけても、疑いを容れない。

これに対応しての日本人側の心理になるが、お相手をさせられた男性が果報者視されてるのは何か示唆的である。ある洋娼は、白人兵より黒人兵を好む理由として「黒人は少くとも私達を人間として扱ってくれるから」と云った(日本の貞操)。この感覚は健全だ。然るに日本男性は、尊重してくれる同胞女性よりも、猿としか見てくれない白人女性の相手をしたがるのだ。対等でなくても接触できるだけで果報とするのだ。敗戦国の男として勝利国の女を征服する復讐感という点から、これを説明しようとする人もあるようだ(五島勉氏)けれども、端的に白人崇拜思想ではあるまいか。黒人は白人女性を犯す時に、神を瀆すに似た心理的緊張を味い、その法悦に生命をかけるのだといわれるが、金髪美人に対する日本人の考え方には、この黒人のと同質のものがあるように思われる。

彼女等が進んで日本男性を抱いたとしても、それは獸姦的なものに過ぎぬわけだが、もう一つ考えておかねばならぬのは、彼女等の自由にし得る日本男性の数が少いことだ。男の兵士達にとって洋娼はつかみどりである。だから彼等は性的贅沢をするのである。V少佐は一方に人妻の供給源を持っていたから、自宅のメイドに対してはVよりMに興味を懷いた。絹子を縛ったGIは、もしその晩金持の奥さんを手に入れたら、そうはしなかったろう。男の兵士

達が日本女性を完全に性具として扱った例が多いのに、女将校の方に余りそういう例を聞かないのは、要するに材料の豊富か貧弱かの相違なのである。

だから、別に性欲を満しうる条件で更に日本男性が用いられる時には、性具としての使用例が出て来る。文献としての引用には堪えまいが、赤新聞の記事で、ある民間米人の妻が、ボイラーマンのアルバイト学生に変態サービスばかり要求したという話を讀んだ。これは夫がいるから、この青年のPを必要としなかったのだろう。変態サービスとは何か？こういう場合のテクニクとして考えられるのは、白人男性におけるF技巧に対応する特殊奉仕としてのC技巧である。前項で言及した高橋鉄氏「紅閨秘窟」に面白い絵が出てくる。ニューヨークの裏街でもあろうか、ある婦人専用サロンの看板に、Tをペロリと突き出した黒人の顔が書いてあるのだ。黒人による特殊サービスで婦人客を招いているわけだ。黒人の顔を使つたところが面白い。婦人客に買われる男娼としては白人にも人がないではない。然し白人の顔を看板に出したのでは客寄せにならないのだ。Vは女性の肉体中一番汚ないところと観念されてるのが普通である。いわゆる「お手が汚れる」場所である。それをTで奉仕させることは、相手の人格の冒瀆である。ヒルシユフエルトは貞淑な婦人の中にはC技巧を喜ばぬ者が少なくないと語っているが、それは右のような心理が働いては相手に征服されようとする女性性感をかつてぶちこわす結果になるからである。それに第一相手が知らぬ男性の時には露出自体が非常な羞恥感を伴う。結局白人の顔の看板では婦人客は入って来ないのである。——ところが黒人ならどうだろう白人の「手が汚れる」場所でも黒人のTなら汚れない。彼女のVには黒人のTこそふさわしい。彼によるC技巧は、だから性感を減退せしめる契機を含まない。面前露出も別に羞恥感を起させない。そこで、黒人の顔が書いてあれば、婦人客は遠慮せずに入ってくる。

これがこの看板の秘密だ。

この心理は、日本人に対する人種偏見がある以上、そのまま日本男性に対しても生じる筈だ。女将校が日本男性に対してC技巧を要求して、断わられたとしたら、恐らくこう云うだろう。「お前は日本人でしかないじゃないの。これは日本人に最もふさわしいテクニクなのよ。なぜ理解できないのかしら。」と。ただ彼女等の手に入る日本男性の数が少いために、まだこのような場面が少いというだけのことである。

この供給が豊富になったら、彼女等はただに性具的使用に止まらず進んで——男達の「精神的強姦」に並ぶような——「愛情の狩獵」も始めるだろう。まだ私がマゾヒズムに興味を持たなかった頃に讀んだため、誌名巻号共逸したが、戦前に綜合雑誌で、比島における米国有関女性の行状記を讀んだことがある。比島が米国の植民地だった時代のことだが、白人女性にとっては、比島人男性相手の火遊びというのは全くひまつぶしの嗜虐的な娯楽たり得たらしい。彼女等が一寸素振りを見せれば、比島人男性はすぐ夢中になる。散々求愛の言葉を云わせ、一緒に車で出かける。ワザと白い肉体の一部を露出する。たまらなくなつた男が「奥様……」と、その腕にでもキスしようとするのを待ち構えて、ピシヤリと平手打をくれる。おあずけをくついている犬が許しを得ずに食べようとして罰されるようなものだ。女の方は初めから肉体を許す気持はなく、ただ自分の魅力のテストに比島人男性を次から次へと引掛けて平手打を喰わせる——そんな話であつた。今想ひ出して見ても、私は昂奮する。日本が占領され、植民地として米國に領有されていたら、それと同じような状態が今頃はいくらでも見られたのだろうにと。………沖縄における米軍の暴虐にマゾ的嘆美を感じないではおられぬ私なのである。

(この項終り)

——サジスチックな演劇——

ミュージカル捕物帖



△浅草松竹ミュージカル第一回公演▽

十一月一日より
十一月十五日まで

本田 由 郎

(一)

花の姿を競うのか、浅草観音の裏、ぞくに浅草の奥山と云われているこの場所に、色とりどりの見世物小屋がかかっている。中でもとりわけ人気のあるのは、美しいお徳、お玉の姉妹の出ている花園座がある。

浅草の近くの稲荷町に住み、この辺一帯を縄張りとする目明し、人よんで稲荷町の金八親分(古川ロッパ)は、体が大きく太とつちよで、年に似合わず童顔のその顔が、人の好さを隠すことなく現している。金八親分は春の花にうかれてか、乾分の亀吉(内海突破)を連れて、ぶらぶらと奥山の見物にと出かけ

る。見物人の中に女賊弁天お紺(暁テル子)を見つけ出し、迷目明し金八親分と、それに輪をかけた様な乾分の亀吉は、奥山見物の気持など素飛ばし威勢よく横飛びに十手をふるって、「弁天お紺、御用だ」と懸命に追ったが、お紺は二人のすきをみて人ごみにまぎれて、花園座の中に姿を消してしまった。金八親分と亀吉の二人は、人をかきわけながら花園座の前にきた。迷目明しも、さすがに目明しです。お紺が花園座の中へ入ったと目星をつけたのです。見物人は人、又、人で一寸の余地もない満員大入の有様。舞台では、この一座の人気を背負うお徳、お玉の姉妹の芸が演じられている。小屋が破れるばかりの拍手だが突然、見物席から銃声が起こり、舞台の上では姉のお徳が身を伏せてしまった。「おい早く幕を下せ、幕を……」上下の大さわぎとなった。金八親分は怪事件なりと、亀吉と二人で舞台の上にかかけのぼった。お徳は胸を短筒で射抜かれ、真赤な血汐は舞台の板を染めた。お徳は自分は助からぬと思って、お玉こそ、因州鳥取七十七万石の城主、久留米駿河守の御落胤だと打明け、唯一の二品、短刀とお墨附の入った文箱を手渡した。この時お徳を尋ねて旅装束の武士、石坂善臣が来る。この旅装束の武士は駿河守の家臣で、命を受けて諸国を廻り、短刀とお墨附の入れた文箱を

お徳が所持していると耳にして会いに来たのである。

お徳は——因州鳥取七十七万石乗取をたくらむ悪家老、黒部主水正一味の者に御落胤と思われ襲われたのである。実は、お徳が御落胤でなく妹のお玉が御落胤であつたのだが、お徳は母親にひろわれて成長し、母がなくなる時に、お玉を迎えに来た時には短刀と御墨附を渡してやるように云われたが、つい悪心が起り自分が姫君になりたくなり、今日迄お玉に打明けなかつたのである。お徳は虫の息で石坂善臣に事の起りを話し、お玉の事をくれぐれもたのむのでした。此の話をそばで聞いていた女賊弁天お紺は石坂とお玉の後を追うが、その後を金八親分と亀吉、そして新しく乾分となつた鶴造が追う。後で姫君を亡き者にしたとばかり思っていた黒部主水正の一味は、姫がお玉であることを知り、同じく石坂達の後を追うのである。お玉と石坂は途中で黒部一味の赤松伝九郎等に追いつかれ、石坂は奮戦するが斬られてしまう。お玉はやっとの思いで逃げの

びるが、再度おそわれて、ついにつかまり水車小屋にゆわかれて猿ぐつわをされてしまう。

(二)

山肌が高々と立ち並ぶ見るからに険しい山路、遠い山々の肌に積つた雪が、春と共に融けて流れ出し、深い谷川を通り一本の河となり、この山路の水車小屋の水車を廻している

のである。この小屋は今住人としてなく荒れほうだいである。赤松伝九郎は水車を止めさせ水車にお玉をゆわえさせ、顔の半分を大きな手拭で猿ぐつわをかまし、助けを呼ぶ声も出せない様にしてある。黒部主水正は黒頭巾に顔をかくして、愛人お蘭の方と二人で出てくる。

「姫様、御覚悟、御命を頂戴仕る」

黒部主水正の命令で二人の浪人が刃を抜き放ち、お玉の胸三寸に白刃を押しつけた。お玉は大の字に縛られているからどうすることも出来ない。只々、天命を待つばかりだ。お玉の命は風前のともし火。

「待っておくれよ。お前様達は姫をなぶり殺しにすれば事がすむと思つてゐるらしいがこのお墨附が私の手の中にある内は、お前達の思うようにならないよ」

弁天お紺が乾分のガチャ安と道をいそいでやっとな追いついたのである。御墨附は、お玉が赤松等に追われている時にお紺が素早くすり取つたのである。

「待てッ」



黒部主水正は浪人を押しとどめ

「お紺、相談に乗ろう」

「そう話が解っていただければ、しかし千両、ビタ一文かけても手は打ちませんよ」

「うん、いいだろう千両出そう。もっとそばへこい」

お紺が近づくと、手を見せず切りつけた。

どっこい弁天お紺と異名をとった女賊、切先三寸をさつと身をかわした。

「黒部様、きたないまねはやめましようよ、こうなればこの御墨附は、二千両、三千両でも売れませんよ」

お紺はこう毒づいて逃げてしまった。

「お紺を追え」

数名がお紺の後を追った。この時、目明金八親分が乾分の亀吉と鶴造をしたがえて水車小屋へたどりつく。

「御武家様、その娘を私達にお渡しただけませんか」

「なに、目明し風情で何ごとか」

「なにを三ピン。こう見えても江戸稲荷町にその人ありとられた金八親分だ。腕づくでもうばってみせるぜ」

「いらぬ手出した。それ、あれを見る」

「水車を廻しや」

お蘭の方がいった。お紺を追ったため人数の手薄なため、お玉の体に責拷問を加えて、目明し達を防せこうと思っているのだ。水を

せきとめていた板がはずされ、水が流れ出し、水車が動き始めた。ぎーぎーと水車は廻り始め、お玉の体は真逆さまになり着物のすそが乱れ、赤い蹴出しの間より白い足が見える。顔に水がかかって息もつきかねる有様。肌にあす様な水で廻る水車と一しよに廻転する美女。

「どうだ目明し、手を引け。手を引かぬと姫は死ぬぞ」

「えーい、仕方がない」

十手をがらりと足元に投げ出した。黒部は十手を拾おうとした瞬間、横から手がのびて黒部の手をつかんだ。黒部はつかまりながら「姫を斬れ」

と叫ぶ。子供相手の鮎屋の仙太がお玉を助けるが、なぞの人物の出現により話は大詰となる。

(三)

この舞台での拷問の景は、残念ながら川田孝子ではなく代役のようでした。筋向いのフランス座でこの様な場面がありました。初めの時は、この座のストリップパーが演じていました。二度目の時は三冬まりが演じています。三冬まりは、新東宝映画「もゆる上海」(主演、川路龍子)で神田隆の演ずる、憲兵に私刑される中国人の女がそうです。三冬まりの豊かな肉体を御承知の人も多いと思います。

す。水車に赤の湯文字一枚で、上半身の乳房の下と下腹部を大ロープでゆわかれ、水車をぐるぐる数回廻わされます。両足が上になったとき、本当に苦しいのか三冬まりの顔が赤くなっていました。湯文字の端がまぐれて、美しい白い足が両方揃えてゆわかれているのが印象的に浮びます。裸体のまま水車にゆわかれていた姿を父親が見て、気が狂ってしまったのです。これで景が終るのです。この様な芝居が毎回上演される様になったらよいと思います。今、このところ年に一、二回のことなので残念です。

主な配役を書き出しますと、

目明し親分金八……………古川ロッパ
其の乾分亀吉……………内海突破
呼び込みの鶴造(後に金八の乾分)有木山太
女賊お紺……………暁 テル子
お玉(実は蘭)……………川田正子
お玉(実は蘭)……………川田孝子
お徳……………椿 由美
石坂善臣……………田島辰夫
鮎屋の仙太(実は若殿)……………北原 隆
家老黒部主人正……………佐藤マモル
お蘭の方……………大東あけみ
赤松伝九郎……………山田周平
配下丸山源之助……………大井哲夫
茶店の娘お花……………及川康子

花と朔風

(三)

北原純子

☆

夏の陽が早くも障子を染める頃になって、健が乱れ髪をかき上げる様にして入って来た。浴衣の裾がさつと捌ける時、種馬のような締った足首の深い毛が覗かれた。道子の胸にわけもない熱い嫉妬が湧いた。気のせいかな疲れた目をしている。一晩部屋を空けるなどという前例はない夫であった。

健は転がっている道子を、地面を見るよりも無感動な目で一瞥すると、其のまま机に向って聖書を読み始めた。

「第五章。イエズス群衆を見て、山に登りて坐し給いしかば、弟子たち此れに近づきけるに、イエズス口を開きて彼等に教えてのたまひけるは。幸いなるかな心の貧しき人、天国は彼等のものなればなり。幸いなるかな慈悲ある人、彼等は慈悲を得なければなり……」

まるで聖そのもののような端然とした姿勢で、いとも厳に朗読するのを、道子は遠い声の様に聞いた。

昨夜夫が何処で休んだか道子には解っていたが、何が面白くてあの小面憎い程驕慢な白い頬の少年の部屋へお百度を踏むのか、其処まで詳しくは判らなかった。それだけに道子の頭に湧いて来る想像は、どれも常識を越えた信じられない様な事ばかりであった。

もしかしたら、少年は夫の手ぐらい握っているのではないだろうか、とか。冗談まじりに接吻くらいは交わしているかも知れない、等と。

昨夜道子は何度夫が帰って来たような気がして、胸を轟かせて、障子の開くのを待ったか知れなかった。その期待が外れたあとの底知れぬ空しさは、身体の痛みを倍加したのだ

った。おりふしに鳴っていたふざけたピアノの音。その音を聞くだけでそれに附随した笑い声までも想像出来るような。

健がたわむれに弾くマンボやスイングの類であったのだ。世の中に妻を残して家を空ける夫は掃いて捨てる程居るけれど、健のようなやり方をする夫なんているものだろうか。

どう考えても、此れが自分の夫だとは思えなかった。夫でなければ何だろう。恰度子供頃に、何時も女の子をいじめる悪童が居て偶々それに撞まった時の、あの身の凍るような経験を呼び起してしまうのである。

此れ程までにしいたげられても、尚、健を振り切ってしまうえない不甲斐なさに歯ぎしりする道子である。

縛られた痛みはもう通り越してしまっていて、今はほんの一寸でも、身体を動かすと、

吐きそうに胸が苦しかった。

尿意を催したらどうしよう。と、ふっと杞憂が頭を横切ったと思ったら、忽ち下腹が痛み出して、こらえきれなくなった。

「一寸ほどいて、一寸でいいから、お願いですからほどいて……」

道子は夢中で言った。言葉よりも先に涙が湧いた。芯は強いけれど、どちらかと言えば泣き虫の道子であった。

健は声も変えないで朗読を続けた。

「ほどいて下さらないなら、あ、ああッ！声を、声を立てます。あたくし声を……」

「ああ、いいよ。その代り君はボクの妻で居られなくなる」

健は背を向けたままで言った。

まさか本気で言う筈はないと思ったが、道子には健の常識を信じる事はもう出来なかった。塩っぱい様な生温い感触が内股を浸した。道子はどうとう下着はおろか畳までも濡らしてしまった。かってない惨めな恥ずかしい気持が身内を駆け巡った。子供の頃にさえ此んな不始末は犯した事がない道子である。而も粗相を甘えて訴えられるような夫ではなかったのに。道子は見栄もなく泣いた。

「うるさいなあ」

さすがの健も持て余して振り返った。

道子は必死になって、濡れた畳を身体で隠そうと試みたが、及ばなかった。

健は道子の身体の下から流れ出した液体を見付けて舌打ちした。

「仕様がないな。犬だよお前は。裸が分相応だね…… エート、何時だ」

健は腕の時計を見た。六時に五分钟前。

「もう此んな時間かい。何しろボクは出掛けるからね」

健は何を思ったか、道子の髪を縛って紐もバンドも解いてくれた。余りの解放感に、身体が宙に浮き上った様な頼りない一瞬であった。道子はそれでも尚顔を上げる事が出来なかった。

「ホラ。何時まで濡れた中に浸っているんだ。蓮根じゃあるまいに——。脱げよ」

道子は途迷って返事を洩した。

「此れを脱げ！」

健は道子の浴衣の衿を引っばって言った。

さすがに夫も此の惨めな自分の姿を見かねて、許す気になってくれたのか、とホツとして、帯を解きにかかる道子を、健は冷淡な目で見ていた。

「何か代りのユカタを……」

と道子は哀願する

「いいから脱げ！」

道子は羞恥に震えながら、淡々と着物をずらして行った。

「純情ぶるな。早くしろ」

道子を裸にすると、健は隣室との界の襖を

開けてその部屋に入り、更に隅の半間押入れの扉を開けて、入れと命じた。古くなつた新聞や雑誌の類が入っている不用に等しい押入れである。道子は結婚以来、夫とは一緒に風呂に入った事もなかった。裸を見られる事は胸も潰れる程恥ずかしい事であった。今更のように、夫との薄い繋りを思つて切なくなった。

健は半分自棄のように、道子の腕を腰紐で高手小手に縛ると、前のように胸にはバンドを二巻きした。素肌を縛られる恥しさ。

健は道子の羞恥をつまらなさそうに見た。

健の頭の中には昨夜のヒロミとの強烈な陶酔が充満していて、今はどうしても、無理に、道子に夫らしく振舞う気持は持てなかった。道子をいじめる事も今はもう疲れてしまつて物憂かった。

「いいかい道子。誤解するんじゃないよ。ボクは訳があつてこんなジメジメした責め方をするのは違うんだからね。此れが精一杯のお前への愛情なんだ。判るか？ 此れ以外に妻を愛する方法をボクは知らん」

そういう判った様な判らない様な事を、大真面目な顔が言い渡すと、いやがる道子の背を蹴込んだ。

「そんな化物のような顔では、出歩くわけにも行かんからな。ゆっくり休んでい給え。誰に呼ばれても返辞をしちやならんよ。帰った

ら解いてやる」

「だって、トイレに……」

「一日一度にきめて置け。何事にも習慣が大事なんだ」

健は扉の掛け金に小さな南京錠を下した。

☆

間もなく健は食事を終って、女中の磨いた靴を履くと、颯爽と三和土を蹴って出かける。純白のワイシャツが充実した男性の胸を包んでいる。黒いズボンとのコントラストは簡潔で、此んなスタイルはよく似合った。

「ボンジウール！ 先生」

と、此の時朝日に輝くプラタナスの蔭から、平袖の白い浴衣を着たヒロミが庭木の下枝をくぐる様にして出て来た。童女のような豊頬にまつげが影を宿して、微笑むと淋しくなる美貌である。肌も肌着も、頭の先から足の爪先まで、唯清潔という一語に尽きる少年であつた。しなやかな腕で細味の腕輪がキラキラした。

「何時だ？」

健が訊いた。

「イレ、セトウール（七時です）」



ヒロミは腕を上げて、女持ちのようなその腕時計を、健の目の前にかざして見せた。七時である。

「正確かい？」

「パルフェトウマン！」

完全に！ とヒロミが言った。健は自分の時計をそれに合せた。

「先生は何時も早起きでいらっしやるから感心してしまいます。ゆうべボクのために徹夜までして頂いたので、今朝はまだお休みかと

思っていました」

ヒロミ自身はまだ食事も済んでいない。

「ボク、でも。あの方程式まだ一寸解りません。あんなにいいねいに説明して頂いたのに……すみません」

玄関先を掃いている女中を意識して上手に芝居をした。健が笑っていると、女中が去った。ヒロミはキユツとウインクして健の腕にぶつかって来た。

「マダムどうしました？ まだ此れ……」

と、自分が縛られる恰好をして見せて、

「ボク、今朝は眠くって眠くって、まだ眠い。ボク、ゆうべは本当に考えちゃった。今にボク、生れ変わるかも知れない。ボク、今、一人で生きる事を考えているんです」

「おどかさなよ」

ヒロミは門の外まで付いて来ながら、

「だってボク、何のためにこうしてケンの傍に居るのか……。自信がなくなってしまったのだもの」

「どうしてそういう厭味を言う？」

「バ、レグザンプル！ 哀しい、お兄さま」

とんでもない、と、ヒロミは其処で立ち止って、一寸深刻な目をした。

「本当にはボク、ケンから離れる事なんて出来なと思うの。だからこそボク、そんな意気地なしの自分にムチを当てて、飛び出してしまいたくなるんです」

小さくタンゴを口ずさみながら、ステツプを踏んで見せる。

「また判り切った事を言わせて見たくなったんだろう。今夜話してやろう。うん？ 君が嬉しいように——」

健はヒロミの肩をグツと押えて、コチヨ、コチヨと動く足を止らせると、さっさと歩き出した。ヒロミは追う事をやめて健の後姿を見送っていた。

その男らしい誇りに満ちた腕が、恐らく今夜も恥を忘れたガキの様に這いつくばって、愛をせがむヒロミの白い肉体を、心ゆくまで荒してくれるであろうと。

此のヒミツは楽しかった。併し健との繋りは本当はそれだけではないのだろうか……と不安になる。ヒロミだって何時までも若くはない。

ヒロミは急に小石を拾って、健の踵を目掛けてビューンと放った。小石は外れて健の右の脛に当たった。

健の小さな悲鳴が聞えた様な気がした。

健は振返って、痛そうに眉をひそめて、ニラミ付けた。

「悪い奴だよ」

ヒロミはケラケラと、乾いた葉ツバのように軽薄な笑いを何時までもやめなかった。

☆

ヒロミが門を入ると、白い制服のチャール坊

がカバンを下げて立っていた。ヒロミが僅かに黙礼するのを、

「相変らず遅いなア」

と呆れた様に言った。

「あなたが早過ぎるのです。ボクはこれで遅刻をした事はないんです」

「そうかも知れないけど、夜の遅いのは感心出来ないワ」

ヒロミは笑っていて取り合おうとしない。

チャ子は意地悪い笑いを浮べて、

「ゆうべお兄さまと遅くまでお風呂に入ってたでしょ」

「いけませんか？」

「そうよ。お兄さまだってお気の毒よ。あなたの責任だから……。チャ子なんかあれから入ったのよ。お蔭で寝たのが一時だったわ」

「それは御迷惑でしたね。今夜は早く寝て下さい。ボク、これから食事ですから、失敬」

ヒロミは言い捨てて、枝折戸の向うへ去って行った。チャ子はゲンコツを作って、ヒロミの去った方へボインと喰わせる真似をして「ちやんと知ってるんだから……。気障な奴。大きらい」

と呟いた。この二人どちらも十七才で、どちらも小柄で、どنگりの背比べの様であった。

☆

夏休みに入って間もなく、チャ子は郵便受

の多くの手紙の中から、差出人不明のヒロミ宛の粗末な封書を見付け出した。「宮下様方村井弘美様」と、実に下手くそな字で書いてある。不鮮明な消印は辛じて清瀬と読めた。此んな拙い字の手紙をヒロミ君に寄越すなんて一体誰だろう——。

と思いながらよく見ると、薄いハトロンが透けて中の字が読める個所があった。チャ子はシメシメとばかりに目を凝らした。

「ゼヒお逢いしたいと……。入院は急な事で……。お金も何とかしなければ……。御相談したいのです」

インクの濃いところだけが読めるのだ。

「まるでクイズよ、これじゃあ」

併し、チャ子はスコブル心配であった。

——此の手紙には何かある。氣心の知れないあの少年。或いはその紅唇に毒を含んで、お兄さまの財産をぶん取ろうと企図んでいるのかも知れないではないか——

「今にキツト、高慢の細い鼻をヘシ折ってやる。そうする事が却って、ケンお兄さまをノーマルな生活に返してあげる事になるかも知れない。このままではお兄さまの生涯は、あの不良少年のためにメチャメチャにされてしまう」

チャ子は腕組みをして深く考え込んだ。

チャ子は此の腹違いのたった一人の兄が子供の頃から好きであった。ママゴト遊びが唯

一日の目録だったその頃。夫の浮気に腹を立てた継母にいじめ抜かれて、一日中時々食事も摂らずに、蔵の中で愛犬のチロを相手に残酷な遊びに熱中する不幸な兄を氣遣って、何度網戸の前に佇んでいたか判らないチャ子である。自分の最も愛する母が兄にとって恐しい人であるという複雑な境遇の中で育ったチャ子は、幼なくして氣を遣う事を知った。

唯、如何にもシヤクな事は、ノーマルになった兄が、自然奥さんを受する様になるだろうと思う事であったが、この心の矛盾にはチャ子自身も苦笑した。

——お姉さまのためにするのではない。あくまでも健お兄さまのために、そうするのです。

アーメン！ とチャ子は十字を切った。

チャ子の考えは余りにも単純すぎたのである。健のヒロミに対する感情は、最早愛だの恋だのといった簡単なものではなくて、一種の中毒であった。喫煙者の心理と全く同じである。手許にヒロミがなければ淋しくて居られないのである。此れをやめる事は絶対に出来ない健にとって結婚は常識であるに過ぎなかった。その常識を破る事は、社会人として完全とは言えなかったから、常識に従ったままの事である。だから健は道子そのものには愛も憎しみもなかったのだが、夫である以上妻に対しては夫らしく振舞わなければならな

いという、自分の役目を思い出す度に妻が憎くなった。それ程厭な思いをしても健は此の生活を続けて行くときめいている。健がキリスト教信者である事も、人前で妻に優しい夫である事も、人の寝る間も机に寄りついて学問する事も、自分でも胸がすぐ程男性的に振舞う事も、人目には絶対に完全な人間でありたいと願う見栄のため、唯それだけである。だからと言って、健はノーマルでない自分を悩みも軽蔑もしてはいない。

——けだし、アブノーマルは天才に通じる。何よりも俺自身がそれを証明する——。と威張って感激している。唯、それを一般の平凡人づれに通じさせる事は不可能だと観念しているだけの事である。

☆

朝であった。

「奥さま、お電話でございます。お名前を仰言らないでございます」

と、よねが知らせに來た。

道子は青くなって玄関へ急いだ。まさか電話までも掛けて来るとは思っていなかった。

道子は辺りをばかると小さい声で、

「困るワ、電話なんか掛けて下すっては——。

あなたのお氣持がどう判っても、もう今になって、そんな。とても私には出来ません。どうぞ此れ以上私を苦しめないで……」

電話の奥から、ねばり付いた様な声が聞え

た。

「いや、前にも言った様に、過ぎた事をどうこう言うんじゃないんだ。とても困っているのですね。せめて、都合の付けられるだけでも何とかしてくれないか」

彼の話はこうである。道子は彼とは、隼夫



達が見付けた日に、初めて新宿駅の改札口で巡り逢った。彼は道子を見ると、駆け寄って来て、「なつかしい」と言った。「決して捨てたのではない。或る事情から、どうしても道ちゃんに逢えなくなったのだ」とも言った。哀しそうな目をして、「道ちゃんは変っ

してしまはなければ、今度はそれこそ自分の首が飛ぶ、というのである。道子の弱味につけ込んでの頼みである事は判っていた。五万の金は宮下家の世帯からすれば大した金ではなかったが、例え幾らにしろ、道子に自由の動く金はなかったのである。

た」とも言った。逢って見ると、道子にはどうしても男に捨てられた様な気がしなかったから不思議である。二人で喫茶店の片隅に腰を下すと、男は道子の現状を根掘り葉掘り訊いた上で、結局頼みたい事があると切り出した。彼は最近、あるのっぴきならない間柄の友人に五万の金を貸した。それも自分にはとても持てない五万の大金は、他から融通しなければ貸せる筈もなかったし、融通の効く当もなかったので、自分の勤め先の金を使い込んだという。もっぱら流行の手である。彼は小さい金融会社に勤めていた。ところが決算日が近づいて来ているので、それまでに穴埋めを

道子は気が気ではなかった。

「兎に角、電話は困るの。お手紙を頂く事も困るの。私から差上げるまでお待ちになつて」

玄関脇の階段を誰かが降りて来るような気配がした。

「あッ、切ります」

「待ってくれ。待て、道ちゃん。…そ…」

湿った声が耳に残った。道子は切れた電話機をまだ押えつけていた。その時階段の途中で、あッと小さい叫び声が出て、真赤なスリッパが滑り落ちて来た。道子が見上げると、手摺に掴まったヒロミが、スリッパの脱げた白い右足をブラブラさせて、微笑みかけた。ヒロミが道子に笑顔を見せるなどという事はかつてない事だったので、道子は妙にドキマギして

「ヒロミさんはお食事、これから？」

と訊くと、ヒロミは如何にも今笑顔を見せた事が残念でならないとでもいうように、何時もの白々しい表情に戻って、

「ええ」

と、そっけなく頷いた。柄口者のヒロミは口にくそ出さないけれど、道子に対して並々ならぬ敵意を抱いていた。

☆

道子は電話をヒロミに訊かれたのではなかったかとひどく案じた。ヒロミが何でも健に

告げ口をする様な気がしてならなかった。電話口で自分が相手に答えて言った言葉の中で、訊かれて変に取られる節はなかったかと考えた。何だかどの言葉もみんな後めたいものに思われた。これはどうでもヒロシよりも先に健に伝えて置かなければ、どう誤解されるか判らないと判断した。

夜になって、さて打ち明ける段になると、容易に口に出せなかった。話すとなると、余りにも作為を混せて話さなければならぬ個所が多かったため、怖しかった。

机に向ってケインズの経済論をホッ、訳している夫の手もとをジッと見乍ら、道子は縁先に立っていた。額に垂れかかった髪をかき上げる事も忘れて、小さく単語を口ずさみ乍らペンを走らせる、学問に没頭した姿は、此処にこそ、健の面目躍如たり、といった雄々しい気魄が漲っていた。道子はこの夫を見る事で救われるのである。学問だけは絶対に誰にも負けない男。その男の妻である事が誇らしい。

「何か用か？」

健が顔を俯向けたままと言った。

生え際の美しい男の項が道子の心をとらえた。

道子は返辞をためらった。

「そう鼻先に立つな。邪魔だよ」

健はそれだけ言うと、道子にかまわず仕事

を続けた。

道子は自室に帰ると、ヒロミの絆纏に作る派手なお召縮緬の布地を広げて、長い溜息をついた。

「冬までに縫って置け」と、この布地をつきつけられた時、道子はテッキリ自分のものだと思ひ込んでいた。ヒロミのものだと判った時、道子は訳もなくカッとして、

「あたくし、人のものなんて仕立た事がありません。第一ヒロミさんの寸法をあたくしが計るなんて、あたくし厭！ あの人何時だって、怒って様な顔をしているんですもの」と抗弁するのを、

「あ、ヒロミの寸法か。オレが知っている」と、あっさり言われた時には、道子も、もうダメだと思った。

道子はハッと我れに返って目を上げた。蔵の窓に灯がついた。邸の中で唯一つ、戦前から建っているこの蔵の中にヒロミは住んでいる。

窓から白い手がすつと出て、今まで吊してあった文鳥の鳥籠を、引込めるように音もなく取込んだ。

健夫婦のこの住いは離れになっていて、母屋とは渡り廊下で繋がっている。蔵の窓がよく見えるが、中の様子は判らなかつた。電燈の明りが時々青かつたので、青いシェードをかけたスタンドのある事が想像出来た。

やがて、その窓からピアノの音が流れ出した。グレエールの舞踊組曲、「赤いケシ」とは言っても、それは非常に幼稚な弾き方のもので、稚拙であるために一層風情を添えて響いた。このピアノは健の実母が嫁いで来た時持って来たもので、健が子供の頃から蔵の中に置かれていた。そのため健は六才の頃からピアノに馴染んで、今では一寸したピアノストの真似事位は出来るまでに上達していた。

健は蔵に入る時は、ピアノを弾きに行つて来る、と言った。健のピアノは軽快で澄明であつた。美貌で秀才で、諸芸にも一応の心得は持つてゐる健と、平凡な道子自身とは、余りにもかけ離れ過ぎている。そんな女を健程の男が、何のために妻にと望んだのか、道子にもやつと判りかけて来た。

「お姉さま」

縁先からチャ子が小さい声で呼んで入つて来た。直ぐさま道子の手許に目を止めて、

「ステキ！ これお姉さまの長襦袢？」

「そうしようかな、って思っているの」

「ウソお！ 黒衿が付くんじやない」

チャ子は縹子の布を取り上げて、急に小さい声で、

「ハッハーン、判った。ヒロミ君の絆纏でし

よ？。判るんだ、それ位い。ヒロミ君、冬になると何時だつてこういう派手な絆纏を着て

るのよ。朝なんか食事に起きて来る時だつて、まだお寝巻着てゐる時あるのよね。そんな時なんか上からこれを羽織つてゐるワ。彼華奢に出来てんでしょ。キョジャク体質の方だからね。直ぐインコウを痛めるのよ。そうすると、あの細い首に白い縋帯を巻いてね、例の桃山時代みたいな柄の寝巻着てさ、その上から派手な絆纏を羽織つて、赤いスリッパを履いて、お玄関なんかで逢うとね、コホンコホンって、かそかなる咳をするんだ。だけどそれが何だか仮病みたいに見える時もあるのよ。だからお兄さまに言つてやったの。ヒロミ君って全くよく風邪を引くなあ。まるで風邪を引くために生きてゐるみたいだつて。お兄さまったらね、時計だつて精巧な奴ほど痛み易いものなんだ。ヒロミ君ってデリケートに出来てるからだろう。だつて、澄まあしてんです」

チャ子の声が段々高くなるので道子はハラハラした。

「何？ お兄さまに聞えるって、大丈夫よ。」

お兄さまお勉強なんかやつてゐる時は、何の音も聞えないらしいから……」

健の書斎は一部屋へだててゐる。詰り、健の書斎、空き部屋、夫婦の寝間、と三部屋続きの離れであつた。

「併し下手くそなピアノだなあ。あんなの弾かれると、近所へていさいが悪くって困つち

やう」

肩をすくめてそう言つと、此の気の多い娘は、もう立ち上つていた。

ピアノの音が止んだ。再び灯が消えた。月が昇り始めていた。

☆

健はまだ机に向つていた。

もうそろそろピアノを弾きに行く時間である。健は日課のように夜の八時になるとピアノを弾きに行つて、十時頃までは帰つて来ない。帰つてからまた一頼り机に向つていて、寝に就くのは大抵一時になった。それまでにもし道子が先に寝てしまふような事でもあれば、健は怒るかどうか、道子は試して見た事もなかったから判らなかつた。

月は昇り切つて、植木の繁つた広い庭を明るませていた。鯉の放してある池の水面が輝いて見える。

急に表の方が騒がしくなつて、チャ子が二、三人の汚れた男の子を従えて庭の方から駆けて来た。

「お兄さまあ、大変よオ！ たけるが新聞配達の方の事噛み付いたのよ。血が凄く出てるの、一寸来て下さあ」

道子も立ち上つた。健が難しい顔をして立つて来た。

「新聞配達がどうしたつて？」

「たけるが噛み付いたの」

「たけるはどうしてる？」

「ハウスへ入れちやいました」

健は頷いて、

「シエパードに寄り付くような奴はバカヤロウだ」

苦々しく言った。

「だって、お兄さま……」

「誰が引張っていたんだ？」

「チャ子よオ」

「気をつける！」

健に怒鳴られて、チャ子のはじかれた様に駆け出した。

「何しろチャ子責任だから、その子連れて来ます」

「連れて来よう、」

「ちれてきよう」



私の友人であるある研究所へ勤みている医者から面白い話を聞いた。それは彼が最近、禿の特効薬として大きく世間に知られてきた

子供達も遅れじと駈けて行った。

「大した事でなければいいんですのに」

道子が案じ顔で言うのを、健は事もなげに「千円もやれば文句あるものか。どうせ食えない家の子にきまつてる」

と言いつつ、庭下駄をつっかけると、何処へとも断らず行きかけた。

「ネ。一寸見ておあげになつては。ひどい怪我だったたら」

「子供の怪我位いに一々ボクが行っていられるか。お前が行って見てやれ」

健が姿を消してしまつたと、間もなく今度はキヨがやって来て、

「坊ちやま。オヤ、お出かけですか？ たつた今、チャー坊さまが仰言りにいらしたでしように。子供がたけるに噛まれたと言つて、

マゾヒズム、見たり

聞いたり、ためしたり

【1】

春 木 俊 野

セファランチンに就いているいろいろ研究していたがその中で面白い記録を発見したのである。それは――

Aは今年二十七才の温和な青年である、そのAが青春期の絶頂にあり乍ら段々と頭髪が抜け始めて気がついた時には前頭部から頂上

お玄関へ参つて居りますのに……。道子さんは坊ちやまが何処へいらしたか御存知ないでございませうか」

「それが今、裏の方へいらしてしまつて……」
「お呼びして下さいまし。新聞屋の親方つて言うのが来て居りますからつて……。もうおつつけ、桂さんもお帰りでしょうけれども――」

キヨは言い置くと急いで去つた。

この老女中、といつても、まだ四十には間があるが、十三の時に健の子守りに来て以来健を我が子のようにも思つて仕えているキヨは健は何時まで経つても、坊ちやまで、チャ子は何時まで経つてもチャー坊さま。最近他所から入り込んで来た道子などは、おかしくて奥さんとは呼べない、疎ましいものでしかなかったのである。

(未完)

にかけてめつきりと薄くなつてしまひ、太陽の下ではにぶい光を放つまでになつてしまつた。禿げた人間に悪人は居ないと云われるが当人にとってはそれ処でなく、まだ三十にも手の届かぬ裡にこんな恰好になつた精神的な苦痛は大変なもので生来の消極的な性格にますます輪がかゝつて、劣等感はいよいよ強く陰気な暗い人間になつてしまつた。そして恋人も得られない灰色の青春に死をも考える程になつてしまつた。勿論いろ／＼の手当も施したが効力なく、比処へそのセフアランチンが現われて溺れるもの薬をもつかむで彼（私の友人）の研究所の門をくゞつたのである。三ヶ月位治療が続けられたが余り効力はなくその裡にAは来たり来なかつたりする様になつて来た。彼は始めにAから悶々とした禿の苦悩を書いた手紙をもらつていたので注視していたが段々様子をみると経済面で大變らしいのである。大体此の注射及び塗布薬は一週間で六百円から九百円位だから月に三千円位普通の安サラーではそして又独身の男には苦痛的な出費額なのである。

K県から単身上京して来ているAの事を半ば同情の眼でみていた彼が、時折りは薬を余分に分け与えたりして、どうしても経済上持たない時には遠慮せずに云つて来いとまで云つてAを感激させたりしていたが、そのAがぶつつりと来なくなつてしまつた。彼は仕事

も忙しいので、そのまゝAの事は忘れていたが、それから又、三ヶ月程たった頃、新宿に用事で出たついでに、久し振りに映画を観ての帰り、もう時間も夜十一時になろうとしていたが、飲み屋のずっと並んでいる一角で、其処は夜はこれからと云う様な酔客と女給の嬌声、レコードの流行歌と賑やかなものだが其処を通り抜けようとして、一軒の飲屋から出て来た若い男とパツタリ顔を合せた。

「あッ先生じやありませんか」と云われてその男を見直した彼は思わず叫んだ。

「おう、A君じやないか、どうしたその後」と反射的にAの頭をみてしまつた。すると多少酔つぱらつたらしいAは彼の氣持を察したのか黙つて頭をさげて見せたが不思議な事にはAのあの禿げた頭がまだ少し薄いが以前からみると余程よくなつて、注意してみないと、とても禿げているとは思えないのである。

「A君、すっかりよくなつたじやないか、どうしたんだい」

彼は珍らしい発見でもした様に云つたが、此のAからは非その状況を聞きたいと思つた。Aは酒の故か、それとも禿が直つたからかとても明るくなつて

「先生、のびませんか、話もあるし……」

と云うので咄嗟に彼はAに今夜は、おごつていろ／＼訊ねてみようと考えた。そしてA

が酔つていろ／＼と喋るのを、いや喋らせたのを綜合して意外な事実と云うか記録を知つたのである。Aはセフアランチンでも大した効きめのない事に失望し、又経済上からも段々遠のいて来たが、彼のアパートの隣室に或る女が移つて来た。年は彼より一つ下で美人と云う程でもなかったが何処か艶っぽい感じのある女で新橋のあるキヤバレーに勤めていた女給だった。不図した事から二人は親しくなつて彼女はAの苦悩する禿など問題でないと云つてくれたりした。氣の強い勝気な女性で却つて温和で人の好いAとは性格がピツタリしたものらしかった。やがて二人は肉體關係にまで入つたが劣等感の強くなつたAは始めから女王にでも接する様な態度で彼女に接しこんだらしかつた。いわゆるAには同じ接吻するにしても同等の唇と唇とは出来得ない程の氣持を持つ様になつていた。性格とか性癖もあつたのかもしれないが劣等意識が彼にマゾヒズムを芽生えさせていたらしい。その裡二人の女王と奴隸そのまゝの生活が始まつた。彼の好むのは女王のネクターを飲む事だった。

僅かな間にそんな事までする様になつたのは彼の性癖もする事乍らやはり彼女が相當のサジストであつたものと思える。処が此処に不思議な現象が生じて来た。Aの頭に毛が生えて来たのである。彼はまさかと思うが女性

ホルモンが効を奏したものと思えない。彼はもつと此の事については調べてみたい様子を見せていた。

○ 映画界の内状を暴露した、しないで、問題になった。河上敬子著の「女だけの部屋」を読んで、ふつと此の河上敬子さんと云う女医兼女優さんは我々マゾヒストをよるこぼしてくる人でないかと思った。文中、フランスでは男が女の足の裏を舐めて女の味を知ると云う事や、女プロレスが流行って今に女性が太陽族の男を投げ飛ばす様になるかもしれない等と興味深い事が書かれてある。

○ 映画も女性が最後に勝利を得るものは見ていて気持がよくなる。二、三の例をあげると古い映画だが大映の「火の女」山本富士子がオートレースで、男達にまじって最後に男を尻目に優勝するもので文字通り火の女の凄じさを描いていた。それから新東宝の「女真珠王の復讐」も、直接被虐の場面はないが財力にも云わせて大の男を窮地に追い込む筋は女性尊重者には嬉しいものである。今度、ソ連映画で「四十一番目」と云う映画では射撃名手の女将校が四十人の日系露軍将兵を仆し四十一番目の男を殺さず捕虜にしてしまう。その捕虜をシベリヤ平原を横断して護送する間に恋愛を覚え、やがて悲恋と云うフランス

映画の様な哀愁をもつマゾ連には珍らしい映画が来るらしいが一寸期待出来そうだ。

○ マンボに続いてチャツチャツヤ、そして今度はロック・アンド・ロールが海の向うから入って来たらしい。その無茶苦茶なリズムは青春の血を狂的にわきたゞせるものらしいが、私の知っているレツスン場で、その初公開が行われた。踊ると云うより男女が荒れ狂うと云う方が早く性的衝動のはげしい事は大したものだ。投げる。転がる。の通りで酔う程に踊る程に何をやってもいゝと云う自由さがしまいに男の連中が、女性のスカートもまくりあがって太腿もあらわな白い脚を抱いて肩車したり、肩車出来ない者は、ひっくり返って女性のお尻の下に顔を敷かれたり、女性の馬になって、四ツ道いでホールを這い廻る狂態まで表われて楽しい踊りをみせてもらった。

○ 宮本幹也が観光新聞に連載した「カマトト令嬢」の中に主人公のカマトト令嬢木の実が彼女を思慕する男性の一人である徳明に、自分の足を舐めさせる情景とその場を彼女の母親に見られてしまう描写がある。挿絵も木の実の足の指を口に咬えている男の顔が描かれてあった。大体此の人の作品にはマゾの男を扱ったものゝと云うよりサジ女の出るものが

多い。

○ 映画「日本橋」の中で、柳永二郎の份する赤熊の伝蔵が恋いこがれた芸者お孝（淡島千景）の手にかゝって殺されるが、これも如何にもマゾ的である。恋した女のために莫大な身代をつぶし、それでも女を追って、其の女の足許にひれ伏す。あけくには刀で口の中を刺されえぐられて死んでゆく。

○ 去る十一月十二日のお昼すぎ、東京上野公園のひと隅で四十過ぎの余り身なりのよくない瘦身の男と二十四、五才の飲屋勤めらしい風の女二人が組みつほぐれつの格闘を演じ始めた。人が多勢たかつた頃は、その男は完全に組み敷かれて、仰向けになったその男の胸と腹の上にはだけたスカートから太腿もあらわに、女達は馬乗りに跨っていた。そして胸の上に跨った女は自分の両腿の間に男の顔を挟んで所きらず揉む事、訳は「つけ」で飲んだ酒代を一向に払わず、長くその飲屋へ行かなかつた男が、パツタリと飲屋の女と出遅ってしまった、払えないで演じた一幕だったとか、女二人から片手を逆にねじられ乍ら交番へひきたてられてゆく後姿が印象的だった。

(未完)

(雑誌通信)

科学は裁く

——(前略)——

一九五〇年一月二日の朝刊が、どんなにパリ市民の好奇を唆ったかは、当日の新聞が完全に売りきれたと言う事実でもわかる。此の日の一面トップ(フランスでは大事件に限り社会記事でも一面最上段に掲載する)に、大見出しで報ぜられたのが、例の怪事件、自殺か他殺かで大きな波紋を描いた「浴槽の死美人事件」の鑑定談だった。

ルースマン探偵とシルリング博士署名入りの発表に依れば——

『死体には外見上、後頭部以外に、一つの傷もありませんでした。そこで解剖したのですが、その結果、

ソフィヤ夫人は妊娠四ヶ月でした。

毒物の中毒症状は認められません。

所が、意外にも夫人の陰部腔内には、墮胎施術の痕跡が残っていたのです。というわけは、夫人の腔壁に異物挿入のため生じたと思われる、長さ三センチの静脈を破った切り傷

(「探偵クラブ」昭和26年7月号より)

が認められたのです』

人妻のソフィヤ夫人が妊娠するのは、当然のことだが、墮胎を企てた痕跡が発見されたとあっては、問題が複雑になる。なぜ墮胎せねばならなかったのか？

此処でシルリング博士は、墮胎手術について、薬剤の飲用又は挿入に依るものと、器械を用いる手術例を一通り上げた上で、

『夫人の場合は、器械を用いたものと認めます。その方法は、卵膜剝離を目的とする腔洗滌法であります』

それにしても夫人の腔壁に残る傷痕は疑い。何故の傷か。専門家が施術したとすれば此のような傷をつける筈がない。もし未経験の者が手術したとしたと……。

『こりや一大事だと思いました。なぜと言え

ば、腔内には多数の静脈が集中しています。然も静脈の血圧力は極めて弱く、動脈を切断すると多量の出血をして止まりませんが、静脈出血は僅少で、すぐ止まります。それな

んです。で此の際腔洗滌の液が皆無になつてゐるにもかかわらず、イルリガイトルからゴム球で空気を陰部に挿入したとすれば、静脈の陰圧に依つて空気は傷口から血管に吸い込まれて、右心臓にたまりまゝです。やがて多数の泡となり、心臓が活動しても、その泡が伸縮するだけで、血液は循環しないんです。従つて酸素の欠乏を来たして死亡します』

博士はこう気づくと、心臓の外側にある心嚢をきりととり、これに水を満した上、心臓を没入した。そうしてから静に右心臓を切開した所が、意外にも相当量の泡沫血液を発見したと言う。

『これで死因が判明したのです。ソフィヤ夫人は、墮胎手術の結果、空気栓塞のために、急死したのでした。』

——(後略)——

大久保敏雄「浴槽の死美人」の一節

此れはパリ警察本部ジェーン・ルースマン探偵の手記に依つてゐる。いくら実話でも此の殺人は余りにもひど過ぎる。

が墮胎手術の不完全のために急死した事件ではあるが、相当細かに説明されてあるので一応書き抜いた次第である。浣腸とは又異なるがちよつと興味を覚えた記事であつた。

(東 一郎記)

映画シナリオ

『私は街の道化者』

丘 與志夫

登場人物

加世子 (20才)
 三吉 (55才) チンドン屋の主人
 とみ (40才) その妻、歌手
 一平 (27才) ドラム、口上のベ
 あきら (18才) 女形、トランペット
 龍助 (45才) パチンコ屋の主人
 カルメン・ローズ (23才) ストリッパー
 栄公 (23才) バンドマンくずれ

(F・I)

① 繁華街マーケット通り

お昼時――

買物に出た夫人達や店員などで賑わっている。騒音が人々の話し声を消す。

「カンカンチンドン……」

人混みを縫ってチンドン屋の一群が陽気

に嘶し乍らやってくる。

鳥追い姿で三味線かかえ流行歌をうたうとみ、町娘に紛してトランペットをふくあきら、ビエロ姿でおどけた調子のドラム一平。

そして一平と対の女ビエロで、ちらしを道ゆく人に配っているのは加世子である。「カンチンドンチンドン……」人々の好奇の眼と嘲笑の中に、商売の愛嬌をふりまき乍らチンドン屋の一群が過ぎて行く。

その人々の背中の大きなポスター

「本日開店大衆娯楽の殿堂

ジャンジャンパチンコホール」

風にあはられていく。

② ジャンジャンパチンコホールの前

チンドン屋、一段と陽気に嘶したてる。

開店祝いの花輪や、のぼりが通行人の足をとめ、店の中からは「チン、ジャラジャラ」と景気よく玉をはじき出す音が人々の心をそる。

一平「さあさあ、思い迷うは一生の御損、本日開店は打止めなしのオールサービス、パチンとはじけばチン、ジャラジャラ、ジャンジャン玉が出るよ。その名もジャンジャンパチンコホール、絶対御損のないのがこのジャンジャンホールの大サービス、さあさあ入った入った、はい、どうぞ。」

面白い身ぶりで客を集める一平。

通りがかりの御用聞きの小僧も思わず自転車をおりて入ってゆく。

「いらっしやいーい」

女の黄色い嬌声と安っぽい流行歌と……

加世子、一隅に恥し気に佇み、それでもチラシを配っている。

(F・I)

⑥千住駅 夕暮れ

駅から吐き出されてくる通勤者、思い思いに家路に急ぐ中に、チンドン屋の紛装のままの加世子達の一行が異様に人目をひくが、本人達は仕事を終って、いたってのんきな顔である。だが加世子だけはまだ板につかず一行の後にかけられるように帰る。

(O・L)

④裏長屋のある所

一行が帰ってくる………
ある軒の傾いた一間半間口の家
その前に、「日の丸宣伝芸社」と下手くそな字の看板がある。

一平「只今 御帰館!!」

あきら「ただいま………」

と入って行く。

⑤家の中

六畳と三畳の狭い間取り、汚い壁に女剣戟のポスターや、古めかしい舞台写真等が乱雑に貼られている。

かつての三吉ととみの写真。その前で三吉がどてらを着て古雑誌をねそべり乍らめくっている。

四人入ってくる。

三吉「ああ……(と物憂く起上る。)」

とみ「何だい、又そんなものよみくさっ

て。少しは仿らいたらどう? 社長面して、フン、小汚い社長様だよ。」

三吉、うるさそうに再び寝転ぶ。

とみ「一寸、お前さん。お前さんはね、そりや昔は立派なお役者様かも知れないがね。何よ、今じゃ尾上桜之助一座なんて云ったって誰もおぼえてやいないよ。」

三吉「(ムツとして)うるさい!! もういい……(起き上り)おい、とみ。俺ア風呂に行ってくるぜ、おシンくれよ。」

とみ「(懐から金を出し)今日一日の上りはこれだけや(百円札を一枚出して三吉に渡し)一平、あきちちゃん、お前達も行っておいで。」

一平、あきら「へえ………」

とみ「あきちちゃん、お前さん、又、女風呂に入るんじゃないよ。」

あきら「そんなア、いやだア、おかみさん。」

三吉「(不満そうに)これだけかい?(ととみの顔色をうかがい乍ら)帰りにな、一寸パイ………」

とみ「フン、ごくつぶし」

とみ怒り乍ら、もう一枚の百円札を出して渡す。

みと「早く帰んなよ……(当り散らすように)加世子、さっさと御飯の仕度しないかい。」

加世子化粧をおとす間もなく台所に行く。

⑥台所(裏口)

煙にむせ乍ら、加世子懸命に炊事をしてる。とみ長煙管を口にして来る。

とみ「さ、早くしないかい。もう皆風呂から帰ってくるよ。終わったらコロッケ買っておいで(と、金を渡し)一枚位サービスさせるんだよ。いいかい。早く行っておいで。」

⑦場末の商店街

加世子、惣采屋の前でコロッケを買っている。

(O・L)

⑧演芸社 家の中

食卓をかこんでとみ、一平、あきら、加世子。貧弱な夕食である。

あきら、よれよれの和服の上に女物の羽織を羽織っている。

一平「おかみさん、明日は何処です?」

とみ「パチンコ屋だよ、今日と同じの。」

あきら「へえ、パチンコって馬鹿景気ね。」

とみ「加世子、しっかりやってくれなきや駄目じゃないか、今日のざまア何よ。おマンマくえる商売だよ、何も恥しがることはないんだよ。」

加世子「はい、済みません。」

一平「無理ねえよ。加世ちゃん、慣れる迄は仕様がないうさ。まあ、気楽にやるんだな。」

とみ「(面白くなさそうに) ふん一平、惚れたな!!」

一平「(照れて) 馬鹿云うなよ、おかみさん。」

とみ愉快そうに笑う。

その時、表で「ごめん下さい」と云う男の声。

とみ「加世子、行っておいで。」

加世子、立上り表へ行く、

⑨家の表

中年の男が立っている。加世子をみて、

「ああ、やっぱりここ

か。私は、ホラ、今日来てもらったジャンジャン

パチンコホールの主人、

木村龍助だよ。」

加世子「ハイ(と不審相に相手を見る)」

⑩家の中

龍助が上りこんでいる。

加世子、お茶を持って入ってくる。

龍助「(加世子をみて) い

やー、私はすっかり気に入りました。ですからお

かみさんにも相談せずに話してしまっただけです

が……。」



とみ「(人が変わったように) ええ、とても

いいお話で、本人も喜ぶ事でしょう。」

龍助「いえ、私んとも、どうせ人手が足りないですから、同じ女店員を入れるなら、この娘のような。」

とみ「(愛想よく) ええ、ええ、この娘は

とってもいい娘でね、骨惜しみはしないし。ねえ一平さん。」

一平、顔をしかめる。

とみ「どうだい、加世子ちゃん?」

加世子「(うなだれていたが) ハイ、おか

みさん折角のお話ですけど……私、自分で独立出来るような仕事をしたいんです。一人でも生活出来るような技術を身につけてゆきたいんです。」

龍助「(笑って) あっはは……独立ねえ、

生活の技術ねえ。いや、いい心掛けです

よ。でも、パチンコ屋だって技術だよ。

それよりも、いい男を世話してやっても

いいよ。それが女の生活さ、まあ、いい

や、返事は明日でもな……。」

と龍助立上る。

とみ「ああ、もうお帰り……加世

ちゃん送ってあげて。」

龍助「(とみに千円札を一枚渡し)

これ、お土産がわり。それから、

店の方は一週間つづけて下さい

よ。派手にじやんじやん宣伝して

や。経費はいくらでも出すからね。」

とみ「(金をおしいただき) ハイ、ど

うも旦那ありがとうございます。」

龍助「じや」と出て行く。加世子

も送って。

とみ「あーあ、いい客だねえ。ねえ

一平、加世子も一寸惜しい娘だけ

ど渡してしまおうよ。いい金づる

だもんね。」

一平「ふん、くそ面白くもねえ、お

かみさん店員だなんて、体のいい事云いやがつて……妾にでもするつもりだろう。助平野郎!! あいつはね、この前、人身売買であげられたばかりなんだぜ、何されるかわかりやしねえや。」

とみ「おだまり!! ねえ一平、金さ、貧乏はもうごめんだよ。(猫なで声になり)ねえ、そんな話はやめて、寝ようか?」

と、とみ、一平にしなだれかかる。

とみ「あきちちゃん、何ぼんやりしてんのよ、押し入れだよ、押し入れ。」

あきら「又ですか?」

とみ「ぐずぐず云ってないで。さあ、手を出して、早くよ。」

あきら、不承／＼手を後に廻すと、とみはその手首を合せ、自分の腰紐を解いてギユウと縛り上げる。そして、その端を手

とみ「さ、早く入るんだよ。」

と、押し入れをあけて、あきらを押し込み。



とみ「今夜は旦那もいないし、一平も荒れてるからね、長くなるよ、覚悟してね。」

とみ、押し入れの戸を閉めると、一平の首にしがみつく。

なすがまゝにされている一平。

とみの着物の裾がはだけ、白い太ももがのぞく。

⑩狭い露路

龍助と加世子が連れだってくる。

龍助「どうだい、どこかで飯でも食べる?」

加世子「いゝえ、私はもうこの辺で……」

龍助「まあ、いゝじやないか。」

龍助、加世子の手に金を握らせ、

龍助「こりや、少いが小遣いだ。おかみさんには内緒だよ。あの女、業つくばりだからな。」

加世子「でも、こんな……」

龍助「まあ、まあ、いゝじやないか。なあ、加世子ちゃん、なんなら俺は一生お前さんの面倒みてもいゝんだぞ。」

加世子 その意味がわかって「そんな……失礼します、私……」

帰ろうとする加世子の肩が、竜助のごつい手でぐいと引かれる。

加世子「あ、何するの、放して、放して!」

竜助ニヤリとして加世子の肩を抱きしめる。男の力に敵わず竜助の胸の中でもがく加世子……次第に力を失ってゆく。

……長屋の屋根に半月が美しい――。加世子放心したように立ちつくす。

(F・I)

⑫商店街(ジャンジャンパチンコホール)

朝——といっても午前九時頃か?

パチンコホールの女店員達が開店の用意をしている。レコードをかける。

お午の人の流れが杜絶える頃。

と、突然、チンドン屋の衣装のまゝの女

……加世子、店の中からかけ出してくると、逃れるように駆け出して行く。

「一寸! 加世子! 待ってよ!」

慌てゝとび出してくるとみ、一平……

とみ「チエツ、何処へ行ったんだらう?

仕様がないうえ、せつかくの旦那の……」

一平「好きなようにするが……」

とみ「とんでもない、私しや、どうしても」

龍助、仏頂面で出てくる。

龍助「どうした、おかみさん?」

とみ「すみません、旦那。どうも、なんと

も……いえ、明日はきつと」

竜助「明日? (さげすむように笑う) 冗談

はい、かげんにして……まあ、帰って

もらおうか?」

とみ「え? そんな旦那。明日はきつと、

きつと連れて来ますから……」

竜助「おかみさん、そんな可哀そうな事し

なさんな。厭だつてものを無理にまでも

……俺は、割りと人情家でな。」

(F・O)

とみ「じゃ、あのお店の方? 一週間と?」

竜助「と思っただけさ。だがもういゝよ。」

龍助、店の中に引込む。

とみ「旦那! 旦那!」と、とりすが

が、すげなく追い払われる。

とみ(口惜しさに唇をかみ)「畜生!」

一平そんなとみを嘲笑する。

⑬ある町の通り

加世子狂人のように走って行く——。

⑭演芸社の前

がっかりしたとみ、一平、あきら、悄然

と帰ってくる。

⑮その中

加世子、おびえたように一隅にかしこま

っている。

とみ達が入ってくる。

とみ、加世子をみると憤然と躍りかゝ

る。

とみ「お、お前つて女は! 畜生!」

加世子「(驚いて) あっ! おかみさん、ご

めんなさい、済みません、私、……」

とみ「うるさいね」

とみ、加世子を組伏せ、馬のりになつて

髪をむしり、頭をなぐる。

加世子、たゞ驚怖に「済みません!」

と、わめき、とみの打つ手を逃れ、はね

おきようとする。

とみ「一平、手伝つておれ!」

一平「おかみさん、まだ真昼間だぜ。いゝ

加減にしなよ、子供みてえに。」

とみ「うるさい! あきちゃん、その行李

の細引をとるんだよ、ぐづぐづしてない

で早く!」

加世子「おかみさん!」

あきら「(同時に) おかみさん。でも、そん

な。」

とみ「お前までが……畜生! お前もく

ムっちゃうよ」

あきら「いやだア。」

あきら、細引をほどいてとみに渡す。

とみ「足をおさえて!」

とみ、加世子の手を後手にねじ上げ、手

首を縛り、胸にも一巻き、二巻きと、ひ

ししと巻きつける。

加世子、観念してか、僅かに反抗したの

みで、やがてなすがまゝにされてゆく。

とみ、加世子を入口の柱に縛りつける……

……一平、暗然として、しかし、仕様が

ないというようにみている。

とみ「ザマアミロ! いゝかい、今日はメ

シぬきだよ。お前のおかげで飯代どころ

か電車賃損しちゃったんだからね。」

あきら「本当だね、いやんなっちゃうよ」

とみ「何云つてゐるんだよ。お前達のお飯も

ないんだよ、今日は!」

あきら「まア、ひどい……。」

その時、三吉が帰ってくる。

三吉「(一同の様子をみて驚き)おい／＼どうしたんだい、こりや? え? とんだ新派悲劇だぜ。とみ、今更舞台稽古でもあるまい? お前もえらい敵役を引きうけたもんだな。」

とみ「何云ってんだい! 朝っぱらから遊び歩いて! 結構な御身分だよ。ふん、今日はね、こんな新米の娘っ子的のために商売減茶苦茶にされちやったんだよ。」

三吉「ふうん、そうかい。だがな、とみ、(と自信たっぷり)俺だって遊んでるわけじゃねえぜ。いゝ仕事をみつけて来たよ。これで温泉へ行けるってわけだよ。」

とみ「温泉? 冗談じゃないよ、お前さん。伊達に貧乏世帯はってんじやないよ。」

三吉「(いやに落ついて)まあ、きけ。○温泉な、あそこの大原旅館ってところが、少し変わったところでチンドン屋で東京中に宣伝しようってんだ。日当は混みで千円だが、終わったら俺達を自分の宿へ無料で招待するってんだよ。まあ、宿は三流宿だが、温泉にだけは入れるって事さ。条件はオンの字だあな。」

とみ「お前さん、それ、本当かい?」

三吉「ふん、温泉なんて、こゝ二十年ばかり、入った事はねえぜ。」

あきら「うわあ、嬉しいねえ、旦那!」

三吉「(うなづいて、気嫌よく)そうかい。

俺も明日はやるぜ。いゝかい、俺がやるからには本式だ。今までみてえに、怠けちやいけねえ、衣裳もごまかすんじやねえぞ。みえないとこまで、良心的にやるんだぞ!」

あきら「じゃ、私、おかみさんの腰巻と長襦袢お借りしようかしら?」

とみ「馬鹿だね、あきちちゃん」すっかり気嫌を直したとみ、やさしくあきらをにらむ。

三吉「いつまでそのまゝにしておくんだい?」

と加世子をみる。

一平、むつつりと加世子の前に立っている。

三吉「一平、とってやんなよ」

とみ「(上気嫌ながら、楽しむように)駄目／＼一平! 私の気が済むまで、とつたりなんかしたら承知しないよ。」

加世子諦めてうなだれている。

(F・O)

(F・I)

①⑥同じ家の中(朝)

乱雑な部屋の中で、国定忠治の衣装を終わった三吉がすっと立つ。

宿屋の番頭の「一平、芸者姿のとみと加世

子。あきらは鏡台に向って化粧に余念がない。

とみ「あきちちゃん、早くしなよ。さ、裸になって、こっちへおいで。何してんのよ」あきら化粧を終りパンツ一枚でやってくる。

とみ「お前の好きなお腰さ、長襦袢はどっちにする? これかい?」

あきら、腰巻を巻き、とみの差し出す長襦袢に袖をとおし、伊達巻をしめる。

(O・L)

①⑦街

「チンドン、チン、チン、ドンドン……」陽気に練り歩く一同……

その背中ピラに、カメラ接近する。

「秋の行楽には、大衆のサーブスをモットーとする皆様の○○温泉、大原旅館へ!」

(O・L)

①⑧○○温泉の駅

軽快な音とともに、スマートな電車がホームに入ってくる。

①⑨○○温泉——その全景。

②⑩大原旅館(夕)

ゆき交う遊覧客……

二階の部屋から、馬鹿騒ぎする宴会の吹声が流れてくる。

②⑪附近の峡谷(夜)

河原に、電柱がポツンと一本立って、そ

の下に加世子がうづくまっている。
小径をつきつて一平がやってくる。

一平「加世ちゃん、何、見てんだい？」

加世子「(そのまゝの姿勢で)水の流れ……」

一平「ロマンチックなんだな。俺は苦手さ。」

加世子「水は生きてるのよ……」

一平「俺だって生きてる！」

加世子「え？」

一平「加世ちゃん、俺は……俺はな……」

一平「ふるえ乍ら、加世子に寄り添う。」

加世子「どうしたの？ 酔ってるのね？」

一平「少し……だが、酔ってたって、好きな事には変りねえ、加世ちゃん、俺、愛してる！」

一平「ジリ」とにじり寄って加世子を抱く。

加世子「あゝ、いけない、いけないわ！」

一平、狂おしく加世子を抱きしめ、唇を求め。加世子、はげしく抵抗する。

もみ合う二人のシルエツト。……

……足がもつれ、叢の中に倒れる。……

「けだもの！」と叫んで加世子が起き上る。その後から一平も起き上る。

一平「けだもの？ 俺が？ (と狂ったように笑うが、その声が止むと) そうか……俺はおかみさんとも……やっぱりそうなんだ。だが、な、俺は加世ちゃんだけ

には…… (再び自嘲的に) いゝさ。俺は今日限り姿を消すよ。君に拒まれた俺はみじめた人間さ。行くよ……だがね、加世ちゃん、君は自分というものを痛めつけ過ぎてるよ。自分を孤独にしてゆく事に、悲劇の主人公になる事に酔っているんだ。」

加世子「孤独にする？」

一平「そうだよ。じゃ、これでおわかれだ。」

加世子「一平さん！」

一平「俺は何処へ行っても生きてゆける人間さ。元気でな、さよなら！」

一平、太股に去って行く、だが惨めな後姿、淋しく……暗闇の中に消えてゆく。

(F・I)

②演芸社の表(朝)

マンボスタイルの青年(栄公)とパン助を思わせるような毒々しい化粧の女(カルメンローズ)が来る。

③家の中

とみと三吉が二人に相對している。

とみ「まあね、太鼓叩きに逃げられて困ってたんだよ。さんく世話になった恩も忘れたあげくにさ」

栄公「僕が太鼓叩きですね？」

カルメン「栄公、キャバレーで名を売ったドラムの栄公がチンドン屋の太鼓叩きとは落ちぶれたものね。」

栄公「ジーンクルーパーだってチンドン屋さ。(とみに)これには深いわけがあるんですよ。ねえマダム。」

とみ「マダム？ 私が？ へえ…… (カルメンに) え、とこちらのお嬢さん、何と云いましたっけ？ カルメン……」

あきら「カルメン、ローズさんね？」

カルメン「(あきらをみて) へえ、この人、男？ 女？ 気味が悪いわねえ」

あきら、くさる。

カルメン「カルメンローズ。どうぞよろしく。」

三吉「ストリッパって、裸踊りか？」

カルメン「まあ、そうね。」

とみ「まさか、お前さん、裸で町を歩くわけにもゆかないし、まあ、せいぜい警察のうるさくない程度に裸になって、やつてもらおうかね。じゃ、今日からたのみますよ。」

加世子、買物籠を持って出てくる。

加世子「買物に行つて参ります。」

④表口

加世子、出て来ると、郵便配達が来て、手紙を渡す。

加世子。それをみてはっとするが、そつ

と家中をうかどう。

とみの声「加世子、もう出かけるからね、直ぐ帰るんだよ。」

加世子。一寸思い迷うが、思い切って手紙を握ったまゝ去る。

(O・L)

㊤ある喫茶店(夜)

テーブルの上の冷えたコーヒー。

手もつけず、深い思いにふける加世子。そっと手紙を握りしめる。

一平の声が、さゝやくように聞えてくる。

『加世ちゃん、元気だろうね。俺も身体だけは元気。俺は今、船乗りです。

恋に破れて船乗りになるなんて、映画の筋書にもなりやしねえ。だが、これがもと／＼俺の本職なんだから仕様が

ねえ。毎日広々として海原だけを相手の生活、柄にもなく感傷的になる事もある。そして加世ちゃんの事を思い出

す。女の体を知りつくした俺だが、何故、貴女の事ばかり思い出すのさ

う。加世ちゃん。こんな俺でも、貴女を本当に愛していた事だけは信じて欲

しいんだ。貴女は俺の事、口ではけだ

ものとのゝしったが、体でまでは云わな

かった筈だと思う。俺はそう考えると、これは早まった事をしてしまったのでは



ないか、取返しつかない事をしてしまったと後悔する。だが、メソ／＼してゝも仕様がな。海と丘じやどうにもなら

ん。加世ちゃんも早くいゝ旦那さんみつけるんだね。でも、そうなると悲しい。俺、やっぱり加世ちゃんが好きで、加世

ちやんと結婚したかったんだから……」
考えこむ加世子の顔に、レコードが流れてゆく――。

(O・L)

②6 長屋の露路

加世子ばんやりと帰ってくる。
空ろな、その眼――。

②7 演芸社家の中

加世子帰ってくる。

と、はげしいとみの声がとんでくる。

とみ「加世子、何処へ行ってたんだい！」

加世子「(素直に)すみません」

とみ「すみませんもくそもあるかい！一日中仕事をほっぽらかして、よくものめくく帰って来たね。どいつもこいつも恩知らずめ！誰のためにおマンマが食えるんだい！え？そんな事するからには、どんな目に会ってもいふと云うんだね。」

加世子「はい(とうなだれる)」

とみ「よおし！」

とみ、猛烈と加世子においていかう組伏せる。そのはずみに加世子の懐から手紙が落ちる。とみ、馬のりにまたがったまゝ、それを拾って読むと、

とみ「(わな／＼とふるえ)畜生！お前、一平なんかと畜生！グルだ。………ようし、くそ！」

とみ、憤然として、加世子をひきづりま

わす。悲鳴をあげる加世子。

栄公「(ニヤ／＼して)マダム、逃げるよ縛っちゃいなよ。」

とみ、こづきまわされてぐったりとなつた加世子の手を後にねじ上げる。

カルメン「(無感動な調子で)裸にしなや、つまんないわ」

とみ「よし、栄公、手伝っておくれ！」

栄公、肯いて、加世子の着物に手をかける。最後の力で抵抗する加世子。

だが、すべてむしりとられ、柱に／＼ひとしと縛りつけられてしまふ。とみ物差しをもつて思い切り加世子の肩をなぐる。アツと悲鳴をあげる加世子――。

カルメン「惨酷ねえ、マダム。でも、この人の体、一寸きれいな。私、少しいじめたくなっちゃった。マダム。くすぐっていゝかしら？」

カルメン、とみの返事もきかず、加世子のわきの下に指をさしこむ。

はげしく身をくねらせて逃れる加世子。撫然とした面持ちでみていた三吉。

三吉「おい、とみ。いゝ加減にしねえと、時間だぜ。」

とみ「わかつてるよ。(加世子に)いゝかい、今晚はね、旦那と出かけなきやらない所があるんでね。帰って来てからゆっくりとお仕置してやるからね。覚悟し

てな。」

三吉ととみ、外出の用意をする。

とみ「じゃ、栄公、留守の間、このまゝにしておくんたよ。でも、いじめたきや、いじめてやってもいゝよ。じゃ、留守を頼むね。」

栄公「O・K」

三吉ととみは出て行く。

途端にカルメン、栄公に抱きつく。

栄公「おい、放せよ！」

あきらくさって、ひとりつまらなそう……。

カルメン「あら、あきちやん、ごめんなきい。あんた、お小遣いあげようか、映画でも観に行ったら？」

あきら「え？本当？本当に映画に行ってもいゝ？……でも、そんな。」

カルメン「いゝじやないのさ(と金を出し)私達が留守番してるから大丈夫よ。ゆっくり遊んで来るといゝよ。」

あきら「そうですか……すみません」あきらよろこんで出て行く。

カルメン「(クスツと笑って)首尾は上々ね……あの欲張り女め、金儲けの相談ときいて……うふふ……計画通りね。栄公、表のかぎしめて、早く仕事／＼！」
栄公、表戸にかぎをかけてもどる。
その間にカルメンはダンスの中を引っか

きまわし、衣類などを畳の上に投げ出す。

カルメン「仕様がない品ばかりね。」

栄公「金は何処だ。」

カルメン「これだけよ。たった千五百円……」

……一寸割りに合わないア。」

栄公「仕様がないさ。こんな貧乏屋じゃ、

あるだけ持ってゆこうよ。」

と、しやべり乍らも二人は、目ぼしい物を素早くまとめてゆく。

栄公「早いとこ逃げよう。」

カルメン「うん。」

二人、品物を手にもてるだけもって、逃げる用意をする。

栄公「(加世子をみて)この女、どうしようか？」

カルメン、栄公に何か耳うちする。先刻より驚いて二人をみてい加世子。

カルメン「(加世子に)貴女、どうする？」

この家から逃げる気ある？」

加世子「……。」

カルメン「それとも、あんな欲張り女に忠義だてして、チンドン屋なんて道化者で一生送るつもり？」

栄公「俺達こそ、とんだ町のピエロさ……」

カルメン「何云ってんのサ。さ、どっち？」

私達と一緒に逃げる？」

加世子「……。」

カルメン「じれったたいね。体は動けなくて

も、口ぐらいきけるんじやないの。何さ

！ 貴女を逃がしてあげるんだって親切

からよ。別に私達の仲間に入れてんじやないのにさ。よう、どっち？ 逃げなくともいいの？ 逃げるの？」

加世子肯く。

カルメン「栄公、ほどこいてやりや。」

栄公「よし。(加世子に)なあに、先刻は

悪意があつて縛られて云ったんじやないんだ。僕達の仕事やしやすいようにと思

つてね、悪く思わないで。」

縛しめをとかれた加世子そのまゝ、うづくまる。

カルメン「裸じゃ、仕様がないねえと、(包みから一枚の着物を出し)これ、あんなのかい？」

加世子肯く、

カルメン、加世子に着物を渡す。

②露路

三人が出て来る。

加世子はたゞ二人の行く方について、力なく行く。パトロールの警官が行き過ぎる。

栄公「(警官に)おや、雨だ。いやですね、雨なんて。」

警官「(一寸呆氣にとられ)ああ？ 降って来たか？」

三人行き過ぎる……。

途中迄行った警官、首をかしげて引き返すが、もう三人の姿はない。

警官、何でもないというように再び歩き出す。

②商店街

雨がはげしくなる。

加世子、悪夢の中をさまようようにあてもなく歩く……

その肩が次第に雨にぬれ……

街のネオンも雨に映ってわびしい。

雨はだんだんはげしくなる。

何処かのラジオから「サンディッチマン」の流行歌が流れてくる。

哀調のメロディ……

雨にぬれた歩道を加世子は、たゞ一人とぼとぼ歩いて行く。

その前をパトロールカーが突然サレインをならして走り去ってゆく。

(F・O)

——終——

告知版

○真木不二夫「黄色オラミ誕生」(第三部)は、作者の都合により、原稿

が遅れますので本月号は休載いたします。○

日下絹子「ある女給の体験」九雅節夫「特異

な角度から」宝塚二三夫「天は知っている」

は原稿未到着のため、休載とします。

小学校の気分がまだぬけきれない時でしたから、女学校に入ってから間もない頃でした。私のお友達に晴子さんと云う一ツ年下の小学校六年生の子がいて、その子が凄く肥っていていわゆるデブなのです。とても温和しい子なので悪童連から、デブ／＼よんでぶ等と冷かされては、顔を赧くしては逃げ廻って居り、時々泣いてさえる子でした。私は自分の気性なのかどうか知りませんが、こうして皆に苛められる子はよく庇ってやったり面倒をみてやる事が好きだったのです。其の日も、学校の帰りがけに此の晴子さんが空地の片隅で四、五人の男の子達に苛められていたので、私は飛んで行って、今にも泣きそうな晴



サジスチンの半生記 (三)

— 女学生時代 —

鷹野 めぐみ

子さんを連れ出しました。

「何よ、あんた達は、そんな事云うものじゃないわ。みんな先生に云いつけてやるから」

私は大声で叫び乍ら云ったのですが、一瞬たじろいだ男の子達は、その中の一人が、

「チェッ、女学校へ入ったんで威張ってやがら、デブちゃんと威張りん坊ッ、オンナのデブに威張りん坊」

と、はやし出すと、皆がそれにならってやじり出しました。

私は石を拾って投げ乍ら晴子さんを家に連れて来ましたが、先刻、始めにやじり出した五年生の哲夫に腹が立ってたまりませんでした。哲夫はやはり近所の子でした。然し二人

でいろ／＼遊んでそんな事も忘れ、夕方近くになって晴子さんが帰ると云うので、私は家まで送ってやり、ブラ／＼と家に向っていると、パツタリと哲夫と逢ったのです。哲夫は大勢居る時と違って、今度はくるりとさびすを返すと、バタ／＼と逃げ出したのです。

「こいつめ」

私は反射的に追いかけていました。二人は十分以上も走ったでしようか。やがて公園の繁みの中に哲夫は追いつめられて逃げられなくなりしました。

「哲夫ッ。さっきは、よくも私の悪口を云ったわね」

と、私は哲夫の首すじにつかみかゝりました。

た。男の子でも自分より年下だし、普段は余り強い子でない事を知っていたからです。

「負けないぞオ」

哲夫はあわれな悲鳴をあげて私にとびかゝって来ましたが、勝負はかんたんでした。私は両足をすくって哲夫を芝生の上に仰向けに倒すと、胸の上に馬乗りに跨っておさえつけました。

「これでもか、これでもか」

私は両手で哲夫の頬べたを代る／＼ぶってぶってぶち続けました。哲夫は手足をふんばって、はね返そうとしましたが、私は哲夫の両腕を膝頭の下に、しっかとふまえておこしません。とう／＼哲夫は

「ごめんなさいよオ、ごめんなさいよオ」

と泣き出したのです。春の夕暮れの公園でしかも、奥まった繁みの中ですから誰も居ないのです。私は

「泣いたって許さないから、泣くともっとぶつよ」

とおどして、すっかり抵抗しないと判ると哲夫の上に跨ったまゝ身体を前の方へずらして首の上に跨り、両ももでびったりと顔をはさみ、スカートを上からかけて尚もぐい／＼とお尻でおさえつけたのです。哲夫の唇からもれる熱い呼吸。男の子を完全に征服した快感、私はもう憎しみを忘れて此の快よさのみふけていたのです。こうして私は明男、

哲夫、勇一の三人を完全にドレイとしたのですが、女としての眼ざめてくる気配は、次第に私の肉体にも萌していったのです。小学校と違つて同じ兄妹でも、兄とでさえ一緒に歩く事の出来ない当時の世相でしたから、私のおてんばは相変らずだったのですが、熾烈な戦争と共にこの性癖は次第に忘れる——忘れると云うより機会がなくなると云いますか、とにかく勤労奉仕にあげくれ、空襲におびえる時代となつたのです。

その頃私は、早くも制服の乙女も半ばの三年生になつて居りましたが、一年下のクラスに私をお姉様お姉様と慕っている秋子という子が居りました。いわゆる「S」ですが、秋子はやはり私と同じ学校の一年生になつていた妹の輝子を非常に羨しがって、私が本当の妹ならいつも云っているのです。私はおおよそ「S」なんてくだらないと云う気持ちでしたが、女学生のセンチメンタルと云いますか、大きな黒い瞳をぬらす様にして私を見上げて慕ってくるのを見てみると、可愛いくなつてくるのでした。此の秋子が一度私の家に遊びに来て、夜遅くなつてもなかなか帰らないのです。二人で勉強すると云うのが口実だったのですが、秋子は二人きりの私の部屋の中で甘える様にしなだれかゝったり、指を一本一本きつく握ってくれと云ったり、さしもの私もいささかうんざりして来たのです。

「あんまりしつこい人はきらいよ」

私がすげなく云うと、秋子は涙ぐんだ眼がだん／＼泣きじやくり始め、しまいにはキツと顔をあげると私の大切にしていた置人形を掴むと、バタツと床の上に投げつけました。「まアッ、何をするの！ 変な事をするといひどいわよッ」

私は思わず秋子の顔をピシリと平手でぶちました。

「うるさいッ、もっとこわしてやる」

と秋子は私につかみかゝって来ました。私はカアツと怒りがこみあげて、セーラー服の袖を引いてその場に引き倒しました。背中の上に馬乗りになると、髪を毛をぐい／＼引っぱっておさえつけたのです。

「嫌ッ／＼、お姉様かんにんして、かんにんして、どんなお仕置きでも受けますから、かんにんして」

秋子は泣き乍ら低く叫びました。私は馬乗になつたまゝ、むら／＼とサジズムの気持が全身をつみみました。自分の膝下にドレイとなつて居る秋子を思いのまゝに苦しめる。私は秋子の上に跨ったまゝ云いました。

「秋子、私は貴女を許さないわよ。貴女の云う通り姉妹の縁を切りたくなかつたら、私のお仕置は何んでも受けるのよ。いゝわね、お仕置が嫌なら、貴女なんか嫌いになつてやるから」

秋子は身を悶えさせて、

「お仕置して、お仕置して」

と云っています。私は秋子の両手を後手にすると、細紐で固く縛ってしまいました。

「立てッ」

私は縄尻を持って、涙にぬれてる秋子を引き立てました。それ以来、毎夜の様に私は秋子を責めつけました。ひどい時には、物差してむき出しのお尻をはれる程打ちつけた事もありました。革のむちでは音がでるので、わざと物差しにしたのです。尚も責め折かんが昂じてくると、私は秋子に自分の身体に必要でなくなったものを飲ませました。部屋の中で一寸大きじょうごを咬えさせて飲ませたのです。このじょうごを使うのは、今でも一人の男に対してはやっていますが、後で書くことです。が勇一にも此のじょうごをくわえさせたのでした。そして秋子は飲むだけでなく食べる事も一度きりでしたがやったのです。然しそれからすぐ敗戦となったのですが、秋子は空襲で死んでしまいました。兄も私の性癖の対象となるため兄として生れたみたいで温和しいやさしい性格の故か、いつも私に馬乗りに組敷かれる役ばかりでした。中学校へ入ってすぐは余りそう云う遊びもなかったのですが、兄が四年生の時、妹の輝子とふざけてドタンボタンやっているのを、私が「助

太刀致す」とばかり妹に味方して兄を組敷き妹と二人で馬乗りになってぎゅう／＼押えつけた事がありました。私が兄の胸の上に、それも首のあたりに乗り、妹はお腹の上に跨ってキヤアキヤア騒いだのですが、兄は自分より私達妹二人を本当に大切にしてくれたもので、之は今でもそうですが有難い事と感謝しているのです。

さて、それから敗戦という冷厳な現実に向面しましたが、圧迫と灰色の生活から解放されて、自由と平和の歓喜はそれ以上のものでした。あらゆるものゝ解放、私達は本当に手足を存分にのばして太陽の下で躍り喜ぶ事が出来るのですから、これからの青春時代に幸先よいスタートを切ったとも云えるのでした。

それに男女同権、そして女権の拡張は、まだ未成年ながら私は男性横暴の時代の潰滅がたまらなく嬉しく、よく兄を四ツ這いの馬にして男女同権よ、と云って母に叱られたものです。ただ何と云っても敗戦直後は、食糧事情の悪いこと。それに人心の不安定もあって、あわただしく女学生時代も過ぎ去ってしまいました。だが、今の太陽族だとかマンボ族とか云われる今日此の頃に、学生であつたらもつとつと派手な事をしたのに、いささか残念でないりません。

此の外、私より一年上の生徒に私が数人が

ら私刑されたと云っても、一寸ワア／＼怒鳴られ乍らこずき廻された位ですが、その一人一人を三人、私は誰も居ない処で遂に仕返しをしたり、その中の一人とも暫く私と「S」が続いたのですが、無論、私が責めつける方でした。それから変っているのは、同級の悪友達と焼ビルの蔭にまじめで温和しい男学生を連れこみ、散々苛めた事があります。たしかその学生に付け文した私の同級生が、その子から先生に云いつけられたのを逆恨みしての事だったと思います。二時間以上も男一人を縛って女五人で苛めたのですから、今考えると可愛想な事をしたものです。(未完)

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く読者の皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えなし)

△編集部▽



秀 緒 の 告 白

藤 山 秀 緒

私は昭和三十年の四月号に「飛行服姿の女腹切」で、はじめて皆様の前に名乗り出た男です。

男！ そのです。「秀緒」という名を見れば、誰でも男と思うのが当然でしょう。

でも、私は本当は女なのです。いゝえ、男になって、女のことを小説に書いたら、どんなにすばらしいことだろうと、男に憧れて、

毎日をおくる変った女です。断髪して男装する勇氣もない、細めのスラックスにジャンパー、そして雨でもふれば、ものものしいフード、ベルト、レインシューズ姿に、じっと男の姿を空想しながら、ひとりあてどもなくさまよう女。それが「奇ク」に出会ってからはMスタイルの締めくゝりを切腹にもとめるようになった藤山秀緒の正体です。

読者通信とも、告白ともつかぬものを書いて編集部あてに出した時も、私は自室の鍵を厳重にかけ、コルセットとパンティに充分に用意をとゝのえ、スラックスとレインシューズを穿き、レインコートを着けて、やゝ太めにひいた眉、きりゝと化粧をした顔をフードにつゝんで、全く男の気持ちになりきってから筆をとり、字体も男のように書き、何度か息をつめながら「飛行服姿の女腹切」を書いたのでした。私は或る劇団に籍をおいて、そうしたM的な性癖とはおよそちがうお嬢さん女優として立っています。ペンネームの藤山秀緒は、私の本名の一字と、私の親友の方の名がちなぎあわさって出来たものです。あゝ私は、此の名によって男のような気持で筆をとれるようになりました。私は、あの文章の中で、腹を縦に裂き乍ら、「ウーッ」と云って体を硬くし、飛行服の両肢をもみあわせてもがくところを書く頃には、男として胸をときめかせていました。

この原稿が、すばらしい挿し絵と共に四月号に乗ったのを見たときは、吾ながら不思議な感情のたかぶりをおぼえました。

私は京都の駅前の露店で若い女の人が、私の書いた「飛行服姿の女腹切」をジッと読みふけり、遂に買いもとめて立去るのを見ました。あゝ、こんな若く美しい人でも、私の気持がわかってくれる。私は、小雨のけふる京

の町を、愛用のレインコート、フードもまぶかにその女の人を追っていました。その人もレインコート姿で、嬉しくも、きりりとベルトを締め、フードを付けていました。

私は、あやしまれるほどに彼女に近付き、寄り添って市電にのりました。しかし、私は運わるく知人であって、彼女を見失ってしまったのです。私はその知人を、どんなに想んだことでしょうか。

私は宿へ帰ると、私の作業服、作業ズボン（火のズボンと呼んでいます。私の汗がにじんで汚れたスラックス）に着かえ、その若妻風の女の方を頭にえがきながら、「乗馬ズボンの女腹切」を一気に書いたのです。

復刊一号にのせていたといいた原稿です。

そして、東京へ戻っても、昼は可憐な女、夜は勇ました男と、二重の生活をつづけていました。

そのうちに私は、飛行服を着てみたいと思うようになりました。オーバーオール作業服や、ギャバのジャンパーでは私の気持ちは承知しなくなったのです。

私は古着屋をさがしあるいてやっと飛行服を見つけました。

「あのう、お友達がお芝居に使いますの。飛行服を……」

主人は私がスラックスをはいて男のような姿をし、顔をあからめながら云うのですから

大方察したのではないかと思います。ニヤリとしながら

「あなたじゃないんですか？」

と云うのです。私は、ハッとして、

「いえ、あの、私のお友達が使うんです」

云いながら、これは、あの文章を読んだのではないかしら。と心の中で恥しさを覚えていました。

私は重い飛行服の包を抱えると、飛ぶように帰って来ました。夜になると、私は、そのどっしりとした「作業服」に身を包み、鏡の中で、何度も腹を切り、のたうち、悶えるのでした。飛行帽、半長靴、眼鏡など、かれこれ一万円はかゝってしまいました。中でも落下傘のベルトで太もも、と股間をしめつけ、ハリへ体をつるすように支えて、敵陣へ落ちて恥しめをうけぬために空中で死んで行く男装の女飛行士の腹切りは何ものにもかえがたいたのしみでした。

そのうちに私は女の恋人(?)が出来ました。Mという女の人です。Mさんは乗馬をはじめました。私も乗馬服には憧れていましたから、乗馬とは名ばかりで、たゞ乗馬靴や乗馬ズボンを穿きたい一心でクラブへ入りました。Mさんは、グレイの乗馬ズボンに黒の長グツ、派手な乗馬服を着て乗っています。私も負けずに、きりっとした乗馬服をととのえ舞台の隙を見ては馬場へ出かけるようになり

ました。

クラブの更衣所へ行って乗馬ズボンに両足をつゝみ、股間がくびれるほどにズボンをたくしあげて太いベルトで腰をきめるときの快さ。きつちりと足へ喰入る乗馬靴の重味。

私はこれだけで身も心も宇頂天になってしまします。

騎上の人となった私の姿は或る雑誌にのっています。その写真にも私のそのときの心の中がありありと見え、ひろげて見るたびに気恥しい思いをいたします。

私は、このまゝの姿で人目にふれてみたいようなスリルを感じます。私は、わざと乗馬ズボン姿のまゝ、クラブを出て、銀座へ行きました。電車の中でも視線が私にあつまるのを意識しました。

「おゝ、すげえ。Mガールだね。」

「馬に乗るんだな。はやるからねえ。」

一緒に歩いて来たM子さんは、たゞ恥しうにうつむいて扉の処に立っていました。

銀座を歩いても、人々は振返って私たちを見ました。乗馬靴、拍車、乗馬ズボン、スポーツ服、ムチ、派手な乗馬帽。どれを見ても銀座マンにとっては珍しいものづくめです。

私たちは誇らかに乗馬靴の音をひびかせて銀座八丁を歩きつづけました。あゝ、私は男だ。男になったのだ。なんとすばらしい興奮。

やがて灯ともし頃ともなれば、二人の心は

一つにとけあつて、二人だけの楽しいプランを語り合ふのです。その夜語りあつた処は、趣町の、閑かなホテルでした。二人は、ホテルの一室に嚴重に鍵をかけ、カーテンをひきます。

私は、キツとなつて、男らしい態度に変わります。胸を張り、力をこめて乗馬靴をふみしめてM子に近附きます。

「M子。おれは死ななければならぬんだ。どうか俺の切腹を見届けてくれ。」

M子は、興奮にふるえ乍ら、

「はい。わかりました。この上は、深く御最後を……。私も……。あとから……。」

「いや、君は死んではいけない。あとに残つて僕の誠心をつたえるのだ。M子、見てくれ！俺はこの短刀で切腹するぞ。あゝ俺は、俺は！」

「あなた……。」

二人は固く抱合つて最後の別れをいたします。やがて私は、乗馬服の前をひらき、シャツブラウスの前をくつろげ、ズボンを押下げて用意をととのえ、ドアに身をもたせかけつゝ立った姿勢で、短刀を左の脇腹へ突立てます。

「ううっ……見、見ているかッ！」

「あなた！」

「ウウッ……うゝ……ううむッ……。」

私は苦しげに喘ぎながら腰を屈めて短刀を

引廻します。

「あゝ、あなた……。」

すがりつくM子。私は右まで引廻した短刀を引抜くと、M子を抱きしめ、力つきてM子の体を乗馬ズボンの両股にしめつけつゝ、床の上へ倒れます。M子は仰臥、私はM子の腋の下を乗馬ズボンで抱き、苦痛の表情。

「M子。見、見るのだ！おれの最期を！」

い、いま、お、おれの魂を、見、見るのだ……。あウ、ッ——ッ、うッ、うッ、ッ……うゝゝ、うッ……。」

私はガバと両手を腹腔へ突込みます。そしてコルセットの下から血みどろの臓腑——真紅に染めた綿——をつかみ出します。私は興奮にふるえる手で、卓上にある血のように濃い紅茶を血綿にしませ、

「M子、お、おれの魂、おれの魂を、お、お前の口へ、お前の口へ……。」

ぐつとM子の口の中へ血みどろの臓腑をさし入れます。

「むうッ……。」

M子は、もがき、ごくん、と血汐をのみ込みます。むせ返るM子。

「あゝ、ウ、ッ——ウ、……。そ、その齒で、くい切るのだ！は、はやく……。」

M子は体をかきめ、両肢を揉み合わせ乍ら「うゝッ！」

と云つたまゝ、臓腑をくい切り、息をつめ

て悶えます。「ウーッ……」私の呻き。

私も、臓腑を裂かれた苦しみに

「うっ……ううッ——。」

と乗馬ズボンの股間をぐつと締めつけ、腰を浮かせて、しばらくは息をつめます。

そして、

「M子。M子。あゝ、お、おれは……おれは……死、死んでも……う、うれしい……さ、さようなら！」

きりりと口びるをかねて、短刀を心臓めがけて突立てます。

「ウーッ！」

大きくけいれんして、どさりと俯伏せに倒れるのです。

M子は起上り、血みどろの私の死体をベッドに寝かせ、静かに頬ずりをします。こうして「自刃」の一幕は終るのです。

そして東の空がしらむまで、私は男として男のよろこびをかみしめるのです。

今日もM子さんと乗馬をしました。興奮のさめないうちに私は奇クの原稿をかき、力つければ筆をとめて、乗馬ズボン姿を鏡にうつし、恥しい姿を夜のしじまの中にとけこませて行きます。

皆様の中に、奇ク誌上だけの妻として、私を慰めて下さる方はないでしょうか。私を男と思つて私のこの悩みをお救い下さる方があれば私は乗馬ズボンを穿いて、喜んでお相手をさせていたゞきたいと思つております。

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤブー

(第三回)

沼 正 三

前号迄のあらすじ 日本青年瀬部麟一郎は恋人クララと共に、墜ちた空飛ぶ円盤の中で美女ボーリオンを救けた。彼女は二千年後の宇宙帝国イースの貴族で円盤に乗って航時遊歩していたのだ。イースでは里人は奴隷化され、日本人は家畜ヤブーで、馬や犬もその変種だし、生体家具といって、生きながら家具にもされている。円盤の中にも肉足台や肉便器があり、犬もいて、裸の麟一郎を咬んで全身麻痺を起させた。その緩解薬は二千年後の世界にある。招待されたクララは恋人を癒しにこのイースを訪問する決心をした。身仕度の終わった時、迎える円筒が到着した。

才七章

スタンダード・ストウーラー
標準型肉便器

クララは麟一郎の耳許で囁いた。

「麟、行ってみよう。どんな所か分らないけど、二人一緒にさえ居られるんなら心強いじゃない。貴方の肌の色を何の彼のいつたけど、それが愛情の試金石だというなら、その試練を受けて見ましようよ。麟、妾誓うわ、貴方を何時までも愛するってこと。二人

は離れないんだわ」

後のことだが、麟一郎を愛玩ヤブーとして可愛がるようになった頃、クララはよくこの時の言葉を思い出した。これはクララがフオン・コトヴィッツ嬢として恋人の日本人学生瀬部麟一郎氏に話しかけた最後の言葉になったのだ。勿論二人が完全に飼主対家畜の關係に立つ迄にはもう少し対話が交されたのだが、この次にクララがボーリオンの別荘で麟一郎と口をきいた時には、彼女の心中には既に相手をヤブーと見る気持が入り始めていたのだから、女から男への、人間から人間への話し掛けとしては、これが最後の機会になったのである。

だがこの時のクララはそんなことは知る由もない。恋人の身を案じて慰め励まし終ると、手を伸して鞭を拾い上げながら、静かに立ち上った。

麟一郎の眼から又涙が迸って、顔の下に位置したクララの乗馬用革長靴を濡らした。この災厄に際して恋人の変らぬ愛情に感激したのだ。物言えぬ身に涙丈が意志表示の機関だった。クララ、有り難う。それでこそ僕の妻だ……

クララはもう泣かなかったが、万感胸に迫って、身動きもせず、涙で洗われてゆく靴先を黙って見つめていた。

長靴の先は塵埃を冠っていたが、麟一郎の涙が次第にそれを洗い流していった。

二人が抱擁接吻した時には目を背けたポーリーンだったが、今度はごく平静な気持でこれを眺めていた。

靴をヤブーの涙で洗わせる光景は、イースでは珍らしくないのである。凡て騎乗に際しその乗用畜に依じて一定の服装を要求するのがイースの風習だが、鞭、長靴、手袋については特に厳重で、馬や半人半馬に乗る時には乗馬鞭（犀からスジヤムボク（※）を取る様にして畜人馬の巨大な Penis から作る）、乗馬長靴、乗馬手袋（いずれもヤブー皮革から作る）を、天馬に乗る時には天馬鞭（舌去勢した舌触手を乾して作る）、天馬長靴、天馬手袋（いずれも天馬皮革から作る。後者は仔の柔い皮を使用する）を、それぞれ着用することになっているのだ。ところでこの天馬皮革はヤブーの涙で光沢が良くなるという性質を持っている。但し涙といっても、嬉し涙、口惜し涙、痛みの涙、皆成分が異なるので、天馬皮革に効くのは、痛覚が涙腺を刺激して分泌させる特殊の物質ドロロゲンを含んだ痛みの涙に限るのである。そこで貴族の邸宅の玄関に飼われる靴道具一揃の中には、靴靴奴、捧靴奴、舐靴奴、磨靴奴等と並んで、洗靴奴が缺くことのできぬものになっている。鞭撻で皮膚の末梢神経を刺激してやると、鞭撻に依じて涙を出し、靴を洗う。ポーリーン自身は面例臭がつて、天馬騎乗の後でも使わないことがあるが、ドリスはポロ競技の後では必ずこれを使い、靴靴奴の前に跪かせ、ピシピシ鞭をくれて叮嚀に洗わせるのが常だ。だから、鞭を握って足許のヤブーの涙に濡れる靴を見下ろしている乗馬服の令嬢に、彼女は以前一緒に暮した頃の見馴れた妹の姿態を思い浮べ、ふっと、この女はイースの人ではないのか、と先程の錯覚にもう一度囚えら

れそうになり、慌てて鞭や長靴が天馬騎乗用のものでないことを確認して、打ち消した位で、その光景自体には何の不自然さも感じなかったのである。

（※参考）犀の身体の中最も尊重される部分はペニスである。これから作られるスジヤムボク Siambok は世界中で最も怖い鞭なのだ。それは先の方へ次第に尖ってゆく細長い鞭で、鯨骨の様に柔軟で鋼鉄の様に強靱である。一鞭ちで人間の肉を骨まで切り裂く。スジヤムボクで鞭たれる位なら射殺される方が増した。河馬や麒麟の生皮からも作られるが、一番残虐な、一番喜ばれる奴は犀のペニスを陽に乾し伸して作られるスジヤムボクである。プロシヤやベルギーのアフリカ駐在陸軍将校連はこれを手に入れると大喜びする。スジヤムボクを作るには、陰茎の尖端に火熨燙位の二三ポンドの重さのものを結び付け、その「肉片」を根元を上吊して日光に当てる。毎日段々伸びて次第に細くなる。すっかり乾いたら、鞭に作り上げ、油を呉れて磨く。すべすべ光って恐ろしいこと三尺の緑毒蛇に等しい。……」——アレキサンダー・レイクの著書から）

考えて見ると、もう間もなく迎えるの円筒が到着する時刻である。「皆様でお出掛け」と先刻云ってたから、ドリス丈でなく、兄や弟も乗っているのだろう。着換えしておかなければ……そう思ってポーリーンは立ち上った。

空気存在する遊星はいずれも完全な大気調節によって人間の生活に快適ならしめてあるが、四季の区別は有った方が良くとされて残されている。地球の原球面は目下秋なのだが、円盤の中は暖くしてあるので、ポーリーンは下着にケープ丈羽織った軽装でいたわけである。クララは同性だし、麟一郎はヤブーなので、この略装で別に羞恥を感じなかったのだが、兄弟にせよ、異性の前には、

こんな、裸に近い恰好では出られない。邸でなら黒奴に命じて着換えさせるのだが、この円盤の中では自分で着換えねばならないのだ。

立ち上りざまクララの方を見ると額に汗をかいている。夏物の乗馬服だが、この部屋では暖か過ぎるのだ。それにその乗馬服もボーリーンの目には、服地の悪い貧弱なものとかしか見えない。招待したお客様なんだから、妹達の目に見つともなくない様にしておけるのが、ホステスたる妾の義務であろう……

「クララ嬢」と苗字でなく名前で初めて呼び掛けて、「お着換えなさい。こちらへいらっしゃい」

その声には命令することに慣れた人に特有の抗い難い調子があった。クララは長椅子とは反対側の壁の方へ近附いて行った。何か釘でも押したのか、壁が割れて、衣裳棚が現れた。

「妾の方が背が少し高いからピッタリとは合わないでしょうけど、まあ暫らくのことだから……どれでも良いのよ……そうね、これになさる？」

……そうそう、貴女には下着もいるわけね、はい、これ。使ってな

いんだから、気持悪くなさらくと良いのよ」



ポーリーンは一揃のスーツを下着と靴ストッキング下を取り出した。そして恥かしがっているクララを急ぎ立てて着ている物をすっかり脱がすと、下着の着方から手を取って教え始めた。ワンピースの海水着のようなこのコンビネーションの下着は縫目がなかったが、伸縮自在で下から穿いて上に引き上げてから両腕を通すと、ビタリと身体に密着し、今迄どんな肌着からも味わったことのない快適な肌触りだった。靴下は、絹でもナイロンでもないが、もつとずつと繊細で透明で、やはり縫目がなく、太腿迄引上げると靴下留めなしで留り、殆ど穿いていることが分らない。妙齡の女性の夢想の靴下見たいなものだった。

ポーリーンはケープを脱いで下着丈になっていたが、この時自分も靴下を穿いた。その時彼女はクララの足趾が五本あること（犬も西欧人の小趾は一般に日本人の小趾よりもずっと小型であることを読者は承知されたい。）に氣付き、クララも相手が四本趾なことに氣附いたが、この時には二人ともそのことに触れなかった。

裸になるのを恥かしがっていたクララも、下着を着てしまい、靴下を穿いてしまうと、次第に大胆になり、若い女性らしい服飾への好奇心に駆られ始めた。

スーツは彼女が今迄に見たどんな婦人服とも異っていたが、強いて云うなら、ブラウスと上衣と細身のズボンの三揃いになっていると云えば良からうか、その服地は勿論聞いたこともない微妙な織物で、下着と同じように七彩の幻光に輝いているが、地の色は、ブラウスが白、上衣とズボンが茶を主調にする縞柄だった。やはり縫目らしいものがなく、綿金や釦や帯の代りに布地自体の伸縮性に頼っている仕立である。

自分もセーター風の桃色の上着と紺のズボンを着けたポーリーンは、着終ったクララを見て

「まあ、とても良く似合うわ、ズボンが一寸長いだけ」と嘆賞し、衣裳棚の横の鏡を指さした。クララがその方を見ると、どういう仕掛があるのか、初めに正面からの像が、次に鏡自体がクララの身体を一廻りする様に横から背後から又横からの像が写った、——成程今迄自分の知らなかった美しさが現れている。と彼女は感じた。この瞬間には、新しい衣裳への関心のために、彼女の心から麟一郎のことが忘れられていたが、若い婦人としては無理もないことだった。

今度は靴を出して呉れた。中ヒールのパンプスで、何の皮革か。ゴムの様に伸縮し、とても軽い。少し緩い目だが穿けぬことはない。ポーリーンは笑って

「一寸の辛抱だから……あの長靴よりは良いでしょ」

底革は素晴らしく弾力に富んでいた。クララは何も氣附かずその穿心地の良さを感じた丈だったが、実は彼女の足趾は靴底矮人（後章で説明する。）の肉体を踏んでいたのだった。

ポーリーンの打ち解けた態度に急に氣易さを感じたクララは、先程の息詰るような緊張が終った後、急に我慢できなくなつて来ていた尿意を、便所の所在を尋ねることで解決しようとした。

「アノ、失礼ですけど、お手洗いを……」

「お手洗いは？」一寸途まどったようだったが、クララのもじもじした様子で悟つたらしい。然し変なことを云った。「あ、Ashikoと云いたいのか（次章詳述）。どうぞ」

ピューと口笛が鳴ると、すぐ脇の壁の今度は低い所が割れて、素裸の畸形侏儒が立ち現れた。

二

ここでイースにおける排泄の風俗について一通り述べておくことにしよう。二十世紀人の読者に対しては、黒奴用の真空便管ヴァキューム・シユア

Vacuum Sewer から説明して、次にヤブー、白人に及ぶのが分り易いだろう。

真空便管はその名の通り真空掃除器と水洗便所下水道を綜合したもので、真空圧で排泄物を吸引し、便管に集めて送るのであるが、水を使わないので、水で薄められぬままの尿尿が管内を流れる点が下水道と異なる。黒奴の住宅の各室及び白人住宅内の黒奴の私室にはこの便管の支管が敷かれ、更に細管が分岐して伸縮自在の特殊ゴム管になって、椅子の裏とか寝台の側板とにか延び、先端器という部分で終っている。先端器がゴム管より太くなった形が毒蛇コブラを思わせるので、先端器はコブラと称ばれる。これが黒奴の便器なのである。だから便所という特別の場所はない。既に二十世紀においても欧米の新住宅では便所という区劃はなく、浴室に便器を備えた様式が増加していたのであるが、今では更に進んで各居室の便利な場所に設備されているので、便所に通うことは勿論、事務中小便の為に席を立つ必要もない。臭気は吸い込まれる一方で少しも濡れないし、紙を手で扱うこともないので、前史時代人が便器というものに感じた不潔感は全くななくなっている。これが真空便器で、衛生的で便利な便所設備が文明の進歩のシンボルだという命題に従うなら、今半人間と軽蔑される黒奴も、二十世紀人より遙かに文明的な生活をしているといえよう。然し物の反面を見失ってはならない。真空便管の先端器は固形物を受け付けないので、使用者は常に軟便を排泄せねばならない。黒奴用の食物——後に述べる様にこれも配給管によって給与される——には常に緩下剤が含まれている。黒奴は摂食上の自由を制限されることによって、排泄上の便利を享受しているのであり、その主目的は、黒奴のためよりも、むしろ、彼等の使用主たる白人に不快な不潔感を与えまいとするにあると云うべきであろう。

ヤブーの排泄物も最後には黒奴用のと同じ真空便管の本管に流れ込むのであるが、合流以前は全然別の栄養出管と称ばれる管で、これが栄養入管という管と合して畜人栄養水道となり、飼育所の畜舎とか白人の住宅に敷設されている。普通の住宅で云えば充填室 (Charging room. CR と略される) があって、その床に蛇口が上へ五糎程突出して開孔している。ヤブーを飼っている人は一日一度一定時間毎にヤブーの体内にいるポンプ (第四章二参照) に栄養液を充填することを忘れてはならない。それは原子機関以前の自動車に時々ガソリンを充填補給せねばならなかったのと同じことである。定時に CR に入れたヤブーは自身も飢餓と排泄要求を感じているので、早速肛門の真下に蛇口が来る様な位置で蹲む。(腰掛は与えられない。ヤブーは旧ヤブー時代以来腰掛便器に慣れず蹲んで使用する習俗だったのである。) 肛門から突出したポンプ虫の尾端は先ず蛇口の出管部に挿し込まれ、真空圧で吸われて一瀉排泄し終ると直ちに入管部に挿し変えられて、栄養液を身体一杯 (即ちヤブーの満腹する迄) に吸い込む。この間三十秒ないし一分間で、ポンプ一枚穿かぬ全裸のヤブーとしては唯蹲む丈、真空便管の先端器の操作に片手が必要とするのに比して更に簡単である。然しそれでも、CR に入れる間又は作業を中断せねばならない (尤も栄養水道管を伸して蛇口を直接ヤブーの肛門まで届かせ作業を中断しないで済ませる便法もあったが) ので、四六時中仿ける様にするため栄養循環装置が発明されたわけで、栄養水道の出入両管を更に細管にしてポンプ虫を除いた小腸に直接連結したのがこれである。こういう生体家具はコードによって繋がれているから行動が現実に束縛されていること当然だが、一見この束縛のない普通のヤブーも、CR のない所ではポンプ虫は摂餌は勿論排泄さえも不可能なので、事実上逃走はできない。殊に大抵の家庭では脳波型による個体識別装置を

CRの蛇口に附設してあるので、家庭ヤブーはある特定の蛇口からのみ摂餌できるのが普通で、その束縛は目にこそ見えね生体家具におけると大差はないのである。とにかく以上が摂餌と結合させられたヤブー独特の排泄様式であった。

さて、白人の排泄であるが、読者は既にイースにおける排泄物処理方式の基礎が真空便管にあることを悟られたであろう。白人についてもこの基礎は変わらない。黒奴酒導管——酒落て「酒の下水」ともいわれる——は、名こそ異なるが仕掛は真空便管と全く同じもので、唯内容物も管も末端部も別だという丈のことだ。その支管は白人住宅の私室の壁に隠れた地袋の隅に達して先端器に終わっている。この地袋は狭く低く、犬小舎位の容積しかないが、これはSCと称ばれていて、この語は二十世紀人に対するWCの語と同じような不浄感をイースの人に与えるのである。

然しそんな狭い所に人間が入って用使用することは勿論できない。そうでなく、このSCは、肉便器 *Stooler* と称ばれる生体家具の定位置なのである。SCとは「肉便器の押入」の意の *Stoolers' Closet* の略だ。多くの生体家具と同じく、これも雄ヤブーを材料にするが、その機能は口と胃とを人間の排泄物の容器とすることにある。生体家具の常として、幽門即ち胃と腸との境界部分が循環装置のため閉塞されているので、別に人工肉管で胃から外部へ抜ける道を開設してある。そこで一旦胃に収まった尿尿は胃液で混和され、固形物も流動する液状と化して放出され、黒奴酒導管に注がれる。こうして肉便器の発明により、白人は先端器もポンプ虫も問題にならぬ最も快適安楽な排泄形式を享受すると同時に、それが介在して固形便を咀嚼消化してくれることで、自ら緩下剤を服用する要なく、自由な食生活を営みつつ、しかも衛生的な真空便管装置を利用しうるに至ったのである。

真空便管との関係から客観的に見れば、白人は黒奴酒導管を、肉便器と云う生きた先端器を使つて、利用しているわけなのだが、白人の主観においてはそうでない。SC内の先端器は単純に肉便器のもので、間接的にも白人に結び附くものでない。SCの中を覗くこととはない（覗く用があれば黒奴に命じるからである。）ので、全然便管を意識しない人が大多数だ。彼等の主観からすれば、排泄とは肉便器に *food and drink* を与えることなのである。前史時代の東洋の一地方では豚を便所に飼つて排泄物を飲食させたと云われるが、その人々ならイースの白人が肉便器を見る気持が分るであろう。要するに「自分達の尿尿を御馳走として飲食する家畜がある」と云う意識である。唯この家畜が半ば家具的存在になっている点が昔の人に不可解であるかも知れない。

逆に肉便器を含めてヤブー達の方にこの白人の意識に対応する神話が存在している。「神様は黒奴を憐んで酒を与えようとした。そこでヤブーの中で特に優れていたストウラーなるものを選んで口からの飲食、ベニスからの泌尿と云う本来ヤブーに許されぬ一見黒奴風の生活をすることを許し、その尿から酒を作るために神様自ら *Food and Drink* をお与えなさることとした云々」というのである。即ち肉便器達には便器としての自意識がない。便器とは彼等に云わせれば、黒奴が使彼等がSC内で使う先端器のことで、神様には本来そんなものは要らないのである。「神様はヤブー中の優良児たるストウラーを養つて下さつてゐるのだ。」これが彼等の信念であつて、一般に白人を神として礼拝するヤブーの宗教「白色崇拜教」——各種ヤブーはそれぞれ自分等こそ神様に愛されていると信じている——の中でも、選民意識の強い点で特殊のものである。生体家具の一として栄養はコードから来るのだが、自身ではそれを意識せぬ肉便器は自分の栄養は直接神から与えられ口に受けた聖なる食物から摂ら

れるものと考えているわけで、事実彼等の特権的地位は黒奴達にさえ羨ましがられることがあるのだ。

然し実際には、聖なる食物は肉便器の体内にはほんの少ししか吸収されない。唾液胃液尿等と混った尿尿は、やがて人工肉管に送られ、そこで強力酵母を添加され、醗酵を始めつつ、先端器から導管に入って黒奴酒業者 *negtater* の醸造所に導かれ、樽に貯えられて酒精分を増加してゆく。これを精製したものが黒奴酒 *negtar* だ。一般平民の尿尿は纏めて二級酒、三級酒を作るのに用いるが、名流貴族のは家柄によってそれぞれの銘酒を醸造するのに使用する。このように白人の排泄物は完全に廃物利用されるのだが、では黒奴やヤブーのはどうなるのだろうか？ 畜人省栄養水道局の所轄する特殊餌料配合所において廃物利用されるのである。真空便管本管はここに導かれ先ず緑藻培養源（※）となる。外からの熱を受け易い様透明になった管内を流れる尿尿は見る見る緑色に変わって高栄養蛋白質の集まりと化する。更に管内を流しつつ各種の微生物や抗生物質を作らせると、最後には人体の栄養を一〇〇%維持する完全食糧の緑色液となる。この複合クロレラ液を逆に別の本管で外に導き支管を分岐させて行ったものが、イース百億のヤブーの生命を支える栄養液であり、栄養人管なのである。即ち白人のものは黒奴に、黒奴のものはヤブーに、ヤブーのものは再びヤブーに、それぞれ完全に摂取されるので、イースの文明は前史時代のように排泄物の処理に悩むことがない。これは廃物再生摂食連鎖と称ばれ、内務省の管轄する所だった。

（※参考）徳川生物学研究所ではクロレラのタンク培養を研究している。クロレラは普通の農作物の四十倍の高効率で太陽エネルギーを吸収し、反当り一年の収穫率は四トン半で、米の十倍、大豆の三十六倍に当る。そして組成は蛋白四二%、脂肪二二%、炭

水化物二四%、残りの中の各種のビタミンを含み、その含量はどんな食品よりも豊富で、蛋白源として牛乳の四十三倍の能力を持っている。条件が良ければ一日に百倍も増える驚異的生産力であり、組成も自由に変化させられる。将来の人類の食糧問題はクロレラによって解決されるであろう。手近な所では大都市で処理に困っている排泄物もクロレラを利用して家畜の飼料に変えてしまふこともできる。………」

——田宮博士の文から——

以上がイースにおける排泄物処理方法の概要であり、排泄風俗のあらましである。ヤブー、黒奴、人間、それぞれの排便施設を備え、前史時代の世界における様な非衛生で不便な便所というものがどこにも見られないのがイース世界なのである。（尚、立小便にあたるものとして白人が直接黒奴の口中に放尿する場合があるが、これは正規のものでないから、後章でその場面が来るまで説明せずにおこう。）

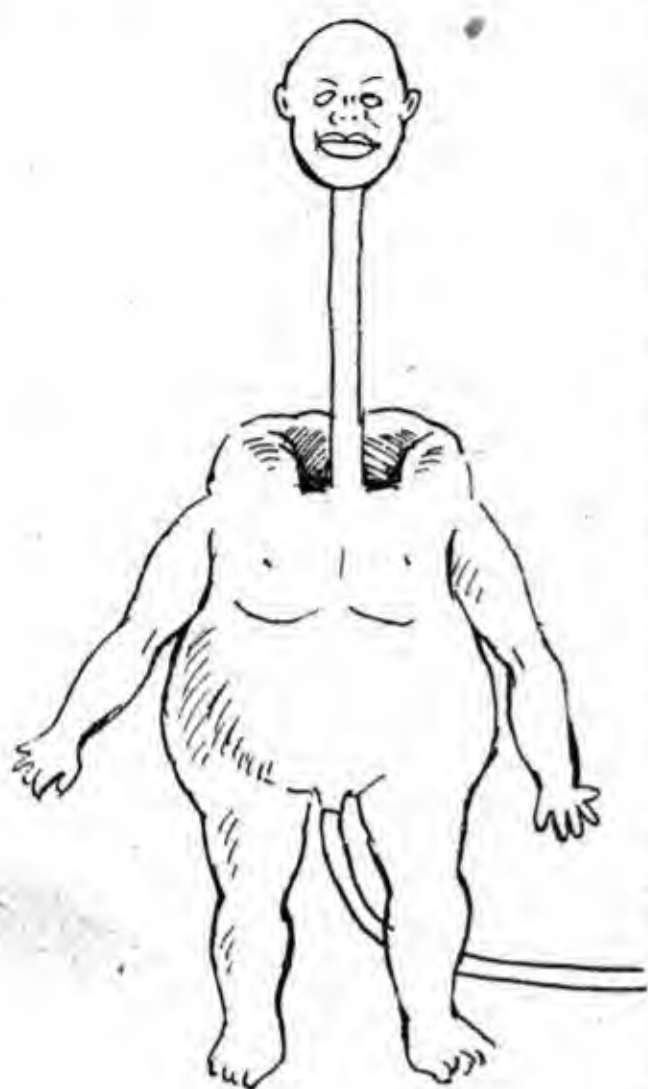
三

ところでイースにおける肉便器使用の風俗は、初期の形態をも算入すれば、既に千五百年以上の歴史を有する。現在帝国内のどの遊星のどの大陸に行っても、凡そ個人の私室で専用便器の備えてない部屋はなく、客室、船車内、集会



場等で標準型共用便器の姿の見られない所はないが、このように普及する迄には、殊に便利至極な三能具標準型の誕生する迄には、長い変遷の跡があるのである。

肉便器使用の端緒は女権革命以前アルタイル圏への膨脹期に遡る。『イース事物起源』の記す所によると、遊星ゴンダへの植民に際し、その星の大気の状態から気密円頂閣内に便所を一箇所しか設けられなかったので、夜中尿意を催した時、遠い便所まで歩いてゆくのを面倒臭がった男達が、寝台の上でヤブーを尿瓶代りに使うことを考えた。これが最初の肉便器だと云う。女性用小便器と違って男性用のものは口唇部に特殊の構造を要求しないから、ヤブーを持つてゐる人はすぐ利用できる。十年程の間に、ゴンダ星の風習は帝国全体に拡がった。当然昼間も使う、大便にも使うという人が出る。自家の便所から陶製便器を追放し、小便所の朝顔の跡へは立姿勢での口唇の位置が丁度大人の泌尿器に当る位の身長の子ヤブーを縛り付け、大便所腰掛の下には口の大きなヤブーを蹲んで仰向かせ、結局



自分の排泄物を全部ヤブーの体内に納める創案者たるの栄を担ったのは、ベトロニウスの再来と称せられた伊達者の卿ドレイパーだったと伝えられる。

やがて女権革命が起り、男子用朝顔と並んで女子用朝顔（手帖第十四項及び次章参照）にヤブーが使用せられる様になり、子供では口も胃も小さ過ぎるとして侏儒をその為に使所で飼う様になった。その頃一方では黒奴の為に混尿酒を与える試みもあり（第四章一参照）やがて黒奴酒が作られ、真空便管が普及し結局今から千三百年程前に、粗笨ながら廃物再生摂食連鎖の原始形態が成立して、肉便器の存在は動かすことのできぬ重要な社会的機構の一環となり、陶製便器の使用は全く廃れるに至った。

然しまだ染色体手術の技法が発明される前であるから、便利な体型は誘導変異から長期にわたって育種淘汰する以外には得ることができなかった。椅子に掛けたまま、寝台で臥たまま放尿できる轆轤首型肉便器は、本来舌人形、唇人形用として発達した体型を尿壺に転用したものであるが、その数十種に及ぶ長い頸が作られる迄には数世紀にわたる育種学者の苦心があったし、大便器としての侏儒型も、いわゆる馬蹄肉瘤——両肩が著るしく怒ったのと背中の中瘤とが筋肉塊で連結して、頭部を三方から馬蹄形に囲む肉質の山脈状になったもの——が発達して、坐った時、腰掛便器の眼鏡板（穴あき蓋）の代りに楽々と使用者のお尻を支え得る様な見事な畸形になる迄には、幾百の試作品が無駄になったのだ。

侏儒、侏儒、轆轤首の三種が、三用途に応ずる肉便器の三定型として発達したが、こういう単能具は私室に置くには充分だが外出先へ連れ歩くには不便である。共用器でなく専用器として持つ階級からの要求に恰かも染色体手術法の発明が呼応して、八百年前初めて三能具が作出された。三種の定型を一身に兼ねている畸形である。

その便利さから単能具を圧迫し、平民の専用器及び一般共用器として広く用いられるに至り、単能具は特殊化して貴族向きの高価な専用器に残存している。

単能具に貴族の私室に置く専用器として読心能^{バシツク}附にもできるし、頭部の造作（第二章でリンガの頭部にどんな加工がなされたかを想起されたい。）に変わった趣を加えたり、生体彫画による皮膚の装飾に高尚な趣味を示したりすることも自由で、極端に云えば、帝国内一万の貴族の使用しつつある数万の専用器中に全く同じ二つを見出し難い位である。これに反して共用器は、個人の嗜好^{このみ}に属する部分に手を加えない方が良くとされ、専ら実用本位に、機能第一に、体型を追求した結果、一番便利な形と認められるのが標準型として規格が公認され、量産普及化されるようになった。

これは大変な畸形である。侏儒で佝僂で鰻鱺首と云う丈でも想像できよう。脚は太く、長さは四〇糎で膝で二等分されている。足は大きく扁平足である。両脚の上にある胴体は肉塊といった方が早い。あぐらをかいた時の胴体の高さ五五糎、立派な馬蹄肉瘤を具えている。腹部は恐ろしく肥満し突出しているが、これは四人が次々と続け様に使用し得る様つまり胃容量が四膀胱容積（これは肉便器の胃がどれ位膨脹しうるかを測る単位である。）にも達するためである。生体家具として栄養循環装置を備えているのは勿論だが、その外にも内臓に加工してある。それは気管が咽喉を通らず、頸の附根の後



方、馬蹄肉瘤の凹みの内側の二つの孔に開いて、そこから呼吸していることで、鼻粘膜をその孔に移植してあって嗅覚は普通人より強い位だから、その加工の狙いは偏に咽喉を食道に専用させ、呼吸によって尿尿の通過が中断されたりすることのない様にしている。（舌人形にもこの加工を施したものがあ。腕は長く細い、手の指は柔かく短く、爪は舌人形と同じくうっかり引掻傷など作らぬ様全部抜いてある。馬蹄肉瘤内側深さ一〇糎の凹みの中一杯に細長い頸がとぐろを巻いた様にして畳まれ、頭が載っている。大便器になる時は頸を折って凹みの中へ後頭部を入れ顔を仰向にして口を開くのだし、小便の御用なら頸を伸す。頭部は口唇部の異常な発達を除けば、目鼻耳頭髪すべて尋常だが、不精髭にならぬ様、毛根は除いてある。深く裂けた大きく開く口と吸盤の様な感じのする厚い唇は、女性の為のものだが、男性にも使用し得ることは云うまでもない。歯は咀嚼用に奥歯を残してある丈で前歯は全部抜いてある。舌は普通人の倍もある幅と長さの見事なもので、黒奴用の先端器と並んで、この有能な舌が、イース世界からトイレットペーパーを追放してしまったのだ。これが標準型肉便器（Sist.と略されることもある。）である。身長は頸を伸した時（実際にはこの姿勢はとらないが）一五〇糎、畳んだ時一一五糎（頭部二〇糎、脚部四〇糎、胴は肉瘤頂から尻まで五五糎だが中央首の附根から尻までは四五糎で、四五糎ある長い頸は畳むと凸みに納まるのである）、腹囲は一三〇糎というのが規

格数値である。シリウス圏のペロ星にある大飼育所^{ヤブー}で量産され、一定の訓練と教育を受け終ると、選民ヤブーとして祝福されつつ、帝國全版図に輸出されて、白人の生活を快適化すると共に黒奴酒原料採集機構の末端として黒奴の爲にも役立つ有用な生涯を幸福裡に送ることになるのである。この製造と訓育の状況は、いずれクララがペロ星を視察する日まで預かることとし、ここでは円盤内の操縦室の場面に話を戻すことにしよう。

第八章 起立号令 ASHICKO

一

壁から現れた畸形侏儒は、SCから出て来た標準型肉便器^{スタンダード・ストウーラー}だったのである。円盤がポーリーン一人のものなら専用器を置けるのだが、ジャンセン家の他の人も乗る艇だから共用器を附設してあるのだ。勿論乗る時に手間を惜まねばコードを外して専用器と取り換えさせることはできるのだが、舌人形と違ってたまにしか使わぬものだし割合物に構わぬ性質のポーリーンはいつもこいつを使っていた。

口笛で出て来たのは、これが呼出合図になつてゐるからである。読心能^{シンク}附のもの以外は耳の良いことが、生体家具の重要な能力であつて、標準型肉便器は、誰でも同じ様に吹く呼出の一吹を、一度聴いた丈で百人を百人二度目には聴き別けるという素晴らしい聴覚^{ヒヤウ}を持っている。今この操縦室^{パイロット・ルーム}附屬の奴も、以前ポーリーンの航時遊歩の時奉仕したことがあるので、今の口笛の主が誰かは知っているのである。

彼は短い脚をチヨコ／＼と交替させながら、いそいそとポーリーンの方に進み寄った。コードが長い尻尾の様に床に這った。ポーリーンは、いきなり

「違ふ！」と叱る様に制止すると、更に数語を付け加えた。「コッチジャナイ。御客様ノ御用ナンダヨ」

この数語は麟一郎を仰天させた。肉便器の姿も見ず、誰の発言か確かめる為に振り向くこともできぬ彼は、クララの声でない以上ポーリーンに違いないとは思いつつも、一瞬耳を疑わずにいられたかった。

クララも驚いた。肉便器の異様な姿態は、先程から続け様に珍奇な事物を見てある程度神経が鈍磨して来ていたのと、この肉便器がまだ頸を伸さないで単に太った侏儒の様に見え、目鼻耳などは普通人と同じで、人間らしい印象に富んだ点もあったことから、それほど彼女を脅かさなかつたのだが、今この数語を聞いて、何故とも知らず凝^{コウ}ツとした。麟一郎との恋愛以来、彼女と共に日本留学生の会合に出て彼等の会話を聞いたことがあり、自身も恋人の母国語に相應の関心を持っていた彼女は、意味は分らぬまゝ、それが何語かを直感的に悟つたのだった。

ポーリーンが肉便器を叱つた言葉は日本語だったのである。

一体どうしてポーリーンは日本語を話せるのだろうか。外でもない。之れが家畜語^{ヤブー} Yapon だからだ。イースの人類は共通語として世界語(平民方言、黒奴方言、又各遊星での方言など訛りは色々あるが基礎は英語であること前述のとおり)を話すのだが、その片言を憶える頃にはもう家畜語をマスターする。家畜語音盤(既に二十世紀に着想されていた言語学習法——睡眠中睡眠学習音盤という語学レコードを聴かせて下意識に教授する仕方——の産物である。)で喋り方を身に付けてしまうのであり、又それで充分なのである。物心附くと共に自由に使える家畜言語が言語教育の正規の学習の対象にならぬことは当然で、いわばイースの人類にとっては、スプーンやフォークの使い方を憶えるのと同じ様な(事実「スプーン」の次にヤ

ブーンをおぼえる」と云う俚言もある位である。生活技術上の初步的必須知識として家畜語が考えられているのであり、シェークスピアの詩を暗誦する様な精神的作業とは全く異質な、便器を使う前に口笛吹くのと質的に大差のない唇と舌の廻転によって、家畜語を操っているわけなのである。

家畜語文字というものは全然用いられない。言葉も貧弱である。

もと／＼論理的思想的表現に適しなかつた家畜語は、言葉の貧困化に伴つて全然複雑な思想の表現は不可能になつたが、普通のヤブーの仕事は思想には縁が無いので、白人がヤブーに命令する為の言語としては充分である。敬語は非常に発達しているのだが、白人とヤブーとの間には対話は存在せず、白人が一方的に命令する丈だから敬語用法にも白人は無関心である。

尤もヤブーへ命令するのに家畜語を使わなければならないわけではない。人間の言葉で命令しても勿論構わないのである。唯ヤブーは、一般に人間の言葉を理解し得ない。特別の用途に充てる為、人間の言葉を教える必要がある時には、睡眠学習音盤ですぐ教え込めるので、この点が知性ある家畜の有能な点であるが、普通は教える必要がないとされる。家畜が人間同志の会話を理解したりする必要はないからである。言語は系統立って教えられるか自分で話し言葉として使つて見るかせねばマスターできるものでないから、自分で話すことを許されぬヤブーには結局人間の言葉は理解できぬまゝに止まるのであつて、この点他の知性なき家畜と全く選ぶ所がないのである。従つてヤブーに命令するには家畜語ですれば良い、これが伝統的な考え方だったのだが、これに一石を投じたのが有名なクアドリー（女）伯爵であつた。彼女は家畜語は命令補助用具たるに止めるべきで、命令は人間の言葉でなされるべきだと主張した。人間が家畜に命令するのに自分の言葉を捨てて家畜に迎合する必要がど

こにある。前史時代の馬や犬に命令するのに人間は人間の言葉を使ったではないか。勿論教え込める語数は人間の言葉の何分の一％にしか過ぎまいし、そこまで教え込むのも飢餓と鞭撻との助力がなければできない。然しそうやって教え込んだ幾つかの単語短句で行動させてこそ家畜を扱うというにふさわしい取扱ではないのか。それ以上人間の言葉で指示できない所で必要があるならば家畜語で教えてやるのも良いだろう。然し妾はそんな場合にも鞭と手綱で自分の思い通りの行動にまで強制しようと信じる……

この説は一般世論を動かし、以来、白人のヤブーに対する命令は先ず簡単な人間の言葉で為され、家畜語はその説明補助に用いられるのが普通になった。要するに、ヤブーは白人に対しては「口のきけない家畜」たるに止まるのだ。

黒奴との関係は多少異なる。黒奴はヤブーに話し掛けるには家畜語を以てしなければならないとされているし、白人とは会話することのできないヤブーも、黒奴に対しては、許された時、必要ある時、口をきくことができる。唯この場合敬語は「アリマス」調にすべきで「ゴザイマス」調は使つてはならないとされる。後者はヤブーの神即ち白人への祈禱にのみ用うべきものだからである。従つて黒奴はヤブーの用語が正しい敬語法を守っているかどうか分らねばならぬ。為からも、白人よりは家畜語の知識が深く、幼児期に充分マスターさせられるのである。

尤も、黒奴に対して話すことができるなどと云つても、実際問題としてヤブーが口をきくことは極めて稀であり、肉体的にも舌の構造等から啞であるのが多い（※）のであるが、話しこせね聞く方丈は一応標準に達して、家畜語で解説すればいくらでも複雑な命令が可能であり、これが「言語を解する家畜」たる彼等の矜持なのである。単純な文法と貧弱な言葉、イースでは家畜言語と輕蔑せられ

全然言語として扱う価値がないとされているとは云え、家畜語はやはり知性動物の特徴たる言語の一種、少くともその退化形態であるには違いなかったのだから。

(※) 註。馬や犬は喋れないし、肉便器でも、昔は喋れたが現在の標準型は喋れない。舌が大きく発達し過ぎた為である。この過程を示すとも云える俚諺に「良く舐める(舌は)拙く語る」と云うのが残っている。

もし退化する以前の家畜語を知りたければ、ヤブン島に行けば良い。ここに飼育されている五千万匹の土着ヤブーは、昔ながらの旧家畜語と家畜語文字を使って未開文明生活を送っているのである。とにかく、イース世界における家畜語の地位機能というものは、このようなものである。だからポーリーンとしては、クララや麟一郎に対する効果などは全然念頭になく、唯肉便器に指示を与えるという丈の意味で、無意識に口を動かしたに過ぎなかったのだ。

二

叱られた肉便器は慌ててクララの方に向き直って近寄って来る。

彼女が気味悪そうに身を引くと、ポーリーンは

「そうか、貴女はまだ肉便器を使ったことがないんだったわね。…

別に面倒なもんじやないんだけど……」

と云いながら、決心して、

「じゃ、妾が使って見せてあげる」

クララに向かって話し掛けていた視線を下に落すと、

「Come here (いっちおいで)」と呼び掛け、続いて低い鋭い声を出した。「Ashicko。」

又脱線することになるが、これから先も度々使われる言葉なのでいっしょの Ashicko, という語の意味、由来、用法を、オクスフ

ード大辞典の最新版を訳して紹介することにしよう。用例はイースの事物に慣れぬ読者には分り難い点もあるうから、訳註を附しておく。

ASHICK [ejik] 外来語【語原】Oshikko (旧家畜語)

【名詞】(1)【廃義】尿。小便。比較→UNGK (大便)(1)【本来は、古体ASHICKO [ejikou] を用いた】ヤブー尿(例1)(2)

【転じて】人尿(例2)(3)【自動詞(4)から】(ヤブーが)起立すること。(1)【肉便器の】立位(例3)(2)【犬の】チンチン(例4)(3)

【馬の】立姿勢(例5)(4)【生ヤブーの】起立(例6)(5)【転じて】(黒奴の罰としての)立ん棒(例7)(6)【他動詞から】(ヤブーを)立たせること。【特に】(肉便器を小便に)使うこと(例8)(7)【熟語】ASHICK and ungk (立(っ)ことと坐ること)(ヤブーの)両姿勢(例9)(例10)

【自動詞】(1)【廃義】尿。小便。比較→UNGK (大便する)(1)【本来は、古体ASHICKO [ejikou] を用いた】ヤブーが排尿する(例11)(2)【転じて】(人間が)小便する(例12)(3)

【現在に、自動詞としては次の命令でのみ用いる。受命自動詞】命令形 ASHICKO [ejika] 略体 SHICKO [jikou] (ヤブーに対する)「起(っ)」【起立命令】。反対→UNGKO [ankou] (坐れ)(1)【本来は】(三能型肉便器に対する命令)立位を取れ(例13)(2)【広義化した】(ヤブー系動物への)起て。【特に】(犬に)後脚で立て(例14)。(馬に)立上れ(例15)(3)【更に広く】(生ヤブーに対して)起て(例16)(4)【転じて】(矮人に対して)掛け(神々の競技や矮人斗技におこつ) (例17) (6)【熟語】to say ASHICKO (起立命令をかける) 肉便器を使用する意の婉曲語法(大小便を問わぬ)(例18)(例19)

【他動詞】-ed, -t. 【自動詞(7)から】(起立命令をかける(例20)

(イ) (ヤブーを) 立たせる (例21) (ウ) (ASHICKO の号令をかける) 起立させる (例22) (エ) (熟語) to ASHICK a person (ある人に起立号令をかける) 生ヤブー扱いする。人格を無視して侮辱を加える意味 (例23)。to ungk and ASHICK a horse (馬を坐り立たせる) 馬に跨る動作 (例24)

【語史】 ヤブーの文化史的運命を象徴する語の一つ。初期には、OSHICKO, ASHICKO と綴られヤブーの(排)尿を意味したが、ポンプ虫寄生によってヤブーが排尿と無縁になって以後、語尾のOが脱落して人間に転用され、肉便器への説明語として用いられる。(用例12参照) 中に起立を意味する号令語と変り、女權革命後は尿の意は全く忘れられて、起立の意味の受命自動詞として意識されるに至り、最後に他動詞化した。但し常にヤブー系動物に用いられ、人間には用いられない、黒奴にも刑罰用語以外には用いない。逆にヤブーに対しては、Stand, stand up という語を用いず、すべて ASHICK で代用する。又 to say ASHICKO (アシッコと云う) が用便を意味するのは、ASHICK が一旦古義を離れ排泄と無関係な起立動作のみの意義と観ぜられて後に、(昔手と紙で尻を拭いた時代に「手洗」という語が便所を意味した様な) 排泄に関する直接表現を避けた婉曲語法として成立したもので、語義変遷の好例とされる。

【用例】 例1。人間でなく猿だということは雄特有の立小便の風でも分る。便所を持っていても猿真似した借物に過ぎんから、尿意を催すと便所でない所で ashicko を放出するんじや。J・ラッセル編『將軍マツク言行録(地球都督時代篇)』

例2。儂はその仔畜人 cub に云った「お前は今日から小便所じや。儂の ashick がお前の唯一の飲物になるのじや」B・スタンウィック編『卿P・ドレイパー書簡集』

例3。歴史時代印度教の經典に無量寿仏の極楽世界を説いてそこでは人は心に排泄を念えば大地が開閉して不淨を受け容れると叙しているが、心に放尿を念うとすぐ、肉便器が ashick で前に立つ我々貴族の生活は、昔の人には極楽とも思えるわけだ。Aヘブバーン『古代宗教雜誌』

例4。満二年で完全に這うことが身に着いたら、仔犬 puppy 外に出して、始めて ashick を仕込みます。I・バーグマン『バウ星紀行』

例5。さても又丈夫エド・フィエール / ashick の馬の肩に跨り / 拍車爆と輝いて / 威風凛々を払いけり。J・モロー『女城主(物語詩)』

例6。ashick している生ヤブーを立っている人間と比べて見よう。どこが違うだろう? S・ローレン『ヒトラー畜人論の擁護』

例7。妾は一方混尿酒を与えんと共に他方氣に入らぬ黒奴はどしどし ashick に処したから、彼等からは愛されると同じく恐れられた。女卿ジャンセン『回想録』

例8。肉便器の ashick にも人によって違いがある。妾は両股で尿壺頭を締めつけながらでないというまく放尿できないが、感觸で放出できる人も多いらしい。男にも咥えさせた丈で出る人吸わせないと駄目な人、色々ある様だ。G・ケーリー『隨筆・こんなこと』

例9。ashick と ungk が家畜語に入ると、前者は立つ、為のアシ(脚)となり、後者は坐る、意を保存した儘変音してエンコとなった。尚家畜語で軟い、甘いものをアスコと云うのは、肉便器に対する ungko から連想されるものが直輸入されたのであろう。D

用例5



・デイ『家畜語考』

例10。「Ashick 十」回、ungk 三回」(健康体の意)(諺)

例11。「おい、何処へ行く」「ハイ、oshicko に……」「その前に此処へ首を入れる、俺が小便したい」H・ネフ『ゴンドラ星異聞』

例12。「お起ち」とお姫様は肉便器に命じ、それに分る言葉で

附け足しました「妾ハ ashick シタイカラ」M・オハラ『童話・情深いお姫様の話』

例13。肉便器は生後十ヶ月位で止め、以後は独りで排便させましょう。ashicko, ungko は片言でも云えますから、すぐ肉便器が使える様になります。家畜語音盤を聞かせるのはずっと後で良いのです。J・シモンズ『娯談本』

例14。彼女の愛犬ニューマは脳の言語中枢を抜かれた奴であったが、ashicko と云われればどんな犬より素速く後脚で立って、獅子の様に刈り込んだ上半身の長毛を誇示するのだった。J・ドルー『クアドリー伯爵伝』

例15。飛び乗りながら ashicko と叫び力強い一鞭を入れた。馬は彼女を肩に、跳び起ち上って疾駆し始めた。E・ガードナー『暗黒星雲から来た娘(長篇小説)』

例16。九月三日。朝暗い中に伝声管を生ヤブーの畜舎に継がせ ashicko と怒鳴って画面を見ていたら、皆地面から跳ね起きたが一匹の雌文は動作が遅かったので、連れて来させ、巨大蜘蛛の生餌にした。shicko, shicko と励ましたが結局二時間で完全に縛られる。午前中の面白い消閑だった。E・テイラー『飼育所長日記』

例17。トロイ戦争ゲームのシリウス地区予選決勝は昨日L・ヤングの白組とA・バクスターの青組との間に競われた。審判官たるN・ウッドの ashicko の号令一下、二千匹の矮人は縦横に斬り交え、激斗数時間白組に勝関の上った頃は競技場の河流は真紅に染っていた。(アベルデーン・タイムズ記事)

例18。「Ashicko と二度云う必要はない」M・デイトリヒの言葉。(一度云って用の足りぬ様な肉便器は捨ててしまえの意)

(故事成句)
例19。「一度に二台に ashicko 二つな」(無駄なことをするな
の意)(金言)

例20。夫は妻からたとえ ashick されても口答えは禁物です。妻の望みなら私はいつでも、この手を蹂躪って貰おうと思います。妻は夫の主君なのです。T・ムーア『じゃじゃ馬馴らし・五幕』

例21。陛下の御足がペロ星の土を踏まれる間全ヤブーを ashick し続ける様に、との宮内官の意向が内達された。G・ガースン『セオドラ女王朝史』

例22。近時有機計算機の起動と制動を ashick, unck の語で表現する者がある様に聞き及んでおりますが、どうかと思うのであります。『国語審議会議事録(デボラ・カー委員の発言)』

例23。証拠算出計によれば被告人の有罪度は八〇度強である。

よって被告人は被害者を ashick したものと認め、名誉毀損の罪により縮小刑二級三年に処し被害者に引渡すものとする。V・リイ判事『判決録』

例24。母の血を引いたか男の癖に子供の時から乗馬が好き、仔馬を買ってやると上手に unck-and-ashick します。今度は天馬を欲しがり始めました。E・パーカー『おてんば息子を持つば』

【訳註】例1註。M將軍は地球占領軍司令官で初代地球都督となつた人。当時ヤブーの語はまだ無かったが、彼は類人猿と称んで人権を剝奪した。(第五章三参照)

例2註。P・D卿は肉便器使用の先駆者。(第七章三参照)
例3註。諷心能附肉便器の使用を意味している。ashick の語が三能具だけでなく、単能具にも用いられる例。

例4註。外に出すとは、それまでは畜犬場内の電流の通じた低天井の室で飼育されてるからである。(第三章二参照)。パウ星は犬の生産地。

例5註。馬とは畜人馬。騎手を肩車に乗せて走る巨人ヤブーで後章に詳述する。

例6註。ヒトラー畜人論は第五章三参照。

例7註。J女郷は第四章一参照。立ん棒は横臥を禁じる黒奴への刑である。混尿酒とあるのは当時の醸造過程なく尿尿を酒に割る丈だし、黒奴酒の名称も無かった為。

例8註。G・Cはモナコ星都督だったが、夫君は乳児時代肉襦袢が悪い癖をつけた為、生涯強く吸わせながらでないと放尿ができなかった。それを不具扱いする人がいたので、彼女がこれを書いたと云われる。

例9註。D、D、は学問の対象にならぬとされていた家畜語を

初めて真面目に考察した人で、誤謬がなくはないが、研究の結果には卓見が多い。エンコ・アッコの解は既に定説である。

例10註。鳥類の長命は排泄物を体内に溜めないからである。イスの人は便意を我慢しない。健康な普通人で小便十二回大便三回が一日の定数である。

例11註。(綴りがOで始まっているのに注意)。ゴンダ星での風習は第七章三参照。この時代にはヤブーが主人と対話したりする地方もあったことがこの記述から窺える。

例12註。ashicko が命令語として確立する以前は stand up という命令も用いられたことが分る。waira は stooler の幼児語でオマル、オカワと云った感じ。I'll make water. (小便したい)の末尾の語から訛ったもので、I'll spit. (唾を吐きたい)が転訛して it'spy (肉痰壺) になったのと同じ過程である。尚 water は別途家畜語の語彙に入って、貴重な神聖な(即ち白人関係的な)物質を意味する語ワラになっている。

例13註。diapoo は diaper-yapoo の縮合語で、乳児の股間を常時清潔に保つ為襁褓被覆の下に矮人を入れたもので menspberry と同様の着想に基づく。紙や布の襁褓の様に交換の時不快な便臭がないし、交換も六時間置で良く、便の異常は矮人が教える便利なものである。

例14註。Q伯爵は本章一参照。ニユーマンZundaは畜人老犬(毛刈方は旧犬の場合と同じ)の名で、犬の名としては最もありふれたもの。

例15註。後章の馬の乗り方参照。

例16註。E・T・自身は寝台に臥たままでヤブー共を起し、その態度を遠写画面で観てるのである。巨大蜘蛛は女郎蜘蛛をスク

ーダー位の大きさにした変種で美しさを愛でて貴族に飼われる。生餌をすぐ殺さず段々糸で縛る様に、毒牙は抜かれている。(詳細は後章参照)

例17註。「神々の競技」と総称される矮人を使う遊戯中一番大仕掛なのが Trojan Wargame で武装の矮人千人宛を指揮して戦争する。血みどろの戦いを眺める気分がトロイ戦争に臨むギリシャの神々さながらなので、この名がある。規模を小にし素手で格闘させる型のは矮人将棋と云う。(いずれも後章参照)

例18註。立位を取らせるのに二度も号令を掛けねばならぬのは肉便器として不良品である。M・Dが息子が二度号令したのを見て不見識を叱った故事から出て廃品や無能者を処分する時に用いられる表現。

例19註。勿論一度に二台の肉便器は使えないからである。

例20註。俾夫バートルキオが結局は妻カサリンに征服されて貞淑になるという筋の喜劇。

例21註。ペロ星は肉便器製造の飼育所のある星(第七章三参照)

例22註。有魂計算機は、電子人工頭脳の要処要処に矮人を入れて有魂にしたもの。

例23註。証拠算出計は、陪審員に代って証言の信用価値を計算する機械。縮小刑その他の司法制度は後章で詳述する。

例24註。イスでは男性は学問美術音楽等に携わり、勇壮なことは、女性の領分だからである。

お断り。尚、各例文には年代が掲記されてその意義での初使用時期を示しているが、イス紀元年数は、カルー星の一年を地球時の十八ヶ月として換算せねば無意味だし、ここではそこまでの必要もないと見て、数字は省略した。



〔ポケツト告白〕

サディズムの芽

甲 斐 仁 参

土路草一氏の「潰滅の前夜」は私に女を家畜として飼育し調教する点で非常な興味と興奮をかき立てた名作であったが、その後沼正三氏の「家畜化小説の登場を喜ぶ」、麻生和夫氏の「家畜化小説を喜ぶ」に共鳴して「更に十二月号の沼氏の手帖及び「家畜人ヤブー」並に真太不二夫氏の「黄色オラミ誕生」を拝見し、マゾヒスト諸兄の関心がサディストの

私のそれと対極的なものである事を知り非常に興味を覚えた。その意味で川号時代より沼氏の「手帖」には異常な関心を持ち、殊に三十年二月号の空想科学小説に関するものには私にも非常に興味深かった。

私は現在嗜虐の対象としての女性を人間ではない、虐待する為に存在する家畜、又は獣として考える時、最も強烈な興奮を感じるの

である。民族的な又他星人に関する点でも沼氏と正反対なイメージと興味を持って居る。私はこの点をはっきり自覚させ自己分析させていただいた沼氏に深く感謝すると共に、此処に至る経過を振り返って見たいと思う。

奇ク誌上でも「幼い時から女の責、責面に興味を持つ」と云う告白は何度も見られ、私としてその例にはもれないが、それ以前に於て家畜や小動物が虐待されるのを見、又それ等の絵画を見て興奮した事をはっきり覚えて居る。例えば魚屋が生きた小魚を切り裂く時ビチ／＼はねながら料理されて行くのを見たり小鳥屋の店先で鷹が羽を切られ、脚に鎖りをつけられてつながれて居るのを見たり馬が馬方にはげしく打たれて目に涙を溜めて居るのを見たりした時である。年令的には五、六才位の頃だと記憶する。しかし自分で魚を切り裂く時には快感がなく、自分で手を下して獣類を打つ事には興味がなかったようである。この傾向は小学校頃にもあり、少年や少女が囚われ虐待される絵画、文獻に興味を抱くようになつてからも時々顔を出したように覚えて居り、更に性に目覚め、自分がサディストである事を自覚し女性に対する嗜虐に異常な関心を抱くようになった時、それが止揚され

前述の如く女性から人間としての資格を剝奪した状態で責め虐め事に快感を覚えるようになったのだと思われる。

だから私の場合、女性の合意で行われるサドプレイにはあまり興味が無い。その責め方がどんなに残虐であっても相手に人間としての資格を認めた同格の上で行われる限り魅力は半減される。勿論、現代の社会に於てサディズムを発散させるのにはそのような方法しか無いし、私自身そのような方法を探っては居るが、小説文獻、絵画にあらわれる限りに於てはこのような方法はなまぬいし、私を興奮させる事が出来ない。旧号中でも特に私の興味をそそったのは二十八年頃の女囚私刑に関するもの、二十九年の半公刑に続く一連の篠原氏のものである。これは社会人としての権利を剝奪された女に対する嗜虐だからである。同様に奴隷に対する私刑、魔女裁判に於ける拷問、切支丹宗門史に見られる女性への責、身寄のない娘を集めて行われたいソドム百二十日に於ける嗜虐等々生殺与奪の権を握って行われる責に特別の興味がある。いずれも女が人間以下のものとして取扱われ、対象である女性の意志を完全に無視して行われるからである。

更に最近幼い頃の興味が止揚され新しい型で生きかえって来たのだろうか、女の型をした人間以外のものに対する嗜虐のイメージが生れて来て居る。例えば人魚を捕えて責め殺すと云うテーマがある。アマゾン河には顔が人間に似た魚が居り、その地方の住民が釣り上げ岸に上げて棍棒でなぐり殺すと云うような記事を読んだ事もあるが、そのように美しい女の顔をした人魚を釣り上げるか網で捕るかし、最初は水槽で飼ひ次に空気中に出して苦しめ、又水の温度を上下させて責め、最後にはうるこをはがし焼いたり、切ったり、打ったりして殺してしまうというのだが、これは幼い日、魚屋のまな板の上でビチ／＼はねながらうるこを剥され、ヒクヒク動きながら鍋にかけられバタバタとはね上るのを何度も見て居た印象がよみがえって来たものである。

次に天使の捕獲である。誤ちを犯した天使が神から罰せられて、悪魔の手に陥ちる話は何かで聞いた事があるが、そのように神通力を失った美しい天使を捕え鎖につないで見世物にし鞭打ちその他の苛責を加え更に人間の排泄物を食わせ、翼を折り、火培りにすると云うのだが、これもその昔、小鳥屋の店先で

ガリガリと翼を切られ、とまり木に太いくさりで脚をしぼられ、バタバタと身をもがいた鷹から変換したものかもしれない。ついでに馬方に打たれて涙を流した馬もサニトレスとなつて私のイメージの中に出て来て居る。その他、動物記や空想小説も私の頭の内で勝手に変型されて居る。

以上は私だけが抱く特殊なイメージかも知れないが、ここに到る以前はサディスト諸兄と同様、責めをコレクションし、自分でも描き、写真を集め、これに満足せず自分で写し又文獻を求めて古本屋を漁った経験があるし現在でも続けられて居る。読者通信の中で拝見する奴隷を好まれる方、強烈な責めを好まれる方の中でも、案外私のイメージに関心を寄せられる方々もあるかもしれない。もしそうだとすれば、奇クに於いて小説、挿画に取入れられる可能性が生れて来るかもしれない。人間としての女性に対する強烈な嗜虐は種々誤解の生れる原因となるようだが、人間以外の対象であり、御伽話に類するものであれば、自ら変つて来るのではないかと考える。もし幸にしてこの拙ない告白が誌上を汚し、諸兄の御目にとまり、いささかの関心を示される方があれば望外の喜びである。

女教員の責め折檻

岸 本 青 柳

「青木さん、今晚いらっしやいね」

「ハア、ありがとう」

「アレ、見せるワ」

「アレって、何？」

「テレビよ、意味分って！」

此際簡単な会話ではあるが、実は意味深であるのだ。この会話は徳川幕府時代に相当覇振を利かした、或る藩主の城下街の高級住宅街の道脇である。今朝漁れた新鮮な鰯を、喜作という魚屋が、附近のサラリーマンの夫人連五、六人集っている中で、俎の上で料理しているのを眺めていた一人の婦人が、それも近所の中年の紳士風の男に、声をかけたのである。通りかかった紳士は、或る繊維会社への通勤途中であり、呼び止めたのは藤原節子というこれも中年の未亡人であった。

節子未亡人は四年ほど前に脳溢血症で、或る鉄工所の応接室で客と取引上の対談中突然この世を去った、孝夫という総務主任の夫人であった。孝夫と節子との二人の仲に儲けた子供の内、姉娘の方は今春新制高校を卒業して洋裁学院へ通っており、妹娘は新制中学校二年生となったばかりである。節子は夫と死別してから、生命保険支社の外交員に採用され、小学校教員当時の先輩や同輩や其の教え児の家庭を歴訪して、生命保険への加入を勧誘して廻り、同僚女外交員十一名の中でも中位以上の成績を占め、姉の方から月々生活

の補助を受けて、どうやら其の日々を一家親子が、女ばかり三人暮らしを営んでいる。

節子の姉絹枝は節子と五つ年上であり燃料関係会社の重役で、營至夫という養子を迎え妹節子に自宅の離れを無償で貸してやり、これまた姉妹の間柄は至極仲善く、お互いに何くれとなく世話を焼いているように見られる。だが夫れは表面だけのことで、時折には姉妹喧嘩をしたり、金銭上のゴタ／＼も屢々起っているようだとの近隣の評判もあり、それに輪をかけて妹節子は俄か未亡人になってから、妹婿の營至夫との間に何らかの秘密が出来たらしいとの噂も立てられている。

姉絹枝は相当の教養もあるようだが、口喧かましく男優りだとの蔭口を利く者もあるほどで、妹節子も姉に似寄ったものか、頗る快活で、色白な背は高くやゝ肥満しており、一寸目には、旅館の女将タイプであり、脂切った女盛りの三十五、六才というところで、職業柄でもあろうか、常に顔には紅、白粉の気を離さず、髪も美しく手入れをし、その上、着物姿は人々を魅了せずには置かないものがある。(写真参照)

そして秋から冬にかけては、姉妹が申し合わせたように、紫地で黄筋の格子縞の袴を着るので、事情を知らぬ人々が見れば、双生児だろうかと疑われるほど顔や姿がよく似ている。声音も殆んど見分けがつかぬくらいよく

似寄っている。こんな調子であるので、近所隣の交際振りは、表面は相当派手のように見られている。

節子は未亡人となつてから、独身である青木に言い寄つて、何とか物にしよとする野心からか、或いは好奇心からか青木四郎君を毎晩自分の家に招いて、テレビ観賞を口実に徐々に淫らな魔の手を延ばして来るのだが、変魔者の青木は容易に、その魔の手には乗らないので、節子はます／＼焦慮の色を種々の方法で現わして来るのである。

「青木さん、あんたアレ好き？」

「アレツて何のこと？」

「解っている癖に？」

とニコニコ顔で、節子は青木の膝を軽く右手で叩いたが、夫れでも青木は相変らず「解らん／＼」の一点張り

「アレツてねえ、あんたのお好きなあのお遊戯よ！」

と急所を衝いたように、笑い続ける。

「ウン、アレのことか、誰に聞いた？」

「誰にッて、この間、お宅へお伺いした時、あんたがお留守、でねえ！留守居の方にお断わりして、あんたのお部屋へ入ったのよ、すると机の上に縛られた女の画が半分絵の具で塗ったのを置いていたワ」

「あの縛り絵を見たんだネ」

「エ、一寸見ただけヨ」

「藤原さんは、アノ絵が好き？」

「妾も一度あのように縛られて見たいワ」

「君も随分変わった先生さんだね」

「あらッ、先生なんて、昔のことヨ、冷やかしちゃいやヨ」

二人の会話はだんだん他人行儀の言葉が失くなり、半ば恋人同士か兄妹のような言葉使いになり、無遠慮となつて来る。

「では君を節子と呼ぶことにしよう。節子を後ろ手に縛つて、あの絵のように責めようか、夫れでも満足？」

「エ、あんたに縄で後ろ手に縛られて、泣くほど、いやというほど責められてみたいの！」

「じゃア、何時縛ろうか？」

「そうねえ、明後日の月曜日の朝、向うの甲山にしましう。何も用意は要らないの？」

「僕は写真機を持って行くから、君はその格子縞の着

床の間に縛られた女教員

物で、長襦袢、紅いお腰を着て来るんだ。細引二筋と古手拭を持って来てくれ、髪は乱れた方が凄味があるネ、誰にも秘密だヨ」

「ハイ解つたワ、妾、今から何だか胸がドキ／＼して来るのヨ、どんな風に責められるのか知ら？」

節子は嬉しいような、不安気のような面持ちで、一寸顔に淡く紅潮さして膝の上に置いた両手の指を俯向いていじっていた。

「責めは、斯のようになるんだ」



と青木が小声で独言をいうかと思うと、突然前にキチンと座っていた節子の艶やかな黒髪を引ッ擱んで、手元へ強く引ッ張った。

「アッ、痛いッ」

と節子が呼ぶのも構わず、起ち上ると同時に背後から、青木は節子のむっちりした両手を後ろに捻じ上げ、前かがみに腰を浮かして中腰になったので、節子の袂から落ちたハンカチーフで、素早く両手を組み合わせて固く縛った。髪の毛の香水の香、クッキリ白い襟足、淡黄色の襦袢の紅裏が覗き、中年女の豊醇な移り香が鼻をついて来る。二、三度節子の身体を左右に動かしてから、襟頸を下に抑えろと俯向いたところを馬乗りになって、続けさまに五、六回右手でお尻を叩くやら、四、五回ギュー／＼抑え附けた。

今度は襟がみを後ろへ引ッ張ると、節子が顔を上向けになり、胸を張って、後へ斜めに倒れそうになったところを、青木は右膝頭で節子を支えた。

「何だか、手首が締ったようになって？」

と仰向いて青木の顔を凝視しつつ、うれしような顔をしていた。

「一寸稽古をしただけサ」

「本当に細引で縛られて、責められたら、どんな気持がするかしら？」

「明後日は本縛りで責めて上げよう、木から吊るかも知れん、大分痛いヨ」

「そう、ウンと縛って、痛いぐらい辛抱するワ、あんたのお好きなようにして！」

「よしッ、今度は容赦なしに責めよう、お前も責められるのが好きだろう」

「エ、屹度ヨ、吊り責めを写真に大きく撮って欲しいの」

青木は節子に、先刻告げた衣類のこと、細引、古手拭のことなど責道具の持参を堅く約束した。若しその朝が雨天だったら、甲山の麓にある空家の茶室で責めることをも約束して、節子の揃えてくれた下駄を履いて、庭に下りた青木は、節子に出勤の簡単な挨拶をしってから、

「小手調べはどう思った？」

「ビックリしたけれど、自分が責められてよかったワ」

その翌々日の朝早く、二人は甲山で約束通り落ち合い、中ほどの林の茂みの中へ歩みを運んだ。丁度其処は百坪余りの平地で雑草が腰まで蔽っていた。青木は美味そうに「いい」を一服喫んでから、キヤビネの写真機を三脚台の上に乗せて、五、六本の立木を焦点に一間半ぐらいの手前に据え付けた。節子はハンドバックから、麻縄二本と一筋の古手拭を青木の手渡し、言われる儘に白足袋を脱ぎ蹴足になって、懷中鏡で着物の開き方、髪の乱れ方、顔の作り方を映していた。向側の山頂に朝日が出ているが、薄曇りでハッキリ

しないが、林の上は相当明るいので撮影には満更悪くはなさそうである。

青木は和服で綿紗の帯を巻き、桐の下駄履きの軽装ではあるが、節子は紫地に黄筋の入った荒い格子縞の袴、絞り染の長襦袢、緋木の腰巻、水色の扱帯の和装で髪の毛を前後を少しずつ乱れ髪にしている。色が白いのを着物の色と髪の毛の乱れが、よく調和が取れ、食い付き度いほど艶な姿である。

「節子ッ、地べたへ座れッ」

「ハイッ、こうですか？」

「ここは山の中でも人家に近いから、大きな声を出すんじゃないぞ、少々の痛いぐらい辛抱しろッ」

節子は従順しく青木の命令通り、草原の上に膝を揃えて座る。青木は節子の両手を高小手に強く、青磁色の帯の上に縛り上げた。帯の端を引ッ張り出して、ダラリと後ろへそらした。六尺ほど剩した麻縄の端を、雑木の下から三尺ぐらいの所で、三重に巻き中腰になつて少し俯向いた節子の縛られた姿を真正面と左右両横から三枚を撮影、二度目に樟の樹に立縛りの姿を一枚、三度目に反身の姿を前と後ろから二枚、最後に中の方に枝振りの松の木に別の太縄を振りかけて、吊り責めにかかる。足場がないので下の方の根元の出たのを利用して、節子の片足を乗せさせ、地面との間隙を計って、太縄をグルグル松の木に

山中で立木に縛られた女装の筆者



巻き付け、剥った縄の端を節子の縛った両手と背筋との中間の縄を通して結び付け、松の根元にかけて片足を蹴り上げると、その余力で節子の身体がグルグル廻り出した。

青木は良い具合に撮影しようとするが、吊り下げられた節子の廻転は一寸止まらないので、傍の陽桜樹の大きな枝を折り、これを後から突っ張り漸やく廻転を止めたが、こんな塩梅で手間取ったため、夫れまで我慢していた節子も、顔一面に汗を流している。

「ウーン、痛いイッ、苦しいイッ、早く早くヨ」

と後ろ手に縛られ、吊し責めにされた苦痛を訴え出した。両眼から涙が流れ出る。眼は釣り上り、口をへの字に曲げて歯を食いしばり、顔面は蒼白となって来る。青木はと言えど周章ず、急がず緩然レンズを覗いて焦点を合わせている。

「ク、、苦しいイ……もうゆゑ」

るゝして……痛いイ……」

と約十五分ほど経ってから、はじめて泣き声を立てる。吊り下げられた節子の両脚はタラリと解かれた帯と同様、稍々垂直の姿勢であり、時々右脚を僅かに動かすのみである。

鑢て、この苦痛に喘ぐ節子の縛り吊りの悲鳴の極致の姿をパチリと写真に収め、節子を元の通りに草原に抱き下したが、まだ緊縛した麻縄を解こうとはしない。暫らく其儘休息させた後で、縛られて寝させられた節子の乱れた艶麗な姿を撮影していた。

「節子ツ!! 吊り責めの感想は?」

「やっとなが身に蘇った節子は、後ろ手に縛られた痛々しい身体を徐ろに起し、横尻に青木に向って座るのであった。

「エ、、本当に苦しかったワ、はじめのうちには左程でもなかったんですが、吊り下げられてから、だんだん縄目や帯が身に食い込むので痛さが通り過ぎて、胸が締め付けられ、息が止まるかと——ねえ、妾、もう許してッて泣いたでしよう、随分長かったのネ」

「僕も緊張し切って冷汗をかいいたヨ」

「でもねえ、吊責めは可いものネ、妾、自分の姿を眺めて、自惚れたのよ」

「節子、お前の吊り下った格好は珍無類だったよ。この次は逆さ吊りの芸当でもして遣ろうか?」

「ハイ、御随意に——どうぞ」

「では今朝はこの位にして帰ろうか」

「エ、、随分変わった経験をしたワ、こんなに前ろ手に縛られた儘でお内へ帰って見たいワ、ホ、ホ……」

節子は草原で休息したので、案外平気そうなお口振りだった。青木に縛られた麻縄を解いて貰った節子は、着物をチャンと着直し、帯も締め直し、髪や顔も綺麗にして、白足袋を穿いて帰り仕度を整えた。而して二人は期せずして、互いに微笑みあうのであったが、この山に巣喰う鳥さえ、この人間様の珍演技を知る由もないのであった。

また青木も節子の奔放振りに一層刺戟され、独身者の気軽さから土曜日の晩には必らず節子の家を訪ずれ、今では夫婦気取となり、近隣の評判など馬耳東風で聞き流している。だが越えてはならない一線だけは、お互いに固く守っているようではある。そして節子の方

から積極的に出て其の都度、自分の種々変った着物を青木に着せるやら、顔にお化粧まで施して完全に女装さした上、青木を荒縄、細引、扱帯などで後ろ手に縛り上げ、踏んだり蹴ったり、殴ったり、宙吊り、逆吊り、柱縛りなど、青木に見せて貰った写真帖や責面通

りの責めに耽るのであった。青木も女装と虐待の二重の愉悅に浸っている。恠うした二人の遊戯は、極秘裡に永らく続けられて行くのであった。

(おわり)

軽演劇の責場

異人屋敷の裸女

(池袋アヴァン座第一〇〇回公演より)

本 田 由 郎

東京池袋駅東口にある、池袋アヴァン座で公演されている、怪奇現代劇『異人屋敷の裸女』の中から私刑の場面をとって書いてみましょう。このアヴァン座は小劇場ながら、私刑場面などは殊にリアルに演じていますので、注目されています。『異人屋敷の裸女』でも、舞台へ七輪を持出して、それも本当

の七輪の中で火を燃やして、この火で火箸を焼いています。それ以前の舞台でも、若い女の太股を焼く場面がありました。この時は本当に赤くなるまで焼いてありました。これで女の太股を焼くのですが、シューと音を立てて白い煙が上がります。女の悲鳴、この場合本当に太股に当てたのではなく、太股の脇に

置いた濡れた雑巾に焼ゴテを当てたのだと思いますが、一寸でも手元が狂えばということ 생각합니다、肌寒い感じがします。又、以前の雑誌に発表された「犯された女」や「マダム紅鶴」とは、このアヴァン座がモデルのように思われます。

怪奇現代劇

異人屋敷の裸女

作並に演出 北里俊夫

国際色豊かな横浜の街、この街のとある丘のかげに、人よんで異人屋敷と呼んでいる正体不明の怪奇の邸宅があった。そこには以前から傘兵工と云う不思議なセムシ男が住んでいる。この異人屋敷を大規模な密貿易の巢と目をつけた、刑事湯川多喜三は屋敷の中に潜入していった。

或る夜、三人の若い女が異人屋敷の秘密の地下室に捕われ、冷たいコンクリートの地面の上に、見るも痛々しく、細引で後手に高小手に縛られている。三人の女の見張役に、

一味の三下飛助があたつてゐる。

「可愛い三人の娘達よ、この飛助様がゴタイクツだ、だれか俺のあいてをしてくれ」と云いさま、飛助は三人の中の、原色に近い真赤な上衣、紺のスカートを着た女に近づき、顔に手をかけ、面を上げさせ、

「ほほう、わりときれいな顔立じやないか、今晚は飛助様、たと可愛がつてやるぜ」

「目かち、びっこ」

女は云った。飛助は自分の目かち、びっこを捕われの身である女の口から聞こうとは思わなかった。

「うん、この女郎う」

腹立ちまぎれに、女の髪の毛をむんずとばかり、ワシヅカミにして引上げた。この痛みには女は「ウー」と声を出した。顔は、髪を引上げられているから目尻がつり上り、毛の根元は今にも引きぬけそう。

「どうだ、すこしは痛むかね、飛助様をおこらしたら、こんな目にあうんだ」

ビシリ、ビシリ、飛助の平手が女のほおに力一杯打ち下された。コンクリートの地下室に鳴りわたったこの音に気づいてか、親分と目され、ガラガラ蛇と異名をとる、小男ながら残忍なものをどこか匂わしている男が現れる。

「飛助、なにサワイでいるんだ」

「へエ、ガラガラ蛇の親分で、なにね、ちょ

つとからかつて見た、へエー痛めつけただけなんで」

「馬鹿野郎、やたらに痛めつけちや、王がキズ物になるじやねえか」

親分にどやしつけられて、飛助はビヨコビヨコ米つきバツタよろしくお辞儀をする。

「時に飛助、男の逃出す手助けをした阿娘はどの阿娘だい」

「あの女ですよ」と、水色のワンピースを着て、地下室の端にうずくまっていた女を指さした。この女のすぐそばにいた、別の支那服を着た女は自分のことかと、一瞬どきりとした様だが、隣の女と知ると胸を撫で下した表情となる。それに反して、水色のワンピースを着た女は顔面青白く、恐怖の念を強いて押し殺している。

「あの阿娘か、ちっといけるな、ひとつヤキを入れてやるかい、阿娘、名はなんと云うんだ」

答える元気もないのか、益々顔面を青白くこわばらして黙っている。

「ユリて云う名だそうで」

飛助が横から口出しておしえた。

「ユリて云うのかい、名だけはおぼえておいてやるぜ、飛助、早くヤキを入れる仕度をしる」

「へえ、親分どんな方法で」

「焼火箸だ」

焼火箸でヤキを入れる、その物ずばり、焼火箸で水色のワンピースの女ユリを責め様と云うのだ。この問答を聞いたユリは、地下室から地上に通ずる唯一の道である階段の側に誰にも気づかれぬ様にそりそりと近づいていた。どの様なスキを見いだしたのか、階段をカケ登った。

「この野郎、味なまねをしやがる」

ドアの寸前でガラガラ蛇のために腹をけり上げられてしまった。「アー」ユリは階段を石みたいにながれおちてゆく。後手にいわかれた不自由な体だから、かたい地面によけることもできなかった。打ちどころの悪かったためか地面に落ちるとユリは失神してしまつた。

「親分、ユリがどうかしましたか」

私刑用の焼火箸の仕度で、奥に七輪と炭火をとりについた飛助は、階段の下で失神して伸びてしまったユリを見て云った。

「この阿娘、逃げようとして階段をかけ上りやがるから、けりおとしたまよ、ふんだらしねえこのざまさ、気絶している女を責めても始まらない、水をぶっかけてみな」

七輪をそこにおいて水をとりにいった。飛助は両手にバケツを持ち、バケツには満々と水が入っている。

「親分、かけますよ」

水はユリの体全体を洗い流すかの様に一ぱ

い二はいと無操作にかけられる、ユリが気づくと、

「飛助、気がついたらしい、すぐ火箸を焼け」

「おい、てめえ達も良く見ておけ、なまいきなまねをしやがるとこんな目にあうんだぜ」

ガラガラ蛇は、他の女達にも見せしめたと二人の女に見せつけた。

「ユリ、お前は階段やドアの近くが好きの様だな、おのぞみ通りドアのそばにいかしてやるぜ」

ユリの後手をとると、ガラガラ蛇は階段をひきずり上げる。

「どうだい、ユリさん、お前の好きなドアが目の前にあるんだよ、さぞ満足だろうね」

ユリの後手を解くと、ドアの前にあるハリに細引が通された。その細引にユリの両手がいわかれ、引上げられた。ユリは完全に体を伸しきり、一本の柱になったのか地面に足がゆれるたびにつく程度。

「ユリ、お前はドアが好きらしいからドアをおがましながら責めてやろうよ」

ドアが近くなったり遠くなったりしているのをユリは感じた。それは彼女の体がゆれているからだ。

「女達、良く見ておけ、焼火箸の面白い賣場を見せてやるから、お前も逃げたりすればこうなるんだぜ」



ユリの長い髪の毛が背中の方までたれ下っている、その毛を無操作に肩の上にあげ、服のホックをはずし始めた。

「あーっ、やめて」

ユリは必死に身もだえた。両手を吊されているから逃げることもかなわず、全部ホックがはずされてしまい、白いその上半身が吊されたままの後姿でロウソクのうすあかりの中に、白い肘だけが光って見えた。

「飛助、まだ火箸は焼けねえか」

七輪の炭火で、飛助が鉄の火箸を焼いている。

「へい、もうだいぶ焼けましたが、今少し焼きましょう。」

「そうか、十分焼いて真赤になったらもってこい」

炭火で焼火箸が真赤になると、

「親分、このぐらいの赤みかげんでどうでしょう」

「そのぐらいでいいだろう、それだけ赤まっ

ていればユリと二時間ぐらい赤まっているだろう」

真赤に焼けた焼火箸は、飛助からガラガラ蛇の手に渡された。白いユリの肌近づき、「ユリ、お前のこの美肌に一生、今日のことを忘れられないように、この真赤な焼火箸で印をつけておいてやるぜ」

「ゆるして下さい、助けて下さい」

ユリは一生懸命タンガンしたが、

「今時なにを云いやがるんだ、男を逃がしたり大それたことをしやがって、泣きごとを云ったってまにあうかよ」

「どうか、焼火箸で私の肌を焼くなんてひどいことはしないで下さい」

必死な気持でユリは云うのだった。

「馬鹿野郎、男を逃した土性骨で焼火箸をがまんしようしてみろ」

「飛助、始めるからな、そこにいる女達にも良く見物させろよ」

焼火箸がユリの肌にあてられた。肌を焼く煙が地下室の天井に上っていた。

「うーう、あー」

ユリは悲鳴をあげて、あつさをこらえている。

「苦しいか？ 苦しむがいい、なまいきなまねをしてくれたおかえしだ。たとえ苦しむがいい」

ガラガラ蛇は手にした火箸でゆっくりゆっ

くりとユリの肌に文字をきざんでいた。

「苦しい、かんにんして下さい」

ユリはいくら自分が大きな声で悲鳴をあげたとしても、誰も助けてくれることのないことを知りながら助けを呼ばずにはいられないのだ。ユリの白い背中の肌に「ユリ」の二文字が書き出された。ユリは体の全部の部分から、苦痛のため汗をしぼり出して全身に水をかけたよう。首を前にうなだれ、だらりと吊り下っている。

「飛助、お変わりだ、今一度火箸を焼け」

火箸は又、真赤に焼かれた。今は後だからこんどは前を向いてもらおうかと、ユリはぐりりと前向きにされた。こんな服は破いてしまえと、前の部分をかろうじて乳房のあたりで止っていた、その服に手をかけびりと破いた。白いユリの胸、豊かな乳房がアラワにされた。白い乳房が生き物のように息づいている。ユリ、女の命と云われるお前の乳房を、この焼火箸で焼いてやるよ」

首をガクンとたれてユリの髪の手を手にかけておこした。青白くなっている顔面に真赤な焼火箸が映って、地獄の赤鬼か。

「やめて、悪魔、人非人」

見るに見かねた他の女達が中止してくれと叫んだ。

「こら、こいつら」

飛助が女達に平手うちをくわせた。

「飛助、もう打つな」

「やい女達、俺は悪魔だよ、だがな、俺にさからわなきや、こんなひどい責拷問はしねえよ、お前達もユリみたいになりたくなかつたら、これからユリの乳房を焼くところを静かに見物している、ユリ、始めるぜ」

白い生物の様な右の乳房に真赤な焼火箸があてられた。

「うーう、うあー」

ユリは心死に声をはり上げた。

「やめて、やめて」

息もたえだえ、背が波の様にうごき、乳房にあてられた焼火箸が乳房の脂肪をもやし、白い煙を上げ、型の良い乳房を無惨な型に焼かれていった。右だけ焼いてみても始まらない、左も焼いて両方の乳房を焼こう。火箸が左の乳房を焼き始めた時、「うーうあ」とユリは最後の声をあげて失神してしまった。

「だらしのねえ阿娘だ」

焼火箸をタラリと吊られたユリの足元になげだした。

「十分ヤキが入ったらしいから、仕置はこれでやめておくぜ」

飛助に見張りの役を云いつけると、地下室を出ていった。ユリは失神したまま吊されている。飛助一人になるのを知ると、この屋敷に潜入していた、刑事湯川多喜三に三人の女は無事に助け出されるのだった。

きもののシリーズ

最終篇

『お妾アパート』

白 金 紅 次

関東大震災の跡始末と都市の自然膨脹——
取り分け大東京と云う発展的整理のあふりを喰って漸く馴染んだ町内から追立られ五六町離れた色町——小料理屋の多い、とあるアパートに引越さざるを得ないハメになってしまったのは、工員上りの勤労者に似つかない区劃整理の副産物としては、けだし傑作だったかも知れない。

六畳一間に畳一枚分の勝手場がついて十銭投入すると一回分の瓦斯が出、それに水道まであるから家賃金二十円也は我慢するとしてなんせ生れて初めての集団生活は、私はさて置き不慣れな女房敏江は大いに戸迷いしたらしい。もつとも、このアパートが引越し早々案に相違して管理人の轟さんを始め、隣室近辺の人から親切な応待やら接待歓迎を受けて

飛び込んで来た私達夫婦を兎も角、安心させたことは俗に云う渡る世間に鬼はいない実証だったかも知れないが。

処が、当の女房敏江が買物に出掛ける八百屋にしろ、魚屋にしろ聴いて来るよも山の噂話を総合してみると、どうもただならぬアパートに引越したものらしいと云う訳は、色町に近い遠いは別として人呼んで『お妾アパート』と云うんだから一方ならず驚いたのである。

道理で引越し早々狭まい廊下で出合う人間が極めて上品風じやあるが粋筋の女風情であり、そろ／＼夏になろうと云う頃の部屋は何処も暑いと見え、ちらっと覗いた部屋の模様は頗る尋常向の暮らし方ではなさそうだったし、僅かに開いた南側の庭先には赤や桃色の

色取りどりもいと鮮かに女の腰巻が干し場狭ましとばかり翻っていたことでも判る。当時の軍需景気が建ったアパートにしては、取り立てゝ変った造りではなかったが、東側の通りから入る入口から真直ぐに廊下をはさんで南向に一号、二号、三号と部屋が連なり、寒いのと日照りが悪いためだらう北側に五号、六号、七号の今は物置に空けてある空部屋が階下の全部、階上は南に八号、十号、同様に北側に十一号、十二号とあって縁起の悪い番号を飛ばしての病院風はいゝとして、便所は階下に一つだけと二階西側に屋上物干場がついていると云う古いながらも堂々たるアパートなのである。

住んでしばらく経った後の話によると、曾って十部屋とも満員だったそうで、それが

何の因果か開館早々にして御丁寧にも心中騒ぎが二部屋も出たため『それ以来奇妙に住む人がいつかないんですよ、北側の寒いお部屋なんですけど』と、五十を越した轟さんは亭主を亡くした淋しさ未練さをみじんも匂わせることなく極めて他人行儀に語って呉れたのは実の処恐いみたいでまた住宅難の今日としては甚だ勿体ない話かも知れない。

さて、それはともかくとして、当分しばらくは好まざるに拘らず、このアパートに御厄介にならなければならぬ。有るか無しかの世帯道具を六帖一間に並べて敷金を払ってしまふと朝な夕な嫌やでも隣近辺と顔を合わせる事になって、月並みの挨拶が『お茶にでもいらっしやいませんか』だの、『いつも両国の川開きには棧席に招ばれているんですけどお出掛けになりませんか?』などと、誘われる頃ともなれば、誰がどの部屋に住んでいるか、ほどそのあらかたが判って来た。否、この位なことが判らぬ位なら奇ク読者に限らず『男』に生れて来た甲斐はなかるうけれど、成程、名実共にお妾アパートだけはある、私達夫婦の住む二号室をはさんで玄関口近くの一号室は、当時珍らしかった茶羽織を無難作に羽織って、どうかすると細帯一つのまゝ、八才位な色白な女。それでいて気立は至極優しく、後姿はふるいっきたいばかりの粹筋上り、その旦那が何処をどう通って来るか知らないが如源寺とか云う住職つまり坊さん、とは先ず驚いたが壁一つ隔て、隣三号は長唄師匠タイプで踊りの名取だそう。小肥りの尻を端折って三味線の塵を払っているお掃除姿は今様浮世絵的で、これまた隅に置けないなまめかしさ。『主人が湯河原から帰って来まして一寸寄るだけですけど』とは仰言るが、どうして、銀座か品川あたりにちやんとしたお住いのあるさる貿易商とか聞いた。

脚を階上に運ぶと、本篇の筋を追うて説明しないと一寸紹介に苦しむが、八号室は二、三流どこの某鉄工所の部課長クラスのお相手、時たま長屋風のアップパー姿を拝見する。その隣十号は、どうやら専門が出稼ぎらしく、折につれよき鴨を喰えて帰る三十余りの、でっぶり肥えた女で、だらしなない風采の反面、銭湯に行くのが唯一のお楽しみとあって減多に口をきかなかったから、先ず、御昵懇を願ったのは如源寺と長唄と鉄工所の綺麗どこ御三方と云うことになる。

『暦がぐるりと廻ると早いもので暑い夏がやって来た。ただでさえ、むし暑いその頃の東京は、原爆水爆で雨ばかり降る今日と違って文字通り徹頭徹尾骨だけで涼みたい夏であつたから、ワンピースか何か召して男でもやって見たい腕を肩の附根から露わに出す今日の、女性姿に程遠い暑苦しい帯、紐、裾のまとい

つくアバン女性の諸氏はさぞかし堪らなかつたであらうと思われる。

『まあ、こんな恰好で御免なさい。いつかの御札に駿河屋の羊羹ですけど、お子供さんにも……』『それはそれは、いつも御丁寧……』と半帖勝手を済ませた敏江と女同志の会話は別段取り立て、云うこともないが、暑さがこの暑さとなれば週一回、某所の芸妓温習会の振付指導?に出掛けるお化粧最中が白の肌襦袢に人絹薄桃色のお腰し一枚だったとしても無理は云えないだろう。

『で、ね、その方も仰言ってたけど、このアパート、偶然女ばかり寄ったんですって、だから男って云えばあなただけしかない女人国なのよ。女臭いのは当分我慢して下さいって、ホホホ、夏は特に女の匂いが強いんですってさ。』と半分私をからかいながら敏江は夕飯の跡片づけをする。

『転居早々俺が女臭くなるのは工場上りの人間にや、いゝ薬になるんだよ……』と自分でも訳の判らぬことを云ってゴロリと横になると、一個一銭の風鈴が一吹千金の涼風を吹き入れて呉れる。

『西隣りのお妾さんね、今日は出掛ける日かと思ってお仕度したら日を間違えちゃったんですって、二時間余りもお喋りして帰ったわ。とっても愉快なお話……』
『工員上りと違って、どうせお芝居や見物の

話だろう」

「うゝん、処がそうじゃないの、旦那さんの話、まあ男と云う者は、と云う珍らしい教訓話なのよ」

「何処へ行っても我儘で始末に困るから適当な処で尻の下に敷きなさいとでも云ったんだろう」

「処が、あの方の旦那さんは、特に忍びでつまり週に何回か、この頃は忙しくて一回か二回位だと云ってたけどお部屋に女が二人出来るんですって……」

「何の話だい、そりや、よく判らないじゃないか、暑い時だからあっさり話して御覧」

「つまりね、女になるんですって、女の着物着るのよ」

「何んだって？ 御丁寧に改って、どう云う訳だい？」
と、私は興味本位に教訓とやらを勿体振って喋る敏江の話に柄になく曳きずられて聴き耳を立てた。話と云うのはこうなのである。

そもぐの慣染めは、どうでもよからう。縁日の帰りに現に敏江と一緒にあった位だから、金と暇があれば男と女がくつつくのは詮義するだ



け野暮だが、何んでも連中、さる温泉に遠出した折、乗っていた自動車が転覆したそうである。その時、彼女が無傷で旦那が全治三ヶ月の重傷もおかしな話だが、治るべき打傷を奥さん御承知の上で暫時看護婦取りで引取り親味になって介抱した。つまり旦那の泥と血に汚れた洋服からシャツ、下着に至るまで剥ぎ取り『おかしいけど一寸これで我慢なすって』と、真新しい女用の肌着に下は自分のメリンスのお腰をつけさせて浴衣を羽織った旦那を床に就けたことからこの話は展開する――。

『だもんだから、それ以来と云うもの、夏は浴衣に、冬は袴と云う風に四季折々に女物を用意しとけて、きつい催促をなさるんですって――。いつかお洗濯が多いとこぼしたの本当ね。あの旦那って一寸大きいでしょ、ホラ、茶ばい洋服を着ていつもハンチングかぶって来る人よ。まあ、お妾さんの方も女としては小さい方じゃないから着物の寸法は合うからいゝようなものだけ』

『女の着物着て何するんだらう。まさか旦那の方が飯を炊いたりお茶を出したりする訳にや行かんだらう』

『一寸やってみたいのね、だからドアの鍵はしっかり締めて置かないと、とっても妙ちくりんな逢い引き風景なのよとお妾さん笑ってたわ、女が女を可愛がるってお芝居のお女形なら兎も角でしょ？ 処がどうかして疳に触ったりすると、あれで、とっても苛めたりするんですって――。この間も衣料切符の割当でお店の物が法外にたゝかれたとかで御機嫌なゝめの処へ。持ってきて来て輸出が停った計報？を聞いたから堪らない、夜っぴいて半分泣きながらお妾さん

を苛めたんですって、そう云えば先んだったの土曜の晩お隣、賑やかだったわ」

『どうも隣近所がこう壁一枚と来ちや、あんまり妙なことも出来んしね、それで例の旦那、別に締めてお妾さんを見棄た訳でもないんだらう？』

一つべん位は男女の姿を拝見したいもんだよ、壁に穴でも開けるか』

『およしなさいよ、弥次喜多じやあるまいし。お仲間に入れて頂いてあなたも女装してみたら？一通りはあるわよ。』

女の着物って満更お嫌いじゃないんでしょ？ 序でお二人揃ってお妾さんの前で酒盛でもなさったらホホホ……』と敏江は大いにひやかしたが

幾ら住んでいる処がお妾アパートだからと云っておいそれと油臭い掌を緋縮緬の長襦袢で包んで見た処で、どうにもなるまい。もともと雨の降る日、私の木綿の寝巻が、かわかなに上に猿又まで間に合わないの、暗い廊下だから判りやしないわよと云うのをいゝことにして、女房の腰巻を巻きトンボ崩しの浴衣をひっかけて便所通いをやったことはある。下手な田舎廻りの役者衆が旅先きで降り籠め



られた姿と思えば何んでもあるまいが、裾から赤いのがチラつくのをかまわず立小便はちと無粋だったらう。

例の三号室の女装情景は、その後詳細に判って来た。心理学的なことは私には無理だが、つまり激しい実社会から逃避するには年輩的に云って、女——妾の部屋に飛び込むに限る。飛び込んだ以上は、非社会的な振舞いに浸って大いに人生の垢を洗い落して刹那的な桃源境をさまよい歩き度いであらう。それには曾って親味？ になつて自分を介抱した

は』と一方的に挨拶する訳には行かない。几帳面に腕は捲くつても、旦那は、きちんと座ったまゝ至つて物静かだ。木塀一つで露地と隔てゝる南側の庭先から桃源境を拝見するのは如何にも卑怯のようだが、幸い今晚に限つて外のお妾さんはどうやら留守の様子。暑くて半分涼んで、半分星空の下で寝るんだと妙な理窟をつけて敏江と氷水を飲みに出掛けたが、名物の植木市もないから、そのまゝ早目に帰宅、何んせ風一つない晩だなあ、と出窓から又庭に降りて隣三号室の顛末如何と覗き

当時の姿を再現しなければならぬ。——と云う訳で始めの内は簡単だったのが、時に及んで巾広の帯を締め、鹿の子の帯揚げをのぞかせて、裾を曳くこともあると云う。この序言がはからずも適中したのは肌寒の秋に入ろうとする頃で、暑い真夏の内はお妾、藤間かんりよくさんの稽古着に着るような浴衣に朱の一本とつこの浴衣帯を巻いて腕捲くりしたまゝ差し向いで一獻傾けていたのを、宵の内すだれ越しに拝見した。むるん見つかつた処で、こちら六尺襦一枚の恰好だから『今晚

見て驚いたのである。じみではあるが、薄着に細目博多献上を締めたとお妾女史は多分その場限りの座興か戯れではあろう。赤の腰紐で心持ち軽く後手に縛られて、片や旦那はしなだれ掛る女の嬌態を肩で喰い止めて三味線無しの端唄の吟詠？中であつた。

生来おとなしい性質だと見えて、声も小さいから何を口ずさんでいるか判らないが滅法暑いだけで今晩はひどく御機嫌がよさそう。その証拠に軽くくっつた女の身体を、さも愛情に堪えぬ如く頬ずりし、幾ら何んでも今晩はまだ窓が開いておりますよと外から一応見えぬ処にかくそうとする女の裾を掴んで曳き戻そうとする途端、双方共裾が乱れて、成程二人女とはよく云つたもの——。

この分で行けば、せんだったのお賤やかさと云うのは、精々艶にこぼれる縛り上げた女の姿態をふんだりにふりまいたことだろう。やゝ遠目ではあつたが、くゞられて自由を失つた女の身動きから発散するしなのよさは、流石は踊の師匠だけあつて一分の隙もない——いや、ゆうべはいゝ眼の教訓を獲たよと翌朝敏江御前に報告したら、

『そうでしよ、だから他山の石を参考にしてあなたも一っぺん位と云わず女の着物でも着て、気分を新らたにしないさい』と逆襲されたのは男冥利に尽きることかも知れない。

さて斯うなれば東一号室も当人には悪い

が探りを入れなければ治りがつかぬと云うもの。第一、下着の洗濯物が一番多いのも如源寺である。旦那様の坊さんが御布施の高によつて入御の日を定めようとも、色即是空、南無菩提のしずくがお妾さんに飛び散つて、色も鮮かなお腰をその都度干すに至つては、おだやかでない。

『いゝえ、昔は少々の家作と地主でしたけど今では手離しまして只今は住職業の方を……』と弁明するつるよ女史はどう見たって、さる処の絆筋と見て差支えなからう。氣立が優しく、ふるいつきたい程の女気性は誠に恵れて幸いだ、どう云う因念で二子頭の丸坊主と結ばれたか、世の中は多分に皮肉と矛盾に満ちて考えるだけでも阿呆臭くなった。と敏江に話したら即座に、

『女は、一枚剥けば何処の女も同んじよ』と姉さんじみた殊勝なことを云つて取り合なかつた。

そのつる女史が、妾業ともなれば、昼間は要のないものと昼寝を充分に摂つて、さて薄化粧は——。悪いもので丁度その頃、私が工場の現場と事務を終つてアパートの玄関口を股ぐ時なのである。若気の至りで昔、玉の井をひやかした折、しみじみと嗅いだ白粉と香水の匂いは存外変らぬものと見えて今も甘酸っぱい情緒を漂わせて満点である。しかも今日は三日(三、五、七、十三、十五……と

経文にある如く入御遊ばす)で仏滅して、み前に生物を供養されるとあれば腰を振り／＼常人姿でお忍びある坊主も坊主なら、愛玩を以てこよなき嬉しきとする彼女も又彼女である。廊下を音無く無響のまゝ忍び歩けば、半分開いた入口から部屋がのぞかれ、諸肌を脱いで桑の鏡台に向つて顔をつくらう仇姿が今晩も見えるのだ。

東の壁に接して小さな簾簞と人形ケース、それに朱の衣桁があり、瞬間観察だから、よくは判らぬが大柄な桜花のちらし紅色地縮緬の長襦袢だけが帯や帯、腰紐、伊達巻などの中からくっきりと浮び上つて一際なまめかしい。明るい窓の内側に小鳥の籠があるのは初めて拝見するが部屋の真ん中に朱の丸卓に長火鉢が主持ち顔で鎮座しているのは誠にうらやましい氣がした。総じてお妾ともなればこれだけの仕度が揃わねば営業かのうまじだから、生じいそんじよそこの女一匹がすぐなれる類いじやなさそう。

処で、この或る意味では、私達夫婦と最先きに口をきいて何くれとなく手伝つて呉れた上、夕飯と朝めしを用意して歓待して呉れた一号室佳人が、そう云えば時々自分の部屋の向いの例の空部屋と云われる五号室で彼女らしい声のもれるのを聞いたことがあり、大方暑い精で北側の空部屋を使わせて貰つてゐるんだらう位い考えて別に氣にも留めていなかっ

が、華やかな二人の忍び行が色即是空の経文に便乗して充分堪能出来ていたと拝聞した時は、二の口がきけぬ位感心したものである。

——結論から云うならば、早い話が女は罪な者、その肉体を充分責めて巢喰いなせる悪霊を追ひ出さんが為には、一つの折檻部屋が必要であつたらしい。木魚握る手に細引をたぐり、凡ては無声映画の如く女の着物を脱がせ赤い長襦袢一枚になったつるよ女の両腕を後ろに廻わして念入りに縛つたのであろう。胸に喰ひ込んだ紐がひどく乳房を圧して痛かつたそうで、

『その都度、お坊さんに何されちや大変ですわねえ』と敏江がくと

『身動きが出来ぬ位、ギユウ／＼にく／＼られてお経をあげられると、何んだかこのまゝ成仏出来るような気がして、気が遠くなるんですよ』は最早や完全にマゾ化した女性かも知れない。管理人の轟さんが或る晩誤つて扉をあけた処、赤いお腰一枚のあられもない姿で髪をふり乱し天井から降ろした太縄に宙吊りにされていた彼女を発見してまあ／＼間に合つてよかつたわと安堵したそうである。

して見ると如源寺の坊主は相当な者と見て差支えなからう。或る人が——（と云うのは彼女が聴かせた話なのだが）寺を訪ねると無数の浮世双紙を見せて一ち／＼説教した拳句、すべて女は罪人で汚れた者であり、早晚

地獄に落ち行くものである。と喝破して木魚の割れ目に慨歎の唾を吐き棄てたそうで、聖業に似ず以ての外の喰わせ者であるに拘らずすつかり身も心も奪われて意の儘になる妾つるよさんは、それからと云うもの、気の毒で可哀そうで堪らなかつたわ……とは敏江ひたむき同情の言葉である。

扱て二階八号室の佳人は如何と云うに、鉄工所だけあつて、すべてが堅牢風に見えて、その実そうでなく現に引越早々何処ともなく舞い降りた緋縮緬の腰巻を落主判らず二三日あづかつた経験がある。初めは洗濯物の一部が風に吹かれて庭先きに転り込んだものと思つて別段意にも介せず二東三文の家財道具と一緒に何気なく取り入れたものゝあとで一通り片付けてみると

『お腰の舞込みは何んだか意味があるわねえ』と姉さん冠りの手拭を脱ぎながら敏江は同性の腰に巻く布片をけんそうにた／＼んでは又展げて見ている。その昔社長一家と柄になく伊豆行を敢行して見事に一張羅のホトゼを盗まれたことを想い出しているとすれば、『どうせ、このアパートに住む女の人の物だらう。自分の褌なら、すぐ気が付きそうなのなのに、管理人の轟さんにでも届けておいたら——』で落主八号室のお鉄？さんの処に戻つたのは後日の話。

次に落下したものは白足袋一組、九文半位

な小さな足であつた。続いて舞い降りたものは、薄手木綿の白の肌襦袢、中十日を置いて妙な物を頂いて誠に恐縮した。流石の敏江もその都度届けるのは、かまわないにしろ、月の物の三角バンドまで落とされては同性の恥として一席弁じ込む必要があると憤懣に堪えぬ表情で私に訴えたが、

『何も考える処があつて先き様が、いたずらするんじゃないんだらう。俺一人がしよんぼり下宿してるんなら話は判るが——。もっともこの分だど何が落ちて来るか判らない。色々ところらも都合があるからあんまり妙なものは落とさないで呉れて頼んでみるか』と冗談事が、ふと機会を得て遂に膝を交えて或る日話し合いの出来たのは嬉しかった。

『きかなくなつた洗濯はさみとこちらの不注意で飛んだ御迷惑をおかけしまして——。つい手近かに干すもんだから本当に相済みませんでした。どうかするとちよく／＼お泥さんに見舞われて困つていた矢先なものでしたから、……』

『何を盗りに来るんです？ 一体全体——。成程、物騒ですね。夜中アパートは明け放しだから、そうですか？ そりや、あたしの家で良かった。着物つてむろん普断着じゃないんでしょ、そうですとも、まあ上から落つちる位ならいゝですよ。何も女物ばかりかっぱらわなくても良さそうに、そうですか、そり

やお氣の毒でした。で、？
まだ出ませんか？ すっか
らかんは少しひどいが大方
借衣裳屋でもやろうと云う
んじやないですか？』など
ゝ刑事問答よろしく、よも
山の話があつて、扱てしか
し『本当に申訳ないんです
が、あたし夜中にほける癖
があつて時々序に御迷惑か
けているんですのよ』と白
状したのは予期しないこと
だけに少々たまげた次第だ
が——いや、それでよく判
つた、今様お洒落娘所作事
一幕の段は芝居にしちや出
来過ぎた、なまめかしさ。
さらば何物か盗らんものと
忍び込んだる泥的と、若し
廊下の一隅でも遭遇したら
恐らく闇に浮ぶ特上の色氣
に胆を潰して潰走間違いな
しと折紙付——これも即着
物、女、妾、そして解放さ
れたる初夏の催情誠に良ろ
しかったに依ることかも判
らない。



再び眼を覚す頃である、冷えた酒をひっかけた私が小便に起きるのは、かんべんして貰うこととして歌舞伎見物か、したゝか酔った拳句を連れ立って共々御帰館遊ばした八号お鉄佳人が酔覚ましの手振り身振りはさぞエロツぽいことであつたろうが、
『松蔦のよかつたこと、古風な矢絣模様の振袖を噛みしめて、ひたむきな愛情に耐え兼ね、では御存分に……、菊は喜んで御手討ちになります……ねえ、今晚、うんと、いゝでしよう？』と喋ったかどうか、壁に耳がないから想像するとして、丁度、お床入りの前か後か彼女が燃えるような緋の長褌袴で小用から出る私が用を足そうとして入る処で、ホホホ……と突然彼女が微笑み、そのまゝスーと滑るように白足袋が二三歩行つて重ったかと思うと、あたかも劇中劇のお菊の亡霊でもあるかのように、両手を後ろに廻してベタンと廊下に座った。

首の座に就いた形である。播州皿屋敷なら是か非でもこの場合、お菊を縛り上げておかなければならない。本人はうつら／＼としながらも、そのつもりで手を後ろに廻わしたんだらうが、畜生！ 縄のないのが残念だ。旦那には悪いが腰紐か何んかはあるだろうと咄嗟ではあったが、女のそばにすっ飛んで行って腰を探った。五燭の電燈が天井からボウーと照らすだけで廊下は極めて暗いが、物干場に連なる出入口からは満月に近い青白い月光がもれて一種凄艶な気を漂よわす。誠に以て幸運なる機会を掴み得たものである。

天井裏の鼠と同じく、素早く觀念なせる美人の柔軟な胸部から二の腕にかけて肉も喰い込むばかりに縛り上げた途端、女の身体がぐつと寄りかゝり媚を含んだうるむようなまなざしで

「お菊は嬉しう御座んす 如何ようなりとも御存分に遊ばして……。ホホホ……。で、気が付いたらしい。」

あらッ……と叫んで、いさゝか妙な雰囲気になり酔うていた私の右手をふり切るようにして身体をもがいた。束髪じやあるが緑の黒髪が私の左腕の内を二三度くぐったかと思うと、市松模様の伊達巻が、はずみでさらりと解けて襟前がはだけ、これまた緋色のお腰がぞりりとこぼれた。

恋や恋、我中空になすな恋である。たとい

同居は承知の上でも他人の所有にかゝる人妻？が羞恥とねほけ覺しとで私の肩から上を衣ずれの音も軽るげに真紅の蹴出して撫で廻して、のがれて行ったからと云うて文句を云うような男と男が違うんだハッ。……と力んでみた時には、既に彼女は掌中を遠く離れて個室に姿を消していたのである。

帰りの遅い私の身を案じて、細帯のまゝ敏江が迎えに来なければ狂った一頁の如く、そのまゝ私が首の廊下に鎮座したかも知れない。小用が取り持つ縁かいなどは恐縮だが本当な戯れ事であったのだ……。

以上が本お妾アパートの序曲の一片である。およそお妾とは如何なる存在であるか、などと世相をうがつこの下手な女房敏江を除くと、いずれもその道の大家ばかりであるから、住んで半歳余りの毎日は、私好みから云つても奇ク好みから申しても、おもしろいネタの連続で、特にきものにまつわる話の数々は、それこそ尽きぬ位豊富に拝見、否味わせて貰ったが、これらは何れ他日機会を見て御披露したいと思う。たゞ本篇を以てきものシリーズ全巻を終るに當って極めて月なみで平凡ではあるが、一二の余話をつけ足して一部フエチシストの各位への花むけとしたい。

それは御多聞に洩れず、このアパートに物盗り、つまり泥棒——白状する処によればほんの出来心でやったと云うが、電線工夫に化

けた少々爺臭い野郎が、北側の露地の電柱から忍び込んだのはいいが、時間が悪かった見えて例の十号室銭湯居士が銭湯から帰室する処で悪事露見！『あら、皆さん大変よ、泥棒よ』と大声一番、よくしたもので、そこは閑人揃いのアパートだけあって全員おっとり刀で？出御、『あら、この人、生意気に、この人でしょ。あたしの着物かっぱらった奴は、男の癖に舞い込んだりして……』などと姦しましく喋るうちに女房の敏江まで手助けした挙句、見ん事取っちめて了ったそう……（私は出る幕じやないと床の中でその結果を心待ちに待っていた。）

敏江に聞くとその結果は極めて有効適切であつたと云う。つまり三号室かんりよく長唄女史が腰紐で足をすくった拍子にストンと廊下の隅に倒れた処を、着ていた江戸紫の匹田紋りのお召？で頭からすっぽり冠せ……（してみると女の方はさしずめ長福絆一枚になったことになる、少しふに落ちないが……）もかく処を常日頃の訓練よろしく、如源寺つるよ女史に、着物紛失の犯人はこい奴とばかり鉄工所の寝ぼけ女史が勇敢に上から沢庵石の如く一緒に重なり合つて乗ったから奴さん堪らない。グーと抜かしたかどうか判らぬが、兎も角伸びた処を細引でグル／＼巻に縛ったそう。『早く／＼』と、せかせかした為に組んずほぐれつゝの間に誰かさんの真赤なお腰が巻

き込まれて、何んのことはない奴さんエロ地蔵の態たらくになった……。警察で彼は、『今一度忍び込んで見たい、何分よろしく……』云々と述べたそうである。

今一つは屢々話題に出る火事の一幕を私が身を以て検証した本当の話。確かあれは夕食を済ました頃だったから午後七時——無風だからよかったものゝ、近所の材木屋から火を發したことからは始まる。火元まで五十米もない上に家が立て込んでおり、水利の如何を問わば延焼は免れないかも知れぬとにわかに近所近辺蜂の巣を打たいたような大騒ぎになり、騒ぎは次第に文字通り阿鼻叫喚の巷と化して了った……。

さあ斯うなると、我々夫婦やお妾居士の面々は、元々家財道具にしる自己資本を注ぎ込んでない連中（もっとも一張羅の衣類は焼けちや勿体ないとは後で異句同音に喋り合ったことだが……）はさまで動ぜず、初めは兎も角、風向きを見ましようとして屋上の物干場に集

つて一同高見の見物、その内、火元が材木屋だけに一寸やそつとで鎮火する処かますく竹がはじける、火柱が立つやら、妙なもので風、しかも熱い突風まで吹きつけて来た。こゝにおいて遂に、よそでやったかどうか知らないが『かまいませんからやっちゃいまいしよ……』と脚の震えるのをかまわず最先きにつるよさんが裾を割るとズル／＼とそれこそ御同様火の燃えるような真紅のお腰を勇敢に曳きずり出したのである。どうせ夜である。恥も外聞もあつたものじやない。『じやあたしもやるわ』と長唄師匠は今でも判つきり覚えてるが、花模様の子絞りの顔るなまめかしい腰巻を、鉄工所は桃色のを、そして、まさかと思つていた銭湯居士は、今日に限って和服の寝巻姿も珍らしいが真赤なお腰を右へならえではずしたから、『こりや凄いい、盛観だッ』と感心する暇もあらばこそ、一齊に火陣に向つて振り始めたのである。流石に敏江はクス／＼笑つていたが、兎も角

赤や桃色の色取りどりの布をちぎれんばかりに風になびかせた——。

このあられもない一群に黒一点の私が度胆を抜かれて茫然と立すくんでいる顔に、胸に腕に今の今まで巻かれていた諸々のお腰類が遠慮余しやなく、ぶつかって来るんだから、きものシリーズは妖として尽きる処を知らない正にこの眼で見た地上最大のショウかも判らないだろう。この蔭の力で辛じて残つたしほの憩い場処たるお妾アパートは勿論のろくべき戦災で跡かたもなくその後間もなく消滅し去つたが、若しこの世に奇遇と云うものがあるならば、否、人の世に寿命が不滅であるならば、そして我々の喝仰する優美なるきものに永遠の生命があると云うならば、恐らく燦としてその妖美を讃え、その艶香に酔いしれる天下の好事者は必らず舞い降り、再び地上に彼等の天国を築くことであらうものを……。

きものシリーズ終篇 依如件 あゝ。

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第十三項 出版物「秘密結社」

（東京白水社刊クセジュ文庫。セルジュ・

ユタン著小関藤一郎訳 〓 Serge Hutin;

「Les Sociétés Secrètes」 Collection Que sais-je? No515)

秘密結社については、昔から種々の著述

がある。例えば、J・ブウシエ著の「フラン・マゴニク」J. Boucher; Symbolique maçonique. 一九四八年刊、古くはJ・G・フインデル著の「フリー・メエソン史」Histoire de la franco-maçonnerie. 一八六六年刊の如きがそうである。こゝに紹介する新刊書はついこの五月に出版された小著であるが、沼氏好みの「白人優越狂信の一派」K・K・K（正しくはクウ・クルックス・クラン）について稍詳しい説明をしているので此処に紹介した。周知の如くK・K・K団は真夜中白衣を着け、白い頭巾を頭から冠って、騎馬で街を横行し、黒人でさえあれば無差別に私刑を加えた一種の暴行結社である。リンコルの奴隷解放を快しとせず、黒人獣視の伝統を今日に至るまで固持する甚だ異様な一派である。この著作によれば、この結社は一八七一年米連邦政府により解党を決定され、更に内部の金銭上の汚職により自然消滅した事が記されており、再び「一九一六年、前大戦中に牧師シモンズに指揮された三十四人の白人がジョージア州のアトランタ市を俯瞰する山に火の十字を打て、白衣と帽子つき袖なし外套を着けてクランの再建を誓った」という。

そして、再建されたクランが、カトリッ

ク反対とラテン民族移民排斥を併せて主張したが為に、人心に喰込み、更にユダヤ人排斥を支持して、百万人の会員を持つに至った事、そして、公式に報告されただけでもテキサス州一州で一九二二年十一月までの一年間に五百件の黒人に対する加害事件が記録されている事、更に驚嘆すべき事実、即ち「全白人種を統合して有色人種に対する十字軍を試み」る事を宣言し、「欧亜大陸に侵攻すると発表した事に言及している。勿論正規、非正規を問わず、女性会員の存在した事は疑を入れないのである。

更に注目すべき部分は「紐育市長は（中略）州内からクランの首領及び加入者を追放させ」という事である。この三行たらずの文章は明らかに世界第二の都会、紐育市内にさえ、クラン会員が相当数以上存在した事を意味しているからである。そして「一九三〇年頃からクウ、クルックス、クランは人々の口に上ることがだんだんと少なくなった。しかし、その存在が全く消滅したと早急に結論することは出来ないのである。なぜなら、アメリカの南部諸州において定期的に起こった黒人に対するリンチ事件の責任は明らかにこの秘密結社に帰せらるべきものゝようであるからである。」と結んでいる。

この著作に挙げられた私刑の方法は烙印したタールを浴せて羽毛を撒く刑、鞭打、死刑、傷害、薬品による烙印等であるが、私達は、これらが、第一の羽毛に畜生化せしめる慾望の発見を見出し、残るすべてが、家畜に対して、私達が日常行っている懲罰や行為と全く同じである事に気付くのである。黄禍思想は遠くチンギスカンに及び、その末葉は、蔑視観会を伴ってこの様に残存しているのである。

私は、汎マゾヒストに対して本書を敢て必見の書とは云わない。併し、白人崇拜病の傾向を自覚する人々、同性愛を兼有するマゾヒストの人々にとって、この小冊子のごく一部分（一二三頁―一三六頁）が、戦慄的な昂奮を齎らすのであろう事を信ぜざるを得ないのである。猶、本欄はパトリオティスムや政治思想による歪曲は皆無であり、且、性感覚上だけからの立論であり、結論である事を改めて附言しておく。

復刊第十四項

「女性騎手による競馬」

（本項は左記の典拠による。）

一、BRITAIN TO-DAY. Dec. 1954. No.224

二、DAS LEBEN: 1932 号数未詳

三、SPORTS ILLUSTRATED:

Nov. 1. 1954

英国の紹介誌「今日の英国」誌の旧号（前記）の第二五頁の上段にコッツワルドに於ける婦人競馬の写真がある。又、前記一九三二年の某月号、独乙総合雑誌「ダス・レエベン」誌は、その第十七頁より第二十二頁に至る特輯「馬に騎る女達」の中、第二十頁上段に *Der Weibliche Jockey* として、写真一葉を掲載し、更に一昨年のも米誌「スポーツ・イラストレイテッド」誌は第二十二頁に英国、ニューマーケットでの女子競馬騎手の写真を掲載している。

恐らく、「ダス・レエベン」誌の写真は英誌の紹介しているコッツワルドのものか米誌の紹介しているニューマーケットのものか何れかであろうと思われる。前者は女性騎手のみの競馬であり、後者は男女混成の競馬である。因みに、グラント・ナショナル大競馬の如く、伝統的な競馬は女子の出場を許さない。この経緯は米国映画「緑園の天使」＝*NATIO NALVELVET*＝（主演エリザベス・テイラー *Elizabeth Taylor*、ミック・ルウィー *Micky Rooney* 一九五二年テクニカラア）に見る通りである。

女性乗馬については旧号「マゾヒストの手帖」に沼正三氏が詳しく述べているから重複を避けるが、競馬となると、乗馬が如

何に馬を苦痛によって支配するとしても、比較にならない程虐める要素が多い。騎手は只管に速度をのみ要求する。そうして、屢々見られる様にこの速度の要求が同時に「死」を要求する事になる場合が多い。女性の競馬騎手志望者が、恐らくはすべて、十人が十人サディテイークな傾向を持っていると断言しても誤ではない。

最後に去る昭和二十二年、山口県下に日本で最初の女性競馬があった事を附記しておく。

復刊第十五項

「三度、サーカス」について

女の猛獣使いを見る事によって、多くのマゾヒストが満足感を得ることについて、私は前々回と前回に詳しく記した。今こゝで同じ事を繰返すのは止めよう。私は只、二つの事を紹介的に羅列しておく。

(1) ロシア雑誌「先駆者」＝*PIONEER* 第六号の第二頁「小説 *LEW*」の挿絵にイリナ・ブルグリモワを做った *ILINA ZADEREDGI NAYA* という猛獣使いの挿絵が出ており、文中、これに關した記述がある。

(2) 「ブリテイッシュ・ワールド・ニュース」の中八月十九日封切のもの、最後に前

号に所載のマルガリタ・ナザローヴァ女史と愛虎が紹介されている。

(3) 前々回のロシア映画「サーカスの女王」は約半年間大都市での上映がなかったが、九月五日―十一日の七日間、東京池袋文化劇場で上映された。この事は逐次他のニュース映画館がこの映画をとり上げる事を予想させるので敢えて附記しておく。

復刊第十六項

「米国映画」 「復讐に來た男」

ワーナー・ブラザース製作、色彩映画

主演、ランドルフ・スコット

同 ドロシー・マローン

同 ベギイ・キャツスル

封切、松竹洋画系、九月七日

＝*The Tall Man Riding*＝; Randor

Scott, Dorothy Maron, Peggy Castle,

WARNER BROTHERS & FIRST

NATIONAL; Technicolor.＝

西部劇映画であるが、近頃頻繁に製作される「異色作」ではない。ゲイリー・クワパア扮する主人公の心理を描いた白昼の決斗 (*High Noon*) に端を発して「彼女は二挺拳銃」のパロディ「シェーン」(*Shane*) の深刻めいた空気が、現代化された「日本人の勲章」白人と土人の立場を逆転させて裏

側を描いた「赤い砦」、更に未封切ではあるが、曖昧漠糊とした西部的映画「バス・ストップ」の全ゆる変化を経て、今や、公式的な西部劇、特に一九三〇年代に流した一部原型を逸脱した牧場物語とも云うべき勸善懲惡劇が再興した。これは「銃の後に立つ男」(The Man who stands behind the Gun)や「平原の勇者」(原名失念)の系統に属するものである。

土地の権利を争う農民と牧場主と悪徳利権屋の群、拳銃の名手である主人公ラリー・マドン(スコット扮)は牧場主に鞭打たれた背の痕の恨みを晴す為にやってきた。利権屋の情婦リウア(ユヤッスル扮)と旧恋の間柄の牧場主の娘コリナ(マロン扮)は互に親密であったが、同時にマドンを双方共愛している。利権屋とマドンの対決、そうして当初レックスという若者の妻となっていたコリナがマドンの愛を得るということに多種多様の要素を含んだ構成を持っている。ユウゴオならば、この物語は一地区の風景を背景にしての一大長篇となったであろうに思われるが、映画では実に簡単である。むしろ粗雑と手前勝手、見せ場の連続という形でつなげられているという方が当たっている。一九五六年製作にしては色調も悪い。併し、所謂悪女が活躍する

式の西部劇と共にこの型の西部劇は、マゾヒスト向きの見せ場を往々にして持っている。此の映画もその通りである。二人の女主人公は夫々強い性格を持っており、特にコリナがマドンを夫レックス殺しの犯人と誤って信じている間の態度や行為には烈しく侮辱的な態度が見られる。乗馬鞭で打ち据える場面もある。併し、コリナが乗馬鞭を弄ぶ場面の方が、何かしら強い刺激のある様に思われる。鞭打場面は「平原の勇者」の方が遙かに鋭い印象をうける。

復刊第十七項

米誌「マン・アンド・マン」より

一九四七年の右雑誌「Man & Man」の第二十三頁に読者通信が掲載されておりその四通の中の一通、コロラド州、デンヴァー市のGMS氏からの通信が眼を惹いたので、ここに原文を紹介しておく。同誌は「ラフ」や「フオート」「ナイト・アンド・デイ」の各誌と共に著名なる艶笑的画報の一つであるが、こうしたフェティシズムやサド・ヒズムに関しての明らかな発表は珍らしい。大体が、米国では公刊誌上にこうした、いやしくも変態的な性慾を堂々と暴露するが如き事は甚だ稀である。読者通信に曰く、

私は貴誌が発売されると逸早く、一冊も洩れなく購読しております。私のピン・アップの蒐集の中で、貴誌の企画するものは最も豪華です。併し乍ら、残念な事に、貴誌は大きな誤ちを犯しています。というのは貴誌が、長い編上靴を着けた美女の写真に掲載していないからに他なりません。愛すべき美しい脚は、それが、黒く輝く皮革によって掩われる時に更にその魅力を増すのであります。勿論、長靴は、ハイヒールで優雅なものでなければなりません。どうか、私達読者により多くの編上長靴をつけた美女の写真を発表して下さい。

G・M・S

こうした通信は、奇譚クラブや類似誌に見られる最も在り来りの形ではあるが、この註文に対して同誌は「G・M・S氏に対してのスペシャル」として、一葉の写真を掲載している。

復刊第十八項

「マリオン・シーファート嬢」

II COSMOPOLITAN: Vol. No. 140
No. 5: MAY, 1956: Page 41-44

米誌コスモポリタンは古くから伝統的な綜合雑誌であるが、この本年五月号に特輯としてリング・リング・アンド・バーナム

・サーカス（「地上最大のシヨウ」というパラマント映画）セシル・B・デミル監督主演ジエームズ・スチュアートⅡに出演して紹介された米国第一の規模を持つサーカス（の新人として、この美しい女性馬術家マリオン・シーフアート（或はマリオン・ザイフェルト、MARION SEIFERT）嬢を紹介している。

サーカスがマゾヒストにとっての夢の源の一つであり、沼氏の指摘した様に（手帖第六七項、第六九項—以上一九五五年十月号所収、第七二項、以上一九五五年十一月号所収）女性乗馬が又マゾヒストにとって甚だ好ましいものである、この二つを合体した此の様な女性が存在するという事（現在の我々には遠い伝説にすぎないとしても）は興味を繋ぐべき何物かがあるのではないだろうか。こゝには五つの美しい乗馬衣裳によるマリオン嬢の写真が紹介されている。そうして、通常こうした企画が、場面写真を主として紹介するのに対して、こゝでは、むしろマリオン嬢のモード紹介の傾向がある。それだけにこうしたものに興味を持つマゾ、フェティシストには楽しいのであるが。サーカスや女性乗馬については改めて述べないが、前記沼正三氏の手帖の各項、及び、筆者の時評、復刊第一項

やイリナ・ブルグリモワ女史についての記述を参考として頂きたい。

復刊第十九項「川島芳子」

Ⅱ別冊日本週報「亡国の微笑」昭和三十一年九月二十日発行第一〇六頁より第一一頁まで及び巻頭写真一葉Ⅱ

政治の破局は常にエロ・グロ・バクロの三口を現出すると云われる。あまとりあ教によるエロ時代、奇ク類似誌の興味本位の編集によるグロ出版物の氾濫、そうして、戦記物に端を発したバクロ時代が一九五六年を代表していると思われる。このバクロ時代と最近特に頻度を増しつつあるスパイ事件の為に現われ始めたスパイ物出版物を合併して一石二鳥を狙ったのが、このダイジェスト版と銘打った日本週報の別冊第二号である。

この一冊は甚だ不得要領な記事を満載しているのだが、記述の系列だけは、東洋最大のスパイ事件ゾルゲ事件より、未だ耳新らしいラストボロフ事件に至る大小さまざまな事件をまとめている。女スパイは特に男装の女スパイという形でマゾヒズムや女性サディズムと関連を持つのであるが、この様な事項は沼氏の手帖に譲ろう。私はたゞ、男装の麗人として伝説的な存在であっ

た。清朝正統の娘たる川島芳子についてのみを述べよう。同誌によれば、

東洋のマタハリとおそれられ、その細首に十萬元の賞金をかけられて、日夜刺客につけ狙われていた。男装の麗人、の川島芳子は世界スパイ史上に忘れざる事のできない存在である。として、その略歴を、清朝の末裔、肅親王の息女として生れた彼女は、本名を金壁輝といふ、満洲国皇帝だった伝儀とは従兄妹の間柄であり、戦争中は満洲国皇族の待遇も受けていた。と説明し、

父の盟友だった川島浪速氏の養女となり、川島姓を名乗って、日本女性として育てられ、終戦直後、国民政府に捕えられ、親日的スパイ活動によって銃殺刑に処せられ、たととしていた。

「令嬢ジュリー」と同様に彼女も長ずるまで、男子として育てられた。そうして、幾多戦乱の大陸に活動した。この事は、彼女の心の中に（支那女性である事を忘れてはならない）何等かの女性サディズム又はそれに類似の心理が存在した事を推測させるし男子マゾヒストの立場からするとき、確実に対象となるのではないだろうか。

× ×

×

×



「話の屑籠」

辻村 隆

◎

春日八郎の流行歌「お富さん」が、ヒット版として全国津々浦々で熱狂的に唄われたのも、ほんこの間のことだが、今では場末のパチンコ屋でも、もうかけなくなった。その「お富さん」の縛られた挿画の集大成を奇クに掲載したのが、昭和廿何年何月号だったか、大分以前のことになるが、こんなにお富さんが騒がれるのを知っていたら、もう少し遅く発表すべきだった。せめてもう二年程遅ければ時流に合したのにと残念でならない。全く流行の波のうち寄せうち返す早さというものは、驚くべきものだ。

◎

その「お富さん」を、先頃大映で小唄中篇

映画で撮ったことがあったが、監督は助監督より昇進第一回の天野信である。最近まで彼がこの奇ク誌上で大活躍していた某氏であるといったら読者諸氏は、きっと驚かれるでしょう。ハテ誰でしょう？。当った方があったら、クイズ懸賞品を出してもいいくらいのものである。

◎

「お富さん」を見られた人は、御存知の事と思うが、OSK出身の小町瑠美子扮するお富さんが、妾になって寮で縛られているところへ、杵屋の名取息子の勝新太郎扮する与三郎が助けにくることになっている。

日頃この監督さんは、奇ク誌上では緊縛シーンに丹念且つ嶄新に書いておられるが、い

ざ自分が実際に演出するとなると、仲々そうも行かぬらしく、お富の緊縛構図はまあ／＼及第点ではあるにしても、奇クの作家のものにしては些か甘い。一つ奇クを代表して、うんと立派な緊縛映画をつくって戴きたい。

◎

女優を縛るのは監督の一存でどうにも行かぬこともあるにはあるだろう。もと／＼映画自体から云えば、縛ること自体が目的ではないからだ。大体スタッフ面々の前で、縛られるのを喜ぶ女優なんていない。古い方に馴染みの原駒子の姐御にしたらって、嵐寛のむつゝり右門で、曳かれて行く緊縛シーンの撮り直し／＼には、本当に腕首が痛くなり、ニヤ／＼

するスタッフを前にして辟易したって事だ。彼女、相当御醜陋の時、一寸緊縛シーンに触れて見たら彼女程の心臓レディも、眉をしかめてそう仰有った。まして若い女優に於ておやである——。

◎

その原駒姐さんの経営するバー、難波新地の花車に、これも往年の緊縛女優の小結か関脇どころの、大倉千代子さんが一緒にいらっしやる。嘗っての可憐なイメージは、今既になく、すっかり脂肪肥とりのマダムが板についた彼女等と、膝を交えてサイレント時代のなつかしき緊縛映画を語れたらと思うが、未だそこ迄の心臓がないのは若年のせい——。兎も角感じのいいバーだと、原駒さん大倉さんの為に一寸たいこもちしておこう。

◎

バーと云えば、東京へ社用出張した時の新橋界限のバーMでの土産話。

冗談の話から駒が出て、バーの女給が、マネー次第でシロシロなら実演しよう云うので、大枚三千円を奪はっして二階の女給部屋へ上った。女二人は先程私に盛んにビールをすすめていた、かおると云う若い女と、ヨシ子と云う、これは大分海干のしたゝからしき姥桜——。普通のシロ／＼なら、今まで度々見参に及んでいるので、そのテクニクの数々は先刻御承知の助で、その気配を察した彼

女たちも、それじや一向に面白くないでしようというわけで、こちらがくどく／＼何も云い出さぬうち、勝手に否定してしまい『近頃のお客様はこんなのを喜ぶのよ』と、ひとりぎめにして、チャチナ洋服ダンスから、ナイロン風呂敷に包んだ麻縄とナイロンバンドを持ち出してきた。

さては若い娘が責められるのかと、固唾をのんで部屋の間で身を堅くしていたら、何と反対で、年増の方がスル／＼とドレスを脱ぎうすい下着一枚になると、待ちかねた様に若い女が麻縄で姥桜を後手に縛り上げ、その縄を首に廻して前で結んだのち、もう一本の縄で両足を揃えて縛り、その余った縄と首からの縄を前でつないで、乳房から腕に二廻りしてかけ、最後に手首のところで止めに結んでぐつとしめ上げた。それが時間にして、ものゝ二分たらずだ。

いゝわね、叩くわよ——。と声をかけて、さつとバンドを振り上げると前踢みの縛られた女の、ウエストからヒップにかけて、可成りの力を入れて叩き始めた。

このシロ／＼、始めから計画的にこうした嗜虐趣味を売物にしている事にやっと気付いた。流石に東京は広いものだ、つく／＼感心した。

◎

感心しているだけが能ではない。私だって

女を縛ることにかけてはモデル相手に散々やうて来たから、今更驚きもしないが、年増がマゾで若い女がサドのコンビが、シロ／＼に事寄せて、これで結構愉しんでいるのじやないかとフト思ったのである。

若い女は私にバンドを差し出して、力一杯引っ張りたいって構まやしないのよ。この人却ってそれを喜んでるんだから、妙な人でシヨ。と紅潮した頬で息を弾ませていたが、自分の方は妙な人ではないと見える。

引っ張たかれて歎ぶ女より、真黒のイブニングドレスに黒手袋で、ヘップバーンスタイルの若い女が、イヤリングをきらめかして、発止／＼と打撃する方が、私にとってはけんらんとして映った。

それが終って定石通り、あの方の交渉を切り出したら、姥桜の方はO・Kだった。若い女は、私は駄目よ、とあっさり蹴られた。私はバンドに差し出した手を引っ込めた。何だかマゾの大年増にサービスする様な気がしたからである——。

◎

こんな引ッ張たくお芝居が、東京で結構当たっているのにヒントを得たそうだが、それが主旨でもあるまいが、私も京都で見たことがある。嗜虐趣味以前の事だ——。

終戦後問もなく、映画を離れていた藤原釜足のカマさんが一座を組んで、それに『魚河

岸の石松』のキノキンの柳谷寛、現在松竹新喜劇の松本秀太郎と云ったブーケツ面々が、新京極で常打興行をやっていた頃だ。

演し物もその時の女優名も失念して申訳ないが、柳谷寛扮するせむしギヤングが、松本秀太郎外の乾分を従えて、波止場の倉庫の中で、ロープでぐる／＼巻きにした娘を責めている処へ、カマさんが助けにくると云う筋。

寛さんの熱演すさまじく、丁々発止と割竹で女を責めるが、床を叩いて音を出していたのが、どうした弾みか、二度三度、女優の腰の辺りや、太腿を打ってしまつて、彼女真実痛々しく身悶えしていたのをかぶりつきで見ているハツとした。

故意か偶然だろうか——。恐らく御本人の柳谷寛さん自身も忘れていたかも知れないが、嗜虐シートの少なかつた頃だけに、尿意を催す程の感激振りだった。

◎

尿意を催した為でもあるまいが。その劇場を出た前が一寸小広場で、疎開道路の側に薄汚ない公衆便所があった。生憎と下痢気味の時とて、大急ぎで大きい方に飛び込んだはいが、何とも汚ないのには閉口した。肥壺の中より、周囲にかゝっている方が多いと云つた有様で、余程我慢しようかと思つたが、便器を前にしては尚更辛抱出来ず、ズボンを手とたくり上げてどうやら用を済ます。

御多聞に洩れず便所内は落書の花盛りで、ところ狭しと書き並べ、書き殴つてある。

百花燦爛とり交ぜた中に一つ、幼稚な絵ではあるが、女を逆さに足だけを縛つて吊り下げた絵があった。髪の手がバカ長く、体長程に書いてあつて、その先が尖つていた。世にサジストの種は尽きまじと、終戦直後だっただけに生々しく感じたことである。

◎

便所の話で受聞きの事だが、東映の女優SがO市にロケーションに行った時のこと、彼女の大ファンたる彼はずっと機会をねらつていたが、あの窮蹙たる美女Sさんだつて矢張り人間である以上、時が来れば排泄作用を営む事は必定、臨時休憩所にあてられた小学校の便所で待つこと久しく、彼女がやつと尿意を催して小学校の来賓便所に入つて用をたし終る迄、何と延々二時間、その隣りの便所内の窓からロケの方をうかがい乍ら満を持して待ち兼ねていたと云うのだ。

唯、Sさんが勢よく進ばしらせる液体の音をききたいばかりに——。

彼はその結果、Sさんも矢張り普通の人間並みであるとして、大いに安心したと云うのだが、変つた趣味もあればあるものである。

◎

Sさんの這入つた便所には覗き穴がなくて勿怪の幸いであつたが、新世界の甲乙座の便

所は横張りで、男女の便所が隣り合せて出来ている。映写中のひっそりした合間を利用して、そつと女子便所の×番目に忍び込んでみると、その節穴から、その隣りに這入つた女の、用を足すところが丁度まともに見えると云う仕組になつてゐると云う話で、

——旦那、右から×番目の便所に節穴があるんですよ。今その隣りの便所へ若い娘が這入りましたからすぐ覗いていらつしやい。

人相のよくないのがそう云つて教えてくれる。その噂はきいていたから、教授料五十円取られて、足音を忍ばせ、教えられた通り、男便所にゆくふりをしてさつと女便所の×番目の扉をあけ、内側からガタ／＼のあふり止めをしっかりとかけ、さて節穴を探せど、一向に見当たらない。まご／＼しているうちに映画が終つたのか、ドヤ／＼と入つて来た女群の為、出るに出不れず、扉の前で列をなした女性の、長いわねえと云う声を、体の縮む思いできいて、穴があつたら入りたい思い乍ら、糞壺にもぐり込みもならず、臭い処で瘦せる思いの十数分を我慢したと云うR君の話は、好奇心をうまく利用したものだけに面白く思つた。欺される奴も奴なら、欺す奴も奴だ。それも終戦直後のこと、今はその館も改造されて、便所も立派な水洗式のタイル張りに変貌された。

話が落ちる処まで落ちた処で、今月の眉籠を捨てよう。

フエチに関する切抜きから (2)

阿 川 準

このところの下着熱、それだけにこのさいとばかりに、メーカーの力の入れ具合も格別と言えましょうが、これらメーカーの出している型録など販売のための宣伝パンフレット類には、なかなか美麗で凝ったものがあり、その宣伝文句のなかには、われわれ同好者にとって、雑誌記事とはまた違った感じで、いろいろと興味深いものがあり、この蒐集も楽しきものです。今回は趣を変えて、それらのなかから適当なものを選んで御紹介することにしませう。

⑬ 初めてコールセットを使用なさる方へ

まずN社の、これから抜き書きしてみましよう。

『(A)、布地とゴム編のもの—』

前と後が布地で左右に脇ゴム(ゴム線場)のついたもので、丈は10吋か12吋が適当。下腹部の出た方はこの種のものを選びましょう。

(B)、ゴム編のもの(普通総ゴムコールセットと言っているもの)——

このコールセットは着たり脱いだりが手軽で、又当りが柔らかなのが特徴。総ゴムコールセットのなかにスーウエイと言って自由自在に伸縮するものが出来ています。これは体を曲げるとき無理せず極く自由に動作が出来ます。

(C)、ブラジャーとコールセットが続いたもの(普通コースレットと言われているもの)

素晴らしい線を出すのに最適のもので、コウエイのものもあります。

(D)、ガーターベルト—
女学生の方や初めてコールセットをなさる

方で余り固苦しくしめず、単に靴下の吊るだけのものをお望みの方に。』

⑭ W社の印刷物は他社とくらべて特に豪華版と言えますが、

私にはどんなコールセットがよいのかしら

こういう見出しのなかから

『コールセットやガードルにはどんな種類があり、またどんなものを選べばよいでしょうか。』

(1)、まず自分のウエストとヒップのサイズを正確に計ってみましょう。

(2)、ヒップサイズからウエストサイズを差引いて下さい。その差によって三種類に分けられます。

(3)、「ずんどう型」その差が八吋以内の方は、ずんどう型と呼ばれ、よく中年の御婦人の間に見られる型です。こんな場合にはウエスト・ニッパでウエストを細くしめるか、又瘦せた方ならヒップパット・サイドパットを着けて、ウエストとヒップとの差をつけてから、その上にコールセットでとのえることです。

「標準型」ウエストとヒップの差が、八吋から十吋までの方は標準のスタイルです。

「蜂腰型」ウエストとヒップの差が十吋以上の方は、ウエストにアクセントのあるスタイルで、最近の若い御婦人には多いスタイルです。

そんな方には、ウエストとヒップの差が十二時のタールセットかウエスト・サイズを合わせたガードルが適当。

(4)、日本の女性には少いようですが、欧米女性の間にはよくある出尻の方は、臀部の張りや女性の魅力として必要なポイントですが、極端に出張った臀部は見よいものではありません。こんな場合、後に布地を使ってデザインしたコールセットがよいでしょう。又臀部の下りめの方には、後部の内側にコールセット丈の鉄芯を入れて臀部を上を持ち上げるようにデザインした特に丈の長いのがよいでしょう。私たち日本人は米を常食としているため、下腹の出張った人が多いようです。こんな方は前部に鉄芯を入れて出張ばりを押えるようにしたコールセットを、また下腹部を押えることによつて、ウエストの部分に贅肉がとび出すような場合は、ハイウエストのものを選びましょう。

⑤、次も同じメーカーのものに、
「コールセットの正しいつけ方」
というのがある。

『(1)、まず股ゴムに両足をとおし、ガードル(総ゴム)の場合は、前部を両脇の方にぴんとひっぱり、後部に余裕を持たせて下さい。(2)、そしてそのまま身体の正しい位置まで引きあげて下さい。コールセット(脇ゴム)』

の場合は前後の布地の部分が、キツチリと身体の前後にくるようにして下さい。

(3)、後のガードルで靴下をしっかりと吊りガードルと靴下の線が真直であるかどうかを確認して下さい。ガードルはストッキングをただ吊るだけのものではなく、ストッキングを吊ることによつて、コールセットのずり上りを防ぎ、適所にコールセットの安定させる機能があるのです。

(4)、もしコールセットに脇ホックがある場合は、下から徐々にしっかりと止めて下さい。(5)、前のガードルを止め、正しい位置かどうかもう一度確認することです。

⑥、やはりW社のものに、質問室の欄がありそれにのつた問答を二つほど。

「コールセットを常用しているが、上にあがって困るがどうしたらいい?」

『最近のコールセットは臀部を押えるデザインから、後部の丈を長くして鉄芯を入れ、臀部を包み込むようなデザインに進んできました。従つて上にあがつてしまうようなこともないのですが、丈の短い製品は活発な動作とか人によつて、少し上りぎみの場合もありますが、そんなときは靴下をはくか股ゴムのあるものを御使用になることです。』

「コールセットの洗濯法は?」
『(1)、鉄芯の取出せるものは抜取る。

(2)、上質の石鹸を用い、ぬるま湯に十分程漬けておいて、揉まずに振り洗い又は押しつけるようにして洗う。

(3)、次にぬるま湯で、3、4回完全にゆすぎます。このさい、少量の糊を入れると仕上げがきれいになる。

(4)、絞らずに押付けて水を切り、乾いたタオルで巻込んで取る。

(5)、乾燥は風通しの良い日陰に干し・ゴム生地を使つてあるので太陽の直射を避ける。

(6)、最後に軽く霧吹きして、布地のところをアイロンで仕上げる。ゴムの部分に熱いアイロンは絶対禁物。』

写真や絵には秀逸なものが沢山あるのですが、文字のように簡単に御紹介できないのが残念。以上コールセットのものばかりになりましたが、御要望次第で、そのほかのものについて、続稿することにして今回はこのへんで。
(完)

☆代理部だより☆

○アルバム「美しき縛しめ」第一集は今回売切れとなりました。第二集未製本の分若干在庫します。一組三十二葉、三六六円(送共)です。時代物責絵巻、未製本、色刷八葉、一五八円(送共)です。美人乱舞は売切です。

人糞尿と下肥

東 一郎

定義——人糞尿とは未熟の生のままのもの

で、下肥とは完全に腐敗しているものを云う。何故此んな定義を持ち出したかと云えば、人糞尿と下肥を混同されている方が多いからである。一体私達は人糞尿、下肥と云うと直ぐ汚いものを連想されるが、随分と御世話になつて貰っているのである。

特に野菜類はそうである。いくら化学肥料が発達しても、下肥を肥料として与えられて来た習慣はそう改められるものではない。

私の家でも、人糞尿を下肥として、家庭園芸に利用している。自分で出したものは、自分で始末するのは当然として。しかしそうは云つても、人糞尿の汲上げは相当に重労働である。中々のこつを要する。とにかくおわい屋は普通の体ではとても務るものではないとつくづく感ずる。一仕事終ると完全に伸びてしまふ位である。私とても中学生の頃、学校が農業実業校であつたし、実習でやらされて来たから慣れてはいるのではあるが、やはり

相当苦痛ではある。

若し、私が未経験として、人糞尿を直ぐ汲上げると云われれば、やはり尻込みせざるを得ない。

自分が汲上げている時は、さほど臭気は感じないものである。はたでは相当迷惑をこうむつていようが平気である。そう云う私でも、他で人糞尿を汲上げている時の臭さには閉口する。全く人間なんて勝手なものだ。

× × ×

嘗つて「奇譚クラブ」誌上に、人間便所の妄想狂、と云う告白文が掲載されてあつたが私にはとてもその様な心理状態にはなれない。充分に腐熟した下肥には愛着を感じるが、便所の中に入ると云うことすら私にはとても解せない。

敗戦当時は誰でも一応は家庭菜園で下肥には御やつかいになつておられるであらう。とにかく私達日本人には欠くことの出来ない肥料だったのである。

当時我が国を占領した米軍の兵士達は、黄金色の人糞尿とノロノロした牛の歩み、正に原始的、と云つたけれども、此れ程簡単で実用的な肥料は他にないのだから致し方ない。が生のままの新鮮な人糞尿を施肥している光景をよく見かけたが、此れには参つたものである。充分に腐熟した下肥ですら、やはりある程度は臭いのであるから。

× × ×

私は人糞尿の汲上げと、下肥の施肥にはそのはな持ちならぬ臭気にある程度まひしてしまつたらしく、さほど感じなくなつてしまつてゐる。全く習慣と云うものは恐ろしい。

そして草花や、野菜物に与えるときは、もう愛情と云うよりは、与えなければ成長しないのだからとの意識で行うのであるから、自然と機械的になつてゐるのである。

大体私達日本人は、人糞尿や下肥に対する観念はさほど強いものではない様だ。永年百姓達は下肥を使つて生きて来たのである。全く自分で出したものを自分が始末するのだから、此れ程経済的な肥料は無い訳である。

× × ×

何かの雑誌で、私はうん、こなんかしませんよ——とお人形の様にツンとすましたタイプの子を見ると不愉快になると書いてあつたが又反対に顔に似ず出すものは相当に出すので川柳になつてゐるのもあつたが、何れにして

も、男に対しては、人糞尿もそうデリケートな問題ではないが、こと女性に関する、いや全くやかましい。最も花恥らう年頃（今日ではまるっ切り反対だが）の女性ともなれば、それも最もである。あの綺麗な彼女が、便所に入った時の事を想像するだけでもいやになります——と云う記事もあった。

人糞尿は汚いものではあるが、とにかく自分の体から出たものである。此れだけは認めざるを得ないであろう。

私も相当に溜った人糞尿は見慣れているが自分の糞を水洗便所で見ると、チヨットがっかりすることがある。それも水洗便所だけに廻りが白く綺麗な故でもあるのか。

× × ×

何処の家庭でもそうであろうが、大抵男の小水は、案外に早く溜るのであるから驚く。私の家でも大体二週間に一度は汲上げないと大変だ。

男の小水は馬の小便に相当する。よく溜ったものかわいと我乍ら感心する程だ。男二人、女二人の小家族ですら此の様に悲鳴をあげているのだから、他の家では一体どうしていることやら——といらぬ心配もしたくなる。自分で汲上げればそれでよいのだが、中々に云うは易く、行いは難いである。

とにかく肥溜を造るだけでも容易ではないし、堆肥の場所も考えなければならぬ——

庭の狭い家では全く困るだろう。ちゃんちゃんとおわい屋さんが来ればよいが、来ない日もあるだろう。皆さん方は如何に始末されておりますか。

× × ×

「死んだら何になるか？」

「死んだら土になるだ」

と云う会話が、嘗ての国語の教科書にあった。その土を下肥が養っているのだ。考えて見ると、全く人間なんてつまらない存在だ。生きている内が花なので、死んでしまえば骨になり、果ては土になり、下肥をぶっかけられていたのだから。万物の霊長と云っても、物を考えると云う特長の他は、即ち食餌を得て、糞尿を排泄する行為は動物と同じではないか。只方法が違うだけの話だ。

此う考えて行くと、人糞尿を下肥として扱うことを生み出した日本人は、中々どうして大したものである。

もちろん害もある。例の蛔虫等はその典型的な問題ではあるが、此れも薬剤の発達に依ってだんだんと減少しつつある。

× × ×

一回私の家では珍事件が起ったことがある。もう十五六年前のこと、猫が一匹私の家へまぎれ込んだ。此の小猫は尻ぐせも悪く余り感じ好くなかった。

ある晩、私が机に向って本を読んでいた時

「ニヤオッ」

と例の小猫の泣き声と、ボチャーンと云う物音。しまった、やりおったわいと思つたが、翌朝、仕方なく肥溜を見に行くと案の上、蓋が中に落込んでいた。中をかき廻すと、手足をつっ張つた子猫の死骸が上った。いやその臭いこと、結局土中に埋めたのであつたが、此の時は全く閉口した。此れにこりて、後程完全な蓋をつくつた。しかし猫でよかつた。人間では大変だ。田舎ではよく落込むことがあるとか。桑原々々。一長あれば一短。

× × ×

人糞尿の汲上げも慣れてしまえばよいのである。慣れる迄は容易ではないが、とにかく施肥としての下肥も新鮮なものとは異なるし、さほど嫌悪を感じるものではない。体は丈夫な人の方がよい。何分とも重労働だから。

柄杓だけは木の方が好い。木は絶対に持ちがよくコールドタルを塗れば、更には完璧だ。私の使用しているのはもう十二年になるが決して腐らない。桶はバケツにコールドタルを塗って使用しているが、此れは駄目だ。直ぐ傷む。出来れば木桶があればもちろんよい。

汲上げるとき、何時も感ずるのだが、一体に紙の使い方が多過ぎる様だ。施肥する時が容易でない。此れも何とかよい方法はないものだろうか。外国人はどの様にして処置しているのだろうか。

水洗便所になれば、人糞尿の汲上げも必要なくなる。しかしやはりつらくとも、今のままで満足である。最も我が家の水洗便所は何時の事か。全くの夢物語ではあるが。

重労働であつても、臭くはあつても、やっぱり愛着を感じているのだろうか。汲上げる

時の人糞の重量、確かに重たいものではあるし、又黄金色の糞を見ると、チヨット目をそむけたくなるが、何時もの習慣でそのまま無意識に汲上げているのである。

百姓が下肥をこぼすのを見て、「ああ、もったいねえ」と、云う気持が分る

様な気もする。それは水分を加え、充分に腐熟させて与えるのだから自然そうなるだろうし、此れが草花、野菜に対しての貴重な肥料なのであるから。

(三一、一一、二四 人糞尿汲上げるの日)

フアンレター

中富綾子様へ

柳沢吉保

恐惶謹言。

中富綾子様、見ず知らずの男から、突然このようなお便りをする失礼を先ずお赦し下さい。およそ世の中で、文章を書くのを一番苦手とする私が、代理部で求めました写真以外、美しい貴女様について何一つ知識を持たない私が書くのですから何卒そのおつもりで御笑覧願います。

最初一方的なラブレターを書くつもりでおりましたが、この暮で満五年の療養生活を送り、来春よりやっと職場復帰を許されたばかりの私には、全然貴女様は高嶺の花であり、せめて一度でも貴女様にお逢いする我儘をお

赦し願いたいと思いますが、東京の隅っこで寝床を背負ったカマボコ暮しの私には、それさえ中秋の名月の様に欲しがりながら手の届かないじれったさを感じるばかりです。せめて貴女様の美しい写真を豊富に頂戴致したいと思ひます。しかし、分譲品中、余りにも貴女様の御写真が少いので腹立たしくなつて参ります。現在、天星社のお仕事をなさつていられないのでしょうか、それでしたら私にとって勝手な言い分ですが、悲しくなつてきます。そうでなければ、どんな良い仕事をなさつて下さい。

現在二百枚に余る写真を所蔵しておりますが、他のどのモデルの方々にも優つて貴女様が惚々する美しさを見せて下さるのが、嬉しくて嬉しくてなりません。中でも貴女様の「羞恥責め」「全裸正面緊縛」はアルバム巻頭を飾り、毎日毎日あかず眺め暮しております。

す。失礼な書き方をお赦し下さるならば、私は貴女様の写真が好きで好きでたまらないのです。いえ恋しくて恋しくてならないのです。御本人は写真以上の方と拝察いたしております。もっともっと良い写真を発表して頂けますよう呉々もお願い致します。

毎日、心の煩悩は追えど払えず、貴女様の美しい肢体に縄を掛け、又胴がくびれ切れる程コルセットを締め、或は私の汚れきつた足の裏で、貴女様の形良く締まった美しい乳房を踏みにじりたいと願つております。今一度失礼をお赦し下さい。現在私の一番の望みは貴女様と文通出来たらということです。如何に筆不精の私でも最大の努力を払いたいと思ひます。が、世に賢者ぶる愚者多く(私など愚者中の愚者ですが)二十九才の独身ですが母、兄弟にいかなる迷惑を及ぼすかもしれず勇気がないのかも知れませんが、住所を書けず残念ですが、もしお赦し下さるならば編集部にて私の所を聞かれ御手紙を下されれば幸甚

に存じます。映画雑誌のスターに対する質問のようですが、次の質問をお赦し下さい。

一、身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップ
二、御自身の好きな写真、好みの縛られ方。
三、緊縛に対する御自身の気持

以上、赦される範囲にてお答を頂けますなら厚く御礼申し上げます。最後に貴女様の下着の一部でも頂戴出来ませんでしょうか。

数々の失礼と悪文、この手紙にて御迷惑をお掛け致すようなことがない様念しながら、重々、深くお詫び申し上げます。

末筆で失礼ですが、いついつ迄も美しく健康であられます様、万福を御祈り申し上げます。

中富綾子様

柳沢吉保

柳沢吉保様へ

中 富 綾 子

編集部の方から、あなたのお便りを見せられて、お返事を書くように、とのことでしたが、私は読者の方々へお返事を書いたのは、あとにも先にも、たった一回きりで、それも土地の名産だというお菓子の折りを送って下さったので、その手前、仕方なしに書いたのが、一回だけなのです。

私はお転婆娘だと会社でも皆から云われて

います通り、マンボやチャッチャチャは大好きですけど、机に向ってお手紙など書くのは大のニガ手なのです。それでも、書け書けとおっしゃられるので、エンピツ書きで、しかも、それを直接、あなたには送らないというお約束で書きました。

お手紙拝見しました。美しいとか、高嶺の花とか書いていらっしやいますが、一度本当に直接、私にお逢い下さったら、すっかり夢がさめてしまわれると思います。私って、ほんとうに我儘で気まぐれで、仕方のない娘なのです。モデルになつているときだって、少しも言う通りにしないので、いつも叱られてばかりおりますのよ。いつだったか、ライトを持つ助手の方がいてはいやだって、駄々をこねたら、カメラの方から、お前のようなまま娘は、次から使つてやらない、帰れってドナられた事だってあります。

写真だけを見ていられるのと違って、現実の私は、自分でも驚くくらい、それこそ著にも棒にもかからないおテンバなんです。会社でも、よく男の方が可愛いとか、きれいなとか云つてくることありますが、いつも、フン、なにをお世辞言ってるんだい。と鼻であしらっています。あなたのような純情そうな方には、もっとお淑やかな方が、たんとおられます。

それから、私の写真が少いということですが、私は気が向いたら行くけど、気が向かなかつたら約束していても、すっぱぬかしたり又、途中で勝手に帰ったり我儘ばかりするので、きつと編集部の方が、こんなモデルは駄目だとサジをなげられたのと思います。私は自分から志望して行つたのですから、縛られるのはイヤではありませんが、会社は日曜日しかお休みでありませんし、その日曜日もお友だちと映画を見たり、郊外へ遊びに行ったり、買物に出たりで、このところ、呼出しもないし、ずっと顔を見せていません。又、気候がよくなつてから、と思いましたが、そうなら、どう風向きが変るやら、今の自分にもわかりません。

最後に御質問に対してのお答え、

一、身長 一六九・五、体重 四六、
二、やはり後手がいいと思います。縄をたくさん使わないで胸に二まわりか三まわりくらいのが好きです。
三、縛られるということは、前面の方が無防備になるので、そのたよりなさというものが私のようなガムシヤラなものには、特に強く感じます。

大へん簡単なお返事で申し訳ありませんが、どうぞお宥下さい。

柳沢吉保様

中 富 綾 子

或る手記

白衣の傍観者

菅野ふみ子

私は東京に出て来て、前から手紙で契約して置いた此のH病院に勤める事になった。元はY重工業会社の診療所であったのを終戦後、院長の安田氏が強引に綜合病院として独立させたという話だった。先ず、小男で丁寧だがそうした話の通り如何にも Strong man らしい美男の院長に挨拶する。何処から来たと云うからS療養ですと云う。私も高等学校はあちらの方を出たのだが向うの春はまだ寒いでしょうと仰有る。それから家族は等と訊ねられたが、話は通じてあるし書類も出してあるので今更夫と別れた事や、三つになる子供が祖母の許に居る等と云った事には触れないで置いた。支給された白衣に着換えて出て来ると事務長の助山が横柄な口調で「おいついて来い。お前の部屋を教えてやる。」と云って私の方をチラッと見たが、トタンにフンと云う顔付きになって私の胸の辺りや腰の辺をジロジロ撫でる様に眺める。それから急に能弁になり出して別館の二階への階段をワザとユックリ上り乍ら国は何処だの、齢は幾つだの、当地には身寄りはあるか、等と根掘り葉掘り訊く。それにしてもこの

白衣は亦如何してこんなに小さいのだろう。と私は階段を一段々々用心して上り乍ら、心なくユサユサと大業に揺れ動く人一倍大きく突き出たお乳を手で抑えると吐が立つやら情無いやらである。大男で丸刈りの事務長は、私を取り合わないで諦めたか「日曜にはとにかく遊びに来給え」と云うと忽ち横柄な事務口調に戻って来かかった部屋の扉を押すと「君の部屋は此処だ」と怒鳴る様に云った。私が呆然としていると海豹の様な首を中に突っ込んで「之が今度新しく入ってきた菅野だ。佐川、面倒を見てやれ。」と云うなりいきなり団扇程ある大きな掌を私のお尻に着けると撫でまわす様にしてドンと中に私を押しやった。嫌な奴だ——。私が当惑していると今迄知らぬ顔をして南京豆を噛み乍ら雑誌を見ていた女が偶然の様に振り向く。去年の春、日青の養成所を出た許りの子供々々した真赤に唇を塗った彼女は、私をそう幾つも齢の違わない者の様に先輩顔をして頼りに教えようとして呉れるのがオカシクもあり可愛い。鼻の尖の上向いたクリクリした如何にも都会の子らしいモダンな娘。私は之から毎日此の七つ齢下の先輩、佐川君子と此処に寝起きする事になるのだ。

二

婦長は驚く程色の白い中年のひどく外来者には愛想の良い応接をする女だったが、何処となく冷やかなものがあつた。私は経験を買われて内科病棟に廻された。主任は夏村光子と云うひどいソバカスのヘシヤゲタ様な平たい顔をした小女だったが、仕事は十二、三人はいる看護婦達の中では一番出来る様に思われた。削げた頬と真赤に染めた突き出た薄い唇を持ったキビキビ動くひき締った軀を持った女。仕事は朝から定時迄、日に四度の検温と注射だの投薬だのと云つた単調なお定まりのこと……。主任医師の松森氏は頭の真中が薄くなりかかった軍医の古手、新しい知識は何も無いので専門の病院にいた私は驚いてしまったが、人物は単純で正直で一番良い。格は副院長だが誰からも尊敬されず去年奥さんを亡くしたので一層元気が無い。松森氏の他に笹原と云うインスターンを終つたばかりの生意氣そうな医員がいる。笹原は院長の旧式な病理論を心では軽蔑している。で、事毎に学校直輸入の新知識を講釈に及ぶのだが、夏村女史はこんな若僧を相手にしないので勢い目標は私に集中する。殊に私が以前療養所にいたと云う事が彼の関心を惹くらしい。我々は或点に於いて一致する。然し仲間の看護婦はそう云う事をよく思わないらしい。勤務が終わると夕食。之が私達仿いでいる者にとつては最も愉しいひと時である。此処で私達は今日あつた色々な話題を交換し合う。美男の患者の話。先生のヘマをやつた話。然し私は間もなくもう一つのお喋りの世界がある事を知つた。元の少年工員の宿舎であつた改造風呂の煙突から仄々とした煙が夜空に流れる様になると仲間達は手に手に湯道具を持ち乍ら風呂にゆく。私が実は私と笹原先生との思いもしない噂を聞かされたのは実に此の浴場に於いてであつた。女達は女達だけになると実に大胆になつて露骨な言葉を選び好んで使つてあらゆる事を喋る。「久保の奴二回ばかり

してきたと云うのよあんだ。無論大尉さんとヨ——」「しかしタマフセギの方は大丈夫なのかしら。幾ら愉しんでも良いけどネ……」大尉とは松森先生の事である。「愉しむなんてモンじゃないワヨ。大尉はガツガツしてゐるってのヨ。」「フン奥さんを亡くしたからネ。」その時今岡と云う最古参のが云つた。「私、今度来た新米の奴イケ好かないのヨ。もう笹原の奴と出来てゐるってじゃないの……」湯の煙は深く湯壺の反対側の用水槽の蔭にいた私は、彼女等に発見されなかつた。然しそれから私は彼女等の入りそうな早い時刻にはゆかないことにした。いつの間にか春が終つた。花の晚い北の故郷と異つてこちらの初夏は精力的に貪婪に肌に喰ひ込んで来る。蒸し蒸しとする大氣。粘りつく様な空の色。終い風呂に浸つて独り膚に湯を流していると甘美な物愛さが軀の芯に喰ひこんで来る。弛緩と陶醉。そつと梨の実の様に熟れて下つた重い乳房の下側に掌をやつてみる。「私は又少し肥つたのかしら……」何となく不安な眠られぬ夜が続く。夫と別れて以来、私は此の初夏から夏にかけての候をいつも落ちつかない気持で過す。

三

その日は急患があつて私は笹原氏と燃えるような緑の山を下つて都営住宅の方に往診に行つた。太陽は何時迄も武蔵野の向うに落ちずに路は思つたより遠く汗と埃と粘つこい笹原の絶え間のない囁きに私はスツカリ参つてしまった。若い田舎地主の子の笹原はもう私に夢中になつてゐる様子だが、私は今更夫も恋人も持つ気はない。心に余裕はないし総ては煩しくさえ思われる。それで、その日は早く風呂に入つた。いつになく私は早く入つたらしい。透明な湯の流れが自分の少し凹んだ腹の上を流れて落ちるのを見てると幸福を感じる。「私はまだ若い！」不意に私の自惚れ顔は湯殿の直ぐ外側でした二三人の男達の声に驚かされた。アツと云う叫び声を挙げる



暇も無く彼等は私の入っている湯殿に乱入して来た。私はとっさに鍵の手に折れた湯壺と反対側の暗い所に身をひそめた。濛々と立昇る湯気は強くボンヤリと日輪の様に泛んだ電燈は彼等が誰であったか私の方からも見分ける事は出来ない。「俺は先生がもうヤツチャッているんじゃないかと睨んでるんだがネ。あの女は堅い様で案外脆いからナア——」先頭の海坊主の様な大入道が湯槽に飛込み乍ら云ったので私はそれが事務長の助山だと分った。今一人のが浸り乍ら云う。「いや事務長、確かあの久保と云う女は堅そうで滑っこい。中はスベスベですよ。口はキツイですがネ。」「フンそいじやまるで水道見度いじやないか。」「そうですヨ事務長。水道鉄管も鉄管。そ

の内側にバタでも塗った様な物でサア。」私は嫌らしいと云うよりも呆れかえっていた。男はザブザブやり乍らまだ続けている。話は此処でも軍医大尉氏と同僚とのロマンスである。目下此の病院では彼が如何にして彼女を最終的に射留めるか。又誰が一番先にそいつを確認するかと云う辺りに皆の注意が集っているらしい。それにしても男と云うものの考え方はどうしてすぐ単刀直入にゆかなくてはならないのだろうと思う。その癖隠れて息をひそめている私自身何時の間にか、耳を敬てて胸を躍らせているのだが——「時に事務長、あの今度入って来た菅野と云う看護婦ですが——」不意に私は自分の名前を出されてギクリとする。南無三と思ひ乍ら何と云うかと耳を澄ましていると、その男「あれは田舎者だつて云いますが、良い女じゃないですか。第一軀が良いですよ。腰の張り具合、白いポチャポチャした肉付き——」事務長の大きな笑聲。

「そりや君、僕の眼鏡だからヨ。僕の連れて来るのは皆別嬪さな。フフ先ず此の病院では、越川かあれかと云う所だろうなあ。乳なんてコンナに飛出してるからナア。」私は耳がカッカツと燃えて来る。塞ぎ度いが又聞きたい。それにしても越川さんの身体はそんなに綺麗かしら等と要らぬ事を考え乍ら壁にピッタリと軀をおしつけて耳を澄ましてゐる。自分の心臓の音がポンプの様に鳴る。事務長が喋っている。「——ネエ尻だよ、あの女の良い所は——こうせり出していてナ。こう後へ突き出ると共にグツと下っているのはあんまりいないモンなんだが、あの女はその理想的の奴さ。それが筋肉でプリプリしているくせに抑えてみるとフアーッとして実に柔いんだ。」私は遂々目を瞑った儘壁際に踞んでしまった。男達の歓声が起る。「本当ですか。まるで触ったみたい。押んだ様な事を云いますぜ。」「いや僕は現に此の間触ったばかりだよ。実に羽根蒲団の様で何じやな。つまり天国に行った様な

気持ちゆうのはあんな事を云うんだろう……。こう撫でまわして
るとな。無論白衣の上からじやったが「私は飛び出して行つてあの
入道頭を思い切りピシヤリとひっ叩いてやい度いと思つたが、ここ
では如何にもならない。心臓がトレラーのエンジンの様に唸ってい
る。「然し事務長、着物の上からじや駄目ですよ。まあその中に誰
かが本物を拝むと云う事で——」又一人が云う。「フン。若しかし
たら俺かも知れないぜ、お初穂を頂戴するのは……。遠足でもあれ
ばネエ——」事務長の傲慢な笑いが天井一様に反響する。「まあ君
方慌てんで手入れてもしいた方が良いぜ。フン、来月は榛名温泉
行きだからナ。然し例の一件は僕に委しときなさい」「ヒヤヒヤ」



「誰が一番に剝くか一つやってみ様じやありませんか」私は
彼等がどつと出て行つた後も心臓に輪を嵌め込めた様で、冷
えた身体をもう一度湯に沈めるのも億劫でじつと胸を抱いた
儘その場でうつ伏していた。「誰が先に剝くか」だと……。
此の病院にはそうしたシキタリがあるのかしら……。やつと
部屋に帰つたら皆が何て蒼い顔だ。気分が悪いのなら寝れば
良い等と云つて呉れた。今岡一人がフンと鼻で嗤い乍ら笹原
先生にでも診て貰つたらどうだと云つたが私は黙っていた。
「新入りの癖に出しやばつて先に風呂に入つたりするからだ
ヨ」と云う声がある。

四

榛名と云う温泉郷の名前は故郷にいる時から聞いていたが
来たのは無論今度が初めてであつた。湖と山と溪流にのぞむ
楓の若葉と静けさ。それ以外どこの街にもある様な下らない
ものが少しばかり。それだけの所であつたが私は、この静け
さが心に沁みる様に有難かつた。もしも私の心にシコリさえ
無かつたら……。私は土産物を作るチャチな家の建てこんだ辺
りを離れた溪谷添いの若楓の樹の下道を歩み乍ら考えこんでしま
う。自然が美しければ美しい程、私は憂鬱になつて来る。若しもこ
んな下らない心配事と云うものが無ければどんなに愉しいだろう—
と思うのだが、それは同行の佐川女史には分つてはいない。私はあ
の先だつての風呂場での一件を聞いてからは、どうしてもこの遠足
には来るまいと決心していたのだが婦長や院長迄が出て来てすめ
てくれる言葉に対して新入り早々の私はどうしても断り切れなかつ
たのだ。「まあ、今日あんな如何かしてるワ」と佐川女史につき当
つてしまつて云われるのだが、云われる迄もなく、私は矢張りあの
件が気に掛けてへまばかりやつている。幾ら考えないで置こうと思

ってみても「誰が先に斜くか競争しよう」だの「万事は儼に」等と云うあの言葉を思い出すと、それに捉われずにいる事が出来ない。浅黄色だった空がどんどん黒色に変わってゆく。谷間のあちこちの旅館に灯が入る。初夏とは云っても山間の谷風はさすがに身に沁みる。ああ日が暮れてゆく——と目の前にポツカリと突然真暗な穴が開いた様な気がする。三昧の音が聞えて来る。酒を飲む男達。そして乱れて来る一座。「ああ神様」と私は樹の下に坐りこんで天を仰いでしまう。この長い夜をどうして過したのか？ 佐川女史は洒落たアチラ風の襟の広いコートか何かを着て口笛を吹き乍ら至極屈託がない。まだ若いので男達がどんなに貪婪なものか等と云う事を知らないのだから無理もないのだが、或いはこう云った風の人はイザとなつて見ても固執しないから私の様に初めから恐れる必要がないのかも知れない。とに角佐川女史では当にならないと云う事が分つたので出来るだけ頼りになりそうな人と考えて婦長の傍にいつもいる事にした。「まあこの人は何て私に付き纏うんでしょう。好かれたのかしら……」と云われ乍ら、私は笑っている。扱て広間に膳が運ばれて院長以下の男達が上座に坐り食事が始つた。やがて酒がまわつて来て色々な人が思いもつかない隠し芸等と云うものをやる。しかし私はそれ所ではない。助山ばかりを注目していたが彼は院長の御機嫌をとるのに一生懸命つき切りでお酌をしていたが、彼氏とうとう自分の方から潰れてしまった。それから……万事は恐れていた程の事もなく十時過ぎになつて終つた。之からはもう床に入るばかりだ。危いと云えば危い様なものの又まさか声を立てて抵抗する者を三人がかりで曳きずつて行つて乱暴する事もあるまいと考へて私は持ってきたズボンをソツと着用し及んで床にモグリ込み警戒をゆるめない。電燈のスイッチはここ。婦長さんは左隣りと何回も頭に入れていたがその中に不覚にも眠ってしまった。フト気がつくとな「嫌よ。嫌よ」「良いじゃないかヨオ」等と云う忍び声がすぐ近くで

する。ハッと軀を固くして辺りを窺うとおかしい事に用心して点けて寝た筈の廊下の電灯迄が消されて真暗。愈々来たなと心構えて、力一杯斗つてやらねばと思うのだがもう緊張と恐怖でガタガタ手脚が震えるばかり。然し何糞と尚も息をコラしているとこれは又奇怪な事に反対の方向でも、男と女との秘やかな囁きがする。あつちでもクスクスこつちでもヒソヒソ。男達が忍んで来て女達に云い寄つて居るのだが、勘定して見ると此の部屋中が淫売宿の様になつてゐる有様である。そのとき、突然枕許の方でケラケラと今岡さんらしい女の嬌声が響いたので、私はもう頭の先迄熱くなつてしまつて夢中で「助けて！」と大声をあげて傍に眠っていた婦長さんの肩にしがみついてしまった。私が大声を上げたので看護婦達は蒲団に潜りこむ。男達は泡を食つてその女達の頭を蹴とばし乍ら遁走する。いきなり攫えられた婦長さんはとび起きるなり目をつり上げてサア早く電氣をと云われるが、慌てている私は幾らスイッチをひねろうとして探しても確かにあれ程見当をつけて置いたそのスイッチを見つけない。やつと指先に触つたからヤレ愉しやと力一杯それを押すと何と忽ち深夜の街中にケタタましく鳴り渡るベルの音。六尺棒を持った番頭が駆けつける。女将が出て来る。方々の部屋では電燈が煌々と点けられる。芸者の腰巻を寝衣と間違えて着て飛び出して来る奴がいる。勿論院長は何事が起つたんだととんで来る。五分後は廊下は事件を見に来た浴客で身動きも出来ない。八分後には、この街たった一人の警部補の署長が自動車のサイレンを鳴らしやがて来る。十五分後には百姓兄弟達の消防組が賑やかに鐘を鳴らし乍ら旅館前の街道を登つて来る始末。私は間違つて事もあるうちに非常ベルのスイッチを押してしまつたのだ。ズボンを穿いたまま恐縮している私は皆に問い詰められたが、そうかと云つて今岡さん達仲間の人達が事務所の人達と良い事をしていたとも云えずにうな垂れるばかり。八重歯の口元を抑え乍ら「多分此の人は田舎の方に

いてこう云う賑やかな雰囲気になつたので疲れて夢を見たのでしよう」と盛んに婦長が助け舟を出してくれるのが有難い。今岡女史は間違と分つて警察等がひき上げてしまつてからも眠れないと起き出して着物を着てしまつて私の方をさも憎しげに睨みつけ乍ら「ブン幾らズボンを穿いて寝る田舎者だつて夜と昼との区別ぐらいはつけて置いて貰い度いワネエ」とブリブリしている。どちらが区別がつかないんだと思つたが唯恐縮しておく。何としてもだ。之で最大難関は切りぬけてしまつたのだからと新装置の防犯ベルに秘かに感謝する。事務長の助山だけがまだ残つていて、そうした私達を眺め乍らへやをやりやがつたと云いたげな風にニヤニヤ。皆にブツブツ云われ乍らも私はすっかり安心してしまつて今度はズボンを脱ぎ本当によくしてくれた美しい姉さんの様な婦長さんの横に入つてピッタリと軀をくっつけて眠る。時々夢の中で現つて婦長さんの堅肥りのしたよくひきしまつた腿が私のにあたる。この人は私より四つ五つも年上の卅三、四と云つた所だが肌等はどう見ても私の等よりキメが細くて綺麗な様なのが憎らしい。唯軀つきが小柄な方で厳しい性格だから目立たない。それにしても冷ややかな表面とは違つて亦何と暖かな柔い背中——私は時々眠り乍ら夢中で手をまわして彼女を抱いたが私も夢の中、婦長も眠っているのか私の様に声も立てない。

五

昨夜の騒ぎがあつて今朝は皆朝食抜きでおひる迄ググウ。近くの牧場でとれると云う生のままの濃いドロツとした熱い牛乳をフウ吹き乍ら独りですすっていると髪を梳いて来た婦長がブラリとやって来て私の顔を見るなりニヤリと笑う。「じゃあ、あんた警戒していたのね」婦長は私の白状したことを聞いてそれからしきりにオカシそうに笑う。とそこへ番頭がやって来て大浴場が空きました

から今すぐお入り下さいと云う。私が如何しようかと思つていと傍から婦長が「サアあんたもう何も警戒する事はないでしょう。お入りなさい」と叱りつけるように言う。陽気も良い頃だから昨日から一度もお湯に入っていない軀はベトベトするし様名に迄来て温泉の味を知らないと云うのも気の利かない話だと思ふのだが一度脅やかされた心は容易に解けない。然しそういう私の心には構わず婦長はどんどん私を曳張つて脱衣場迄来てしまふ。「サアお脱ぎなさいヨ」「でも男の方が——」と洩ると婦長は自分の帯を解く手を休めて甲高い声で笑う。「まあ何を云つてんのヨ私達が入っているじやありませんか。時間で買い切りなのヨ此のお風呂は——」そこで嫌応なしに私の帯に手をかけて「まづまづ——」と云う間もなく着物を剥いでとうとう長襦袢迄とつてしまふ。「まあ浸り度くなかつたら見るだけでも見ていらつしやいよ」とうながされては今更帰りますとも云えずに戸をあけて私は暫く声を呑んでしまつた。あまりの巨大さ、あまりの素晴らしさ。三方を総ガラスにした何十畳というタイル張りの巨大な浴場に一方の壁面から他方へ透明な湯の河の様に流れている。全山の新緑を映して湯も床も天井もそして泳いでいる同僚の女達の裸身も総て薄緑に染つて萌え出すかと疑うばかり。急に昨日から張りつめていた心がカラリと晴れて私は少女の様な気持になつて踵程の深さの所を駆けて深みにとびこんで行つた。私にすぐついて来た婦長が泳げるかと云うので泳ぎなら女学校時代は県の四百米の選手だつたと云うと誰かに競走して見なさいと云う。然し結局佐川女史の他には泳げる者がいないと云うので私と彼女とが婦長の審判によつて泳ぎ競をする事になった。距離は大湯槽の往復百米は結構ある。飛びこんだ私が五十迄は抑えていたが間もなく湯の温度が高いのと若い佐川女史には敵わないと云う事に気がつき出した。彼女は必死で腕を掻く私の目の前を真白な充実した大根の様な脛をプロペラの様に廻転して過ぎてゆく。年をとると水泳

はあらそわれないもので呼吸が続かなくなり、それに脂肪のギッシリ填った軀は水中でギシギシ軋みとても若鮎の様な若人には敵わない。それにだ。私の様に子供を産んで大きくなった乳房や、つき出たお尻はもう水泳するにはあまりに相応しくなくなっている。声援は頼りないのだがそうした訳で六十を過ぎた辺りからはグングンと抜かれてしまった。然し口惜しいのでトッサの事にクルリと仰向いてバックでピッチをあげた。こうするとブラブラ胸の下に下って邪魔になっていたお乳が邪魔にならなくなる。ところで勝負程妙なものはないので私のそうした奇策が意外に効を奏して八十辺りでスツカリ軀が浮いてグロッキーになってしまった佐川女史を軽く抜いてゴールしてしまった。「あんた素晴らしいのネ」と私に抱きあげられた佐川女史が驚いた様な瞳をして囁く。「熱かったでしょう」と婦長もよって来ていたわってくれるのだが、成程そう云われて見ると久し振りの激しい運動と湯の温度にあてられて腕もお腹も股も桜を散らした様に真赤になって恥かしい程はててくる。「でも菅野さんの裸素敵だったわヨ」とおだてられてつい浴場の真中に島の様になった自然岩の上に立ってしまふ。「その手を離して……そう胸を隠しちやダメだワヨ。そしてもっと胸をつき出して。そう」と婦長。私は茶目気分、半分は夢心地で云われるままに好い気になってポーズしていたが、ヒヨイと顔を何の気なしに入口際の壁に向けたとたんアッと云って棒立ちになってしまった。入口の扉の上に庇が出て少し薄暗くなった凹室の様な中二階の所に院長以下助山、笹原、松森、事務所の面々が目を皿の様にして赤顔な顔をこちらにつき出して私の方を見ている。「院長どうです。矢張り何と云っても今度来たのが一番でしょう」と折柄声迄きこえるのは正しく大入道の助山の声。「まあ婦長さんあんなどころに」と私が指すのをチラッと見たまま婦長はじめ仲間の看護婦達別に驚いた風でもなく「さあ、もう一度浸りましょう」とどンドン大胆に腿を上げて湯の中に飛込

んでゆく。私一人は岩から立ち上ることも出来ず、かと云って逃げる訳にもゆかず島の上で真赧になって跼みこんでしまった。折柄入口の扉がガラリと開くとさっきの番頭が大声で「皆さん時間が来ました」と告げた。私はその晩夜行列車の中で隣に坐ったおとなしそうな例の久保という面長な看護婦に、どうしてあんな事をするのかと聞いてみた。すると彼女はじつと不思議そうに私の顔を暫く見詰めていたが私がカラカッているのではないと云う事が分ると云ったものだ。「貴女は来たばかりでよく知らないだろうけれど——此処の昔の先生方の奥さん方は大抵看護婦をしていた人達なのヨ。男の人って矢張り何のかのつと云ったって軀を一番気にするのね——」私は今度はその人の顔を見乍ら「そうして貴女も松森先生の奥様候補になったのですか」と訊いて見様かと思つたが止めた。此の人は良い人らしかったから。唯彼女はそう思いこんでいるのだから思いこんだ事以外にぬけ出る事が出来ない。こう云う人は間違つた事をしでかすが良い人なのだ。少くとも人を虐める事に快感を持つてゐるらしい今岡や出世の為には平気で他人を罠にかける婦長の様な女よりは良い人だ。

六

夏が来た。故郷のS療養所のある北の国とは違って平地のこの辺りの夏はひどく酷しい。夏雲が病舎の長い長い屋根の上を流れてゆくのを私達はSにいた頃は寧ろ爽快な喜びを持って眺めたものだ。長い冬を、晩いまだるっこしい春を、苛々し乍ら眺めていた痛めつけられて来た北国の人間の心は、夏雲が流れ出して低かった太陽が南病舎の尖塔の頂に達する様になると歓声をあげて友達と野原に草を摘みに行く。草の匂いと湿った大地の柔かさ。私達は白衣をひるがえし乍らどこ迄も友達と追いかけてこをし乍ら野原を走ってゆく。こうして私達はよく勤務時間を空けて院長に叱られたものだ

った。私達は一夏一杯をこの様にして自然の懐しい膝の下にしがみついてゆく。然し——都会の夏——私は来る日も来る日も臺の上を熔かす様に照りつける、まるで鍛冶屋の鑪からでも出て来るのかと思われる熱風。そよともしないで油の様に沈滞している室内の空気。

——初めての平地の夏と云うものにスッカリ度胆を抜かれてしまった。青空、夏雲それは爽快どころの話ではない。窮屈な小さな白衣は忽ち汗みずくになって背中も腹のまわりも濡れて張りついた様になってしまふ。「ああ看護婦さん破れてますヨ」と先日にも注意されて驚いて鏡で見て見たらお尻の辺りが四寸ばかり縦に裂けていた。過日もある男の患者に注射をしていたら頻りに腕を預け乍らニヤニヤしている。何を見ているのだらうと思つたら汗でベトベトになった白衣からお乳が映つて、暑いのでついつけていなかったブラジャー無しだから乳首やそのまわりの暈の辺迄がまるで見通しの様に下側からハッキリ見えているのだった。それから乳当てをつけるが之が暑い時は縛られていた様で窮屈な上に今度は手をあげる時に白衣の腋の下ばかり見えている奴がある。で遂々長袖のシャツを常用する様にしたのでは此の暑さではタマツタものではない。又それを着て見てもどこかが見えているのではないかと思うと神経がクタクタになる。一日が終わると私はそうした訳で疲れ切つて御飯もそこそこにして倒れてしまふ。早い風呂は例の件から禁物なので無理をして銭湯を浴びて来るのだが、その風呂さえ憶劫になる事がある。何時迄も看護婦をしている気持はないから勉強して置かねばならない。又故郷に残してある子供に手紙も書いてやらねばならないと思うのだが本当に慾も得もなくなつて浴衣を羽織つた儘そこに長くなつてしまふのだ。佐川女史は競泳以来、見直したか、時々神秘的なものでも見る様な眼をして「あんた本当に奇麗ねエ」等と云う時がある。然し別に私を怖れている様子もなく前の通り何か事があると姉さん顔で私に教えてくれる。同僚看護婦や先生方の内幕、恋愛関

係や勢力関係、こうしたものはみんなこのアッサリした妹先輩から仕入れたものなのだ。色々なウルサイ人同志の事を喋り乍ら彼女一人が全然屈託無しでいたい事は独りでドンドンしていて憚る所が無い。此の二十才そこそこの年だと却つてこちらが驚くのだがその辺がアプレゲールと云うのかどうか。で近頃は佐川女史がいると決つて南京豆を買つて来て二人で駄べる。所が実はその佐川女史近頃は忙しいらしく居ない事が多いのだ。四時の定時のベルが鳴るや否や彼女の姿は最早どんな急患が来ても誰が呼んでもこの病院の内側にはどこもいない。忙しいと云うのは彼女を霧の如く惹き寄せる何者が院外に存在すると云う事である。彼女から聞いた所によると米陸軍サージエント・ハロー氏は絶体の紳士であると云う。彼は彼女にこのスカーフを買つてくれた。このパンブスも買つてくれた。このスーツも作つてくれた。それでいて「まだ接吻を二回したきりなのヨ」なのである。彼女と彼氏とは彼女が日青病院の看護婦養成所時代からの友人である。そして今に至る迄之程の給付をつづけ乍ら接吻二回で済ましていると云う事は彼女を驚ろかせる事なのである。そして之だけの実績はもつとそれ以上のものを要求しても差しかえのないと云うのが大体の女史の意見であるらしい。私は二三回必ずしも男女の関係と云うものは然うした量だけの問題ではないと云つたのだが、それは彼女の理解する所とはならなかった。彼女は絶対に自分の意見しか用いないから私は説得すると云う企てをすぐやめた。彼女のいない日は私は独りで転っている。夜に入つてもムシムシする。倦怠と自省心。いつのまにかトロトロとする。誰かが廊下で盛んに喋っているのを耳にする。「そうなのヨ。威張つてるじゃないの自分が一番美人だつてサ。子供を産んだ事があるくせにサ。」「ええ本当？」と他の声。「バカねエあんた。見れば分るじやないの、あんな大きなお乳してサ……線が——」「エ？」「お腹の真中に縦に筋があるのヨ。ホンの薄くだけどサ。」私はやっと正気

づいた。たしかに！今岡の声！あいつ等だナと思っていると「フン。一度みんなでひっぱりこんでサ。剃いで調べてやろうじゃないか——そうよ真裸にしてサ……私は賭けても良いワ、たしかに見たんだから」私は我慢出来ずに立って行って思いきりよく扉をあけて見たが——廊下にはもう誰もいなかった。何をバカな子供を産んだ事がどうして悪いと思ったが、傷つけられた心はなかなか元に戻らない。蚊がうるさく纏いつくので益々苛々して来る。暫くそれから連中の陰謀を注意していたが別に事も起らず日は過ぎてゆく。近頃は一種の自信も出来て来てあんなに連中の事を気にしたのさえ我乍らバカバカしく感じられる。とは云っても今岡の連中の事を気にしていない訳でもない。暑さが酷いので馴れない私は神経衰弱気味にもなっているのだと思う。日中の暑さは絶頂と見えたが夜に入るとやや涼しくなり虫の声等がする様になる。照明灯の光に透けて見える緑の樹の葉。遠いレコードのダンス曲の音。都会の夏夜——私がセンチになっていると佐川女史が云う。「之からこう云う風に暑くなってくるでしょう。すると面白い事が起るのよ」「面白いことって？」「皆がやり出すのよ！」私は他の部屋のキャッキヤツと云っている騒ぎにギョツとする。私は瞬間に忘れてしまいかけていた今岡達の毒々しい相談事の声を思い出す。「皆がやり出すって？」「どんな事をするの」私は益々膝を乗り出して訊くが、短い鼻をビヨコビヨコさせて佐川女史はフアッション・ブツクに目を据えた儘、落ついて答える。「今に分るワヨ。」——その時、絶叫に近い他室の同輩の声。そして後は暫く静かになる。クスリクスリ漣の様に又笑いが起って来る。佐川女史は構わない。私はトタンに苛々して来る。みんなが——誰かに何かをしているらしい。私は負けるものかと今岡達の顔を頭に描き乍ら肩を張るのだが不安が募る。何が来たって驚くものかと思ひ乍ら又あの様にしても自分皆の前



で何かして恥をかくのだったら……と思うともうそれだけで辱められた様に血が頭に上り軀が怒りと恥かしさに震える。然し傍に悠々と寝転んで南京豆を噛っている佐川女史の小さい軀を見るとこんな小娘でも我慢して立派に暮しているのにと思われる。しかし不安を感じる事は別にそうした反省によっても減らない。そして……私は榛名以来少し自分が本当にどうかしてしまっただけではないかと思ったりする。あまりに奇妙な体験なのだから……。それにしてもあのおっとりした犠牲者の一人である久保さん迄があんな見解を堂々と開陳して憚らないのだから此処にいる人達も余程変わった連中ばかり

の様だと思われる。しかし別にこうした事のために辞めてゆく人もなく又社会の問題にもならないと云う事は私の方が間違っていたのではないかとも思われる——。どうして？ 田舎者だからだろうか……。私には分らない。そして私は矢張り不安なのだ。

七

祭の日が来た。此の頃は日中は焦げついた釜の底さながらで眼を開くのでさえ暑さを感じる様なのだ。猛暑も最早これ以上には上るまいと水銀柱ばかり睨み乍らいつもの様に慰めておく。しかし夜分は大分冷え冷えとして来て虫の声も一層賑わしく、さしもの暑さも此の辺りが愈々最後で之からはドツと秋の涼しさの中に入るのだらうと思う。何かホツとする様で又何となく心細い。と云うのも北国人の郷愁であらうか。とに角夜分だけでも涼しくなったのは私は大いに助かる。夜は寛いだ気持ちにもなつてあれもしようこれもしよう置こうと暫く投げやりにして置いたつくりい物等を出して考えるのも女のたのしみなのだ。私の部屋は佐川女史が相変らず御出張で私一人至って静かなのだが他の部屋はドタバタドタバタ、この暑さにも負けない荒れ様。暑いのにクンパルシートを三回もかけたりしている。こうした街の人の無神経さには随分初めは驚いた私だったが近頃はそうした事にも馴れた。所で今日はこの町内の祭礼なので院も午前中で早く仕事を切り上げて夕食には看護婦一同にも赤飯に形ばかりだが小魚のお頭附きの折詰。勿論別室では院長初め先生方は二級酒を傾けて蕩然の境地をさまよっておられる。私はそれを二人分貰つて来てヒーターにかけ美味しく煮直して、終電車ギリギリで夜道を息せき切つて走つて帰つて来る佐川女史に食べさせ様と云う訳。一緒に暮して半年、アブレとか何とか云い乍らもやはり情が移るのだ等と勝手な事を考えていると、不意に隣の部屋でドスドスと床を踏み鳴



らす物音。連中の大抵の騒ぎには驚かなくなり出していた私もオヤと箸をとめて壁を睨む。すぐ止むかと思っていたが、愈々物音は大きくなって来るばかり「何に糞！」と云う女の声迄聞えて来る様になる……。『？』突然「助けて……く、くるしい……」と云うのは正しく夏村さんの声。私は無論飛び出した。然しどの部屋も気づいていないのか知らぬ顔をしてダンスをやっている。私は扉に手迄かけたがどうした事か不思議な事に中はヒッソリと鎮まりかえっている。そして静かな秋本さんらしい声が何か低い声で云っているのが聞える。オヤ違ったかしら———と思つたからおしてあけるのもおかしいので戻つて来た。然し物の二分と経たない中に又ドスンダア—

ンと壁にぶつつかる音。何かが棚から転げ落ちる気配。二人が大勢かはよく分らないが組打でもしている様子。そして例の苦しそうな咽喉でも締められている様な声。「助けて……助けて……」私は今度は間違いはあるまいと扉をブツ飛ばして隣の部屋の前に突進したが、又依然としてしずまり返っている。確かに秋本さんと夏村さんらしい二人の声が別に変った様子もなく落ついて話し合っている。奇妙な事である。格闘をしているにしろ——それにしてもこの会話は変なのだが——話しをしているにしろ隣室の住人であるこの二人が在室していると云う事は確かであるとする、全く暴漢が侵入している訳でもない——所が私はその次が分らないのである。二分前と今との間に全然繋りがないのである。その乱斗危急をきいて私がこの室の前迄突進して来るその三十秒乃至六十秒の間の存在が私の理解の中には全然ない。暫く薄暗い部屋の外の廊下にボンヤリと立っていたが、別に何の変った事もないので私はスゴスゴと帰って来た。錯覚であった。と思うより仕方がない。それにしてもあまりに奇妙すぎる錯覚……とたんに亦ドストスと畳を踏み鳴らして凄じく荒れる模様。小さな音が大きなのに縫れる様に近迫して行って二つの軀が宙でドンドンと鈍い音をたててブツかる様子。そして尚もお互いの襟首でも掴んで倒されまいともみ合う。不意に空を切つてふりまわされる様な気配。続いて女のヒエーッと云う様な押し殺した、然し鋭い泣く様なうめき。もうどんな事があってもゆくまい錯覚なんだから。と思つてはいたが、錯覚と思うにはあまりにハッキリとした現実だ。机の上には佐川女史愛用の鳩時計が動いているし、庭の暗闇では事務長御自慢の秋田犬が鳴いているし、ヒーターからはジンジン味噌汁の湯気が立昇っている……。それでも私は腰を浮かす。ウンウン抑えつける様な鈍い振動音が畳と壁を透してハッキリとじかには私の軀に響いて来るのだから……。声は消えそうになる。「私が今ゆかなければ……誰かが殺される?……」それと「もう騙

されまいぞ……」と思う心で私はそつと私の部屋の扉を開けて跣で近づいて行った。するとトタンに、ドーンと誰かを投げ倒す地響。「許してよ!」と言う。「今度はまぎれもない夏村さんの哀願する様な声につづいて「どうだ!参ったか!」と云う初めて響いた男の大きな声。私は御免とも云わずに夢中で隣室の扉をひきあけてとびこんでいた。そして——ああ!と云った儘声も出せない。青白い電燈に顔を照らし出されて真蒼な顔色をしてグッタリと横座りに細い軀を壁に凭せて白痴の様に瞳孔を見開いたままではあゝの権高秋本さん。そしてその目の前で何と外科主任の伊勢先生が真赤な顔をしてしっかりと夏村さんを組み敷いてその上に馬乗りになって抑えつけ乍ら喚いている。つまりは彼は右膝をあげて少しはだけた彼女の胸の尖った乳房の辺りをグツと抑えつけ乍ら女の頸に両腕をかけて力を一杯入れ乍らそれをしめつけているのである。最早蒼黒くなりかかっている夏村さんの顔。「助けて……助けて……」と云う紙をこすり合わす様な幽かな声は間断なくそのひきゆがんだ唇から洩れて彼女の額は玉の様な汗で光っているのだが奇怪な事に秋本さんはそれを見乍ら放心した様に留め様ともしない。見ている中にも夏村さんの眉間のドス黒い血管が見る見るふくれ上つて来る。彼女の唇はふるえ乍ら虹の様に色が褪せてゆく。私は煌々と電気を点けた下で行われているその惨状に棒立ちとなった儘声も出なくてそして余りの恐ろしさに立つてさえない程であった。次の瞬間、不意に覚醒した秋本さんは物凄い勢ではね起きると私目がけて頭のテッペンから金切声をあげて突進して来た。「どうして、如何してあなたは他人のお部屋に無断で入って来たの!」私の胸に武者振つくと滅茶滅茶に頬べたをひっぱたいた。余りの事に手向いするの忘れた呆然としている私を尚も彼女は眼を据えるとひき倒そうとして掴みかかって来た。然しそうなる私の方が軀も良いし力もあるの二人して揉み合っていると不意に夏村さんがケロリとした顔付き

で起きて来てしがみついている秋本さんを私から引離し、物も云わないで静かに私の軀を外へ押し出すとバタリと部屋の扉を閉じた。私は吐が立つやら訳の分らない昂奮でじっと暫くその部屋の前に佇んでいたが先生もいるのだし、もうこれ以上変なことに関り合いたくなくなったので諦めて帰った。隣の部屋からは伊勢先生の相変らず元気の良い声と、今迄あんなに酷い格闘をしていたとは思えない女二人の軽やかな話声が響いて来ていた。私は遂々自分の頭が錯乱してしまったのではないかと云う問題に縛りつけられてしまった。相変らず時計は動いているし、事務長の犬は吠えている。私は之がいつそ動いていてくれなければ良いのにと考えた——。私は遂々どうしてしまったのであろうか。榛名の前辺りから脅迫観念につかまされ始めていた私は遂々すべてに対する正しい認識力を失ってしまったのか。白状するが私は七つ年下の妹のかえりを待った。この夜半に勇敢にも眼の玉の色の違う男になんぞ逢いにゆく勇氣は私にはない。事は見様だが私は之は一つの力だと思ふ。一つのものを習慣から超越して握むのはその人間にそれだけの力がある。だから、私の様に習慣と単調の中にあつた者は少し変事に出喰わすと根本的に動揺する。七つ年下の娘を私はおそれと迷いの中で待った。奇怪な日——と私にはそう思われる。しかし佐川女史は何と云うだろう。私は待ちつかれて眠る。不安は残っているが激務に肉体が眠りを要求するのだ。犬がまだ啼いている夢の中で——。

八

暫く涼しかった夜にも亦暑さが戻って来た。残暑と云うのだろうがちっとも名残りの暑さ等と云う風流めいたものは感じない。仕事をしても頭がクラクラしそうだ。汗を拭う元氣さえ起らない。汗とフワフワとした自分の体温より暖い様な空氣の中にじっと我慢して浸っていると云った感じはたまらない。夜になったがまるで日

の暮れたのも忘れた様な熱気である。遠くの方で鐘の音や太鼓の単調な音が果てしなくつづいているのは盆踊りなのだが、それが一層小ウルサク臉にかかって来る様に感じられる。今晩はハローさんが衛兵勤務とかで珍らしく佐川女史が部屋にいる。暑いわけエと云うとウンと恐ろしく元氣がない。男に逢っていねば活力の源を絶たれたと云った顔付きだ。いつもサテンのドレスか何かを着て風を巻いて廊下を走ってゆく彼女だからツマラなそうにしているのが目立って一層哀れである。いつの間にか眉を剃ってしまった様に三日月形の細いのが秀でた額に描いてある。小さな短い鼻の尖がツマンだ様にちよつと上向いて割に日本人としては可愛い顔だがアイシヤドウなんかつけているので余計向うカブレしてみえる。近頃は化粧が派手になって私が見てもちよつと毒々しいと云った感じだが若いだけに何と云っても厭らしさからは救われている。けれどもこうした事は益々昔流に徒弟修業からやって来た今岡一派の古狸オールドミス達の感情を刺激するらしく、私でさえが何だかだと佐川女史の悪口を聞かされる。尤も此の娘に云わせれば、そうした録でもない事を云っている連中自身が封建性の遺物である。「フン私何もお婆ちゃん方にして貰った事ないワヨ」誠にその意気は壮とするも下らない災難がふりかゝらねば良いがと私はこの自由なる娘の為に思う。私はいつも危惧が先に立つのだがそれも田舎育ちの故であるのかも知れない。等と泌々と話をする。折しも庭の方で醉漢の調子外れに歌う声。「まあ厭ね酔っ払い」と云うと「又始るワヨ」と佐野女史頰杖をついたまゝ答へ、それから「尤もこんな暑くってクサクサする晩は男でなくたって一杯やりたくなるワネ」とつけ足す。驚いて問いかえすと彼女はユックリと雑誌を放り投げ乍ら又伊勢先生が夏村さんとこへやって来るのヨと云う。私はまさかあの醉漢がと思っていたが、そう云われて見ると確かに十年前に流行った軍歌を怒鳴っているのは伊勢先生の声である。佐川女史が亦始まると

云うのは伊勢氏が酔っ払ってやって来るといつも夏村さんを捕えてドタバタやると云う事なのである。「此の間の？」と私が鵬鵬返しに云うと「もうあんた見たの？」と彼女は平気な笑顔で笑う。それで然し私には何の事だか分らないのだと云って、伊勢先生が夏村さんを抑えつけてギョウギョウ云う目に合わせていたのだかと、此の前の様子を残らず云って聞かせると顔を浮べ乍ら「何、何時もはも」と凄いのヨ」と事も無げに云う。と、もうその時、階段を一段一段踏鳴らして上って来た酔漢が廊下をユラリユラリ揺れ歩き乍らドラ声を張り上げて「秋本。夏村はいるか——」と怒鳴っている。「先生、夏村さんが気に入ってんのヨ」と彼女は説明する。「秋本さんじゃないの？」と他人から聞いていた事を持ち出すと「ダメなの——二人ともが先生を愛してるんだけどネ」と云うより早く佐川女史は押入れをあけて壁と柱との隙間にピッタリと額をつけちよつと来てみると云う。「始めるワヨ」と云う囁きの終らない中にドスドスと畳を踏み鳴らす響き、女の悲鳴。私は黙って突っ伏してしまった。二人が——二人の女が一人の男を争って……而も彼は云わば彼女等の恩師なのだ……。私は顫顫を抑えた儘嘔吐を催しそうになる。然し、物音がひどくなつて来ると私は心の平衡を失つてついフラフラと立上って誘い寄せられかの様にその壁の隙間にゆく。そしてピッタリと、私は鼻をくっつけて今度はムサボル様に展開している奇怪な光景を見てしまう……。

伊勢氏は夏村さんを突き倒そうとして肩を擱んだ。その腕が抜けて夏村さんが猿の様に嚙りついた。そして男の顔に武者ぶりつく。伊勢は夏村さんのパーマを両手に握って見る見る両腕に力を入れて振り廻したので夏村さんは可哀そうに目を吊上げ乍ら曳きづられて行って倒れる。女が膝をついたので男が馬の様にのしかかってゆく。それから男と女とが嚙り付き合つて組み打ちになり上になり下になり格闘する。女がよく撓う腕で男の襟首をひき奇き奇切った頸に掌

を廻してしめ上げると男はフラフラになり乍ら女の太腿にしがみつきの女の軀毎ひっくり返そうと揉み合う。スカートがめくれて太い腿が剥き出しになるのを男は頬をくっつけてウンウン唸り乍ら持ち上げ様と焦る。女は抵抗するのだが何分小柄で軽いから次第に持ち上げられる。女の脚が宙に浮いて軀が逆さになる。血が下って苦しいので女は無茶苦茶に両腕で畳を掴もうとして男の脚を掴えこれにしがつく。女が激しくひっぱつたので男と女とは一つになって畳の上にドツと転がる。男は女の上に跨って腕を振り上げると女は痛さに軀を海老の様に反りかえらせる。男は空いた方の手でその女の肩から着ている物を外す。電燈の光をスッポリと吸い込んで砂の様に浅黒く盛上った夏村さんの美した肩。男が虐める。女が笑うともない声をあげて泣く。私は茲で部屋の中にいるもう一人の女について見なければならぬ。秋本ヒサ子は激しく斗争している二人の人間の殆んど真前に座って眼をキラキラと光らせ乍ら彼等を見ている。夏村が泣くと女は蒼くなる。男が女を虐めると女が泣く、すると秋本の白哲の顔が次第次第に蒼ざめて来る。然し彼女は何かもしない。夏村は親友であつた。親友が男に虐められているのを見て何もしない。男が女のブラウスを脱がそうするとき女は激しく手で抗った。男は女の両手を膝の下に抑えつけてしまった。それで今度は易々とボタンを外す事が出来た。女は黒のブラジャーをしていた。それは女の艶のない浅黒い膚を鉄の輪の様にキツカリと締めつけていた。女は泣いた。男は溜息をついた。すると肩を張って見ていた秋本の瞳に絶望の色が流れた。彼女はヘタヘタと崩折れる様に畳にうつ伏した。馬のりになった男がそれも外してしまおうとすると女は野猿の様に吠え乍ら猛烈に身体を躍らして男をふり落してしまおうとして抵抗した。彼女の胸をキツカリと締めつけているクローム色の留金はナカナカ外れなかった。女が暴れるので男はふり落されそうになつて危く机の角で軀を支えた。女は抑えられていた手迄外してし

まいそんな勢いで逆襲した。するとその時迄朦朧と夢遊病者の様な目付きでそれを眺めていた秋本さんがフラフラと近寄ってゆくと細い棒の様な前腕を出して、物も云わずにしっかりと女の手首を掴んでしまった。男はすぐ金具を外そうとした。抑えつけられた女はそれでも軀をいざらしてどうにかして避け様としたが手を持たれていたのでそれ程自由にはならなかった。カチリと尾錠の音が出た。夏村さんは脱がされまいとして何か、わけのわからぬ喚き声を出し乍ら暴れた。すると秋本さんは突然机の上にあつた三角定規をとって彼女の脇腹にその先を押し当てた。女は組敷かれた儘無念そうに涙をポロポロ出した。男は女の胸から黒い乳覆いを外してしまった。私は夏村さんの乳房は初めて見たのだが、濃い土色の特有の湿りを帯びた砂地の様な肌がそこで急に盛り上ってまるでベレー帽を二つ伏せた様な底が張っていてその燦んだ肌の真中に鮮紅色の笑き出た乳頭がピンと反りかえって外向きについている……。とても弾力があるらしく女が身を跳く度び電燈の光にプリプリ動いている。目を固く閉じていた女の頬に血が仄々と上って来る。喘ぎ乍ら身を揉み「勘忍して」と訴える。然し男は跳く女を確りと脚の下に抑えつけてスカートのホックを手早く外してそれを押し上げる。女が暴れると秋本さんが三角定規を確りと脇腹の柔い部分に当てる。男は女の両手を縛ってしまう。

九

伊勢はスリッパを女の胸の上にじかに載せてその足で乳房をギリギリ踏みつける。女は苦しみ乍ら悶える。女の乳房に重い院内用の革スリッパの底に出ている釘が刺さる。女は音をあげる。組み伏された女は何とかして苦痛から逃れ様として首を振る。「ゆるして」女は幽かに云った。見守っていた秋本さんの頬にパッと紅葉が散る。女は苦痛に必死の力で躍り上って逃れ様とする。然し秋本はそれを

動かせない様に確りと女の肩口を抑える。もう全然動けない。秋本さんは落ちていた定規を拾って同時に女の脇腹を刺す。刺し乍ら息を弾ませて喘ぐ。眼鏡が飛ぶ。私は知らぬ顔をして雑誌を読みつづけている佐川女史の前に戻ってゆくとべったりとその前に坐ってしまった。私は馬耳東風とまだキャンデーなんかしゃぶって下らない三文小説をひっきりかえしている此の七つ年下の女の顔をつくづくと見た。その時、隣りの部屋で愉しそうに声を合せて小さく笑う声が聞えた。伊勢先生を前に二人の女はつましく紅茶のスプーンを動かして乍らハイキングの話等をしていた。先生の態度は潤達で如何にも自己に自信のある中年の知識層の人らしく落ちついて暖か味がある様に見えられた。私はまだこのアイシヤドウをした小娘の顔を見つめていたが遂々自分の頭の中には今の自分の感情を吐露するだけの言葉がないのだと云う事だけを知った。その時、佐川女史はチラッと雑誌の三文小説から瞳を外して私の方を流し見乍ら、「何、あれで良いのヨ。あれであの人達結構楽しんでのヨ」と云った。私は長い間の言葉を理解するのに苦しんだ。院長の安田氏の一年後輩で南部医科大学切つての秀才だと云われた伊勢氏が中央の栄職から洩れてこんな街の片隅の町病院に來たと云うのにも色々な経緯があるのである。然し又彼が妻子を持ち乍ら看護婦に情婦を作っていると云う事柄も忘れてはならないのだ。とにかく彼は、否彼等は独りでは楽しめない人達なのだ。私は眩く様な嗜虐の場を見せられ乍らそれ程楽しめなかったのは私が彼等ではなかったからではないか——。私は然しその晩矢張り昂奮していたのだ。怖いからと云ったが私は佐川女史と初めて二人で寝た。夫と別れてから他人と一緒に寝たのははじめてのことであつた。佐川女史の肌は若々しくて向う給与の為かムセかえる様な甘いミルクの香りがした。私達は然し何もなかった。私は夜中健康な若い肌が柔かく自分の腕の中で息づいて休んでいるのを幸福に感じていた。我々は之だけで良

手帖雑誌欄

いのだ。あの人達の様に自身を破壊させてゆく様な事になったら大変だからだ。秋本さんは白大理石と云われて以前は全病院一の美人だと騒がれたものだ。伊勢氏に見込まれる迄の事だそう。しかし瘡せぎすの眼の大きいどっちかと云えば西洋人間型の彼女は男のタンクの様な情熱をうけとめるだけの体力がなかったのだ。彼女は愛する男のために苦しみ親友の夏村さんに相談した。そして友の突飛な頼みに驚いたがとうとう身代りにだけなつてやることを承

知した。しかし——。今見る様に新しいカッパルは愛し合ってしまったのだ。然し彼等は愛人であり親友を捨てる事を忍べない。私が久保看護婦から聞いた事は之だけだった。夏村さんの頬が目立ってコケて来た。浅黒い瘡せた顔に花の様に大きく朱に彩られた唇。あの人は男の患者からも妙に人気があると云う。黙々と仕事をしている主任を見ると私はあの時閉め出された憤懣も忘れて愛情をさえ覚える。夏は過ぎてゆく。こうした事件の中にも……。(了)

沼 正 三

ど、相当楽しめる場面がある。

一二八 知性十一月号及び同誌十一月特集「現代の謎」リーダーズダイジェスト十月号、ライフ海外版八月一日号、等の黒人関係記事これらは手帖で一項として扱う予定。

一二九 向井啓雄「とつくにびと」 半分の頁数を割いて、南阿連邦における黒人の抑圧振りを述べる。ガンサー「アフリカの内幕」と共に読めば、アフリカ黒人の状態について知るところが大きいだろう。白人対黒人の問題についてマゾ的興味を感じる人には必読。

一三〇 五島勉「日本の貞操」(東京リポート十二月号) 同名の著書もある事情通の作で、奇ク今年一月号旭森薫「東京祖界」と同じような内容の犠牲者たる女の独白。筆者は実録で虚構でないと言っている。

一三一 島田一男「屍體の市場」(面白クラブ新年号) 麻薬患者達に勝つたら麻薬をやると釣って、恥知らずな人間競馬をさせ、

一二三 有馬頼義「赤い夜」(文芸九月号) C情巧の好きな男を持った女が初めは驚くが段々それに慣れるところが面白い。

一二四 「日ソ一週間戦争」(文芸春秋十月号) 難民を機関銃で気楽に射殺するソ連女兵のことが出て来る。

一二五 ヴイクトル・フランクル(霜山徳爾訳)「夜と霧」 手帖の本文で扱う予定。

映画については奇ク昨年十月号五〇頁参照。

一二六 カ・ツエトニク(露沢紀志夫記)

「痛ましきダニエラ」 ユダヤ人女学生がナチに捕まり、胸部に野戦娼婦 FEELD-FURE と烙印されて売春キャンプ人形の家に送られる。労働区から快楽区へ。生体実験の材料か

ら生きた性具へ。子宮の手術、人工性器、ドイツ兵に奉仕する誉の強調強制、サービスが悪いと報告されて殺されたくないばかりにする必死の技巧……そして老婆の様に老けてしまった少女達。「潰滅の前夜」における性的奴隷としての奴隷の家畜化が理想的に行われたら、こうだろか、と思われる。そして、そんな意味でマゾ的である。サドにも楽しめることは奇ク今年一月号七七頁にもあるとおりで。

一二七 三上綾子「匪賊と共に」 前者の様な組織的家畜化でなく、従ってマゾよりサド(女マゾ)的意義が強いが、腹に烙印で番号を付けられ、足趾を灼かれ、裸にされるな

それに馬券をかける秘密興行。勿論裸男に裸女が乗るのだ。速報三五と類想。

一三二 島田一男「遮断機は上った」(傑作クラブ新年号) サークスから貴婦人に買

われた矮人が、昔ローマの貴婦人に飼われた侏儒と同じ様に、女の玩具になっている。それが犬の穴を潜り抜けようとして、犬用のわなに掛って死んでしまう。文字通り犬死する矮人が出て来るので楽しい。

一三三 火野葦平「賃取橋」(オール読物十二月号) ここにも(速報一二二参照)性的隷属が描かれる。淫奔な然し逞ましい美女が、生活力のない男を捨てて。人々の面前で平手打して這わせる場面もある。

一三四 南条範夫「被虐の受太刀」(小説新潮新年号) 手帖九十三項で注目した「燈台鬼」は間もなく直木賞になった。この作品も割合評判が良い。試合に名を借りて美貌の剣士達の刀に傷けられることを快とした受太刀の達人が、最後には片恋の恋人たる美女の剣の前に恍惚となり過ぎて真二ツにされる。

恍惚たるは幼時の叔母の傍に似た女の前のぞみとするのは、マゾッホが十三歳の時女丈夫叔母の姿に魅せられ、終生その俟を追ったことに着想したのかも知れない。

一三五 映画「征服者」(RKO) ジンギスカン(ジョン・ウェイン)が韃靼王の捕虜になり、その王女(スザン・ヘイワード)

が中で寝そべっている贅沢な牛車の前に繋がれて、牛と同じ轡を荷わされ、鞭たれつつ車を轆かされる所がある。轆畜願望をひどく刺戟する。私は代役になりたかった。

一三六 映画「猫と正造と二人の女」正

造の母おりんが持参金附の嫁福子に下女のように仕え、汚れ物まで洗ってやるばかりか、土下座して謝る。正造はそこまで卑屈に、ならないが、喧嘩して便所に逃げ込んだり、浜辺で、leg fetishismの痴態を演じたりし、福子は彼の身体の上に平気で両足を休ませる。香川京子は仲々一生懸命に演じているようだ。谷崎物の映画化としては「痴人の愛」や「春琴抄」より成功していると思う。

沼正三だより

一、雑報欄は、一時志した様な網羅的なものでなく、氣附いた少数のもののみですから、そのつもりで読んで下さい。

二、「家畜人ヤブー」の原稿は、公刊誌の制約から屢、筆を矯めることを余儀なくされますが、扱われているものが空想的事物である関係上意味不明になってしまいう時が少くないのを遺憾としています。エキゾチックな感じを出すため、煩を厭わず、英語又は羅典語で事物に名称附けてありますから、カナ書の時も、原綴を想

像して見て下さい。例えば lingua は舌 labrum 唇の意の羅典語です。前者は女性用、後者は男性用の性具なのですが、単にラブラムとあっても、綴りから原義を踏まえてどんな形態と性能かを考えて下さる位の想像力を期待しています。公刊の制約からする意味不明はこれによって多少とも減ずる筈です。

三、次の文献の内容を御存じの方は、編集部氣附で資料を提供して下さい様をお願いします。勿論直接本誌に内容を紹介して戴いても結構です。

(1)「漫談」誌昭和六年四月号、醍醐寺保「ドミンの淫鬼」

(2)同誌昭和七年一月号、浅夜草太郎「東京館女歌舞伎事件」

(3)同誌同年三月号、浅夜草太郎「女性共和国綺譚」——特にこの作品を知りたい

(4)「犯罪公論」誌昭和八年七月号、岡田五郎「そんな男の話」

これらはいずれも男性マゾヒズムかコブラグニアを扱っていると会員番号一六〇三番氏から教示された作品です。同氏が、例の「マゾヒストの告白の五通の書簡の全文(先には要旨のみ教示された)」と共に、右各文献についても紹介の労を取られる様、深く期待します。

読者提供のアイデア

高井好晴

(奇譚クラブの口絵として)

表題 「楽しい一日」

△全体として苦痛なく、楽しいプレイを表現す。▽

①見出し「あなた、もう起きないと会社に遅刻よ」

説明……こうして楽しい一日が始まる。

(図) 若い女性、全裸苦くは海水着の乳房の当るところを破ったもの。使用の縄はすべて布製の紐で、痛くないことを考慮。女は床柱へ抱きついた形、両手は高く上げ、頭上で柱に結ぶ。足も柱に括りつけた方がよい。主人は寝床でゆっくり寝ているところ、女が顔だけねじ向けて夫を起している。

②見出し「朝のお掃除」

説明……夫は洗面、私はお掃除ランラン

(図) 女の服装は①同様、頭を姉さんかぶりにし、両手は前で縛り、膝頭と両足を短くつなく、ホウキを持ってお掃除。

③見出し「ハズは御出勤」

説明……「お見送りは紐の長さだけ、あなた気をつけてね」

(図) 女は後手、足は極く短く、部屋の向う

の端に立ち、こちらの柱へピンと紐が結ばれている。夫はカバンを持ちやさしくキッス、手前に昼食が皿に盛られて居る。

④見出し「御帰宅後一休み」

説明……あなた、お疲れでしょう。でも妾ハリキッてるのよ、一休みなさったら、これでいじめてね。

(図) 女は四ツ這い、両手両足は短くつなぎ背中に盆を乗せ、この上にビールとコップが置かれ、向うに夫の腰かけた足が見える。女の口に鞭と束ねた紐をくわえている。

⑤見出し「写真」

説明……あなた、こんな姿勢でどう?

(図) 縁の柱に正坐してしっかり腰を縛る。膝の間に短い棒、胸に乳の上下に、しっかり紐をまわし両手は後手、ぐっと吊り上げる。吊った紐を高い所(柱がよい)へ結ぶ。身体はずっと前へ倒れ、顔だけ上げて前を見る。前の庭前にカメラを置いて夫がカメラのピン

トを覗いている。

⑥見出し「楽しいお食事」

説明……何も御馳走がなくて御免なさい。せめて私でもお肴にね。

(図) 食卓に御馳走が並び、向うは夫。こちらで両手を後に正坐して畳の上に置かれた皿へ女が首を伸したところ。後手か又は左右の足首へ別々に手を結ぶのもよい。

⑦見出し「食後の休憩」

説明……イヤーヨ、でもいいわ、あなたなら、どんな事をしたって。

(図) 庭に置いた二つの藤椅子に二人とも、ゆったりと座る。夫が向う、女は手足を別々に椅子に座って手を置いた姿勢のまま、しっかり椅子に縛る。夫の手は妻の胸を……。夫の片手は新聞をひらいたまま。

⑧見出し「あすは早起き」

説明……明朝は早出だ、五時に合せておくから頼むよ、この目覚しなら大丈夫。時間通り、愛妻の悲鳴で夫の目が……。

(図) 向うに夫の寝床、朝の床柱の前、平たい台で前に首枷がついている。女は台の上に正座し、首をウンと下げ首枷に入れている。両手は後、背中の中平たい所へ細い大きな渦巻センコーを置き、中央に艾を置く。時間がくれば艾に火がついて女の肌を焼く仕掛。今、夫が線香の端に点火しているところ。或る程度の誇張は止むを得ぬとしても、や

はり社会的に生きてゆくには「囚衣」のような自制が必要。これは可能な夫婦のプレイをやや誇張したものです。従って夫は妻を愛す

べきで、一切傷つけたり汚したりしては駄目である。それ故、この連続画は、すべて同一の服装、紐はすべて赤（印刷では黒）の布紐

を使用、サルグツワはキス出来ないから噛まさない。この程度なら一般にも可能であり、社会的にも容認されるのではないが。

（本誌十二月号に「マゾヒスト・クラブの結成を望む」という興味

の種類三種以上につき詳細な説明、挿絵を提出する。

中継

3、会誌「ズロース・クラブ」

毎月二回発行、アート紙使用、

写真挿絵の鮮明をはかる。各人の告白、紹介記事をはじめ、各種ズロースの型録をのせる。

（準会員のために、つとめて他のフエチに關した原稿も掲載す

るようにする。）

4、代理部をおき次の品を販売する。

(イ) 白、黒、ピンクをはじめ各種のズロース、ブルマース、木綿、絹、メリヤス、ネルをはじめ、ナイロン、ビニール、なめし皮製の特製ズロース、ビニール、総ゴムおむつカバー（前ホ

並 原 新 一

「私のイメージ」

「ズロース・クラブ会則」

なす。（ズロースの定義は、普通子供や女学生が用いるぶかぶかしたブルマース型のものを指すが、パンティ類のビッチリしたものの中でも裾口がゴム紐でしまるようなものを一切を含むものとする）
二、会員は男性、女性を問わず、次の規約にはあてはまる者は一切会員の資格を得られる。

入会資格

- 1、過去にズロースに対して興味をもったことを告白する原稿十枚以上を提出する。
- 2、現在所有しているズロース

める。地方会員はズロース着用の写真で代用できる。）
三、会員は一切、通信により相互の連絡交歓をなす。この連絡はクラブで中継する。

四、クラブの連絡、相談事項及び事業種目。

- 1、文通による交歓親睦の中継
- 2、相互の小包等による郵送の

（イ）特に希望の方のために、中古の穿き古されたズロースの交換、販売に応じます。（この程度のものなら、或は実現可能ではないでしょうか、どなたか發起人となって、クラブを作って下さることを望みます。）

× × ×

私の「縛り美五原則」に就て

—「花嫁受難」に寄せて—

笛 地 佐 渡

奇ク新年号を拝見して、小生の長年の念願が口絵の「花嫁受難二題」となつて実現されたことを深く感謝するものである。小生はごく最近も編集部にそれをお願いしたばかりなので、尚更そのよろこびが大きいのである。小生は何の因果か、生来美女の縛絵に不思議な魅力を感じるのであるが、その理由は全く判らない。長ずるに従つていろいろな理論に接したが、小生を完全に納得させてくれるものは一つもない。こゝでくどくどその理論を展開するのはやめるが、世間で一般に「それは変態だ」と一言の下に片付けているのは言うも更なり、比較的こういう傾向に対しては弁護的である奇ク其他類似文献の「倒錯」だとか「異常心理」だとか云う説明も、決して充分のものではない。又どういう理由でそうなのたかという事に関しては全く説明がついて

いないのである。奇クの誌上にもいろいろの体験談がのつていて「私はこうして変態になった」という説明が語られているが、そういう事実を因とした後天的傾向も勿論あるだろうが、小生の場合はいくら考えてみてもそんな理由が見出せない。とにかく生来の性質というより仕方がない。先天的なものである。先天的なものである以上、本質的な変態者であるということになるのだろうか、そういう人間は他にも沢山いるし、よくよく世間をみまわすと、小生などとても全て及ばない残酷性強いそれこそ変態的な奴がいて、とてつもない戦争だとか拷問だとかをやらかしているのだ、どうしても自分をそういう奴らと同じ「変態者」だと思ふことができない。こういう事に関してのなっとくの行く説明は奇ク執筆陣の諸先生によく説明してもらいたいし、

もらうことにして、小生はたゞ「何の因果か？」と疑問符を投げておく以外に道がない。勿論小生も一時はこの「どうして」という事に一生けん命悩んだこともあり、自分が変態者なのかと悲観した事もあるが、近頃はそういう追求もヒケメを感じる事もサッパリやめにして、持つて生れた味覚でうまい料理をたのしむのと同じように、持つて生れたこの特殊な感覚で、巧みな縛り絵や写生の美しさをたのしむことにしている。なぜならいくら考えても判らない先天的性格の追求や、いろいろな罪悪感に余分の神経を使うことは人生を無用に暗くするばかりでなく、こういう風に小生を生んでくれた親、及び自然、或いは神、に対しての冒瀆だと思ふからである。

こういう立場から、私は理論でなしに、次の如き条件でなければ「不思議な魅力」を感じないという「好み」を持つてゐる。

先ず第一に、縛られる女は必ず若い美女であること、勿論お婆あさんなどでは却つて嫌悪の情を催すから駄目だが、たとえ若い女でも醜女ではだめである。この場合の美醜は顔のみならず姿態を含めてである。

次に縛り方は後手で而も胸高に三条以内の縄目がきっちりとかけてあること。但し、しごきなどの巾の広い布でも構わないが、何れも緊縛感が伴わねばならない。

次に縛られた美女の服装はなるべく豪華な

和服で、振袖姿が理想的である。髪形はこれに伴い日本髪であることが望ましい。

更に責められる女の表情の問題であるが、いかに以上の条件が具備していても、表情が悪いと台なしである。顔の表情は必らず哀愁の情がたゞよっていなければならない。小生は必要以上の苦悶の表情や恐怖の表情は好まない。むしろ抒情画的な何とも云えぬ哀愁感を好む。だからなまじ目をあいていよりも瞑目している方が、無難な場合が多い。以前風俗草紙に振袖姿のお姫様の縛り写真があったが、その表情が全く拙劣なため却って逆効果的に嫌悪感を催して、その本を買わないで書店を立去った記憶がある。その本が他にどんなよい内容があったとしても、それだけで全体に嫌悪を感じてしまう。これも理由は判らぬが、何だか馬鹿にされているような非常ないきどおりを感じたのである。まるで自分の大切にしていた宝をブチこわされた様なムカ／＼した感じである。これは自分の抱く理想像を汚された怒りである。この種雑誌の編集者としてはよく／＼マニヤの感情を尊重すべきである。折角効果的であるべき口絵や作品が、却って読者の感情を害することがあるのを考えて、慎重に編集すべきである。幸い本誌の主幹はセンスある方なので、そうヒドイ事はないが、どうもこの表情の点では

絵及び写真共に充分なものがないようだ。殊に写真は、全く普通の表情しかしていないものが多いようである。

次に体の表情ともいうべき姿態のことであるが、これは作品によっては顔の見えないこともあるので、そういう場合は全面的にそうでなければならぬが、責められて身悶えしているという悩ましい感じが必要である。すくなくとも泣き崩れているという感じは持っていないければならない。これ又普通に立っていたり坐っていたりしたのでは効果的でない。

この様に考えてくると、一般の雑誌は勿論専門誌であつてもなか／＼本当に気に入ったものはすくない。いや、先ずないといつてよい位である。以上のべたのは私だけの特殊な好みなので、他の方々には通用しないだろうが、縛り絵や責め写真に対して、単なる「残酷性」をもえ立たせる対象としている人は別として少くとも「美」を樂しもうというマニヤならば、大体以上の「五条件」「五原則」は賛成されるのではないかと思つてゐる。殊に和装マニヤ会の逸名居氏や和装女の縛り責め展覧会の岸本青柳氏などは同感されるのではなからうか。

それから殊に小生の好みの變つてゐるところは、裸体や露出的な表現よりも、むしろ、服装もキチンととのつてゐる方がよく、普

通に好まれてゐる乱れた姿、胸のハダけてゐるもの、スソの乱れてゐるものの極端不自然な表現などは好まない。勿論理論上縛られたり責められたりすれば服装が乱れるのが当り前だろうが、端麗な服装のまゝ縛られたり責められてゐる方が、より美的なのではなからうか？ 所詮小生は「雰囲気派」にすぎず、最近の好みには遠いのもかもしれないけれどもきつと同感の人もあると思つて同志を得たいと念願してゐる。

以上述べたような理想にソックリはまった作品は、過去に於いて一つか二つしかなかったのは私の悲しい記憶である。我が愛する奇クに於いても小生の好みを完全に表現してくれたものは一つしかなかったが、新年号の「花嫁受難」は最近に於ける快心作であつて大体私の理想像に近い。正に私に対するよきお年玉であつた。というのは、こういうわけである。以上の五原則を完全に具現するときそれは「花嫁姿」以外にないからである。花嫁姿こそあらゆる和装美の極致をなすものであつて、女性の美しさと羞恥とを最高に表現した姿態であるからである。女性の服装のうち最も豪華な、女性の生涯のうちもっとも誇り高き、女性の本質をもっとも強烈に發揮した女性美の表徴とも云うべき花嫁姿を、縛り責めることによつて、サジズム精神は最高の境地に到達し、凌辱感と悦虐美は極点に達す

るのである。女性美の極致は勿論「裸体」にもあるのであるが、その対蹠的な極点としては、何といつても「花嫁姿」以外にないと断言できるのである。勿論花嫁姿にも留袖や洋式のものもあり、それもそれなりによいものであるが私はどうしても「振袖姿」に止めをさしたいと思うのである。こういう意味に於いて、新年号の花嫁受難は小生の趣味をやゝ完全に満足させてくれた。最近珍らしい作品なのである。たゞ難点を云えば、吊られた方の花嫁は服装は端麗で気に入ったが、胸に縄がかけてないのと、振袖の扱いが私の好みに合わないのと、表情が驚愕感にかたむきすぎて悲哀感が足りない事である。この三つが完全であれば、私はこの作品に最高の讃辞をおしまなかつたであろう。次頁の作品はこれに比べれば多少見劣りする。それはつのかくしがしてない事振袖姿としての表現が充分でないことなどである。花嫁姿は殊に下着だけの場合、つのかくしがしてなければ、普通の娘姿と何ら変りはなくなってしまう。同じ意味に於いて振袖の扱いが、振袖そのものの存在を誇張するまでに表現してないと、振袖姿の効果はなく、一般普通の和装女と同格になつてしまう。勿論、題名や其他の説明文などによつて空想を以て之に補いしながら作品をたのしみ味うことはできるとしても、それはやはり不充分である。なぜなら、作品と

いうものは空想実現の方途であつて、それがたとえ不自然であり誇張であつても、マニヤのひそやかな望みを表現してこそ価値があるのだからである。花嫁姿、振袖姿などは殊に特長を持つものであるから、その特長がかくされた場合効果がうすれるのは当然である。面倒でもはっきりそれらの存在を示して頂きたかつたと思う。これは我がまゝな小生だけのたわごとかもしれないが、花嫁姿を偏愛する振袖マニヤの切なる念願なのであるから、失礼な妄評を何卒許して頂きたい。とにかく小生のイメージとは多少のズレがあつたが、この作品は近來どこにもない有難い作品であつた。願わくば、これのみで止めることなく、出来れば、毎号シリーズ的に花嫁受難の美しい作品を連載して頂きたい。これは恐らく他の読者の方も異論はないであろう。いつもく／＼同工異曲の作品をみせつけられている目には当分の間、たとえそれが今まで発表ずみの陳腐な姿態で一通りいろ／＼な縛り方責め方をくりかえして行くだけでも、新しい感覚として歓迎されるであろうと思う。私共マニヤの立場としては、別にそれほど珍らしいアイデアでなくごく普通な縛り方で結構であるからせし続けて頂きたいと切望する。勿論花嫁のみならず、舞妓、姫君、町娘、近代娘の晴姿、色若衆、其他何でもよいから「振袖姿」の縛り絵を毎号一つや二つは必ず発表

して頂きたく、そうすればどんなに同好者を喜ばすか知らないし、誌上に優雅で上品な独特の雰囲気をもたすこと必然であると信じてゐる。特に編集長と北原画伯にお願いする次第である。その場合五原則を何卒参考にして頂きたい。この線のものなら、いくら掲載しても現在の諸制約の範囲を超えることはない筈である。

我々が縛り絵を愛好するのは、普通の美人画に見られぬ独得の美を求めらるからであつて決して残虐性の発露ではないのである。だからどうせ美を求めるのなら、その極致を求めたいのである。それが小生の縛り美の五原則となつて結晶したのである。縛り絵なら何でもよいというのなら、本誌の様なマニヤ雑誌はいらない。一般誌に求められぬ耽美の世界が本誌に実現しないのならその存在価値はない。その点、本誌がこの五原則を採用されば、いよ／＼その価値を増大されることを確信するし、立派に一つの芸術のジャンルとして存在を主張しうるから、決して過去に於いていかかわしいエロ本やグロ本と混同され発禁弾圧の憂目を見た様な事態は再びくり返さないですむであろう。我々読者は本誌の安泰と永続のためにも、この様な温健にして芸術性の香り高きあり方を中心とすることを望むべきではなからうか。とにかく小生の夢が、なかばあきらめていた夢が「花嫁受難」によ

って実現された嬉しさの余り、この嬉しさを更に完全に実現し、永続させてくれるものは世界広しといえども本誌一つしかないこと、そして目下その作家としては北原純子氏たゞ一人であること、その貴重な本誌と北原女史が、この「花嫁受難」を契機として、意識的に小生の提唱を支持され、マニヤの夢を満足させて頂きたいと念じる余り、くどいようだが再三お願いしているのである。

北原画伯については、昭和三十年五月号に始めて「春の影」を発表された時から、小生はその作風に魅かれてしまったが、最近も「壊れ易き獲物」「オランダ屋敷の怪」などの好ましい作品を発表されて、私共を楽しませて下さって居る。小生は「春の影」と今回の「花嫁受難」を最も好むが、一寸他の雑誌の諸大家にもまねの出来ない傑作をものさされる。誠に本誌のホープたる方であると思つてゐる。どうか一つ大いに研鑽されて、より美しく、よりすばらしい大作を発表して下さい。んことを、衷心よりお祈りしている。

描く者と見る者は同一人でない限り完全にそのイメージが一致することはありえない。だから絵にしる文にしる、自分のイメージに一致しないものや個所は、修正して鑑賞する以外に方法はない。小生は過去に於いて絵を描く人を数人親友として持ったが、やっぱり自分の好むように描いてもらう事は困難であ

った。ましてや一般の雑誌の挿絵などを見てそれをどうしてくれなど頼むことは出来なから、そのもどかしさを常に感じてゐるのであるが、本誌はその点読者に誌面を開放されてゐるから、こうしてくれと頼むことが出来るだけでも幸福だと思う。

さて、先に述べた五原則は、たゞに絵画ばかりではない、むしろ映画や写真には、もっと適用されなければならないのであるが、これは絵画以上に困難なので困つてしまふ。絵は作者さえその氣になつて貰えば、どうにでもなるものだが、写真では費用の点で先ず行詰つてしまふ。更にモデルのセンスもあるし何か他の面倒な問題も関係するようであるから、本誌のような専門誌でさえ、小生のイメージは実現された事がない。映画に至つては一般的なものだけに尚更である。今迄小生の見た映画の中で、花嫁姿で縛られた女優は「夕立勘五郎」の花柳小菊だけであつたと記憶する。この映画はスチールにも、彼女が白無垢の花嫁姿で縛られた場面が掲出された程度で、夕立勘五郎の所へ嫁に行く途中に悪侍（石黒達也だつたと思う）にさらわれ、とじ込められるが、そこへ勘五郎が救いに来て、剣戟の間にも身悶える姿を見せる。割合気分のある映画でも表情の点でどうも優秀なものは少いようだ。小生の記憶に残つてゐるのは深

水藤子や大倉千代子などが比較的よかったと思う。「右門江戸姿」の大倉千代子のお蘭だとか、「風雲将棋谷」（旧作）の彼女は実によかった。将棋谷では振袖姿の典型的な美しい縛られ姿を見せてくれた。小生もずい分縛られ映画をみてまわつたが、記憶に残つてゐるのは此の他二、三しかないもので、やはり傑作は少いのではなからうか。殊に五原則に適合するものは全く稀である。やはりこの種映画も又、マニヤ独得の製作が出来るまでは満足なものとは望めないだろう。最近の傑作といわれる「水戸黄門、鳴戸の妖鬼」の井戸責めだつて、つるべ縄を上げたり下げたりする坊主がおかしな演技をするので、悲惨な場面なのに客席から哄笑が起つたりして興ざめであつたし、三笠博子（緑眼童子）の吊責めの表情が案外香気な顔であつたのも惜しまれてならぬ。それに引きかえて夏川静江（マリヤ観音）市川小太夫（京洛五人男）などの責め場は凄く熱演であるように、婆さんや男の責め場は容赦なく演出しても、かんじんの美女や若い女の責め場が不十分で遠慮がちであるのは、どうしてだろうか、やはり何かの制約を恐れてであるうか、とすると現代の風潮は「残虐性」の表現は平気で許して、その美的表現は忌避するといふ甚だしい矛盾に陥つてゐると断ぜざるをえない。大体平気で残虐を行う権力者達は、緊縛美だとか、縛絵美だとかに

は、全く縁なき衆生であつて、人間の誰もが持つ残虐性を昇華することを却つて「変態」だと弾圧するのであるから、彼らの如き低級な存在はないであらう。残虐性の最大の表現はいうまでもなく戦争であつて、「編集余滴」(新年号)で、いみじくも編集長が喝破されている如く、近來とみに戦争の記事や映画が氾濫しているのを一体何と見たらよいか、憤懣を禁じえないものである。

芝居に至つては「花嫁」の責めは全くないので残念だ。これに準ずるものとして僅かに「金閣寺」の雪姫があるだけである。しかし雪姫には縛りだけで責めがないのでマニヤには物足りない。これに「明烏」か「皿屋敷」をミックスしたら素晴らしい演劇となるであろう。私は「大江戸五人男」(阪妻主演映画)の劇中劇で、「皿屋敷」のお菊が美しい振袖姿で井戸吊に会う場面を見たので、其後浅草の某座が珍しく「お菊責め」とわざ／＼副題までつけてポスターをはつてあるので見に行つたところ、お菊の扮装が黒っぽい被布みたいなのを着た中年女なので、がっかりしたが、その上演技がまずいのでヘドが出そうになった。夢に描いたイメージを汚されることがいかに心理的に有害であるか、はかりしれぬものがある。期待したものが裏切られるという事は何事によらず悲しいことだが、殊に人一倍執着を持っている場合だから尚更であ

る。センスのない演出や演技ならむしろ上演しない方が人氣に障らないであらうと、しみじみ痛感した。故にあらゆるマニア相手の企業は最も慎重でなければならぬまい。この他「中将姫」は桃色の振袖姿で美しいが、縛られていないので興味は半減する。もっとも看板には縛られた姿になっているが、日本の最高演劇である歌舞伎までがどうしてあゝいうウソを平気でやるのか、良心の程が疑われる。とにかくマニヤだけが集つて独自の責め場専門の劇団を結成するより他方法はないと思う。映画製作はムリとしても素人劇団を作る事は実現可能であると思う。本誌読者の中でこれに賛成協力する同志はないだろうか？ 映画製作だつて、真にマニヤが協力出資してやれば決して出来ない夢ではないと思う。本誌がそういう幹旋の労をとられれば必ずどんな企画でも出来る筈だと信じている。小生は数年以前からいろいろな構想を持っているし脚本なども書いた事がある。実は本稿でそれらを発表するつもりだったが、余り長くなるので後日にゆづることしよう。

小生年来の夢の一端が遂に実現した花嫁受難を拝見した感激の余り筆をとった処、どうもとりとめのない事を書きつらねただけになつてしまったが、これは私の告白であり、訴えであり、イメージであり、アイデアでありレポートでもあるから、ゴタ／＼してはいる

が何かの参考になると思う。

ともあれ私は悦唐趣味遍歴の果てに、縛美五原則に到達して、その見果てぬ夢を具体化するためには独自の構想が必要であると悟りこの五原則に基づき、美人面の製作依頼とか、縛絵責め場専門誌の刊行とか、劇団結成とか、映画製作とか、作品展示会とか、作品資料等交換会とか、即売会とか、簡易振袖の考案頒布とか、悦唐人形の製作頒布とか其他実にいろいろ／＼奇抜なプランを練つて胸中に蔵して居り、数年前実際に脚本等も書いたこと迄あるが、未だこれらの発表の機会さえなかった五原則についても姿態のアイデアなど自分丈けの好みはいくつも持っているが、これらは独善的なものだと思ひ発表を憚った。もし許されれば、今後発表させてもらいたいと思つている。

終りに逸名居士氏の「和装マニヤ会」とか岸本氏の「展覧会」とかの実現を期待すると共に、同好趣味者の大同団結連絡協力により何か面白い仕事を実際に行うことを提唱したい。同志の出現と御協力を切に祈るものである。

【伝言板】 ○大阪の高山とし子氏、神戸の鈴木二三夫氏、桜恵之介氏、大阪の秦圭子氏等から寄せられた通信、原稿は何らかの形で漸次発表しましょう。

〔レポート〕

シヴァンシーの自由の線

〔装苑（一九五五年一〇月号）〕

（柳沢吉保、投）

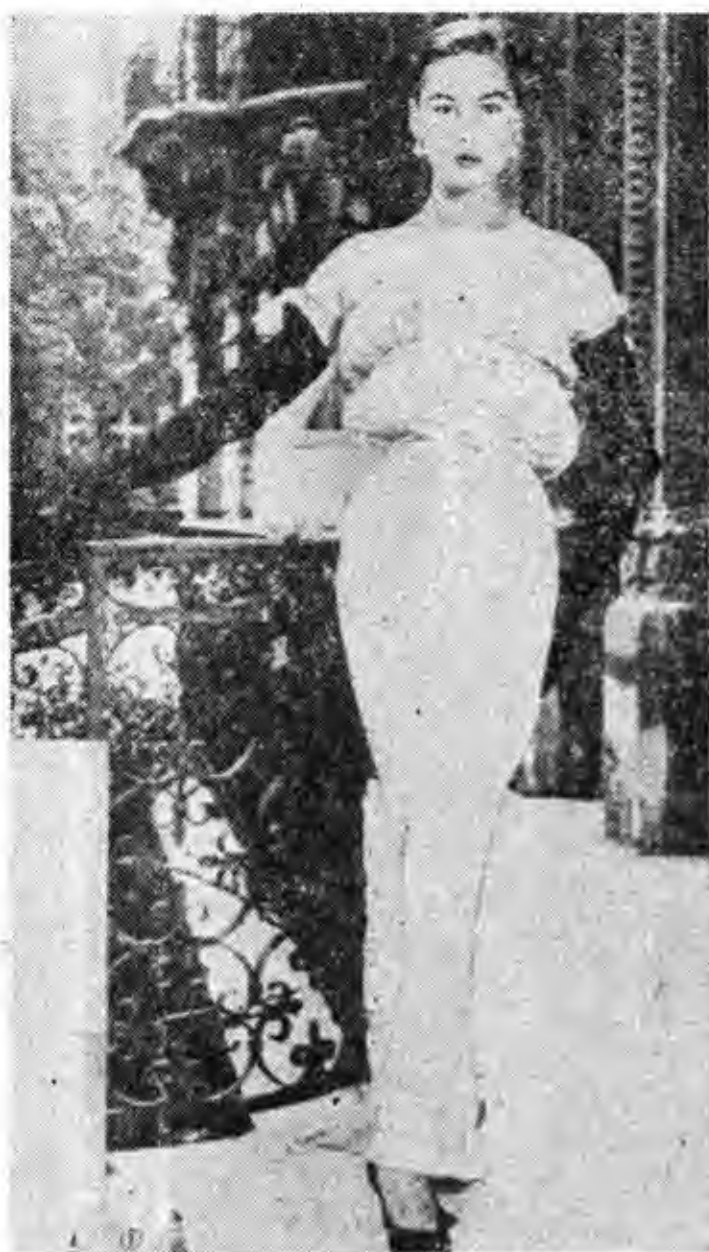
今シーズンの問題作といわれる、シヴァンシーの革命的シルエット（自由の線）は（ロブ・シユミーズ）をもって代表される。シユミーズのように肩から体にそってゆるやかに流れる線がその特徴である。胸のほりを見せず、ウエストは暗示さえせず、上から下までズボットとした表情をもっている。中で最大の特徴は、東洋風の味をもつ奇抜な帽子である。

足首までかくし、細く流したスカートは、歩行に相当の拘束を受けます。ブラウスの二段に締める様なリボンは何か緊縛を暗示します。名が欲を云えば胸の上に欲しいところです。名前はわかりませんが手袋の黒も、又長いのも緊縛された場合素晴らしい感じを出してくれそうです。

イビキ防止装置

『洋裁雑誌であるから緊縛こそありませんが』

〔朝日新聞十二月一日附朝刊〕



（写真説明）

① 淡いクリム色のサテンのブラウスに、やや橙色がかかったクリム色のピロイドで作ったスカートの組合せ。（装苑一九五五年十月号より）

イビキは口をあけて寝るから出るというのでウィーンのあるお医者さんがイビキ防止の装置を発明した。写真はそのいかめしい装置。

（UPサン）

『この写真を何の気なしに見たとき、思わずドキッとしました。イビキ防止装置と申しまして、立派なサルグツワじやないでしょうか。この装置によりイビキどころか、声を発することも防止出来ますし、口中へ詰物をすれば、従来の欧米のギャグと変りない訳です。顔の美をそこなわず、又可愛いお口を拝見出来るだけ楽しめそうで好感が持てます。（写真は省略）』

☆夫婦がズボンを奪い合う

〔東京衣料品卸商報31・11・15発行第一八〇号、ラーゲル作十七世紀の版画〕

封建時代のヨーロッパでは、ズボンは支配者たる男のシンボルとされ、スカートは女の特長、貞節、柔順、羞恥、婦徳とむすびつけられた。ズボンは男のシンボルであると同時に権力の象徴となった。従って、この絵のように妻が夫のズボンを奪おうとすることは夫を尻に敷こうという意味を現わし、男女の権力争いをフウシしたもの。服装と人間関係の歴史の一端を説明しているものである。（絵は省略す）

（春木俊野、投）

浣腸とおむつ

— 其の二 —

月岡映子

○ 毎週土曜日の午後は社長さんが会議の為に工場の方へ出席してしまわれるので、社長室に残るのは私一人きりになってしまいます。電話の応接位で別にやる仕事もなく社長が戻るになる退社間際の時間までは、私の自由の時間になってしまいます。

今日もその土曜日。呆んやりと机に寄り窓の外を眺めながら一人想いに耽っています。私は一人でぼんやりと、とりとめのないことを考えているのが大好きなのです。

ふと、ある事を思いつきました。いいえ前から思いついていたことなのですが、なかなか実行する勇気がなかったのです。電話帳を取り出すと、向いのビルの地下室にあるM薬局のナンバーを調べ、さっそくダイヤルを廻してみしました。

——もしもしM薬局さんですか？こちらは

K医院ですが急に2008のイルリガートルが必要なのですが、今ございますでしょうか？

——K医院でございますね。一寸お待ち下さい。今調べさせていただきますから……。

私は以前からイルリガートルが欲しくてありませんでしたが、一人で薬局に入り求める丈の勇気がございませんでした。それで考えたのがこの茶目なお芝居です。

——どうもお待ち致しました。ございますからどうぞ……。

——そうですか、では早速、使いの者を送りますから……。

受話器をかけると、私は思わず一人でくすりと笑ってみせました。大成功——。あと三十分もして、私自身でM薬局へK医院から来たと言えど黙ってイルリガートルの包を渡してくれるでしょう。——誰にも怪しまれず、聡しい想いもせずに永い間欲しい欲しいと思

い続けていたものを美事に手に入れることが出来るのです。

皆様、こんなお芝居までして医者でもない私がイルリガートルを手に入れようとする私。もうお分かりでしょう。浣腸マニアなのです。

包を持ってオフィスに戻る途中、階段の所で美智子さんにばったりと逢ってしまいました。

——今日は、今日はお暇なのでしょうか？

——え。

——あとでいらっしゃいな、この間見せてあげたドレスを着たM子やK子達の写真が出てきているわよ。

——え、どうもありがとうございます。あと伺わせて頂きます。見たいわ、あの綺麗なドレスを着たお写真を。

美智子さんは私のオフィスの真向いにあるサクラ・ファッシュ・モデルのマネジャーをしていらっしゃる方。大柄でどちらかと言えばM型の女性で、それ丈にさっぱりとした屈託のない方でした。私は暇な時はよく美智子さんのオフィスに遊びにゆき、美智子さんを始め、二三のモデルの方ともすっかり親しくなっていました。ジョーより写真の方を多くなさっている、あまり大きなモデル・グループではありませんが、お仕事は忙しいらしく美しい方ばかりでした。中でもM子やK子

さんは私の好きなタイプの方で、私の浣腸ブレイの夢の対象に出てくる方々です。——
勿論、男性的な美智子さんもそうですが……

——映子さん。この箱を開けてごらん下さい。何が出てくると思う。

——まだ、新しいドレス？ そうね季節から言ってクリスマス・パーティー用の豪華なイヴニング・ドレスではなくて？——

——そんなロマンチックな物ではないのよ、まあとにかく開けてみなさいと言われ、テーブルの上の箱を開けてみると、大人向きのサイズには仕立ててはありますが、一目で分かるベビー用品で、ケープとか、おくるみ、ベレー帽等でした。

——あら、少し大きい様ですけどベビさんの物みたい。

——そうよ、これはベビー用品専門のM社の宣伝に使うのよ。Kデパートに今度新しくベビー・センターが出来たでしょう。モデルにこれを着せて新しいデザインのベビー用名のショーをやるうと言うのよ。

まあ、驚いた。商魂がたくましいのね、と驚く私に美智子さんは、

——まだこんなのはいい方よ。ケープとかおくるみなんて。M社特製のおむつやおむつかバーのモデル用があるのよ……

ほら、これよと箱の中から透明のや桃色の

や色とりどりのビニールで出来たおむつかバーや純白のぎざぎざの縁取りのあるアメリカ風のおむつを取り出してみせてくれるのでした。

いずれもモデルさん達がつけられる様に大型に作られてありました。

——嫌だわ私と、顔が赧くなるのを意識しながら、私は大げさに机に顔を伏せてしまいました。

浣腸とかおむつと言う言葉を耳にしたり、活字を目にした丈で、全身を震わせて妖しい興奮のとりこになる私の目の前に、いきなりおむつかバーを見せつけるなんて、意地悪な美智子さん。それともなにもかも御存知なのかしら？

——誰かこれをつけてショーにお出になるの？

——これ丈はお断りしたわ。こんな役は誰もなり手がないわ。誰だって嫌だわ。

いいえ。ここに一人いますわ、と心の中でそう言いながらも、私はつとめて冷静に。

——嫌ですわ。私なら死んだって……

私の傍にいてるSビルの中に務めている大勢の人達の中には、きつと何人かは浣腸やおむつに受着を持っている人がいるのに違いはない。そして秘かに各自のブレイを愉しんでいるのです。

おむつを当てた時に感じる緊縛感、我慢し続けていた生理を我慢しきれずに洩らす時に感じる心よい排泄感——そしてその後で感じる烈しい汚辱感等と、今更こんなことを申し上げるまでもなく充分に御承知のこととごさいますよう。

然し私達マニヤとは全く異って御病氣、其の他の原因で、否応なしに大人になっても、おむつのお世話にならなければならない人達も沢山いる様です。重症の患者は別としても交通事故等による脊髄の故障から来る排泄器管の不能、また膀胱炎等の後遺症としての尿失禁等がその例で、一日中おむつを当て通しにしておかなければならぬそうです。

又夜尿症に悩まされる若い女性の方が案外に多く、夜具を濡らさぬ様にと、夜お休みになる前におむつを当てている方もあります。

いつ頃でしたかは、はっきり記憶してはおりませんが、ある療養雑誌に、医師に整形手術をすすめられ、自分も是非それを行いたいのだが、夜尿症の為に入院出来ずに困っているが、何にかよい方法はないかと訴えている二十才のお嬢さんの質問が出ておりました。が、その答に、早急の治療は不可能であるし又、整形手術によい時期を失するの好い事ではないから思いきって入院なさい。夜はおむつをお使いになればよいでしょう、とある病院長の回答が出ておりました。タイプライ

ターを習いに通った頃、そこで親しくなったF子さんも夜尿症でお困りでした。その為に愛情にも破れ、一度は自殺まで計られたそうですが、今は信仰を持ち明るい生活を送っていらっしやいます。未遂で病院へ運び込まれた時、半ばやけ気味な口調で、私にF子さんはこう申しました。

——映子さん。私は彼を憎んだりはいしなわ。私が悪いんだもの。考えてごらんない。おねしよをする花嫁さん。おしめを当てなければ安心して寝られない花嫁さん。——

私のふんどし

③

松原三千代

夏も過ぎて、はだかの季節も終り、これからは私にとって物足らない冬に向います。何故ならふんどし姿を見ることが、自分のふんどし姿を見せる機会も少なくなってしまうからです。それでも、この夏以来、お隣りの若奥さまが、だんだん、ふんどし愛用者になつてきましたので、私の夫と、合計、男一人女二人の愛用者となり、楽しんで行けると思っ

考えた丈でもお可笑いいわ。恋なんて私にとつては高嶺の花なのよ……。

「おむつを当てた花嫁さん。」私達マニヤにとつてはあまりにもロマンチックな言葉ではないでしょうか。

現在、私は今日求めたイルリガートルを入れて十数本の浣腸器をコレクションとして持っています。又おむつは、アメリカ風の純白の物が二ダース位に日本風のユカタで作ったおむつが二十枚位、三種か四種類の柄の異つた浴衣で作られたものです。

私自分で考案したフランネルとビニールを組合せて作ったおむつカバーがあります。これ等は整理ダンスに一杯で、未使用の物も沢山あります。

おむつをコレクションしている「おむつマニヤ」の方がいらっしやれば提供してもよろしゅうございます。

誰方か、あまり人目にたたぬ様におむつを乾燥させる方法を御存知の方は教え下さいませんか？ 汚れたおむつの処理に一寸困っております。

——其の二完——
されたのです。私は鏡の前をしばし離れることが出来ませんでした。

× × ×

私は私なりに、ふんどしを次のように分類してみました。(布の中は大体サラシの巾)
① 六尺ふんどし……長さは六尺以下でも以上でもよく、長い布一枚だけで、しめるもの。お尻は丸出しになる。

② 越中ふんどし……長さ二尺から三尺の布の一方の端にヒモを縫いつけるか、通すかして、そのヒモを腰で結び、ふんどしをお尻から股をくぐらせ「前へ上げ、さらにヒモもくぐらせて、余った布を前へ垂らす。お尻はふんどしで包まれる。

③ もっとふんどし……長さ約一尺五寸の布の両端にヒモを通し、または一方を縫いつ

け、片足から穿き込むようにしてしめる。ヒモを縫いつけた方を前にするか後ろにするかは、その人の好みだが、両方とも縫いつけてしまうと用便の際に差支える。お尻は、大体包まれる。縫いつけた方を前にしてしめれば、お尻を丸出しにしておくことも出来る。

④ 三角ふんどし……もっこふんどしをしめたときは、股下からお尻の割目へかけて、ふんどしが、細く絞られて食い込む部分だけ、ヒョウタンの胴の様に裁断加工し、また正面と後ろの部分もそれぞれ逆三角に裁断して作る。これでふんどしの全部分が、身体にピッタリ密着する。お尻は殆んど丸出し、ヒモを縫いつけない方の布の端にはビニール線をシンに縫い込んでおくと、シワにならずピンと張り切った三角型が得られる。なお男用ではとくに前部に余裕ヒダをとって、相当のふくらみを持たせておくことを忘れないよう。

⑤ 水泳ふんどし……一般市販の、前が三角で後ろがタテ一本のふんどし。もちろん市販の水泳ふんどしは男用。女用には前部の余裕ヒダは不要。肌の露出面積は最大、お尻は無論丸出し。

⑥ 以上の基本型についてのそれぞれの変り型。例えば、三角ふんどしの前部中央に丸い穴を明けてみたり、水泳ふんどしの後ろ

のタテ一本をとくに太く丸く作って、変った圧迫の味を出してみるなど、応用変化は使用者の好みにより各種。

× × ×

ズロースからパンティ、さらにブリーフとめまぐるしいほどの下穿きの変り方をみていますと、私たち女性の方が、早く、ふんどしに移るのではないかしらという楽しみがわいて来ます。

近く、ブリーフ以上のふんどし型が、発売されるといふ話もきいています。これからはいいよ、女性服装が下着時代となり、最小の下穿きで、衛生的で、着用感がよくて、スマートで、実用的で、ということになれば、落着く先は、ふんどしではないでしょうか。現在のブリーフなど、正面からみれば、ふんどしと変りありません。後ろの、お尻もだんだん出て来ています。水泳着では殆んど前も後ろも完全なV型になりつつあります。

現在のブリーフから、ふんどし型ブリーフとなれば、お尻は半分以上出るでしょう。

そして次に腰の両側の部分の布が除去されると、もう三角ふんどしです。そしてもう一歩、もう半分お尻が出れば、いいのです。その時がふんどし時代の到来です。デパートの婦人下着売場に色とりどりの、ふんどしが華やかに並び、マネキン人形の腰に、各社の趣好をこらした各種各型のふんどしが、みられ

る日がくるまで。私は、「女性の皆さま、ふんどしをしめてごらん下さい」と、叫び続けます。

× × ×

男の人こそ、堂々と、この気持のいいふんどしを何故しめないのでしょうか。男の人でふんどしをしめるのに、一寸ためらったり、気恥しい気になっておられる様子は、私には歯ガユクで、残念でなりません。私の目からみると、ふんどしをしめていない男。パンツやサルマタの男ほどだらしがなくて、みっともない姿はありません。

とくに若い人たちが、キリキリとしめる六尺ふんどしの男らしさ。若い男の皆さん。パンツやサルマタのようなあんな、ブザマな、だらしのない下穿きは、今日限り、やめて下さい。越中ふんどしもだめです。男なら、若人なら六尺ふんどしか、水泳ふんどしをキリリシヤンとして下さい。私たち女性も今に……否、もうすでにふんどし女性、かなり増えているはず。颯爽とベープを行く私のスカートの下には、いつも真紅や、紅白シマのふんどしが、ピッタリと締め込まれているのです。だから、こんなに明るい、楽しい顔なのです。ふんどしの着用感。それは絶対です。一度しめたならばもう離せなくなりま。そしてこの『ふんどし』という言葉だけでも美しく感動的ではないでしょうか(未完)



玉稿落穂集

——誌上にのらなかった

原稿のことども——

編集部

先月号に引き続いてサジズム関係の原稿を

選り出してみましよう。手当り次第に引っぱり出してみても、この関係のものは必ずといっていい位、手に触れてきます。只、冒頭から直ぐ厳しい責折檻に入って、なんでそんな事がされているのか一向に不明のものであったり、責めの方法が極めて類型的であったりして、読者諸氏にわざ／＼御紹介する程でもないものが多いようです。尤も、時間をかけて、ゆっくり読んでゆけば価値のあるものもあるかもしれません。暇があり次第、極力、眼を通すように努めましよう。

先ず本月号で第一に御紹介しようというのは、最近送稿された次のようなものです。

針金の効用／＼私の研究Ⅴ

万曾由女郎

針金がある。その事を見つめて、私はじつ

と考えるのである。此の細いけれど強い力で痛めつける紐を、一体何のために、どう使ったら良いのか？ 傍では恋人の淳子が熱心に本を読んで居た。バルカン戦争である。その嗜虐趣味に富んだ内容は、はじめて読む淳子を、多分に刺戟するのに不足はない。

正直、私たちは普通の恋愛感情の他に、多少の異常生態の花を咲かせ、相接して居り、むしろ私の解釈からすれば、更に高く更に深い男女の結びつきであるとしている。

私はかなり長い時間、私のために用意された、見るからに垂涎ものの白い餌食を眼前にして、お預けをくった犬のように、その針金の用途を考えねばならなかった。考えても容易に適当なアイデアが浮ばないのは——そんな

な面倒臭いの待ってられない。それより早く……」

『——と訴えるような淳子の瞳が、ときおり意識されるせいかも知れなかった。

夕食を家人と一緒に済ませ、風呂を出ると私たちは二階へあがり、中から鍵をかけての籠城ぶり。家人も遠慮してが上って来ない。が、他のときのように派手な悦唐遊戯を繰り広げるわけにはいかない。もしこれが我が家でなかったら、恋人の豊かに肉のついたお尻やむっちりした乳房は、たちどころに紐と縄の服をまとうか、また彼女自身の細いビニールバンドの犠牲に供されるかも知れなかった。しかし、せっかくの機会に出遭いながら今夜は成るべくひっそりと行かねばならないという条件つきのものであったから、私もそれに合った何か、新しいテを案出せざるを得ないのだ。

室内は割に温いので、すでに淳子は服を脱ぎ、ブラジャーとパンティだけの張りきった姿になっていた。そういう彼女は、膝を崩し片手を畳について、バルカン戦争に夢中の様子。青色のブラジャーが小さい位の、いまにも重くはみだしそうな豊満な乳房を見ると、私はつい、この針金の先で突き刺してやろうか！ などと想ってみた。こんな細い針金では縛ってみるとしても（実際には彼女自身は肌にキリキリと喰い込む痛みを苦しがるだ

ろうが)、私の視覚感にさしたる効果はあるまい。女体を緊縛するには、やはり荒縄やゴツい麻縄などがよく、その点で嗜虐味を覚えさせるようだ。

淳子は尚も、内容の……」

『彼女の指が頁をめくった。軟かそうな白い指である。ふと、私はずっと前に読んだボワザンの小説の中に、乞食のジークというのが娘の指に、針金をまきつけて加虐する場面があったのを想起した。』

そうだ！これをやってみよう！私はいきなり椅子から飛び上り針金を手にしたので、淳子はびっくりしたように私を見上げた。が、私の意図を測ることができないで「どうしたの？」と、きいたただけだった。「ふっふ」

私はいたずらッ子のように笑い、ゆっくり彼女の顔に唇を近づけた。……」

『はじめ私は、淳子が暴れはしないかと懸念して、黙ったまま彼女の両手を背中へまわし紐で括った。「こんなもの、すぐ解いちやう！」淳子の云う通り、それはたいしてきつく縛ったわけではなかった。と云うのは、私の目的を達するまでの予備手段であったからだ「イヤ、これからなんだよ」意地悪く笑う私へ、淳子は不審そうな眼を向けた。』

さて、私は適当な長さに切断した針金を取り、彼女の可愛いふくらした掌を掴んだ。まず拇指をのばさせ、その付根の方をやや強

い力で針金をひと捲き、そして二まきにまきつけた。針金は皮膚に喰い込んで、固い骨を圧えつけた。人差指も第一関節と付根のあいだへ二重に緊め、順々に、指切り遊びのようにに連れていった。右手が終ると次は左の指。中には余り固くまき過ぎたため、血色を失って青白くなる指もある。手をそのままに、今度は足の番である。こいつもドタンバタンを防ぐため、足首を揃えて縛った。足先を掌で掴むとヒヤツとする。その感触が、不意に、これも私の自由にできる彼女の体の一部かと思つて、無暗に愛しく思われて、ぐっと力を籠めて握りしめた。私は熱心に彼女の足の先を愛撫しはじめた。風呂に浸った足はきれいで、ふくよかなパンのようである。淳子は、

私の指が足裏から指の方へ近ずくと、いきなりぐっと指先を折り曲げて、私の指を捉えて押えこんだ。「いたずら奴！」私はいつまでも愛撫し続けたい気持を抑え、足をポンと叩くとす速く、そのいたずら指から針金で縛り上げた。それでなくても足の指というものは関節が異様にくびれ、蒸し豆のように膨んで軟いのに、細い不気味な針金は一層、奇妙な形になるほど喰いこみ、容赦せずにきめつけるのだ。私はちようど簾を編むような手付きで左右十本の指を縛り、余った分で足裏の土踏まずの凹みあたりで、多分に緊めつけて結んだ。斯くして指縛りが全部終ると、それぞれ

残した針金の端を引き、手はより後方へ、足は上側に曲げ、次第に背の方へ押し曲げて針金と針金を結びつけた。淳子の五体は、手の指と足の指ができる限りに接近して、お腹を畳にくっつけた他は、胸部の方も太腿から足の方は完全に宙に、弓状形にそりかえった。この姿勢はかなり苦しいらしく、見るまに彼女は呼吸を乱し、大きく喘ぎはじめた。私は今はもう無駄になった紐を取り去った。すると急に、お互いに引き合っているものがただ針金だけとなったので、手足の指は先へ引っぱられるばかりでなく、横へも引き合い、今にも引き抜けそうに黄白になり、細くくびれた。私は、その苛酷な現象に昂奮して、彼女の肩先を前へ押し倒した。淳子は「あッ！」と小さいが鋭い悲鳴をあげた。手の指が足の方を引っばって体はシーソーのように前のめりになった。「いたい！指が……指が千切れそうよ」その眼には涙が浮んでいた。私はさすがにちよつと可哀想になったが、また思い直して、「弱音を吐くな！」ときめつけてから肩から背の部分を抓りあげた。それから取りつかれたように……」

『……そのたびに淳子が「あッ！」とか「むッ！」とか低い殺し声で呻くのが、また妖しいサチステイックな雰囲気をかもしだした。私のそうした責めに耐えかねてか……』

『……そして自分自身の力によって互いに引

き合う針金は尚更に、指をひきちぎりそうに見えた。弓なりに上方へしなった体は、ただそれだけでも大いに苦痛なのに……」

「肌には一面に汗が滲み出て、私が責めの手を加える毎にもがき苦しみ、可愛い顔をゆがめながら堪えようと努めるのが、私には可憐なまで見えた。彼女の悲鳴や呻き声が下へ聞え、家人が心配して上って来はしないか、とヒヤヒヤし気が気ではなかったが、いつしかそれも忘れてしまったほど、この新しい試みに……」

『いかに同好の恋人と云えども、針金を外した無惨な指の赤擦れを見たときは、私のためによく堪えてくれたと、心から感謝せずには居られず、泣き出しそうな表情で指を見つめる淳子の体をひき寄せ、力をこめてかい抱いたのである。』

この時以来、私は淳子の身体のうちでも、指、鼻、舌、耳、臍といったような小部分だが、かなり重要な役を演ずる体部に惹かれ、彼女の身体の中に何一つ愛さないものがなくなった。愛するということが私たちの間ではいじめ、なぶり、傷めつけ、虐げることの意味するのは当然だと云って、同好の士が反対するだろうか――

私は、今、淳子の鼻について研究中だが、この鼻或いは鼻腔への責めは、ひどく面白く又、大分嗜虐的な効果があるようだ。そのう

ち発表させて頂きたい。ただ顔などへの加虐は随分と用心しないと、とんでもないことになるからしっかりした研究が必要だろう。

(終)

「責め方」の描写のくどいところ数箇所を削除して『針金の効用』の全文を掲げてみました。削除した部分は、特に説明を加えなくとも、筋には関係はないのでこの文章で、作者万曾由女郎氏の云わんとしている事は大体紹介出来たものと思います。縄や紐のかわりに針金を使用したということが変わったといえれば変わっていることですが綿の柔かい紐(赤や青の色付のもの)などとは違って、針金は見た目には色彩的にも、又視覚的からいっても余りよいものではありませんが、被縛者自体には、その部分に紐などとは比較にならない強烈な痛みを感じることでしょう。しかしこの文章では、針金という小道具を用いたという新しさよりも、『私は彼女の足の先を愛撫しはじめた。風呂に浸った足はきれいで、ふくよかなパンのようである。云々』と『この時以来、私は淳子の身体のうちでも、指、鼻、舌、耳、臍といったような小部分だが、かなり重要な役を演ずる体部に惹かれ、彼女の身体の中に何一つ愛さないものがなくなった。云々……』の二個所の記述でありましょう。サディストの中では、鼻、耳、腕、眼、臍、足、脛、等々を特に愛好される方が、意識す

るとしないに拘らず沢山おられると思います。が、この作者は、この文章で、或はこのプレイで、それをはっきりと意識して書いていられるのです。

次に、『京子』と題した安田信行氏の原稿を御紹介してみましよう。これも、前の作品と同じように、適当に削除しながら、全文を次に掲げてみます。文意に支障ない限り、削除した部分を明示するに止めます。これは小説体になっていて、新婚夫婦の夫が妻に対して或る種の教育というか誘導を行うことをテーマとしています。が、関房の描写がいささか濃厚なようです。

京子

安田 信行

雨戸をびったりと閉めてあるのに波の音がたえまなく耳を打って、克彦はどうしても寝つかれない。海に近い家なので波の音は今夜に限ったことではないのだが、習慣になつてゐる筈のそれが妙に気になる事が時々ある。心に屈託のある証拠だった、宵のうちは妻の京子と楽しく語り合っていたのに、いざ肝心のこととなると一向口に登って来ない。気の弱い克彦にとっては優しく温和しい性質の京子だけに、一層云い辛いことなのだ。

(もし妻が怒り、自分に愛想をつかしたらどうしよう。いや妻は自分を軽蔑するかも知れ

ない、そうしたら俺は、俺は……」

彼は京子を熱愛していた。結婚まで女遊び一度したことのない克彦は、平凡な見合によつて平凡な京子と結婚した。しかし平凡だと思つた妻は美しかったし、その美しさを意識しない善意を多分に持ち合せた良妻だった。

だから克彦が妻を溺愛するのも無理はないのだが、反対に京子が果して自分を愛してくれているかと云うと疑問だった。どうしても自信がもてないのである。

京子の善良さ、美しさ、それは彼にとってかけがえのないものだが、彼が世の常の平凡な夫のように、妻の愛情を、それ以上に要求するのは当然すぎることであろう。

結婚以来もう十ヶ月になるが、二人の夜の生活は新婚当時に少しも変らなかつた。……『彼女は今年二十二才だが、その肉体のみず／＼しさと共に初々しい感情を少しも崩さないものである。夫にはそれが大愛好ましいものであると同時に、愛情の不足ではないかという疑をもたせられる場合がある。京子が正にそれであつた。人間とは何とゼイタクな代物であることか。』

京子はスヤ／＼と可愛い寝息をたて、隣に眠っている。彼は枕許のスタンドに手を延ばしてスイッチを入れた。仄暗い行灯スタンドの光の中に白い妻の寝顔が浮び上がる。ソッ

と指先で頬を突いて見る。覚めない。今度は……」

『……男の征服慾を甚だしくそゝる結果となるのであつた。』

さすがに彼女は目をさまして

「あら、あなた、電気を、あなた。」

と、本能的に明かるい電灯を恥じて口走つた。……」

『……京子は無言で夫のなすがまゝに任せている。』

「ね、京子。」

「なあに？」

「ねむいかい？」

「いゝえ、ちつとも。」

「疲れて？」

彼女は黙つてたゞ恥づかしそうに笑つた。

「お前、倦怠期ということ知ってる？」

「いゝえ。」

「それじゃ少し話しようか。」

「えゝ。」

「夫婦はね、或る期間、同じ生活を続けているとお互に相手に倦きてくるんだそうさ。」

「まあ。」

京子はほんとうに驚いたらしい。大きなつぶらな目を見はつて首をかしげた。

「どんなに仲のよい、愛しあつてゐる夫婦にも一度や二度は来るんだよ。永い一生の間にはね。そう云う時が夫婦にとって一番危険な

んだ。離婚などの原因にもなるらしい。」

「いやですわ、そんなお話。」

「だから賢明な夫婦はあらゆる努力を払つてこれを避けなければならぬんだよ。」

「……」

「僕はむろん今、倦怠期じゃない。お前が可愛くて食べてしまいたい程だ。しかし将来のことは神様だけしか知らない。京子はどう思う？」

「愛していますわ。」

「本当に？」

「えゝ。」

「有難う。」

「ね、あなた、その倦怠期ってどんなに愛していても来るのかしら。」

「そうらしいね。」

「私達、そんなの嫌ですわね。」

「だから、僕らも賢明な夫婦になろうじやないか。」

「どうするの、一体。」

「結局、刺戟なんだと思うね。新しい刺戟をたえず二人が感じていれば絶対に倦怠期は来ないんじゃないかな。」

克彦は話がだん／＼思う壺にはまって来るので、快心の笑を心に浮べた。そして……」

『……なおもきいた。』

「刺戟ってどんな？」

「つまり新しい面だね。夫婦が今迄相手に見

せたことのない新しい面を見せること。するとそれが刺戟になり魅力になるんだ。」

「そう」

京子は可愛く首を傾げて考え込んだ。彼は結婚以来はじめて彼女の愛情の証を得たと思つた。何故なら、いま妻は彼の為に一心になつて考えているのではないか。控え目な愛情——

「ね、京子、そんなに心配することはないんだよ。僕らはまだお互が知らない新しい面を沢山持っていると思う。それを一つづつ取り出せばいいんだよ。そればかりじゃない。二人で考えて新しい遊戯を夫婦生活にとり入れてもいいんだ。」

「新しい遊戯ってどんな事？」

「二人だけの遊びだ、例えば僕がお前をわざといじめたり、裸にして縛ったりするんだ。」

「あら、いやあだ。」

「いゝものを見せてあげようか。」

「えゝ。」

「驚いちゃいけないよ。」

「ハイ。」

話は来る所まで来てしまった。後は決断があるばかりだ。克彦は立って書斎に入った。本箱の上の置時計は、二時五分を指している。書棚の後から一冊の古い雑誌を取り出して、再び寝室へ引きかえすと、妻は寝衣の乱れを直して横になっていた。

「これだよ。」

「なあに。」

枕許に抛り出されたその雑誌を何気なく開いた彼女は思わず驚きの声を挙げた。

「あらッ。」

のぞき込むと、そこには全裸の女が高手小手に縛り上げられた写真がのっている。

「まあ。」

克彦は笑い乍ら彼女の表情を見守つた。

「読んでごらん。」

「いや、こんなもの。」

「どうして？」

彼女は本を閉じてしまった。

「京子、男と云うものはね、皆女をいじめた感情を持っていて。女はその反対、男にいいめられたいと云う感情を持っている。たゞ自分で気がつかないだけなんだ。だから決していやらしい事じゃないんだ。何処の夫婦もみなこんな遊戯をやつて楽しんでるんだよ。面白いから読んでごらん。」

「そうかしら。」

初心な京子は、夫の言葉を信じたらしく、再びその本を開いて、今度は熱心に読み出した。黒い瞳を好奇に輝かせながら、そして羞恥に身を固くし乍ら、読みふける京子の顔がだんだん遠くなって克彦はいつか寝入ってしまった。

その翌晩——。

「京子、昨夜の本どうだった？」

「いやよ。」

「何が？」

「はずかしいわ。」

「僕らの倦怠期を予防するために、あの遊戯をやつて見る気はない？」

「いやゝゝ。」

「僕達の愛情が、さめてしまつてもいいのかい。」

克彦は切札を持ち出した。やはり床の中である。

「いやよ、そんなの。」

「おかしいな。どっちが嫌なんだい。」

「でも……。」

「一度やつて見ていやだったらやめればいいじゃないか。僕はお前がどうしても嫌だということを、無理にやらせる気はちつともないんだ。こう云う事は相談づくだからね。」

「そうね——。でも、あなた痛いことするんではよ？」

「馬鹿なことを云うな。」

「じやいゝわ。」

やつと妻は承諾した。克彦は大して苦勞なしに、こゝまで彼女を引きづつて来られたのが、何か夢のようだった。

「お前、子供の時分、お仕置されたことあるかい？」

「えゝ。あるわ一度だけ。」

「どんな？」

「お蔵に入れたの、悲しかったわ、暗くて、こわくて。」

「ふうん。じゃね、今夜は僕がお前をお仕置することにしようね。」

「ええ、でもあんまりひどい事嫌よ。」

「勿論さ、じやはじめるよ。まず着物を脱ぎなさい。」

「あら、いやよ、そんなの。」

「写真の女は裸だったじゃないか。」

「でも。」

「さあ、世話をやかせないで早く脱ぐんだ。」

彼は妻の寝衣をどん／＼剥ぎにかゝった。

腰紐をほどいて寝衣を肩から外すと、その下は赤い腰巻一枚だった。二つの塗腕を伏せた様な乳房が白々と輝いている。両手をとって背中へねじ上げ用意の麻縄で縛りあげる。胸へも二廻りまわして乳房をしめ上げた。馴れない上に極度に興奮して、なか／＼思うように仕事が進ばなかった。それでもどうやら高小手に縛り上げてホッと一息をつく。彼女は羞恥に身をくねらせて、夫に背を向けたままだ。

「立ってごらん。」

少し強い声をかける。

京子は無言で立ち上った。

「これもとるよ。」

腰巻に手をかけると急に彼女は身もたえし

て云った。

「いや／＼。もう堪忍して。」

「どうしてだい。毎晩のように僕にとられても何も云わないじゃないか。まして今夜はお仕置なんだぞ。」

「だって電気がついてるんですもの。」

「さあ、文句はやめて。」

思い切って腰巻の裾をひっぱると、それはたやすく下に落ちた。彼女は忽ちかゝみこんでしまう。

「廊下を歩くんだ、さ立て！」

命令するように云うと渋々立ち上った。

「京子は美しい裸体の背に光線を受けて立っている。うなだれていかにも虐げられた女囚の感じであった。」

「歩け！」

麻縄の端を鞭代りにして、豊かに脂の乗った臀部を軽く打つ真似をする。京子は薄暗い廊下へ出て、しおしおと歩き出した。その背部全体に羞恥の表情がにじみ出ていた。長い廊下を何処までも歩かせている中に、何かしら、奴隷でも引き立てゝいる様な気持ちかられももっともといじめて見たい慾望がつき上げて来るのを制し切れなかった。

「さあ、入って小用を足すんだ。」

廊下の突当りの便所まで来ると克彦はノックを押して戸をあけた。

「あなた、堪忍して、それだけは……。」

「どうしても嫌か。」

「ええ」

「では今日は許すが此の次はするんだぞ。」

「ハイ。きつとします。」

再び憤々と明かるい部屋へ戻るや否や……

「次の日、克彦は妻の目を見るのがこわかった。日曜なので遅い朝の食卓について、はじめて彼女の顔を正視した時、そこに、いつもと変らぬ、いやそれ以上に愛情に満ちた妻の優しい微笑みを見て、心の底から安心した。(妻は怒っていない。) そう思うと胸の奥深い所からフワフワと泉のように幸福感が湧き上って来るのであった。」

「あなた、今朝はとても召し上るのね。」

「うむ。昨夜つかれてお腹がすいたから。」

「いやッ意地悪。」

彼女は優しくにらんだ。黒目がちの大きな瞳が濡れたように輝いている。だがブラウスの袖から見える二の腕に昨夜の緊縛の跡が赤くついているのを見ると克彦は思わず目をそらした。そして身も心も自分のものとなった妻に対する切ないまでの愛情を感じた。

「あら大変。」

京子があわてゝ立ち上った。お茶碗がひっくりかえって、水が朝の新聞を浸し畳の目に流れこんでいる。

「早く早く。」

台所へ雑布をとりに行っている間に朝刊は水びたしになってしまった。

「ごめんなさいね。あなた。」

素直にあやまる妻の可憐な声を聞くと彼は忽ち天来の妙音の様に、その失敗を利用する事を考えた。

「いけないね。新聞が読めないじゃないか。」わざとむつかしい声で云った。京子はびっくりして夫の顔を見つめている。

「今晚はお仕置だよ。」

笑いをこらえた顔で宣言すると、彼女は

「あら、いやよ。」

「いけない。お前は今夜、お仕置を受けるんだ。」

とうとう笑い出してしまふ。京子も一緒に

笑い乍ら

「ひどいわ。」

と云った。

「ね、京子。真面目な相談なんだが。」

「なあに。」

「昨夕のような遊戯ね、お前もう嫌かい？」

それとも統けてやる気がある？」

「あなたが望みなら……。」

京子は頬を赤らめ、うつむいて小さな声で答えた。

「そう。有難う。それじゃ少し買物に行かないか？」

「何をお買いになるの？」

「鞭だの、縄だの、手錠だの。」

「まあ。」

一時間後に、二人は街を歩いていた。克彦の希望するものは殆ど犬具店に揃っていた。鎖、鞭、首環——これは色々なものに利用できる。小型の物を四個求めた。妙なことに

金物屋の店先では馬のくつわを売っていた。早速それを求める。手頃なスプリングと八番線の針金を二メートルばかりわけて貰う。

帰ると克彦は早速それらのもので種々の責め道具を作ってみた。針金をペンチで曲げてスプリングをつけ乳枷を作った。また犬の首環を二箇短い鎖でつないで足枷が出来た。同様にして手錠もすぐ出来る。馬のくつわから立派な嵌口具も作った。

克彦が楽しい期待に胸をふくらませて夜の来るのを待ち焦れ乍ら一生懸命で工作するのを、京子は横眼で眺めてはミシンの足を休めて微笑んだ。

彼女が今着ているスカートを剥ぎとり、シユミーズもズロースも脱がせ、文字通り一糸もつけぬ真裸にして、この責め道具にひしひしと責めつけられる状況を想像しては、克彦はひとり楽しんでいた。それが単なる想像ではなくて数時間後には、この美しい妻が誰にも見せられぬ無残な姿になるかと思うと、急におさえ切れぬ衝動を感じて来た。……

「克彦は弾む呼吸を抑えながら、妻の両腕を

後へねじ上げて、今作ったばかりの手錠をはめさせてみた、ぐるぐると巻きつけた麻縄などと違って、小さな金具があっさりど女体の自由を奪っている光景は、妙に刺戟的でさえあった。

両方の足首には足枷をはめて鎖の長さを二十纏に調節した。更に新工夫の乳枷を……

「……乳房にはめこんでみる。」

「あなた、もう許して。」

堪えきれぬ羞恥に京子は哀願した。

「いや、これからだよ。」その口に嵌口具をかませて頭の後でとめてしまった。馬のくつわの改造品で頗る有効に出来上っているから京子はたゞ

「ウー。ウウウ、ハ、ハ。」

と苦しげな声を挙げるばかりで言葉は絶対に出せなかった。……

「……さ、立つんだ。」

まだ手錠、足枷もそのまゝの妻を邪慥に引き立て、部屋の中を歩かせても見た。短い鎖に、ともすれば足が乱れてヨチヨチと前かきみに歩く、妻の整った肉体はなまめかしい限りであった。

遊戯が一段すむと、彼は自制して妻の体の緊縛を解放した。御馳走を一度に食べてしまふのが、もったいないからであった。

それから一ヶ月たった。克彦は毎夜のように

に妻の体を縛って楽しんで来た。だが京子が果してどの程度のマゾヒストか、又は全然マゾヒストではないのか、その区別は全くつかなかった。見ようによつては夫の趣味を満足させる為に努めているようでもあるし、多少は自分も楽しんでゐるような様子が見える事もあった。たゞ、夫の言葉を信じて倦怠期予防の為に協力していた段階はとうに卒業してゐた。夫の性向を完全に理解したのである。しかし克彦を軽蔑したり嫌ったりするような態度は少しもなかった。

一方克彦は完全なサディストとして京子の上に君臨してゐた。毎日なにかしら僅かな欠点や失敗を云いがかりとして妻にお仕置を課するのだが、京子は甘んじてそのお仕置を受けるのだった。時にはすゝんでお仕置の催促？をすることすらあった。

ある夜のこと克彦が疲れて先にねむろうとすると、彼女は夫の腕をゆり動かして、

「あなた、今夜はお仕置許してね。私もう悪いこと決してしませんから。」

と囁いた。その甘えた声の調子が彼を刺戟して、サディストは忽ち目を覚ました。……

『温和しく淑かそのものであった京子が、これまで成長する為には、二人の大きな努力が必要だった事は云う迄もない。』

京子の里の母親が上京して数日泊って行ったことがあった。そんな夜でも彼女に対する

お仕置は許されなかったのである。例によつて……」

『くつわをはめられた京子は、たゞ体をくねらせ目で哀訴するばかりだった。怒りに満ちた目で……。だがその後の……』

『お仕置と遊戯は彼の智慧の許す範囲であらゆる趣好が行われた。例えば彼の夕食の時、お仕置として妻を乳枷だけの裸にさせ、給仕を命じたことがあった。その時の妻が以前と少しも変らぬ羞恥の姿態を、くねらせているのに味をしめて、以後しばらくの間、食事中彼女に衣服をつける事を禁止した。征服し尽した妻の美しい肉体を眺め乍ら、食事する楽しさは人に語れぬ喜びであった。』

また或るときは二人とも裸になって座敷ダンスを楽しんだりした。

日曜など重刑として全責め具をつけさせた妻を床柱に結んで、一日中眺め暮していたこともあった。

だが克彦はあく迄妻を熱愛してゐた。だから彼女にたえられぬ肉体的精神的苦痛を与えたことは、たゞの一度もなかったのである。

お仕置と遊戯は今や二人の生活の中核となりつつあった。通勤の帰途、克彦の頭の中はたゞその夜のお仕置のことで一杯になるのが常だった。

夕食の仕度をし、編物をし、買物をする京

子の頭の中は、たゞその他自分に加えられるお仕置のことで一杯だった。

今朝、出勤する時、京子は夫の靴を靴箱から出すのを忘れていた。たゞそれだけの理由で克彦は

「駄目じゃないか、京子」

とこわい顔をした。

「ご免なさい。ついうっかりして。」

「今朝はご飯も焦げていたし、失敗が二つだね。お仕置を受けて性をつけろんだよ。」

「ハイ。」

消え入るような声で、頬を赤くし乍ら答える。お芝居とわかつていても、雰囲気は何となく本物らしく聞える程、二人の遊戯は上手になって来ていた。

お仕置遊戯を始めてから、克彦はまるで人が変わってしまった。会社の仕事にも積極性を示してすぐに上司に認められたし、交友関係も大変よくなった。家庭内で彼の性向が百%満足させられる為、心は常に春風のような幸福感にみちているのだった。人生も社会も今は彼のためにのみあった。

夜が来た。

予定のお仕置は、玄関の戸締りをしてから始められた。

百ワットの電灯が輝く下で、夫婦は向い合つて正座した。そして夫は厳かに宣告した。

「京子、お前は今から仕置を受けるんだ。」

「ハイ。」

彼女は深く、うつむいたまゝだ。

「今夜のお仕置は鞭打ちだ。」

「えッ。」

鞭打ちは初めての試みで、今迄やったことがない。当然、妻はびっくりしたが彼は平気な顔でつゞけた。

「たゞちに洋服を全部ぬいで裸になる。」

「ハイ。」

京子は耳のつけ根まで真紅にそめて、ためらいつゝも立ち上ると、部屋の隅へ行こうとしたが克彦は更に、

「僕の目の前で脱ぐんだ」

と命じた。

彼女は怨めしように夫の目をみつめたが、到底許されそうもないと知ると、云われるまに夫の目の前でブラウスのボタンをはずしはじめた。……」

「……彼女の羞恥は、削り立ての鉛筆のように、常に新鮮だった。……」

〔レポート〕

早く眠狂四郎に腹を切らせろ

恐るべき切腹マニヤの読者

△31年10月27日付図書新聞、「剣豪作家五味康祐、柴田錬三郎の対談記事」
(週刊新潮に「眠狂四郎無頼控」連載中) V

「……忽ち十回の打撃が終ってしまつと、もう今夜のお仕置はおしまひである。すぐに手足の紐をほどくと、一応後手に手錠をはめて正座させる。」

「どうだ京子、性がついたか?」

「ハイ、もう決していたしません。」

京子は神妙にうつむいたまゝ頭を下げる。

「そうか。」

彼はゆっくりうなづいて立ち上った。……」

『二人の結婚一周年記念日はもうすぐだが、予想されるその日の失敗に対して、京子はどんなお仕置を受けるのだろうか。(了)』

サドの小説としては、悪どさがなく可憐純情な作品なのですが、責め、折檻、お仕置といった以外の描写で、前戯的な描写が相当ありましたので、それは以上の文章をごらん下さったように全部削除しました。お仕置では最後の方の鞭打ち、と里の母親を隣室にしての責めの両場面を通じて数枚削りました。

然し、全体の筋には、いずれも大して関係のない箇所です。

この文章は、サジストの夫が新妻を自分の性向に導いてゆく過程がソツなく、よく描かれております。細君教育の成功の巻ですが、この程度のことは案外多いのではないでしようか。従来、悲観的な述懐や悲劇的結末に終つたものも、いくつか掲載された例もあり、又、この玉稿落穂集に於ても、紹介したいと思つてゐる深刻な実例(投稿者の方は、掲載してほしい意向のようですが、新聞紙上にも発表された事件で関係者の迷惑も考え、本欄にて紹介する予定)があります。それらと比べると、この「京子」と題された作品のほうが、明るくてほゞえまじい感じを与えられます。

これは創作であり、この文章の中のどれだけが作者の体験か、或は全然のフィクションか、それは判りませんが、こういう立場の女性の心理を扱った作品も拝見したいものだと思います。今月は二篇だけでしたが、次号で更にサド関係を御紹介しましょう。

五味 読者からいろいろいつて来ますか。

柴田 来ますね。

五味 どういうところから来ますか。

柴田 切腹マニヤがいるんだよ。こういうふうに写真を同封して送ってくるんだよ。(と

手紙を見せる) ぼくはさ、眠狂四郎で『切腹心中』っていうのを何回目に書いたんだよ切腹の場面をくわしく書いたら、それをそっくり真似して腹を切りやがった(笑) 姉の長じゆばんを着て、腹にさらしを巻いて短刀で切ったわけだ。

五味 ヘエ!

柴田 いったん癒ったわけだな。だいたい癒着したのをまた切っちゃったんだ。

五味 腹っていうのはわりに脂肪がありま

すからね。

「レポート」

地で行く「処刑の部屋」

映画にとつては公開(被害女性六名も)

(昭和31年10月11日付、毎日新聞名古屋版より)

△ありふれた記事で太陽族映画の影響云々で大分古い古された事柄であります、映画にとり、公開したというのが変わって面白く思ったので切抜きをお送りします。

(名古屋、杉本生、投) V

【犬山】愛知県犬山署では犬山市小島町、電機器具製造会社重役今井宏昌(二三)を婦女暴行の疑いでさる五日、家宅搜索し八ミリ撮影機、同映写機、フィルム十九巻、ワイセツ

いのですか。

五味 大丈夫なんですよ。

柴田 脂肪はどのくらいあるのかしら?

五味 人によって違うね。未婚の乙女あたりはタツプリしてるらしいですよ。(笑) ぼくの女房の兄は外科医で、大阪で外科の天才といわれた人だが、患者を切りたくてしようがない。

柴田 医者と同じ心理だな、そいつも。

五味 医者の場合なんか治療っていうかなんか知らないけれども、とにかく切りたいたんですね、アッペというのは盲腸のことですが

(S・N生投)

☆営業部だより☆

○本誌復刊号のバックナンバーは目次裏に各月号の目次を掲載してあります通り在庫しておりますから御入用の方はお申込下さい。
○休刊前の旧号は30年8月号以降各月号共若干残部がありますから欠号補充の方はお早くお申込み下さい。○代理部で扱っております「美人乱舞」「アリスの人生学校」「美しき縛しめ」第一集は全部売切れとなりました
○「時代物責絵巻」は未製本一揃百五十円(千8円) ○アルバム「美しき縛しめ」第二集未製本一揃三十二葉三百円(千16円) ○代理部の分譲品は従前通り取扱っておりますから総目録は切手八円同封にてお申込下さい。



『雪 夫 と 母』

第 一 部

山 口 幸 一

中学二年生になった雪夫は、此頃毎日ある一つの冒険をやるのかやるまいかと云う事について真剣に思い悩んでいた。

『もうぐずぐずしていられない。他の同年輩の少年達は平気でやっているのだから、僕もそうしたって一寸も羞しい事はない。当り前だ』

と考える時は、すぐ今夜にでも実行しようと思うけれど、いざとなったら、生来の内気

と羞しさの為、やる事が出来ずに日を過していた。

その頃の海辺の町の中学生の間では、下着に猿股をはかずに白い六尺褌をする事が流行ってきた。六尺褌一本の素肌を紺飛白の裕の着物に包んで、春風の吹いている町を足駄を鳴らせて歩いて行く事は、本当に中学生らしい魅力であった。

十四才の雪夫も六尺褌と素裕の姿になった

時、初めて中学生になったと云う喜びを感じ何か身体のすべての部分がすくすくと成長し次第に大人への芽生えに近付いて行く様な気分を味わったのであった。

小さな町では中学校は最高学府であった。その当時は中学二年とは云っても、中には高等小学を出てから、二年も三年も家事の手伝いをやったり、又、会社や官庁の給仕をやったりして初めて中学校に入学して来る生徒も珍しくなかった。

だから、雪夫の様に尋常六年から直ぐ入学した、云わば子供の様な少年達の中にはこの様な中ば青年になりかかった様な同級生に対してひけ目を感じない為にも、普段から晒の六尺褌をきりりと締め込んで、それをわざと時々見せびらかす様にして自分達はもう子供ではないのだと云う事を誇示する少年達が居た。

雪夫も自分の小遣錢で呉服屋から晒を買って来て時々ふんどしを締めていたが、其れは他の友人達の様に母親の了解を得て買ったものでない点が違っていた。だから母には内証で使っている家で雪夫の本当の着衣とは認められていない。褌姿を母に見られると云う事は、絶対さげなけねばならない事であった。雪夫が自分の褌姿を母に見られたいと云う羞しさの原因は、雪夫が初めてふんどしをした時に感じたたまらない快感を母に

気取られたくないと言う気持が根本をなして居るのであった。

真つ白い晒を股からかけてぎゅっーとお尻に廻して締め上げた時の感じは、何とも云えぬ良い気持であり、雪夫から考えれば、他の友人達がよく自分の家の茶の間などで、その禪姿を平気で彼等の母親の前に曝していると云う事は、どうしても了解出来なかった。そして自分も母の前で堂々と禪がしめられたら、どんなに嬉しい事だろうと思ひ、早く公然と母の前で禪姿を見せる様になりたいと希った。

母が自分のふんどし姿を見た時に、どんな反応を示すだろうかと言う事が重大関心事であつた。

即座に禪なぞ使う事を止めさせられて猿股を使用する様に云われるだろうか。又は何の意見も云わないで、そのまま黙認してくれるだろうか、或いは自発的に禪を締めていた事に驚くと共にむしろ引続き禪にする事を奨励して、それからずっと毎日締めさせるであらうか。

何れにせよ、この三つの場合があるが、その内否定されるのは第一の場合だけである。

第二の場合、母が黙っていれば、黙認したものと認めて締めていても差支えない事になる。

さて、自分の禪姿を見て貰う場合であるが

『自分が知らない間に、母に見られてしまつた』と云う具合にしないと都合が悪い。

つまり、自分が、『母に隠れて禪を常用している』と云う事実を知らない間に母に見付けられた結果、母としては、禪に対して黙認するか止めさせるか、どちらかの意志表示をしなければならぬ、と云う立場に持つて行く事が必要である。

その頃の少年の下着としては六尺ふんどしを使っている者は、やはり少く、一クラスに四、五人位なものであるから珍らしいのであるが、別に其れを止めさせると云う理由はない筈である。そうかと云つて、母から其れを特に奨励すると云う事も考えられない。

雪夫が以前小学生の頃水泳の時に、母は禪が要るだろうと云つて準備しようとしてくれた事もあつた。又お祭の相撲の時にも、もし出るなら帯芯の白布を出して上げようと云つてくれた事もあつた。その時も、あわてて断つた雪夫の態度をいぶかしそうに眺めていた。しかし水泳や角力でなく普段に之を締めていると云う事は、明治時代の少年ならいざ知らず、昭和の初頃の頃では、むしろ珍しい事である。殊に良家の長男である雪夫が六尺ふんどしを常用すると云う事は、別に其れを止めさせる理由はないにしても、母にとってはやはり他の良家の少年の様に白いパンツか、又は普通の猿股をはかせた方が無難であると

考えるのは当然であらう。

そう云う風に考えている母の心を推察している雪夫は、何か機会をつかんで、自分も中学生だから、此れからは猿股はすっかり止めてしまつてふんどしにするのだと云う事を強引に母に承認させる必要があつた。

その為には雪夫は現在既にもう六尺ふんどしを常用しているのだと云う事実を母に知らせる事が一番効果的であると思つた。

雪夫は家でふんどしをする場合は、いつも白いキヤラコパンツを上にはいていた。

それは何時、母の前で裸体になる事があるか分らないので中に締めている禪を見透されない様に用心の為に上にパンツをはく必要があつた。

一月程前に雪夫は母の前で思い切つて裸体になつてパンツ一つの姿で寝巻に着替えてみた。

而し白パンツの下のふんどしはパンツがゆるい場合は同じ色なので一寸分らない。母の表情には何も変つた所は見えなかつた。

其の次は、雪夫はもう少し大胆になつて、パンツの上にふんどしの端をわざと二、三寸出して、そのまま、裸体になつて寝巻に着替えてみた。

母はそれを気が付かない筈はないと思つたがその時にも何日たつても別に何も言わなかつた。

今度はどうしても思い切ってパンツを全部脱ぎ去って、本当に裸一つになった姿を母の前に曝して母の意志表示を求めるより他には方法がないと思った。

しかし、雪夫の身体には生きた血が流れている。丁度神経の通っている歯を治療する事が出来ない様に、雪夫の神経が動いている間はそれを実行する事は不可能な事である。其を行う場合には神経を麻痺させなければならぬ。睡眠中にはもう神経も眠っている。

そうだ、睡眠中に、いや、前後不覚に眠っているふりをよそおって、その時母に自分の禪姿を見られたと云う事にして母の態度を判断し、否応なしに母の意見を引き出す事が一番であると考えた。それに就いての実行計画を色々思い廻らした。

其夜は洗濯して純白になった木綿をなるべく太目にふんどしにして腹に三四回巻いてからきつく締め上げ後の方を恰好よく結ぶ。

つまり、ふんどしを締めたのは今夜初めてではなくて、もう前から何度も使い馴れているのだと云う事を明示する事が先ず必要である。そして枕元には制服とズボンとシャツをならべて脱ぎすて置く。パンツは無く、ズボンの下は直接白ふんどしをしているだけと云う事を知らせるのである。

つまり明朝、登校の時は六尺の上にすぐズボンをはくのだと云う事をそれとなく母に知

らせるのである。枕元をそうして置いてそのまま裸で寝床の中に入るのである。

姿勢は俯伏せになりお尻を持ち上げ、ふんどしがお尻から股の間にしっかりと喰い込んだ様子が一目で分る様にする。顔は横に向け目を閉じ枕を脇へ押しやってすっかり熟睡している振りをよそおう。

母は雪夫が寝静まってから寝相を見に廻って来るのが常である。

寝相を直そうと母が掛布団をめくると、中にはふんどし一丁の凛々しい姿の雪夫が敷布の上に曝し出される。

その時の母の一寸した息吹の変化も逃さずに観察しよう。

以上の事を決行しようと決心した。

さて其の日を何日にするかは仲々自分ではきめられない。其の大事な運命の日は絶対絶命の神の啓示によって決定すべきであり、一旦其日が決まった以上は必ず雪夫は其の神の指示した祭壇の上に登らなければならないと決心した。

次の日、雪夫は一人で町外れの神社の石段を上っていた。

社殿の周囲は人氣が無く、何とはなしに清浄の氣がみなぎり自然に本當の神の啓示が受けられそうな氣持になり、身体は隅々に迄引き締って行く感じがした。

雪夫は数字を書いた札を伏せ、目をつむっ

てそれをよく混ぜ、その一枚をを引っくり返した。

一心に神に祈り、パツと目を開くと『七』の字の札が出た。

運命の日は遂に七日ときまった。

もう絶対に中止する事は出来ない。どんな場合でも七日に実行しなければならぬ。

さも無ければ、神に嘘を云った事になるのだ。雪夫はその夜の状況を考えると興奮と恐怖、それに何とも云えない羞恥心で顔が紅潮してくるのであった。

雪夫は七日が来るのを、仲ば期待し、丁度稚児がその灌頂の日を待ちこがれる様な思いで期待と緊張に全身をはち切らせる様にして指折り数えていた。

遂に其の日が来た。

其の夜、雪夫は予め用意していた晒のふんどしを持って浴室に入った。

既に胸の動悸は高鳴っている。

湯上りに、十三尺のふんどしは雪夫の素肌にするすると締め込まれて行った。後の結び目を恰好良く結び上げると、余った端を腰にはさみそのまま寝床の中にもぐり込んだのであった。粗い敷布が素肌に当りひやつとした感じがした。

そして俯向きになると、足を大きく広げて顔を横に向け、熟睡した振りをして母の来るのを待っていた。やや上に持ち上げたお尻の

割目に喰い込んだ晒の布は、そのまま体重から来る圧力で前襟をひっぱる様に締め付けるのであった。

腰に廻した白布はしっかりと下腹部を固定し、その気持良さから胸の動悸が早鐘を打つ様に脈動した。丹前は足でけて布団の下へずり落して置いた。

母が入ってくると、すぐ行儀の悪いのに気が付いて寝相を直そうと雪夫の掛布団をさつとめくるだろう。そして、そこにお小姓の様な下帯姿の雪夫の身体が横たわっているのを見るのである。

そう思うと胸の動悸は益々高まり呼吸は激しくなり、咽喉はからからに涸いて行く感じであった。

一そうの事今日は止めようかとも思った。しかし神様の前で誓ったのだから恐しい。だが止めるなら今の内だ。どうしよう。雪夫の心は左右にはげしく動揺した。

其の時、遠い廊下から母のスリッパの足音が近付いて来るのを聞いた。予め当然、其の事は予期はしていたものの『あっ』と声を立てた。

幾重にも廻してきつく締込んだふんどしは解くだけでも四五分かかる。

もう仕方ない。もうだめだ。

雪夫は布団の中に深くもぐり込むと前の通りの俯伏せの姿勢になり顔を横にしてじつと

熟睡している風をよそおった。

呼吸は益々はげしくふっくりした頬は薄紅をはいた様に紅潮していた。

間もなく障子をあけて母が部屋に入ってきた。布団からずり落されている丹前がすぐ目に入った。

『まあ、寝相が悪いこと』

そう云う母の声が熱病にうかされた様な雪夫の耳にかすかに入った。

枕元に近付く母の衣ずれの音がし母の香いが雪夫の顔へ見る見るせまってくる。

と同時に、母の膝の重みを布団の端に感じたとと思うや、ひやつとした風が首すじから背中に吹き込んだと思う瞬間『あーっ』と声を立てる事も出来ない間に一枚の掛布団は、何の容赦もなくめくり取られ白いふんどしをかけた雪夫の姿が敷布の上に横たわっているのが母の眼に映じた。果して母は驚いた様だった。『まあこの子はおふんどしなんかかけて』と云う声がきこえた。しばらくじつと顔から足の先迄眺めていた様子だったが、やがて両手で雪夫の身体を抱きかかえると身体をぐるっと廻して仰向けに向きを直した。

母は其の姿を優しく眺め廻すと布がせまくなり過ぎていふふんどしの前袋を素早く広げ腰にはさんで締め直し、それから丹前をかけて雪夫の身体を暖く覆うと掛布団をかけた。その事は僅か四、五分で行われたのである

が雪夫にとっては一時間位に感じたのであった。

とうとう母にふんどし姿を見られた。もう僕は四六時中ふんどしをしているのだと云う事を、母は充分知ったのだ。『まあ、この子は……』

と云う短い感嘆の言葉で雪夫が襦をする事を承認して呉れたと思う。

翌日雪夫は恐る／＼母の顔色をうかがって見たが、母の態度はいつもと変らなかつた。むしろ優しく微笑んで雪夫を迎えてくれた様だった。

『そうだ、母は僕のふんどし使用を黙認してくれたのだ。そうでなければきつと叱るに違いない。しかもゆるんだ襦の端を自分の手で締め直してくれた。これから僕は毎日かさずふんどしをしめていよう。そして汚れた時は遠慮なしに洗濯して貰おう』

十四才の雪夫の身体には、生き生きとした喜びが湧き上ってくるのである。

(第一部終)

〔告知板〕

○新年号発送の際は、折柄全通闘争の休暇戦術が実施されてしまったため一週間乃至十日近く郵便物の到着が遅延致しました。そのため種々と御迷惑をおかけしました事をお詫び申し上げます。(発送係)



【読者通信】

○ 復刊以来ずっと愛読いたしてありますが、号を重ねるごとに内容が充実し、それに変化が加えられて次第に発展されている貴誌に強い魅力と愛着を感じます。早速新年号を送って頂き有難く拝見しました。今月号で一番感銘しましたのは、甲斐仁参氏の「電気責に關するノート」でした。殊に、四の密輸団の一味の女が電気責めにあうところ等は感じが出ています。電気責めというのは初めてこの文章で知りましたのでよくは存じませんが、責められる女の有様がいきいきとよく描けています。電気責め以外の責め方で、このように緊迫した感じの文章を甲斐氏が御存じでしたら御紹介して貰いたい

ものです。最近挿画の優秀なのが少いようですが、栗原、瀧、など以前のイラストで二枚でも三枚でも、これはと目を瞠るようなのを是非お見せ下さい。一枚でもそういう絵があれば、二百円の値うちはそれだけで充分です。そんな絵を私たちが描いて貰うとすれば五百円や千円では出来ないのですから。

(静岡 無夢生)

○ 一月号拝見、口絵写真「鳴門の妖鬼」には大喜びでした。今後共是非映画写真を二三枚ずつ掲載して頂きたいと思えます。又、別に掲載できぬ分は、分譲写真として作成しキャビネ一枚五百円以上でもよいから分譲願いたし。

(岡崎局私書函二十五号 深田)

○ 寒冷の候となりましたが、貴社には益々御清栄のことと拝察申し上げます。小生は復刊前の奇巧を本屋にて買い求め愛読しているものです。或る古本屋にて一時中断の奇巧が復刊されているのを見つけた大変うれしく思っております。小生の希望としては復刊の九月号に「私の裏面の生活」と題して月岡映子さんの手記を拝見しまして女性の方にも月岡さん自身(流腸

のみでなく)プレイを實行されておられるのかと思ひ一マニアたる小生も意を強くしている次第です。未知の月岡さんに厚かましい御願ひですが、御住所お知らせ下さいませんか、文通して頂ければ幸甚に存じます。お便りお待ちしております。

(東京都中野区新井 町五一五 深瀬方 竹内洵二郎)

○ 一月号拝受、口絵写真、内容とも、今月号は特に充実してきたように思われ、大変興味深く拝見いたしました。特に「電気責に關するノート」は、七、八月号の「潰滅の前夜」以来、最も心のひかれたものの一つでした。続稿を心から期待いたします。学生だった頃には精神科でよくエレクトロ・シヨックを見たものですが、この文を拝見していると、はじめてそんな光景に接した頃のことかふと思ひ出されています。

(東京、大林生)

○ 最近ふとした機会から貴誌の復刊を知り大変嬉しく心強く感じました。表紙も着色せず地味で、文獻中心的傾向も良いと満足しています。願わくば、もっと程度を高く諸外国の文獻の中、入手し得る

ものの紹介もして欲しい事の一つです。公開誌の宿命で微温湯的なのは、どうもやり切れません。せめてKK通信的組織等ないものでしょうか。十二月号で原忠正氏の記事を拝見致しましたが、同名異人でなければ、小生同氏の会から三、四ヶ月位の間、フランス雑誌を入手した事があります。其の後会計係とかの事故で散解、音信不通になって現在に至っております。若し差し障りなければ連絡場所又は前記の様な会を再開している時は御紹介下さい。

(東京 安田生)

○ 新年号を拝見、紙数はともかくとして、内容的に旧号に劣らず充実したものを感じ、皆様の御努力を大いに感謝いたします。先日はフアンレターなど、稚拙な手紙を中富さん宛に書きましたが、赦されるならば読者通信の片隅へなぞ載せて頂ければ幸甚に存じます。

(東京 柳沢吉保)

○ 赤字にもめげず日夜奮斗の様子深く感謝申し上げます。さて十月号の読者通信に寄稿されました三木恵子様、お便り嬉しく拝見させていただきます。私は数年来女性

に思う存分責められたいと願っているのですが、残念ながら一度もその機会がなく、唯一人淋しく自虐して、わずかながらなくさめている二十三才の青年です。大学卒業後、某研究所で引き続き勉強しているのですが、最近とみに被虐の念が高まり、肝腎の勉強の方の能率が全然上らず、いささかノイローゼ気味で悩んで居ります。せめて被虐願望の夢が三木様はじめ女性サジスチンの方々の文通により、いくらかでもカバー出来るのではないかと、思い切つて筆を取らせていただきました。何卒この悩める小羊にお便りを賜らんことを切にお願い申し上げます。勿論、御命令があれば何をおいても馳せ参じて御奉仕させていただきます。尙お便りを下さいます際には毎月十五—二十五日の間に到着する様望んでいます。必ず御返事は差し上げます。吉報を御期待致します。(大阪市阿倍野局止加藤真二郎)

○ 小生は奇クの発刊当時より今日まで長期にわたり拝読させて頂き居ります者であります。小生の趣味は岸本青柳様と同様でありま

して、女装被縛を夢見る者で、今日まで自分一人で人目を忍んで不充分乍ら満足を致して居りました。十二月号の岸本様の御提案の和服展示会や十月号の和服同好会等、お呼びかけに応え全く心より嬉しく、一日も早くこの種の発表を心待ち致すものです。御社の御取計いにて早急に会員を御募集下さいまして、小生等の夢を実現させて頂きますことを、重ねて御願ひ致します。斯かる趣味の費用は、他の方面の経費を節約しても必要なだけの金は出します。就きましては一度岸本様に御文通、或は御面会を致したいのですが、何とか御骨折り下さいます様御願ひ申し上げます。十二月号の読者通信欄にもありました如く、女装した貴写真掲載方を叫んで居られますが全く同感です。モデルなら何時でもなります故、お便り下さい。(奈良 水井正)

○ 鷹野女王様。待ち焦れて居りました女王様の「サジスチン」の半生記」並びに「読者通信」を拝読させて頂き、非常に感銘深く且つ嬉しく存じます。女王様はプレーの際は残忍なサジスチンであられても、平素は女らしいお方で、且つ

ては生活も御清潔な御方でいらつしやいます由、これこそ私にとつては理想的な憧れの女王様でいらつしやると独りできめて居ります。私も生れながらのオールドマゾヒストですが、社会的地位の關係もあり、MSプレイの一点だけを除いては、紳

子として行動しなければならぬ制約を受けて居りますので、MSプレイは心の秘密として厳守して下さる様な御方を待望致して居りました。女王様に対する関係におきましても、MSプレイに於てはあくまで忠実な奴隷であり、最も従

順な飼犬でございますが、その他の関係では厳格で、苟くも世の常の男女の如く猥らであつてはならぬと固く心に誓つております。こんな私でございしますが、女王様のお側近く犬としてお使い下さいませんでしようか。若しこれが不可能でしたら、せめて奴隷へのおこ

☆読者通信について☆

○本欄は皆さまの交歓室として開放しておりますから御遠慮なくドシドシ御寄せ下さい。○本名住所等の秘密は固く守りますから御安心下さい。○只今手紙の転送は致しておりません。○本欄に住所氏名を発表される方は通信の末尾にお書き入れ下さい。発表してはいけない方は御記入しないで下さい。○本欄を通じての文通は各人の責任に於て直接して頂きたく本誌にての斡旋は致しておりません。

とばのお手紙でも頂けませんでしようか。お足下に手について頓首謹言お願い申し上げます。(東京中央局私書函一三九一番)

○ コルセットマニアの方々にビツクニユースを。コルセットマニアクラブ誕生しました。資格奇クの愛読者でコルセットマニアの人、男女を問わず、入会御希望の方は左記まで住所、氏名御通知下さいませ。詳細お知らせします。又、秘密厳守致します。(神奈川局私書函十三号内)

○ 奇クに御投稿の美しきサド女王様の方、婦人読者の皆様に、一度でもよいからお氣に召すプレーの実験に使役されることを、志願する二十八才の独身青年で健康です。御親書賜りたく存じます。(世田谷区三軒茶屋一四七増沢方中田)

○ サジストの御婦人の方で、小生

の女王様として命令して下さる方を求めます。小生二十八才の妻帯者、マゾと共に女装マニアです。次の様にされる事を夢みています。(一)裸にされ強制的にグロースを穿かせられる。(二)人間馬として調教を受ける途中で、ノビてしまい荒縄で縛られてころがされて、足舐め等をさせられる。(三)縄尻をとられてハイヒールでけられながら仕置場へ引立てられる。(四)女装させられ色々責められる。(五)姿見の前で猿轡をされて、くすぐられたり鞭打ち等のお仕置を受ける。この様な夢を叶えて下さる女王様。一月十二日、十九日の両日、エンゼルパークにてお待ちしております。(目印右手に白いハンカチ)

(名古屋 酒井二三夫)

私は振袖姿、花嫁姿に特別の愛着を持つ、縛り絵、責写真のマニアであります。同好の方々と交際又は文通したいと思っています。殊に和服の着付の巧みな女性の方や日本舞踊の出来る女性、又は男性の方、女装マニアの男性の方、日本人形の作れる男女の方、縛られることの好きな女性又は男性、等にぜひ文通を願いたいと存じます。又、絵や写真の交換とか、よ

い作品をお持ちの方にお譲り願うとかしたいと思えます。どうか宜しく。岸本氏や逸名居士氏の展覧会や和装マニヤ会には大賛成です。御連絡下さい。千葉Y・I生の東京を中心とする読者クラブ、大いに賛成です。くわしく御連絡下さい。誌上で皆様のお返事をお待ちしています。(東京 笛地佐渡)

奇クの愛読の皆様、お変わりありませんか。復刊後は店頭には見られず、あちこちの古本屋を探して十二月号を読ませていただきました。そして松原様、池田様、若柳様等による女性のふんどし、私は本当に嬉しくなりました。女性のふんどしの姿は、私の永い夢でしただけに、読者の中に居られた事は私の喜びを倍加してくれました。そして私も今は、松原様のおつしやる様な三角ふんどしをして居ります。色は青で腰廻りは矢張り同じ色の巾のあるテープを使用して居ります。私の肌は女性の様に真白なので、白と青のコントラストは、より刺戟的です。私のふんどしはお尻の方もテープを使用しています。そしてねじれたり曲ったりするのを防ぐ意味で、特別に作ったガーゼを当てがって居ります。どなたか女性の方で、新しくデザインされましたらお教え願いたいと思って居ります。又、なたか私を召し使って下僕にしてやるうとおつしやる方が御座居ましたら、喜んでお仕え致します。思っています。ふんどし愛用の女性の方、私は本年大学を終えた二十三才の男性です。身長五尺五寸、体重十五貫五百、色白く一見西洋人の様に見えますが純粋の日本人です。(東京 田中)

奇ク十二月号を拝見しまして、本文では「魂を病む人」が良かったです。グラビヤでは「いで湯」がとても良く思えます。度々手紙を出したので、僕の好みもわかって戴けると思いますが、右の方の画が、映画「肉体の密輸」の時の様に、吊り紐式のシュミーズ一枚だと、僕の好きなものになったのにと残念に思います。「肉体の密輸」の時にはり出された写真が、丁度、シュミーズ一枚で吊られて責められているのがありました。何かとして、あれを復写して奇クにのせるか、分譲して戴けないものではないか。奇クから写真が少なくなっていくのが残念です。(東京 K・Y生)

奇クの復刊以来、困難な状況に拘らず、良心的な刊行を続けられる御努力に敬意を表します。特集号は中止の由残念ですが時期を待たざるを得ないでしょう。私の希望としては、我々女を縛るチャンスの少ない者のために、女体緊縛の際の各種の縄のかけ方を奇ク担当者の豊富な経験によって、絵や写真によつて解説する書が刊行されることを望んでいます。(東京 T・S生)

三木恵子様、奇ク十月号で貴女様の通信拝見しました。貴女の御希望、きつと叶えられますから、左記宛至急御連絡下さい。お会いする場所等。門田奈子様、文通致したく思いますので左記宛御連絡下さる様。 (神奈川局私書函 十三号宛)

責めといえ、緊縛、鞭打ばかりに偏しているのには、いささかうんざりしています。奇ク代理部のフォトにしても、余りにそればかりの様です。もっと縄や鞭以外の責めのアイデアがあってもよいと思います。色々の制約を考えれば、自然そうなるのも止むを得



水責のアイデア

(ボーズ) 甲斐仁参

①水を飲ませる人間は黒シャツ黒手袋が好ましい。バツクは黒ビロードがよい。
②シャツタリを切る時、開いた口に水を入れあふれさせるが、こぼれる所を撮る事、シャツタ

「新着フォト紹介」久方振りに秀作で嬉しくなりました。以前やつて下さった通信の転送などの案内欄の復活を、ぜひお願いします。現在の奇巧に要求するのは無理か

も知れませんが、それは通信販売の奇巧と読者のつながりを一層緊密にすることとなるでしょう。毎月の発行を鶴首する者への思い切ったサービスの意味で、どうか是非お願いしたいと思います。尙「伝言板」拝見して別稿お送りします。蜷間洋子様—新年号の convenient、門田奈子様へのものでしたが読ませて頂き感激してしまいました。手の指が廻る様なあなたのウエスト、本当に素晴らしいと思います。貴女のちぎれるばかりの、文字通りの蜂の胴をみたら、もつとちぎってしまいたい衝動にかられてしまうでしょう。以前の奇巧に「服は皆と同じ様にゆるやかに着て」と書いておいででしたが蜂の胴の上に今はどんなにして（ストラックス以外の）服を着て居られますか。又、今使って居られるバンドの中、ウエストニッパの丈はどの位のものですか。ニッパはどんな工合にして締める様に作って居られるのですか。お教え下さいませんか。八月号に書かれていました空気流腸、どうかして実現させて下さい。施術者となって御一緒にプレイが出来たらと思っていますが、とにかく頑張っ

みて下さい。

(阿川準)

KK大型判以来の古い読者の一人でありますが、今回貴社企画部にに対し少々勝手な希望等申述べたいと考えてお便り申し上げた次第です。KKについて—大変結構と存じます。四囲の情勢等止むを得ない事情が多い中に皆様方の並々ならぬ御努力が感じられます。口絵が、本文中の挿画が不満足なものが、本文中の挿画が不満足なものが多い様に感じられますが如何でしょうか。分譲写真について—KK本誌にての物足りなさを補う意味に於て、少しは大胆に羽根をのばした企画をお願いし度いものです。私の一番痛切に感じます事は貧しい財布をはたいてようやく注文した写真を手に入れた時に、カタログの説明を見て想像していた内容と相違してがっかりする事がしばしばありますが、之れを無くする様に説明をもっと詳細につけ加えて戴き度い事です。マニアには各々違った好みがあり、縄のかけ方から其の縄の太さまで気になるものです。況して裸体であるか、何か着衣があるかでは致命的な相違が出て来ると思います。同じ着衣でも和洋の別及びそのボーズ、

下着の状態まで、私の気持からの想像ですが、全く皆様の気持も同じではないかと考えます。勿論有料でも結構ですから、縮刷写真にてカタログを発売願えれば、此の上無い幸と存じます。北原女史の「女学生の羞恥責め」誠に結構です。之れまで全くなかったと思いますが、一度盛装したお嬢さんの此の種の大膽なポーズの写真を作成して下さる様特にお願ひ致します。(K・O生)

私は女装マニアの一人です。奇タを拝見していますと同好の方も居られるようですが、御便りや女装写真の交換を致しませんか。又女装の責めにも興味を持っています。同好の方とブレイしたいと思っています。今の所独りで女装して公園を散歩したり映画をみたりお茶を飲んだりして楽しんでます。御連絡は左記宛お願い致します。(千代田区二番町九木村泰輔方森本信一)

わたしは三角クラブの研究会の模様をお知らせ致します。十一月の集合は七人。場所はわたしの家の応接用洋室。夜八時。スカートを脱ぎベチコートを外すと、皆

下半身は三角フンドシか水泳フンドシ一枚です。白、黒、赤、緑、縞など色とりどり、三角フンドシ四人、水泳フンドシ二人、六尺フンドシ一人、スポンジパット使用三人、赤の六尺フンドシ着用者は別製パットで、男性の感じを見事に演出してました。わたしは逆に白い水泳フンドシにパットなしをしほる様に強くしめて、女の特長を鮮明に表わしてみました。十月以後のフンドシ着用者が五人おりますが、何れも最早あの生ぬるいパンティなど二度とはく気がしなくなつたと言っています。そのうちの一人は実に熱心なフンドシ愛好者となり、入浴に行くにも勇敢に三角フンドシのまま出かけるほどになりました。お家の人も、下腹がしまつて健康上、衛生上もよく、びっちりしめておれば護身用にもいいといつて感心してくれるそうです。彼女の三角フンドシは紐を使用せず、一枚の布から正確な寸法で裁断して作り上げて、左腰でボタン止めにしてあります。アメリカの百貨店の通信販売カタログには、ランジェリーの部にすでにこの種の三角フンドシと何ら変らないVショーツの広告が掲載されています。きつと若い人々の

間に拡まりつつあることと思われれます。そして、やがてそれが、アメリカから逆輸入されて、日本にフンドシ時代の花が開く時が、来ることでしよう。日本の男の人も女の人も、フンドシについてもっと美しく楽しく飾り下ばきの魅力に関心を持つべきだと思ひます。フンドシの持つ着用感にデリケートなおしやれの感覚がプラスされたなら、忽ちブームを起すに違いないといふのが、十一月例会の大体の結論になりました。次の課題としてフンドシとトレイについて研究することにし、可愛いお尻丸出しのまま、後ろ向きの陣をつくってお尻をこすり合つてグッドナイトにしました。男の方のフンドシ愛好者とお便り交換していただきたいのですが、誌上にてお知らせ下さいませんか。(岐阜若柳キヨコ)

AS子様、御質問の件、看護学雑誌の一九五五年三月号附録写真で見ると看護技術の浣腸、胃洗滌及び導尿の介助です。発行所は東京都文京区本郷六の二〇医学書院で

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組千円(送共)

時代物

現代物

(一)女武者の最期

(四)女剣劇の腹切

(二)腰元の自害

(六)女剣士の切腹

(三)遊女の自決

(七)オフィスガール

(四)武家の姉妹

(八)農家の娘

(詳細解説は本誌、九月号、並に十月号にあり)

す。この雑誌は本郷附近、其の他の医学専門店で売つて居り、一般書店にはありません。(価格は七十円)御入用なら条件次第で差し上げても良いです。誌上に住所氏名を發表なされれば小生からお便り致します。なおこの書物をお譲りする場合に女性の方に限ります。高橋よしえ様、十二月号の「糸姫の体験」を拝見致し、この時の検便、浣腸、直腸検査について詳細お尋ねしたいと存じます。御返事を戴けるようでしたらお便り致します。編集部の皆様、一月号は浣腸の記事がなく残念でした。中村洋子さんの浣腸の話は、出来る限り訂正して發表出来ませんか。十

水責のアイデア (ポーズ2) 甲斐仁参



二月号一六〇頁編集だより羽村京子氏の原稿及び一看護婦の手記を掲載する様楽しみにして居ります

(東沼)

大分寒くなつて参りました。其の後大変御無沙汰致しました。東京の荒川猛雄様、下関の久野様、福

① ひしやくで顔に水を掛けるところを撮る。シャッターは①と同じでよい。

② 人物は黒いリノタイルカリノリエームの上に寝かせ、目と口

を硬く閉じさせる。

③ 顔の下にこぼれた水、身体にかかった水等を効果的に写真に入るように工夫する。

岡のT・O生様、通信文有難く拝見、大変嬉しく何度も繰り返して読みました。是非文通お願い致します。若し貴方の手許に責めフォトお持ちでしたら、私のと交換致したいと思つて居ります。(佐賀市高木町四淀川宣明)

私は男性サドです。同じサドでも女には興味はありません。男にのみそれも筋肉たくましい男性にのみ魅力を感じます。K・Kの読者の皆様の中で男性マゾの方、おいでになりませんか、是非お相手をお願い致します。住所が埼玉県ですが、ふだんは東京に居りますので、出来れば都内の方がよろしいのです。二人だけで話し合ったりプレイしたりする場所も知っております。どうかお便り下さい。お待ちしております。(埼玉県大宮市土手町二ノ一九岩淵方横倉輝男)

はじめてお便りします。私は復刊以前の貴誌をとぎ折り購読していましたが、あのような大勢無謀な取締りに遭つて姿が消えたときの悲しさは、憤りさえ覚えたほどでした。私が復刊を知ったのは九月の或る日、たまたま上京して偶然、場末の書店でたった一冊の奇

クを拝見しました。早速買い求めて心ゆくまで何度も何度も読みかえしました。私たちの生活には貴誌のような教授者が存在するのがどれほど心強く、またかえつて健康的で明朗な日常に生き得る喜びを増発させるか、限り知れない役割があります。どうか今後共大いに頑張つて下さい。もったいない話ですが、私は貴誌のような雑誌から責め、縛りなどの写真や絵画をはぎとり、順次綴じれるようなアルバムを作つて居ります。また私自身もスケッチブックに拙いながらもアイデアたっぷりな責め絵を描いては楽しんで居ります。

(茨城県 宇野芙蓉)

悪条件下、各種マニアの好み通り編集することは困難です。平素の御努力を謝すと共に、今後共尙一層の御健闘を祈ります。私は女斗美ファンです。寝業に相争う二人の女性に見られる動的の美に、たまらない魅力を感じます。と共に、私自身女性と相争いたい。最後は組敷かれて、弾力性のあるはち切れんばかりの太股で、首をはさまれたいと常々考えて居りました。先月とうとう長い間の私の夢を完全に満たしてくれる女性を見

付け、時々会ってプレイをたのしんで居ります。二十四才、十五貫近くある女性です。然し服を着ている時は全然そんな肥った感じを与えぬおとなしい娘です。二人共汗びっしょりになりバンテイ一枚で相争っています。力一ぱい斗って五回位やれば二回ぐらい私が逆に馬乗りになり、相手の首をしめてやりますがあとは負けです。時には互にプレイする部屋に細紐を一本おき、相手を押えついたり、手首や足を縛り、完全に動けないようにしたりします。更にこんな女性をもう一人見付け、三人で斗いたいと思います。私の相手をする女性は、私の希望を了解して良い相手があればいつでも斗う。そして負けないわと申しています。奇巧の読者の中に、こんな方は居りませんか。

(T・K生)

○ 先日渋谷で貴誌十二月号をみつけ、早速買い求めました。暫く市場に姿をみせませんでしたので、もうお目にかかれぬのかと半ばあきらめておりましたので、ほんと致しました。私は女装マニアです。衣裳も夏、冬併せると四着ほどになり、最近ではスリープレスのワンピースで、白昼外出しても平気

で通用する程になりました。その体験記など書きためておりましたがよろしかったら原稿をお送りしたいと考えますので、その点にも御返事下さいませんか。写真等もあつた方がいいのでしたら同封致します。又、おさしつかえなかったら都内の女装同好者(といつても男娼はごめんです)の住所お知らせ下さいませんか。勿論御迷惑のかかる事などは致しません。 (千代田区二番町九木村泰輔方 森本信一)

○ 女の人のふんどし愛用者がふえてきているようです。中には六尺ふんどしを常に締めている人が多い様ですが、小生は六尺ふんどしは我々男性美の最高だと思いません。女の人がふんどしを締めた姿は粹で、締め味も格別ですからどしどし使って戴きたい。それと同じ時に女用の下ばきも又捨てがたいと思つています。特に此頃は下着時代というので、沢山の下ばきが売られているようですが、小生は女の下ばきに魅せられていますので、どなたか次の各種の相違を説明して下さい。ズロース、ブルマ、パンツ、パンティ、フレンチパンツ、ブリーフ、ショーツ、そ

の他にもあつたらお願いします。わかりやすく詳しく、大体の形から股下や腰の部分の長さの寸法、どういう時にはくのか、今一番使われているのは何か、そして「お手洗」の時にはどうするのか、他に簡便な方法があるのか等教えて下さい。 (下ばき趣味ABC生)

○ 私は十二月号のこの欄に載せられていた大阪の住田勝美様と同じ女装マニアの一人です。但し和装には興味がなく断然洋装党であり僅か首飾を首にかけただけでも何とも云えぬ気持になります。住田様の云われる如く、余りこのグラビアに女装の写真が載せられていないのが残念でなりません。是非共私共の願いを実現されます様御願い致します。私は女装マニアである一方、洋装した女性の責めにも興味を持っています。但し下着のままでは駄目で、女性の美しさは美しい洋服で着飾ったその上へ荒縄で縛りあげる姿の中にあると思います。例えば九月号の花坂道子嬢の責めに使った洋装位が結構です。特に感心したのは映画「魔の花嫁衣裳」で、ある女優が洋装で責められて居る場面でした。真白なワンピースを着た女が、椅子に縛ら

れて平手打ちされる所が秀れていました。尚、真珠の首飾りがより一層苦悶の美しさを増加していました。この様な洋装の責めを正面より大写真にお願い致します。 (大阪 森田二郎)

○ 私は南国の雄都、福岡に住むも

◎売切品について◎

本誌で取扱つておりました分譲品や本誌の旧号の中、売切になりましたものについて、自分だけなんとか探して送つてくれという御注文が多数参ります。売切品は、いくら代金を沢山頂きますしても、どうも都合がつかねます故どうかお許し願います。

◎御照会について◎

回答を求められる御照会は必ず返信料の御封入をお願いします。雑誌の中へ返事を入れてくれとの御要求は、郵便法によつて出来かねます故、御承知下さい。

◎文通幹旋について◎

只今本誌では、文通の幹旋はいたしておりません。但し連絡場所を明記の通信は読者交歓室欄へ掲載いたします。



のです。ふとした事から奇巧を知り未だ二、三ヶ月を経て居らないので完全なマゾヒストとは云えないかも知れませんが、同郷に池田ふみ子様の居られる事を心強く思っています。私は貴女様の通信を双手をあげて迎える者です。池田様は単なるマニアであるだけ

水責のアイデア

(ボーズ3)

甲斐仁参

①人物を逆さ吊りにして水をふくませ、吐き出させた瞬間をキャッチしてシャッターを切る。
②目は閉じ苦しそうな表情を作らず

③バックは黒ビロードがよく、胸や縄目に少量の水をかけて身体の上を流れているところを狙う。

では私には淋しくなりませんか。少しサド的な処が欲しいと思っていました。今度、三木恵子様の手記を拝見して、思わず万才を叫びたくなりました。貴女の手記を読んで、こう叫んだのは決して私一人でしょうか。必ず他に多数の人々が居られると思います

が、唯、男の体面とかにこだわっても何も意見を述べられないのではないのでしょうか。私はマゾヒストの一人として貴女様にお仕えしてみたくまりました。貴女様が何処の地に居られるのか知りませんが、何だか遠い所に居られる気がして淋しくなりませんか。貴女様は私より力の強い男の人は困る

と書いてありましたが、そうではありません。男であれば貴女様より力が強いのが当然でしょう。唯、男の力に對して貴女様の頭を御使いになられるべきでしょう。一例を述べますと、先ず貴女様が私に對して「貴男は逆立ちが出来ますか、出来ないでしやう弱虫ね」そこで私は苦手なのだが、行わざるを得ない立場になります。私は一心に逆立ちをするが、なかなか出来ないやつと出来ると今度は貴女様は「そのままで何分位我慢出来ますか」と云われます。私はわずかの間だけ辛抱出来ませんが、やがて我慢が出来ず足を下ろそうとすると、貴女様は両足を持って縛り帽子掛などにしつかりくくりつけてしまいます。私は頭に血は下り

呼吸は苦しくなり、手はしびれ、遂に貴女様に助けを求めます。其の時、貴女様は初めて私に對して強く命令されるべきです。「手を後にお廻し」私はあきらめて貴女様の意のままになります。後は貴女様の思うままに女王様として私の前に君臨されるのです。それから顔が尻の下にされようが、ズロースを頭から被されようが、私はどうにも抵抗できないのです。果して私一人がこの様な事を考えているのでしょうか。私の女王様三木恵子様は何処に居られるのですか、私は貴女様の足下に伏したい。(福岡 小森生)

○ 九月号の岐阜の若柳キミコ様、松原三千代様、マニア女生徒の池田ふみ子様、御都合よろしければ文通願えないものでしょうか。相互に腹藏なき意見の交換や語り合いを致したいので御座居ます。秘密は絶対に厳守致すつもりであります。右是非御願ひ致します。(京都市北区 吉田耕三)

○ 寒さに向う折柄貴誌の御発展を御祈り申し上げます。僕は廃刊後になつて或る古書籍店にて貴誌を知り、思わず快哉を叫んだ者であります。

ます。半年前、地方より東京近郊に移って参りました。お互に気心の合った友達が無いため、日夜、悩んで居ります。何卒読者通信を通じて御友達を得る事が出来れば此の上の喜びはありません。僕は永久に御互に励まし合って行ける身も心も打明けられる友が欲しいのです。無論、男性に限ります。本年三月国立の大学を卒業、大学院を目ざして頑張つて居ります。希望する相手は僕が二十五才です。ので、大体二十五、六才位までで男性的なたくましい人、又は美少年に憧れます。僕はマゾ、サソ両面を持っています。マゾ傾向の方が強い様です。十二月号の谷津様、貴兄と御交際出来れば此の上の喜びはありません。又、十月号

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込みのため、或はその他の用件で直接発行所を御訪問下さる方がありますが、理由の如何を問わず右は固くお断り申し上げます。必ず郵便にて御申込下さるようお願い致します。

の文京区柳町篠原様方の久保様、是非御友達になつて頂けませんか十二月号の荒川様もよろしく御願ひ申し上げます。何といつても現在の僕の気持を知つて呉れる同じ傾向の友のない今日、ぜひ御友達に加えて下さる様御願ひします。

突然おたより申し上げます。かつての「岸田映子」でございます。も早御存知ないかも知れませんが往年の奇巧に投稿した事もある切腹願望の女でございます。多分、昨春(?)休刊以来、その消息を絶つてしまつた奇巧が、その後も通信販売にて継続しているらしいと最近の中康弘先生からの私信にありましたので、早速御便り致した次第です。あの頃の川合、賤機大島、法谷、津島、瀬川、兵頭、山口、森様以下、切腹、ソドミアフェティシズム関係の方々には今も誌上で健在でしようか。羽村、信太様も忘れられぬ方々だし、絵の方の畔亭先生や他の当時私達の血をかり立てて下さつた先生方、又、田谷先生などは特別忘れられない偉大な足跡を残して下さいました。(中康先生、勿論です)私は今もあの頃の悩みを持ち続けて来て、奇巧なき後ヒキクの嘆をかこつて居りましたが、実に苦しいものでございます。今どのようにして奇巧の生命の火が燃え続けて居ることでしょうか。あのスタツプが、そしてより以上の新人が、

(浜松 T・K生)

「猿轡を噛まれた女優たち」

本号口絵所載の写真御希望の方は、焼増いたしますから返信料同封の上、編集部まで御照会下さい。

今も尚活躍しておられるならば、私も是非共参加させて頂きませ最早、私自身からしほり出して提供できる様なものはありませんが少くともそれによつて私自身の心の安息所を得ることが出来れば、それも一つの功德と思召して、何卒よろしく御願ひ申し上げます。

(岸田映子)

貴社益々御隆昌の事と存じます突然不躰乍らお尋ね致します。小生二十八才になる男子同性愛者ですが、古くより奇巧を愛読して居り、特にソドミニストでありソドミ愛愛好者です。ソドミ一本の姿で責められるのが、実になんともいえません。小生常に晒の腹巻にソドミ常用です。責められるにもソドミ一本の姿ならどんなポーズでも致します。若し貴社でモデルを入用の節には喜んで致しますからお知らせ下さい。本日同封の写真は小生の物です。瘡使います。こんな男でよかつたらお使下さい。ソドミ姿にて心ゆくまで責められたい男です。同封の写真、スペースがありましたら誌上に載せて下さいませ。写真は越中ソドミですが、責めポーズの時は六尺ソドミ着用致します

古くからの愛読者ですが、毎月大変興味深く拝見しています。併し最近の復刊号は、休刊前に比べて何となく物足りなく、所謂「読みで」がないようです。それというのも、私の好みに合わないものがふえてきているためですが、願わくば、どの傾向の人にもあてはまるような記事と写真を、最低一つづつは毎号載せて頂きたいと思ひます。例えばソドミ、揮愛好者には男の裸体や六尺ふんどし姿男性ヌードをというように。さて本文ですが、前にも色々書きまし

たが、僕は男性の下着、特にふんどしに興味を持ち、男性肉体美にあこがれる二十九才のソドミアです。私の親父がとび職である関係上、筋肉隆々とした体軀で色浅黒く、太股から胸にかけて黒々とした毛が密生し、太くたくましい腕には左右とも入墨があり、いつも晒木綿の腹巻を腹一ぱいに巻き、六尺褌をしめていたので、幼な心に、そういう男性が私の理想の男性として心に深く焼きついてしまったのです。従って、そういう父を持ったことを自分では誇りとしていました。が、小学校の時には友達から「お前の親父は六尺ふんどしをしているな、ふんどし大将」とからかわれたことがありました。その事を親父に話すと「男は猿又なんかはくもんじやない。日本古来の六尺ふんどしをしめるものだ。お前ももう少し大きくなったらふんどしをしめろ」といわれたことがありました。そうして愈々親父の男らしい肉体に、ほのかな憧憬を感じ、私も大きくなったら親父の様な男になりたいと思い、早く六尺ふんどしをしめてみたいという慾望を強く持つようになり、夏、親父に「お前もそろそろ一人

前だ、そんな女みたい猿又をはかないでこれをしめろ」といわれた、六尺ふんどしと腹巻を貰った時の嬉しさ、その時の喜びはたとえようもありませんでした。そして親父自ら裸になって六尺ふんどしをしめ方を教えて呉れました。それ以来二十九才の今日まで、風呂へ行くにも晒の腹巻に六尺ふんどしで、夏祭のみこしかつぎにも他の人達がみんな猿又やパンツをはいても、自分だけ一人六尺ふんどしでした。最近ではパンツや猿又が流行して、六尺ふんどしをしめる人は少くなり非常に残念でありません。男として最大の魅力は六尺ふんどしにあります。ふんどしの愛好者の皆様、よろしかったら文通をしたいと思います。

○ (六尺ふんどし愛用生)

十二月号を開封するや、矢張り真先に山口幸一氏の作品を探して読みました。真似の出来ぬ美しい描写です。刹那的な刺戟を好む人には山口氏の作品はもの足りないかも知れませんが、永く心の中に残るあたたかさを持っています。さて話は旧聞に属しますが、九月頃見た朝日ニュースに珍らしい少年のヌードモデルが出ていました

「タイトル」は「制作の私」だったと思います。閨秀美術家A女史のアトリエで、デッサンのモデルになっていたのは十五、六才位の少年、ほんの申しわけばかりの褌を着けてはいましたが、お尻に喰い込んでいる紐が余り細いので、殆んど全身映し出された後姿は、全裸体と全く変わりませんでした。片足を心持ち後へ引き、両腕を真直にあげ、上体をグーツと突き出して、いる様なポーズをとらされていました。が、極度に緊張した腕の伸び具合は、恰も「吊り」を思わせる程でした。モデルの少年は、明らかに固くなっている様子が見え、A女史が少年の頭を押える様にして更に仰向かせようとしてもなかなか思う様にいかず、如何にも苦しそうなポーズで（平凡な表現ですが）なんだか可哀そうな気持ちになってしまいました。未だいがぐり頭で美しい姿体を持った少年でしたが、二の腕の種痘の跡までも判然と見える些かきこちなさの少年モデルの裸身のポーズは、今でも眼前にありありと浮んで来ます。最近の時勢とはいえ、夏の水泳場でも平凡なパンツやナイロンのキヤルマタばかり目立ち、褌を締めた少年が殆んど見られなく

なつて了つたのは寂しい事です。況して「褌を締めた温和しそうな美少年」は奇ク（特に山口氏等の作品）に登場する少年を通じて、心の中に創造する他はない程です。多くの同好者が如何に渴望しているかは、毎月号の通信を見て明らかです。特集号も全く望み薄になった現在、せめて思い切つて挿画を豊富に入れた「少年褌美」に関する作品が多数発表される様切望致します。（東京 S.K生）

○ ブリーフ褌について私の感じたことを少し書きしるして見ることにします。女性の大部分が長いダブダブのズロースを廃止してブリーフ（キヤルマタ）を下穿きとして用いるようになったのは、非常に大きな進歩だと思えます。しかしながら現在のブリーフは、もつとも理想的なものと言えず、どうも理想の点について少し考えて見ましよう。私たちは先月、学校から修学旅行に行ったのですがその時三日にわたつてクラス全員の下ばきとその着用の仕方を統計して見ました。その結果は、ブリーフ（キヤルマタ）四十六名。ズロース（ブルマー型）三名。三角褌三名です。私は勿論三角褌です

が、この中でブリーフを着用している人の着用の方を詳しく調べますと①お尻が半分以上露出している人、九名②お尻が三分の一位露出している人、二十五名③お尻が少しは露出している人、六名④お尻がきれいにつつまれている人、六名となります。この①②のグループの殆んど大部分の人はブリーフの上部を約十センチ以上切り落してゴム紐を通してなおして、ぐっと短くして使用しているようです。ブリーフの両わきの長さは普通のままですと約二〇センチ二十五センチですが、このように仕立て直して約十センチ十五センチにちぢめて使用しているようです。中には五センチ程に見えるようなものを着用している人もあり

りました。こんな人はもうお尻は丸出しです。このような統計から考えても、お年寄りは知りませんが私たち若い女性は、もつと短い両わきの長さ十センチ位の股のV字形のくりが極端に深いブリーフの出現を望んでいるのです。ほとんど裸に近いような、お尻が完全に露出するブリーフがほしいのです。下着デザイナーの人達は、こういう若い女性の要求にもう少し耳をかたむけてもらいたいと思います。なおこの修学旅行のとき、私たちの三角褌姿が大きな反響を呼び、褌の常用者が続々現れ出したことをつけ加えておきます。私の兄は大学の二年生ですが、長いキャラコの猿又をはいていますので、巾二〇センチ、長さ四十五セ

ンチ位のもつこ褌をつくってやりました。初めは文句をならべていましたが、着用して気に入ったのか三つも同じものを作らせました。女性の中には三角褌やデルタカバーを用いている者もあるというのに、男性の方は余りにもだらしないと思います。越中褌やパンツはよして下さい。女子高生生の体操パンツもつい最近まではブルマー型が大部分でしたがキャルマタ式のものめつきりふえて来ています。この秋には私たち高校でも体育祭がありました。その時私たちダンス部員はダンスの実技をやりました。私たちはその日一日中ダンスのユニホーム一つです

でした。私とお友達のア子さんのものは特に短く作ってもらいしましたので、お尻が半分露出します。勿論、下には小さな三角褌をしめています。このように恰好で一日中トラックスやフィードをかけまわりました。みんなびくびくしていましたが、このように足やお尻を露出して走りまわられるのは私たちの特権だという感じがして、一日中愉快でたまりませんでした。私は目下、三種類の褌をもつて居ります。一つは巾二〇センチ長さ四十二、三センチ

北原純子 賣画傑作選

△ハートの的△女体洗滌室△

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

△緊縛ヌード十六ポーズ△

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

(以上、二組にて、五百円)

△女学生の羞恥責め△

大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円

外国文献 — 分譲 —

本誌九月号並に十月号、又は代理部分譲品総目録(八円切手封入の上御申込下さればお送りします)に発表してあります。

「血紅」「凄惨」

女体切腹フォト

代理部分譲品総目録に発表してあります。

チのもつこ褌で、布地は薄いガゼに近いような晒です。これは誰にでも向く婦人用の普及型とでもいえるものです。もう一つは水泳褌型のもので、私たちのナイロン製です。しかしこれは薄い布地であつたらナイロンでなくともかまいません。前はごく小さい逆三角形で後はぐっと巾がせまく、殆んど紐のように見えます。それから最後にこれは私の新考案みたいなものですが、これも薄い晒で作っています。前はびつたりと肌に密着する最小限の逆三角形で、後は本当の紐になっていきます。腰のまわりをむすぶ紐と同じものです。丁度ストリッパーのバタフライのようなものと考えたら間違いないかもしれません。私たちはこの褌をデルタカバーといっています。奇く愛読者の皆様一ついかがですか。今迄の女性の方はあまり肉体をおくしきぎていました。しかし私たちは戦後始めてブリーフというものを自分のものにしました。褌が女のものになるのはもうすぐです。私たちはその尖端を進んでいるのです。(池田ふみ子)

私は奇クの大ファンでございませう。しかし一般書店へ出廻らぬ

貴誌を購入するのにエライ苦勞をして居ります。かと申しまして、現在の私の状態では、半年分、一年分の予約金も容易ではありませ

ん。で復刊された貴誌は八月号だけしか手に入れておりませんが、他方もおいおい入手したいものと考えております。さて拙いアイディアですが二枚ばかり送ります。「キス二題」ですが、どちらもややエロチック過ぎる感じがしないでもありませんが、女体美が真実に発散されるときは、緊縛され責めを受けるときである、と信じている私には、こうした女体のコンビネーション(組合せ)構図を、サラリとしたスマートな感じで夢見、描いてみたものです。逆吊りの女の股へ、もう一人の女が跨ぐなんぞとは実現不可能な構図でしょうが、私はそんなリアルよりも空想的サディストの心で、夢画集の一頁として描いたものでした。背景は、それだけでなく拙い上に

いたずらに汚雑をきたすものと恐れて省きました。また後ほど絵や小説やらをお送りしたいと思えます。(茨城 H・U 生)

○ 奇巧の最近号について感じることは「縛られた女」「女を縛る」記事が少くなり、代って男性マゾその他の読物が多くなったような気がしますが如何でしょうか。私達、女体縛りマニアにとっては、どうも物足りない気持です。しかし余り我儘を言うわけにもゆくまいと我慢をしているものであります。白金紅次氏の着物と縄の織りなす嫌味の無い軽いサジズム小説や緑猛比古氏の強烈な責場の描写は最も私の好む読物だったのですが阿氏は今如何にお過していらつしやいますか。是非共続けて本誌上に御活躍下さる様にお願ひ致します。次に分譲真真(女体緊縛写真)について感想や希望を述べてみましょう。現在までに私が分譲

◎次号の本誌は一月下旬発売です

本誌は毎月下旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、中旬頃までに誌代のお送りを願います。

願いました写真はまだ極く一部でございまして、はつきり申し上げるわけには参りませんが、どうも紐類で縛り上げたものが多過ぎる様です。是非これは細引などでキチット縛って下さい。紐で縛つたのは実物ならとにかく、写真では、どうしても緊縛感がそがれます。それから腰巻やズロース一枚で縛られた写真が殆んど見当らないのは淋しい限りです。わずかに「AS12」の中に一枚と美少女緊縛が私の望みを叶えて呉れましたどうか今後は腰巻一枚やズロース一枚で縛りあげた写真を、もっと沢山撮って頂きます様お願いいたします。ただ腰巻といつても模様物は、どうも風呂敷みたいで感心できません。ズロースもバンテイまがいのものでなく、金巾製のブルマー型にして下さい。又これもズロースに関するお願いですが「F14」や「羞恥責め」の全裸の中富嬢の太股に、今脱がされたばかりのズロースのゴムの喰いこんだ跡がはつきり見えますが、この様な写真もぜひ増して下さい。色々と勝手な注文をつけましたが、いま一つのお願ひがあります。それは分譲写真の一部を天然色写真にして頂きたいのであります。勿論天然色

写真は経費がかさみますので、そうやたらには作れないと思いますが、一月に一集くらいは何とかなると考えます。では最後に縛りマニアの皆様へ——最近号の読者通信欄は他の傾向(特にフンドシマニア)のグループに独占されそうな形勢です。どうか縛りマニアの皆様も負けずにどしどし通信をお寄せ下さる様お願い致します。(福岡 山下直一)

○ 私の生命から二番目に好きな「奇巧」一月号を贈られたので、取るものも取り敢えず開いて見た。先ず口絵では北原純子さんの「花嫁受難二題」と「鳴門の妖鬼」の写真に感銘を与えられた。殊に鳴門の妖鬼の写真には頗る満足感を味わった。この写真を大写しにする様に写真屋へ依頼して置いた。巻頭の「文学に現われた責めの描写」藤見郁氏「花と朔風」——北原純子氏「フエチに関する切抜きから」——阿部準氏「遊女八重路の責め」——本田由郎氏「最近の縛り映画から」——嵯峨美也子様等には特に好感を持って熟読しました。殊に遊女八重路の責めは委曲を尽したもので、拙作の「舞踊女師匠の責めの実験」などは到底その足元

にも及ばないと恐縮しました。今後とも縛りの映画写真と同種類の紹介を連載せられんことを熱望して居ります。(和歌山岸本青柳)

○ 今春より当欄の御仲間に加わらせて頂きます。人で「美」を嫌悪する者は無いでしょうが、私はそれが「悪魔の美しさ」であつても美の権化に尤も価値あり、偏見を持ちます。現世の至高美は健やかな青少年の裸身にあると考へます。就学以前の視覚対象はサーカスやお祭、新聞にみるオリムピック記事でした。それが長ずるに及び誰でもが期を経て現在は何と唯美探求に至りました。それはカメラや筆による神体の模写再現です。「太陽の象徴」万才であります。従つて昇華表現された諸種の公開作、例えば潤一郎、三島の文学、谷口、木下コクトオ等の製作写真、男子彫塑美術を讃美しますし、異国としては昔の希臘沖繩、月並だが巴里に憧憬を持ちます。更に個人として著名人で代表且理想的なるは長門裕之。騎士道の諸兄何卒宜敷御指導御協力の程お願申上げます。

○

(中野区鷺の宮三の二十八原俊行)

拝啓、私も復刊を心から喜んでるファンです。私は女宮本武蔵……つまりマゾとサドの両方をお持ちの方を求めます。私はサド・マゾとも軽度のものを望み、残酷なのは嫌いですからなるべくサドもマゾも未経験の方が良いと思ひます。私も両方とも未経験です。責めのコスチュームは、別にこだわりませんが、シャツと運動用の黒いブルマーや、ブラジャーとパンティー、海着、スリッパ、セーラー服、和服、或いはふんどしでも構いません。とにかく全裸よりは何かつけてる方が余情があつて良いと存じます。責め方は拷問のふうな緊縛は好みません。残酷な事は嫌いです。殊に肌に傷つける様な事やお灸の様に痕に残るものや、水飲責、雪責の様な非健康な事は絶対にしないで、専ら晒しと辱しめに重点を置いて軽いお仕置で終始したいと思ひます。私と同趣味の方と文通致し度いと存じますが、お一人では仲々プレイするだけの勇氣は出ないけど二人でなれば、やってみたい方は二人でも結構ですが、三人以上は多過ぎます。二人がレスボスなら素敵ですけど、そうでないにしてもS程度親密で、アパートの同じ部屋にお

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

△潰滅の前夜より▽(詳細解説は本誌九月号、十月号にあり)

(大判判画紙) 焼付 八枚一組 八百円(送共)

住いの方でしたら、連絡等の点で甚だ都合です。一人の場合、始めて不安でしたら最初の日だけは、私だけが慮められるのでもかまいません。二人の場合でしたら『私がある国の王女に求婚します』が、王女にはレスボスの恋人が居てどうしても私のものになりません。それで二人を一緒に連縛してお仕置に致しますが、結局要求に応じないので処刑されるのです。又『私が王女を奪いますが、意のままにならぬので色々と虐めると、別の国の王女様(お姉様)が侍女に化けて、私の宮殿に忍び込み、王女を助けて、私は逆に二人から虐められるのです。』等々と変化のあるテーマを空想出来ました。それから『レスボスの愛を誓ったのに、私と結婚した。』と言って私と一緒に縛られてお姉様から制裁を受けるのも楽しいでしょ

うし、二人の中の一人は『A子さん、今度の奇クには面白い記事があるわよ。一寸貴女、応募して見度いと思はない……。ナニ、大丈夫よ。お風呂屋さんに行けなくなる様な事はされないうです。……。浣腸はされても、貞操は奪われない様にチャント私が見て上げるわ……。』という様な浣腸器持参の傍観者、又は立会人の状態でも良いと思ひます。プレイの相手は一見してサド的に見える方は嫌いです。二〇才前後一六五種、五五五、バスト、ヒップ共九〇種もあるファッション・モデル級の優雅な美女で『あんなに優しい顔して、とてもお淑やかなのに、サディストの面もあるなんて』少しも考えられない位、上品な良家の令嬢でしたら全く夢の様な話ですが、そんな方って仲々居ないものです。満二五、六才迄五尺三寸

以上、顔は、十人並で充分です。私は三〇才、独身五尺五寸、十四貫、容姿十人並、インテリ、趣味は文学、音楽読者の中には同じ傾向の方も多い事と存じます。お便り下されば必ず御返事致しますから、皆様是非お便りして下さい。心から、お待ち致して居ります。

(東京 富士野由起夫)

○ 小生は美少年を熱愛する者で、貴誌により同好の人々の存在を知り、大変心強く思っています。毎月の発刊誌には、必ず美少年の面又は写真を一枚でも掲載して貰いたいです。甚だ勝手乍ら小生は、美少年の面が無い時は購入する必要がないのです。小生は貴誌の今迄の本誌の中で美少年の面は全部切取って保存して居ります。自分の趣味以外のサド・マゾの写真、小説は嫌悪されるので、美少年をテーマとした物のみに関心を持っています。貴誌を手にして美少年の面がない時は、ガッカリします。輝美も美少年であってこそ魅力的なので、それ以外の年代の男性は、肉体的に全くグロテスクです。美少年でも、女性的な者よりも、男の子らしい者の方がよいのです。そして愛くるしい容貌

である事が望ましく思います。毎月必ず美少年の面を見られるならば、いよいよ貴誌は小生にとって必需品となるでしょう。小生は全く画をかく才はなく、それだけに一層貴誌のリアルな面が待たれます。小生は中学校の教師をして居り、気に入った美少年を集めて、神田のY・M・C・A体育館にいき毎日水泳を楽しんでいます。この情景を貴誌が全国の美少年愛好者に紹介されれば、貴誌の発展の上にも好い事と思います。ボディビル・マシンのような美少年姿態美増進法は、まことによい着想と思いい、小生は職員会議に出して学校で実行しようと思っています。十二月号の「母と子の手紙」に於ける美少年相撲団は、小生にとっては大変喜ばしい作品でした。是非連載を望みます。貴誌の御発展を祈念しつつ擲筆致します。

(東京 井上達朗)

○ 木枯しの身にしみる頃となりました。様々の困難にもかかわらず皆様の御努力により我々のメッカとしての奇跡の御刊行を心より御礼申し上げます。最近、古川裕子様や川端多奈子嬢、伊吹真佐子嬢の強烈なものを拝見出来ぬのは淋

しい事です。が、岐阜の若柳様等の女性御美愛好のグループだの、栃木の蛭間様のような腹部加虐の御趣味の方など居られますのは嬉しい事です。こういう下腹部への圧迫感を求められる方は数多いと思いますが、色々な御等を用いてみても随分苦しい思いをして締めても時がたつとゆるんだりして中々一寸新しいアイデアを考えてみました。別項に記載しましたので皆様の御参考の一助にもなれば幸いです。蛭間様、若柳様等の御実験と御意見を頂きたいものです。奇跡誌上での御批評をお待ちいたします。(名古屋 沙奴泉)

○ 皆様、御元気でですか、せっかく順調に來たと思つたら11月号で又ぽつんとかけて残念でなりませんでしたが、12月号が少々よかったです。でなぐさめられました。最近ドレイの事に関した記事その他が少い様ですが、少しでもよいですか。ドレイに興味をお持ちの方が大分いる様ですが、この度私の連絡先を明記致しましたので色々とお便り下さる様御願ひ致します。男女を問わずドレイを使いたいドレイ

○ になりたい人とか、色々の意見をお持ちの方や其の他文通交換、座談会等色々してみたいと思ひます。前にドレイ市場の件で読者通信を出して居りますので前の本を見て頂ければわかります。一つ困った点があります、それは四、五人集つて話をするにも場所がないという事です。誰方でもよろしいですから、よし、では場所がある絡下さる様御願ひ致します。12月号の古井真哉様、右の件とは別に御話致したく思いますので一度御便り下さる様御願ひ致します。(東京 都中央区日本橋堀越町二ノ一六粕谷方 土屋力造)

○ 新年号口絵巻頭の新作フォト紹介は近來にないよい収穫でした。殊に、コルセットをはめられてベッドの上へ仰向けに大の字に縛りつけられたポーズはよかったです。それに被縛者の表情が如何にも責められていゝ感じがよく出ていました。下の写真の表情はもう一つでしたが、手錠と金製の足枷は外国婦人の着用している皮手袋、ブリーフ、ストッキングといった雰囲気とも、ぴったりに合っていて、よいものでした。

一応口絵全部がサジズムに関連したもののばかりで有難かつたですが一番最後の欧米式新スタイルは余り感心しませんでした。本文に入つて映画シナリオの「赤いネオンの消える頃」は中々違者な筆でよく書けていました。欲を云えば、もう少し責折檻のクライマックスシーンが盛り上つてくるようなストーリーで実際に同好者が集つて簡単に映画化されるようなシナリオだつたらと思ひます。次に「魔海の業火」がよくかけていました。文献紹介的なレポート式な短い記事が大分ふえているようですが、今後こういつた記事にも力をいれて編集してほしいものだと思ひます。(京都 堀田正二)

落合正人様、小生奇ク二、三年前よりの旧号二十冊余り(途中少しぬけて居りますが)持つております。よろしければ、御譲り致します。誌上に貴兄の住所御発表下されば直接御連絡致したいと思ひます。(大阪 S・M生)

代理部分讓品總目錄

新作発表!

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

【編集後記】

○本誌が順調な発行を重ねていくに従つて読者諸氏からの本誌に対する要望も、最近漸次増加して来る傾向にあります。これは編集する者にとつて大層嬉しいことであつて、この鞭撻によつて出来る限り速かにそれを誌面に反映させたいという意欲を新たにさせてくれます。

○意欲を駆り立てる点に於ては従前とはいさかも変わりありませんが、順つて現状を見てみますのに、種々な理由で、それらの要望を具現させない障礙の余りにも多いといふことは、期待される方々に對して、全く相済まないという氣持で一杯です。

○然し、それらの中にたつた一つでもコツコツと積み上げていくという地味な努力はおこたらずやつてゆきたいと思ひますから、ささやかな燈火ながら、絶やさないといふ意味あいで寄稿家はじめ愛読者の方々の応援を御願ひする次第です。○本月号では、毎月の特異なテーマを掲げて佳作を寄せて下さる青葉楓一、藤山秀緒、本田由郎、東一郎、山口幸一松原三千代、諸氏の小品によつて、誌上を飾つて貰いました。

○和装好みの方から期待されてました、きものシリーズは、その最終篇として「お婆アバウト」でしめくりがつきました。白金紅次氏は更に新しいアイ

デアにて新作を寄せて下さる筈です。

○告白物としては南時夫氏の「我が異常性の記」を得て、久方ぶりに本誌らしき清新な風を吹き込みました。次号から更に続編を掲載する予定ですが、こういった真面目な告白は大いに歓迎したいものです。次号の告白としては、佐々木力氏の「悪魔の勝利を夢みる男」がたどたどしいながら、拔群の味を見せています。

○口絵としては、新年号に引続いて映画のスクリーンを選びました。資料の続く限り、こういった形式のものは口絵に使用したいものです。本誌写真部の特写は、代理部分讓品として扱つてゆきます。口絵に、休刊前のようにグラビヤ写真掲載してほしい、という希望も少くはないのですが、雑誌の体裁上やむを得ませんので御諒解願ひします。

○新しい試みの映画シナリオ「私は街の道化者」。新年号の「赤いネオンの消える頃」と比較して如何ですか、筆者の丘与志夫氏はいろいろのテーマを持つておられる由ですが、一作毎、形式ばかりでなく内容の盛り上りを読者と共に期待したいと思ひます。

○菅野ふみ子女史の「白衣の傍観者」は一風変つた手記ですが、皆さまの読後感如何でしょうか。薄つぺらで読みたえはないでしょうが、何かにつけ御意見御感想を賜れば幸甚です。では、又、次号までさようなら。(三一、一二、一五)